
翼の帰る処(ところ) 3
THE HOME OF THE WINGS
First volume
上
―歌われぬ約束―
YUFUKO SENOWO
妹尾ゆふ子
幻狼 FANTASIA NOVELS
GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
Volume three
First volume

翼の帰る処[ところ]3

――歌われぬ約束――

上



妹尾ゆふ子
YUFUKO SENOWO

Illustration
ことき

GENTOSHA COMICS



翼の帰る処［ところ］3——上
——歌われぬ約束——

妹尾ゆふ子

THE HOME OF
THE WINGS Volume three
First volume

YUFUKO SENOWO



Illustration
ことき——KOTOKI
GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
3
First volume



目次

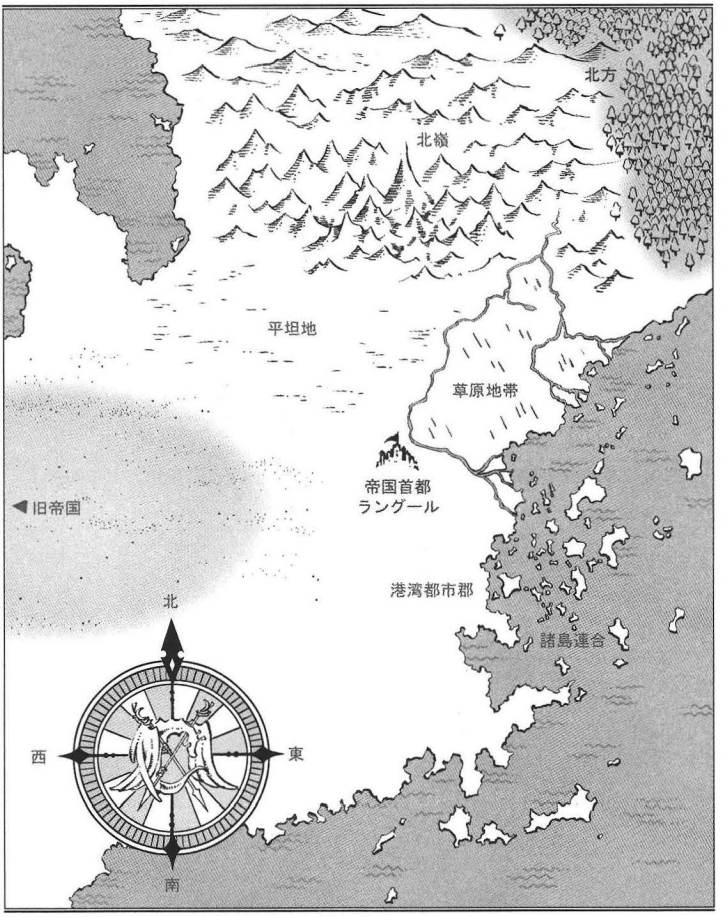
翼の帰る処 ——歌われぬ約束—— ——— 11

第 一 章 ——— 21

第 二 章 ——— 109

第 三 章 ——— 193

あ と が き ——— 274



THE HOME OF THE WINGS
3

人物紹介



ヤエト

「過去視」の恩寵を持つ北嶺国の相であり、《黒狼公》



皇女

皇帝の娘であり、北嶺国の王に任命される



ジェイサルド

《黒狼公》の騎士



ルーギン

皇女の騎士団長



イスヤーム

北嶺の民



セルク

北嶺の民



タルキン

北嶺の民



グランダク

北嶺の民



ナオ

皇女の女官



アルサール

北嶺の民



ラキニー

皇帝の妹



ファルバーン

アルハンの遺民



ナグウィン

商人



ウィナエ

ターンの預言者



スーリヤ

ヤエトが救った少女



スラジャ

《黒狼公》の代官



ミアーシャ

先代《黒狼公》の妹



エイギル

ルーギンの部下



翼の帰る処

―歌われぬ約束―

†

頭ひとつ半、背丈が違った。

誰にもいわなかったが、羨ましくて、憎らしくてならなかった。いつまでも、その差は埋まらないように感じていた。

その当人は、呆れたような顔で彼を見下ろし、ため息をついている。

「生まれたときから、かわいくなかったが」

「弟をいじめたら駄目よ」

すぐさま割って入った姉は、いかにも賢しげな子どもだった。兄より少し年下で、弟の彼から見ても愚かなことを口にするのに、なぜかいつも自信満々で、偉そうで、兄弟が自分の命令に従わないはずがない、と思っている。

もちろん、その確信はつねに裏切られる。

その日も兄はこともなげに姉を無視し、感じの悪い言葉を彼の耳に突き刺すように投げてきた。

「うるさいし、邪魔だし、どう扱えばよいのかわからないな」

姉が叫んだ。

「やめなさいといっているでしょう！」

彼は口を引き結び、刺々しい言葉に耐えていた。

これくらいは、慣れている。兄はいつもこうだ。

「ぼくは出て行けといったんだ。なのに、本を散らかして邪魔ばかりしている。明日は試験で、おまえたちの相手をしている暇はないというのに」

「おまえたち？」

兄は賢いはずなのだが、姉の扱いはうまくない。怒らせてばかりいる。

そして怒ったときの姉の切り札は、これだ。

「お母様！」

やれやれ、という顔で兄は机に向き直った。これ

で、姉が母を呼んで戻って来るまでは安泰だとでもいいたげな風情だ。

だから彼も、手にしていた本を開き直し、床にころがってじっくり眺めることにした。

この本には、よくわからない文字がたくさんだ。字書だ、と父に教わった。文字の意味を説明する本。そう、文字には意味があるのだ。

日常使う文字は、音をあらわすためのものだ。沙漠が起源で、元来はその形にもなんらかの意味があったのだろうと、学者たちが喧々諤々の議論をしているそうだ。

だがとにかく、今はどんな意味もない。文字が示すのは音だけだ。

そういう文字に、字書は必要ない。言葉の意味を調べるための辞書が必要なだけだ。

彼が見ている字書は、古王国の文字についてのものだった。説明は今の文字、今の言葉で書かれているから、だいたい読める。

それにしても、と彼は頬杖をついて考える。膝から折った足を、空中で揺らしながら。

――誰が、この文字の形はこう、意味はこうだと決めたのかな。

誰かが決めたはずだ。皆がそれに従ったのだから、きっと偉い人なのだろう。

「兄様、文字を決めた人って誰なの？」

大きなため息が、返事だった。実のところ、兄は弟の扱いもうまくない。ため息くらいではへこたれないと、そろそろ悟ってもよさそうなものだが。

「偉い人？　皇帝陛下？」

兄はふり向き、彼が開いていた本にちらと視線を遣ってから、答えた。

「そっちは違う。皇帝陛下の文字は、こっちだ」

「こっち？」

彼は立ち上がり、兄の手元を覗いた。自分でこっちだと教えたくせに、兄はいかにも邪魔そうに彼を払い除け、唸るように告げた。

「邪魔するな、失せろ」
よろけた彼を支えたのは、やわらかな手だった。母だ、と思ったときにはもう、兄がこちらをふり向きながら、つづく言葉をはなっていた。
「おまえがここにいるだけで、家族にどんな迷惑をかけているか――」
勢いで、そこまでは声にしてしまっていた。気の毒に、と彼は思った。兄は、母に聞かせるつもりではなかった。面倒なことになってしまった。
案の定、厳しい声が降ってきた。
「今、なんていったの？」
兄が呻いた。
「違うんです、母上」
「弟に向かって失せろだなどと、よくいえましたね。二度と聞きたくないわ」
「ごめんなさい。ただ、勉強の邪魔をされたので、つい……深い意味はありません」
――あれ？
母の嘆きは深刻そうだし、兄の謝罪もいつも以上に丁寧だ。首を捻っていると、扉の影から覗いている姉と視線があった。
すぐ母の権威を利用する姉にも、今のやりとりはどこか不自然に聞こえたらしい。なにかしら、なんだろう、と姉弟の視線がからみあい、しかしすぐにほどけた。
母が、視線のあいだに割って入ったのだ。床に膝をついて、彼の肩をかるく抱いた。
「気にしないでね」
「はい、母上」
――なにを？
失せろといわれたことだろうか？
なんとなく確認しそびれたまま、彼はうなずいた。母は立ち上がり、彼の手を引いて歩きはじめた。
「いい子ね、お菓子を食べましょう」
背後で兄が小さく息を吐いたのが聞こえた。よくわからない緊張を書斎に置き去りにして、彼は母に

連れられるまま食堂へ向かった。
古い家だった。部屋数は多いが、すべてを使っているわけではない。手入れが行き届かず、埃だらけのまま放ってある部屋もあった。母は、あまり気にしていないようだ。癇の強い赤ん坊が――かれら兄弟の末の妹なのだが――母の気力と体力を根こそぎに持って行って、そのお余りを姉が鼓舞して使っているのが現状だった。
もちろん、姉もついて来ていた。母の袖にすがりながら、ぬかりなく尋ねる。
「お菓子はたくさんあるの？」
「ありますよ」
母は上の空で答えた。心はもう赤ん坊の方にあるようだ。
「お兄様のぶんは、とってあるの？」
上品ぶっているが、姉は食べ物には卑しい。彼女に内緒でなにか食べたことが発覚しようものなら、怒り狂って大変なことになる。
「気にしないでお食べ。仲良くするのよ」
母はふたりを食堂に入れると、自分はすぐに出て行ってしまった。
「赤ん坊のところかしら？」
「さあ」
姉は少し考えるような素振りを見せたが、すぐに眼をきらめかせて彼を見た。
「ふたりで食べちゃっていいわよね？　気にしないでって、いわれたもの」
彼の意見を聞いているわけではない。姉の心はもう決まっている。逆らっても無駄だろうなぁ、と思いながら、それでも一応、意見してみる。
「とってある、とはいってなかった」
「お母様を呼んで来てあげたの、誰だと思ってるの？　おかげで助かったでしょ！」
そう宣言すると、姉は食卓に駆け寄り、菓子鉢を覗いて歓声をあげた。
ちらと見ただけで、角の店で売っている砂糖がけ

の揚げ菓子だとわかった。姉が好きなのはもちろんだが、兄もこれは大好物のはずだ。
「マーヤのお菓子の方が好きだったな」
「そうねぇ……おいしかったけど。でも、しかたないじゃない。マーヤは辞めてしまったんだもの。引っ越すときに、一緒に来られなかったのよ。歳をとったお母さんがいるからって」
そんなことは、彼も知っている。姉は、弟はなにも知らないと思っているのだろうか。椅子の上で膝立ちになり、両手を卓上につくと、匂いを堪能するように眼を閉じ、鼻をひくつかせた。
「ねぇ、黙って食べたら怒られるよ」
「お母様が、食べていいって仰ったのよ」
「でも、とってあるかどうか、いってなかったよ」
「それなら、あんたが呼びに行けば？　兄様は、きっとこう。『うるさい、あっちへ行ってろ』って……わかりきってるじゃないの」
「三等分しないと」
「なんで？　あんな人、嫌い。いっつも威張ってばっかり！　自分を何様だと思ってるのかしら。早く学舎の寮に戻ってほしい。長期休暇なんて呪われてしまえばいいわ」
弁護しなければならない気がして、彼は兄の美点を探そうとした。
「だって、すごく頭がいいんだから。学舎に推薦されるくらい。だから、ぼくらが馬鹿に見えるんじゃないかな？」
「わたしが学舎に行っていないから馬鹿だとでもいうの？　あんたって、ほんとにものを知らないわね。頭がよくても女は入れないの、学舎には」
姉の言葉に彼は少なからずおどろき、尋ねた。
「学舎に入りたいの？」
「まさか！　男でなくてよかったと思う。勉強なんて好きじゃない。お菓子の方が、ずっと好き。寮では毎日違うお菓子を食べさせてくれるんですって。お菓子を食べるだけでよかったら、わたしも学舎に

入ってもいいかな」
「女は駄目なんでしょ？」
「そうよ。子どもも駄目。だから、あんたもまだ入れないわね。このお菓子で我慢するしかないわ。兄様は寮に戻れば毎日いろんなお菓子を食べられるんだから、いいじゃない、わたしたちが余分に食べたって。そう思うでしょう？　だいたい、ここにいないのが悪いわ。母様は、お菓子を食べましょうって、あの部屋ではっきりいったのだもの」
　それはそうだが、あの場面で、自分も食べるとすぐに兄が立ち上がるわけにはいかないだろう。その程度のことは姉だって心得ているはずだ。
　けれども、姉は自分の理屈に満足したらしい。菓子鉢の中身を数えはじめた。
　姉は、徹底した公正さは求めない。だが、一人占めするほど強欲でもない。その場にいる弟とは、分けあわねばならないと感じるらしい。
「歳の差だけ、わたしが余分に食べるわね」
　勝手に宣言すると、自分のぶんを布で包んで、食堂を出て行ってしまった。お気に入りの場所で、気取って食べるのだろう。食堂は暗いので、あまり好きではないらしい。
　残された菓子を眺めたまま、彼の手は動かない。
　母と兄の様子が、どこか、おかしかった。それだけではない。なんだか、自分も変な気分がした。
　なにかを忘れているように感じるのだ。
　じっと菓子鉢を眺めていると、おい、と声がした。
「俺のは」
「とってあるよ」
　兄の表情は暗かった。
「おまえのせいで、母上に叱られたぞ」
　姉が余計なことをしたからだ、と彼は思った。そんなことは、兄もわかっているはずだ。
　しかし、姉と直接争うのは、賢くない。どうせまた、大人を介入させて、自分に都合がよくなるようにふるまうだろう。それも、兄にはわかっている。

だから、八つ当たりの対象は弟になる。
「少ないな。食べただろう」
「食べてないよ」
「嘘をつくな。いつも袋売りで買うだろう。量はわかっている。これは、ずいぶん少ない」
姉が持って行ったのだと弁解しかけて、なんだか馬鹿らしくなった。それで兄が姉のところに行けば、姉がまた母を呼ぶだけだ。逆に、兄が姉を見過ごすことにするなら、結局、この場にいる弟に当たって終わるのだ。
それでも、嘘つきだと思われるのは嬉しくない。
「嘘じゃないよ。マーヤのお菓子ほどおいしくないもの。勝手に食べないよ」
彼を見て、兄は眼をほそめた。
「マーヤが辞めたのは、おまえのせいだ」
意外なところに話がころがった。
「引っ越したからじゃないの？」
「引っ越しの原因がおまえなんだよ。変な占い師が、おまえには特別な使命があるとか口走って、大変だったんだ。知らないだろう」
「占い師？」
なにかが記憶にひっかかった。
古い家の塀の向こう、潰したはずの門扉。赤子を抱いたマーヤの姿を思いだし、あれ、と彼は眼をしばたたいた。
——あれ？
「母上が体調を崩してしまわれたのも、そのせいだ」
引っ越し前、母の具合が悪かったのは覚えている。顔を覗きに行くと、いつも弱々しく微笑んでいた。なのに彼の手を握るときは、おどろくほど力が強くて、はなしてもらうのが大変だった。
「占いのせいなの？」
「無視すりゃよかったんだ、あんなの」
兄は菓子鉢を持って、食堂を出て行った。その後ろ姿を見送るわけでもなく、彼は卓に手を置いて、昼でも薄暗い室内をぼんやりと眺めていた。

遠くから、声が聞こえた。

——わたしのせいだわ。叔父様の血を伝えてしまったのよ。

——誰かの責任だなんてことはない。

——話したでしょう、叔父様が兵士に連れて行かれたときのこと。わたしたち家族も皆、なにかの力がないか、調べられて……。

おぼろに浮かぶ人影は、母のものだった。やつれている。椅子に座ってうなだれる姿は、時の重みをその肩に背負っているかのようだ。

——大丈夫だ、叔父さんだって結局、大した力はないとわかって家に戻されたんだろう?

——戻って来たのは、叔父様じゃなかった。

涙声だった。母が泣くところを見たのは、はじめてではない。けれど、こんな泣きかたは……これは、違う。ひどく哀しくて、苦しい涙だ。

——忘れなさい。大丈夫、わたしたちの息子に誰もふれさせるものか。

——薬漬けにされて、自分が誰かもわからなくなっていたの。名前さえ忘れてしまって……。呼んでも、答えてくれなかったわ。やさしい人だったの。静かで、親切で……でも、もう叔父様はいない。恩寵の力なんて、とうに失われたはずのもののために、叔父様はあんなことに。

——なにも起きないかもしれないじゃないか。

父が、母の肩に手を乗せた。母はその手に自分の手をかさね、さらに泣いた。

——あの子、ときどきなにもない場所を見ているでしょう。わかるの、叔父様がそうだったわ。わたしにはなにかが視えるわけではないけれど、恩寵の力が使われているということは、わかるのよ。あの子も……恩寵持ちよ。

母は顔を上げた。父を見る視線はするどい。

——君の気のせいだろうって、仰らないのね?

——それですべてが解決するなら、そう思って済ませるよ。でもね、気のせいだという評価が自分を

ごまかすためのものなら、問題は消えないだろう。叔父さんの話をせめて教訓として生かさねば。未来をつくらない過去に、意義はない。

——わたしたち、どうすればいいの。

——とにかく、事実をはっきりさせよう。気のせいなのか、違うのか。そこからだ。

母はおどろいて両手で口を覆った。

——どうして？

——当然のことだろう。

——でも、恩寵なんて……名前だけよ。神の恵みでもなんでもない。特別な力は、呪いと同じよ！

やめて、あの子を試さないで。

影が遠ざかり、食堂にいるのはふたたび彼ひとりになった。

いや、違う。

——ずっと、ひとりだった。

ひとりなのに、ひとりではなかった。

こんなこと、はじめてだと思いたかったが、そうではないとわかっていた。

彼は忘れていた。今までにあった不自然なことを、ひとつずつ思いだそうとしていた。

いつになく真剣な面持ちの父、古い塔、熱をだして寝込んだあの夜、なにがあったのか。

おぼろな夢の記憶を、彼は反復してみた。

夢ではないとしたら……？

扉が開く音がして、彼は我に返った。

「あら、ひとりなの？」

衣擦れの音。母の声は、かすかにふるえている。

顔を上げると、視線があった。

「顔色が変よ。また熱があるのではない？」

額にふれようとした白い手を、彼は押し返した。

そして、尋ねた。

「恩寵の力って、なに？」

第



章

1

ヤエトは機嫌が悪かった。

悪いといえば、もちろん体調もである。わりと深刻に死にかけた直後だ。頭痛、目眩、吐き気、関節の痛み、手足の痺れ、そのほかの症状とともに意識をとり戻して以来、ヤエトの機嫌は低下の一途を辿っている。不機嫌でなにが悪いと開き直る勢いだ。

生来、虚弱である。

幼い頃から頻繁に発熱しては倒れ、この子は長くないだろうというのが医師の見立てであった。命があるあいだに官職をしりぞいて隠居したいというのが、彼のささやかな願いである。

ところが、予想外のしぶとさを発揮し、何回も死に損なって三十七歳まで生き延びた今、ヤエトは隠居するどころか出世に次ぐ出世を遂げてしまった。

事情を知らない他人から見れば、彼の人生は順風満帆、なんと幸運あるいは狡猾であることかと思われているに違いないとわかるのが、また腹が立つ。

黙っていられない性格が災いして都の尚書局を追い出され、北嶺という辺境に左遷されたのが、ケチのつきはじめである。もっとも、僻地の閑職にまわされるなど、俸祿を受けながら隠居生活を許されたようなものである……と、本人は喜んで乗り込んだのだが。

まさかそこに皇帝の愛娘が太守として赴任し、その場のなりゆきでヤエトが副官に任命され、いろいろあって北嶺郡は北嶺国に、太守であった皇女は北嶺王に、そして副官のヤエトは北嶺相にされ、平の尚書官が一国の相というのもおかしかろうという変な理屈で叙爵され、それも跡継ぎがなくて宙に浮いていたとはいえ四大公家のひとつである《黒狼公》家の家名を継がされて、領地経営までまかされることになろうとは。

思ってもみなかった。

――そんなもの、予測できたらおかしい。

一部でも予測できるとしたら、未来を語る神の預言者くらいのものだ――と考えて、また機嫌が悪くなった。いや、気分がというべきだろうか。

吐き気がする。

未来などわからなくていいと心の底から思っているが、あらかじめ知っていれば避けることができるなら……と、どうしても考えてしまう。

予測できていたら、あのとき口を出さなかった。派閥争いに巻き込まれないよう、余分な指摘をして周囲を辟易させないよう、気をつけた。

いや、北嶺に来てからでも遅くはなかった。もっと適当にしていれば、皇女に見込まれることもなく――ここまで考えて頭が痛くなり、ヤエトは息を吐いた。熱い。まだ熱が下がりきっていないのだ。

――無理だな。

何度でも、彼は同じようにするだろう。見兼ねて口を出し、手を出してしまう性格は、変えようがない。虚弱な身体同様、これも生まれつきだろう。

あまり表情豊かではないから、いつも冷静だと勘違いされているだけで、本来、彼は熱い男なのだ――いや、それも少し語弊がある。

少し考えて、偏屈というのが自分に似合いの言葉だろう、と彼は結論した。

迎合しない。それを立派と勘違いする者もいるが、要は意固地で融通のきかない性格、すなわち偏屈なだけなのだ。

今後は、周囲にその部分を理解してもらうべく、言動をあらためよう。偏屈さを相手に印象づける挨拶とは、どんなものだろう……。

くだらないことを考えているとは思うが、理屈をこねることができるのは、意識がはっきりしているからだ。頭の中はまだ鉄のかたまりがごろごろ転がりまわっているような雰囲気だし、節々の痛みもひどいが、まぁ小康状態といってよいだろう。

少なくとも、偏屈でいられる程度には。

性格の悪さを印象づける挨拶を策定し、誰かが声をかけてきたらいってやれ、と身構えていた彼のもとを訪れたのは、よりによって皇女であった。現実は、つねにヤエトに都合が悪い。

部下の鬱屈も知らず、少女の口調は気安い。

「少しは熱が下がったか」

ここで、知るかボケ——これが、ヤエトが口にしようと目論んでいた挨拶であった——と吐き捨てることができれば、次の段階に進めそうな気がするのだが、それはいったいなんの段階で、進んだ先に待つものがなにかはわからない。進まない方が賢明であろう、という気はする。

身を起こそうとするヤエトを、皇女は身ぶりで押し止めた。しかし、彼は無理に半身を起こし、わざとらしく咳き込んでから答えた。

「以前も申し上げましたが、臣下の部屋を訪われるのは感心いたしません」

皇女は肩をすくめ、それまで看護の女官が座っていた椅子にさっと腰掛けた。さすが生まれついての支配者層だ、とヤエトは感心する。

皇女にとって、椅子は譲られるものだ。躊躇もなければ疑問もない。そういうものだという了解があるだけだ。ヤエトなら、自分のために立ち上がってくれたということにさえ、気づかないかもしれない。これが生まれ育ちの差といえるだろう。

被支配者をいちいち思いやる発想ができないように訓練されているのが、支配者層というものだ。

皇女とて、赴任当初は北嶺の民を野蛮人と呼んではばからなかった。その認識をあらためる上で大きかったのは、鳥の存在だろう。鳥に惹かれ、それを御する技術を学ぶ上で、皇女は北嶺人の存在と価値を認めざるを得なくなった。逆もまた然りである。不服従や謀反の気配は絶えて久しい。鳥馬鹿こそが和合の秘訣である。

皇女の目線は、今や竜種にしては破格といえるほ

ど民に近い。民の位置から世界を眺め直すことを知るせいで、皇女が支配者として弱くならねばよいが、と案じるほどに。

——矛盾している。

偏屈だからね、と考えながらヤエトはまた咳き込んだ。実に便利な言葉だ。偏屈。大書して壁に貼っておいてはどうだろう。

「少しは話ができそうな程度には持ち直したと聞いたので、覗きに来ただけだ。病人を呼びつけるわけにはいかぬ」

「お召しとあらば、参上つかまつります」

この重石をどかしていただければ——と、心の中では言葉をつづけていた。

布団の上には、黒と灰色のかたまりがふたつ、乗っている。ぱっと見たところ……なにがなんだかわからない代物だ。そのかたまりは、彼の布団の上で頻繁に目撃されている。なんとなく腹が重かったり、寝返りをうとうにも動けなかったり、足が痺れていたりした場合、原因はこれだ。

それが雛鳥だと教えられるまで、ヤエトは自分が幻覚でも見ているのかと思っていた。

雛は両手に乗るくらいの大きさだと聞いていたが、ヤエトが忙しさにかまけたり倒れたりしているあいだにすくすく育ってしまったようだ。

話が違う、こんなのは詐欺だ、と思ったヤエトを責められる者がいるだろうか。目の前のこれは、手に乗るどころか、もう尋常の鳥の範疇を超えた大きさである。どこが雛だ。ちっとも小さくない。人間の赤ん坊より大きいくらいだ。

より深刻な問題は、この巨大な綿毛のかたまりを嫌いになれないということだ。見た目より軽いとはいえ、病人には酷な重さだ。なのに、雛が布団に乗っていないとがっかりしてしまうのだ。

このままでは、自分も鳥馬鹿一直線だ。

彼の視線を追って雛の存在に気づいたのだろう、皇女は苦笑し、彼にはできないことをした——羽毛

をふらくませてヤエトの足の上で寝ていた雛を抱き上げ、端の方に置き直したのだ。

寝惚けたまま、抗議するように嘴を鳴らす雛を見下ろして、皇女は断言した。

「シロバの雛は利口だ」

鳥馬鹿の程度でいえば、皇女の方がヤエトより重症だ。間違いない。

皇女は雛の頭を撫でた。雛は眼をほそめ、ぐうと妙な音を漏らした。シロバというのは、ヤエトを乗せてくれる奇特な鳥の名だが、この二羽の雛はシロバの卵から孵ったらしい。

もう一羽の雛は、はじめから寝ていなかった。賢しげに眼をしばたたき、首をかしげてその様子を見守っている。こちらはヤエトの左脇腹のあたりにいたのだが、彼が身を起こすと自分でよちよちと腰のあたりまで移動してくれた。実に、賢い……いやこれはまずい、自分も鳥馬鹿度が上昇したようだと焦るヤエトの心中も知らず、皇女は言葉をつづけた。

「そなたが出歩かぬよう見張っていろと、命じられているそうだ。つとめを果たしているではないか」

誰が命じたのか、心当たりが多過ぎて詮索するのも面倒なほどだ。

「出歩くなど、到底無理ですが……」

「それでも起き上がるからな、そなたは。自分で申したばかりではないか、お召しとあらば参上、と。口先だけと安心はできぬ。当面、おとなしく見張られておくがよい。その方がわたしも気が休まる」

ヤエトは少し咳き込んだ。

「水を……」

背後に控えていた女官が、ヤエトに碗を渡した。受け取る手に力が入らず、落としそうになる。

すかさず、皇女が命じた。

「意識がしっかりしているあいだに、栄養をとっておけ。……そなたは覚えておらぬだろうが、薬を飲ませても吐かれて難儀したのだ」

当然、覚えていない。それは申しわけないことを、



とヤエトは口の中でつぶやいた。皇女は控えていた女官をふり返って命じた。

「厨房で、なにか用意して参れ。ナオに聞いて、口当たりがよくて栄養のつくものをな。ジェイサルドにはみつからぬようにせよ」

女官は一礼して部屋を出て行った。行き届いた命令だ。ジェイサルドはヤエト直属の騎士団長で、戦士としてはおそらく地上最強、万事そつなくこなす有能な人物なのだが……薬膳と称してとんでもない味の食事を出し、無理矢理食べさせる悪癖がある。

さて、と皇女は椅子を寝台に寄せた。

「追い払ったぞ。なにか内密の話があれば、今だ」

「……至急の案件がございましたら伺います」

頭が痛い。関節も痛い。理解できるのは自分の身体の状態だけで、熱がある以上、判断力も思考力も落ちているのは自明である。自分が倒れて何日たっているかさえ、わからないのだ。助言役としてのつとめを果たせるかどうか、あやしい。

「案じずともよい。北嶺は、まずまずうまくいっておる。そなたが倒れて、却ってよかった。皆が、そなたにたよらず仕事をせねばと意を決したようだ」

倒れる前にその決意をしてほしかった……と思いながら、ヤエトは息を吐いた。

「なによりです」

「セルクが申すには、イスヤームがずいぶん大人になったとか」

「……は？」

イスヤームは、はじめから大人である。対するセルクは三十近い年齢らしいが、その半分以下といわれても信じてしまいそうな直情径行の天然男だ。彼に「大人になった」と評されるのは、さぞ複雑な心境だろう。イスヤームの耳に入らねばよいが。

「去年の今頃は、セルクが右と申せばイスヤームは左を主張して譲らなかったと聞いた」

そういえば、彼が着任した当初はそうだった。帝国贔屓のセルクが突飛なことを口にして、イスヤー

ムが反対する。声の大きいふたりが怒鳴りあい、周囲がそれを囃したてるので、うるさいことこの上なく、しかもその成果は不毛のひとことに尽きた。

なつかしい。……二度と体験したくないが。

――というと、今はまだ、祭りの前か？

去年、皇女が着任する直前の議題は、祭りの行事を例年通りの競弓にするかどうかだった。雪で鎖された峠が開通してすぐ北嶺に向かった不明を呪いたくなるほどの寒さや、朝議の不毛な怒鳴りあいなどをあらためて思いだし、それだけで疲れた。

皇女はヤエトとは違うことを考えていたらしい。ため息をつくと、実は、と声をひそめて告げた。

「ナオが申すには、そなたは神気にあたったようなのだ。思いあたることはないか」

「神気……ですか？」

「恩寵持ちの誰かを通じて、強い神気を食らったに違いないというのだ。そなたは竜気に弱かろう？竜気も神気の一種だからな」

「しかし、わたしが竜気に敏感なのは、一族が過去にかわした契約のせいです。一概に、神気ならなんにでもあたるものでしょうか」

竜気というのは、皇家の者が身に纏う気のようなものである。強い竜気の持ち主である皇妹ラキニーあたりがその気になれば、ヤエトに頭痛、嘔吐、目眩、発熱などを発症させることが可能であろうと思われる――あまり実験したくはないが。

皇女は眉根を寄せ、なんだか困っているような、怒っているような、よくわからない表情で告げた。

「とにかく、今回のは身体の病ではない。魂の病だそうだ」

「……ナオ殿が？」

「そうだ。ナオがそう申すのだ」

ナオは皇女の乳母だが、生っ粋の帝国人ではない。沙漠の出身、それも医師神シーハを奉じた一族の数少ない生き残りのひとりである。

調薬の知識や治療の技術で名を馳せたシーハの民

も、ほとんどが帝国の侵攻で命を落としたらしい。ナオがなぜ、一族の仇敵ともいえる皇帝のひとり娘に仕えるようになったかの事情を、ヤエトは知らない。だが、ナオが皇女に対して母親のような愛情と、絶対の忠誠心を抱いているのはわかる。

ついでにいうと、ヤエトは嫌われているが、だからといって嘘の見立てはすまい。もしナオが恩寵持ちであれば、なおさらだ。恩寵とは神の力。真実のみが許され、偽りは馴染まない。

ヤエトも過去視の恩寵――過ぎ去った情景を視る力を与えられているが、視たものについて、嘘は語れない。不可能だ。

「わたしが……その、倒れたのは、この城内でしたでしょうか？」

「覚えていないのか」

「申しわけありません」

皇女は眉根を寄せ、案じるような表情をしたが、言葉では端的にこう答えただけだった。

「違う。北嶺の内ですらないだろう」

予想外の回答である。北嶺で倒れたのでなければ、なぜここに寝ているのか。鳥がいる以上、ここは北嶺だ。あらためて尋ねるまでもない。

「だろう……とは？」

「そなたは《黒狼公》領にいたはずだった。なのに突然、シロバが帰って来たのだ。気絶したそなたを背に乗せて、な」

ヤエトが絶句していると、皇女は肩をすくめて言葉をつづけた。

「邸に戻らぬそなたの身を案じた代官が、伝達官を通じてわたしに連絡をして来たが、そのときにはもう、そなたはここに運び込まれていた。意識が戻ったら詳しい説明を聞くつもりだったが……まさか、覚えておらぬとはな」

――では、自分は所領で倒れたのか。

領主の仕事の半分は、訴訟の解決といってよい。独断では決めかねると代官に泣きつかれ、《黒狼公》

領へは何度も足を運ばされていた。

ヤエトが叙爵されるまで何年も代官をつとめていたくせに、スラジャはヤエトの判断を仰ぎたがる。スラジャだけではない。おまえらもっと自分で判断しろと突っぱねたくなるくらい、ヤエトはあちこちから呼ばれた。いや実際、突っぱねようとしたのだが、断りきれずに引きずり回されてしまった。

北嶺で仕事をしていると《黒狼公》領に呼ばれ、領地に行けば都から、都にいればまた北嶺から呼ばれる。なまじ伝達官だの鳥だのといった高速の連絡・移動手段があるからいけない。駅亭制を駆使しても十日かかるとか、体調を鑑みて休み休みで四十日とかなら、こうはならなかったはずだ。

便利さは敵である。

その上、領地に行けば内密に匿っている亡国の王族がてんこもり問題を抱えているし、都では彼の出世をやっかむ貴族たちの嫌がらせのひとつやふたつは躱さねばならないし、北嶺は北嶺で……赴任当初とどこか変わったかというと、鳥が飛んだ、くらいの差しかないのではないかと思うほど暢気な野郎共が、大声で怒鳴っているのである。

間違いなくじきに倒れる、それ倒れる、もう倒れる、周囲の慌てぶりを観察できないのは残念だ……などと思っていたので、意識を失って寝込むのも予測の範囲内のはずだったが。

――なにごとも、思うにまかせないものだな。

人生なんてそんなものだと割り切っているつもりだが、やりきれなさは拭いきれない。慌てぶりを観察できないどころか、どこで、どうして倒れたのかすら判然としないとは、あんまりではないか。

「シロバなら、場所がわかるのでは」

「それがな、シロバも……」

皇女は顔をしかめて言葉を切った。

やめてくれ、とヤエトは思った。気になる。シロバも、なんだというのだ。

ぴい、と雛が啼いた。おなかがすいたときの声だ。

おそろしいことに、聞き分けられる。
もちろん、皇女もすぐに気がついた。ヤエトに向かって話すのとは別人のような声で、雛に告げる。
「暗くなる前に厩舎へ行って、餌を貰っておいで」
「わたしも――」
「駄目だ」
冷たい。声も眼差しも、雛に対するのとはまったく違う。ちょっと怖いくらいだ。
「シロバが、どうしたのです。元気なのですか」
「人を近寄せないのだ。こう……つまり、心の中が読めない」
鳥は乗り手と心を繋ぐ。
赴任した当初は、単なる精神論かと思って聞き流していたが、実態を正確に表現していただけだった。鳥と乗り手はお互いの心を読み、相手に意志を伝えることで安定した信頼関係を築く。つまり、感応力がある者以外、鳥には乗れないということだ。
皇女はその力が強く、群れ全体をまとめることもできるらしい。逆に鳥に影響されることもあって善し悪しだが、貴重な才能であることはたしかだ。
その皇女がシロバの心を読めないなら、なにか異状があるのは確実だ。
「そういう事情であればなおさら、厩舎へ行かせてください」
「まだ駄目だ。今さら一日や二日、遅れたところで大差ない。もう少し、体力をとり戻してからにせよ。よいな。看護の者にも、そなたを部屋から出すなと厳命しておく。……雛たち、ヤエトの意識が戻ったことも伝えるのだぞ。できれば、な」
寝台からぽてっと落ちた二羽は、しっかりとした足取りで扉へ向かっていたが、皇女の言葉に応えるように啼いた。皇女は大股にその後を追い、扉を開けてやった。一国のあるじが、まるで鳥の奴隷だ。
――シロバに、なにがあった？
シロバがヤエトを乗せてくれるのは、実に貴重な例外なのだ。あの賢い鳥は、感応力などない方が安

心してつきあえると、彼を選んでくれたらしい。
どういう理由であれ、シロバのおかげで彼は北嶺人の信頼を勝ち得、今まで生き延びることができた。直接的にも、シロバには何度も命を救われている。
「もう来たのか」
皇女の声に我に返り、ヤエトは顔を上げた。いかにも邪魔そうに扱われている闖入者(ちんにゅうしゃ)は、小柄な皇女の頭の上から悠々とヤエトに呼びかけた。
「殿がお目覚めと聞き及びましたゆえ。遅参つかまつり、まことに面目次第もないことです」
もう来たのかと邪険にされながら、遅れたといってのける老騎士の図太さには、恐れ入る。しかも、なにやら盆を持っているではないか。
まずい、とヤエトは思った。いろいろな意味で、まずい。せっかくの皇女の命令の最後の部分は、ジェイサルド本人に無視され、押し切られたようだ。
「気のきかぬ奴」
皇女のつぶやきを無視して、ジェイサルドはずんずんと部屋に入って来た。盆の上には、碗がいくつか並んでいる。ああ、とヤエトは思った。
——今すぐ昏倒しなければ！
自在に気絶する技術こそ、自分に必要なものだ。しかし、ジェイサルドの意見は違うらしい。
「熱が上がると身体から水が抜けてしまうものですからな。水分をおとりあそばしませんと……そして、どんどん汗をかいていただかねば。ささ、まずこちらの粥をお召し上がりください」
水分なら水で結構だ、と思うが、こと薬膳に関してはジェイサルドにさからっても無駄なのだ。
助けを求める視線を皇女に投げてみたが、肩をすくめられただけだった。しかたがない。
ヤエトは汗をかきながら凄まじい味のものを啜ることになった。却って消耗するだけなのではないか。たしかに発汗作用はあるようだが、これはいわゆる嫌な汗というものではないのか……などなど、疑問は尽きないが、とにかく食べた。

ふと見ると、皇女はものすごく変な表情をしている。ひょっとすると、ヤエト自身の表情を映しているのかもしれない。そういう顔だ。少し手伝ってくれないだろうか、とおそらくヤエトの方はすがるような眼差しになっているに違いない。

それを察したのか、ジェイサルドは皇女を追い出しにかかった。

「あとは儂がお引き受けしますゆえ、どうぞご公務にお戻りを」

しかし、ああしろこうしろといわれて素直に従う皇女ではない。案の定、わかりやすく反発した。

「まだ話が終わっていない。そなたこそ部屋の外に控えておれ」

「殿のお身の回りに控えて有事にそなえることこそ、儂のつとめにございます」

「では、そなたはつとめを怠ったのだな、ジェイサルド。なぜ、そなたのあるじは誰も知らぬ場所で倒れ、北嶺に運び込まれたのだ」

するどい言葉だった。

ヤエトの身の安全に気を配るべき騎士団長にとっては、大失態である。それは事実だ。

とりあえず無事なのだからよいではないか——と、そのまま告げたら揉めるのはわかりきっていたから、少し捻って、ヤエトは口を挟んだ。

「シロバと厩舎長を信じております」

「なに？」

「わたしにシロバを預けてくれるときに……いや、逆か。シロバにわたしを預けて、厩舎長は保証してくれたのですよ。シロバはわたしのお守りのようなものだ、必ず無事に戻れる、とね」

「乗り手は意識不明、鳥は心を鎖しての帰還だぞ。それを無事というのか、そなたは！」

尖った口調に、ヤエトよりも口にした本人がおどろいたようだ。皇女は少し顔を歪め、許せ、とつぶやいた。

——不安なのだな。

皇女には、姿が見えるより先に鳥の存在を感じとるほどの感応力がある。その力が通じないことに覚える不安は、誰より大きいはずだ。

ヤエトにとっては、鳥の心が読めないことなど今さら過ぎてなんの不便も感じないが、それをいっても皇女が元気づけられるとは思えない。

なんと言葉をかけてよいかと悩むより先に、勝手に言葉がこぼれ出ていた。

「命は無事です」

皇女は答えない。

俯き加減の顔は陰になってしまい、表情を読むことはできなかった。できるだけ軽い口調に聞こえるよう念じつつ、言葉をつづけてみる。

「命さえあれば、なんとでもなりましょう。ですから、無事に戻ったとお考えください」

皇女は顔を上げた。もう少し元気づける必要があるなと踏んで、ヤエトは適切な言葉を探した。

「わたしがそう考えられるようになったのは、王のお言葉があったからです。生きよ、と。わけもわからず、御許に戻ったのは腑甲斐ないことですが……せめて、この命を持ち帰ったことだけでも、喜んでいただけますか」

「なにをいう、当然ではないか」

「では、我が命を持ち帰ってくれたシロバのことも、ただねぎらってやってください。よく帰った、と。砂糖を持って行ってやってくださいませんか？」

皇女は困ったような顔をした。

「だが――」

心が通じないのに、といいたいのだろうが、ヤエトは敢えてそれを遮った。

「砂糖が好意のあらわれであることくらい、シロバなら理解します。持って行ってやってください」

「うん」

「ありがとうございます」

皇女は微笑んだ。少し硬さが残る表情だったが、それでもさっきまでよりはずっとよい。ちらとジェ

イサルドに視線をやると、たのむぞ、と低く告げて部屋を出て行った。
扉が閉まると、ジェイサルドはヤエトが食べた量を検分し、わずかに顎を引いた。
「いけませんな。もっとお召し上がりを」
「これ以上食べると吐きそうです」
正直な感想だったが、ジェイサルドは冗談だとでも思ったらしい。笑って答えた。
「殿は、交渉ごとにお強くておられる。しかたがありません、今はこれで善しとしましょう」
体調が戻ると、もっと激しく食べさせられるんだろうなぁ、とヤエトは考えた。回復したくない、とちらりと思ってしまったが、具合が悪くても結局こうして食べさせられるのだから、さっさと熱を下げ、多少残したり選り好みしたりしても許される状況まで持って行く方が賢明といえるだろう。
「北嶺には、いつから?」
「殿が北嶺におられると聞いて、即刻、馬を飛ばしました。ただ、ご領地から北嶺につづく街道は整備が行き届いておらず、駅の数もあまり……思うにまかせぬ旅でした」
「街道か……」
たしかに、街道整備は後回しになっている。春先の増水にそなえて、水路工事を優先した結果だ。鳥が使えるからと考えての判断だったが、ジェイサルドが鳥に乗れないことまでは考えていなかった。
「南麓鎮では峠もまだ不通だといわれましたが、なんとか登ることができました」
強行突破、という雰囲気だ。ジェイサルドより、馬が心配になる。
「よく通れましたね。馬が嫌がったでしょう」
「南麓鎮からは、歩きました」
無用な心配だったようだ。
とにかく、ヤエトが意識不明だったあいだに、ジェイサルドは無事北嶺に到達してのけた。余人には実現不可能な芸当だろう。

だが、最強老人は珍しく弱気なことをいった。
「儂を乗せてくれる鳥がいれば、と思います」
彼の能力をもってしても、移動速度では鳥にかなわない。それが、身に染みたのだろう。
——《黒狼公》の騎士団長としては、致命的かもしれないな。
あるじと一緒に移動できないのでは困る。鳥たちは一様にジェイサルドを恐れ、乗せようとしない。ヤエトが一緒ならシロバは我慢してくれるが、同乗をたのむにも限度がある。
「シロバの考えでは、わたしは雛のようなものらしい。たよりない男の方が鳥には人気があるのだとしたら、……我が騎士団長を乗せようという鳥がなかなかみつからないのも、うなずけるな」
ヤエトの言葉に、ジェイサルドは苦笑して答えた。
「殿は信の置けるかたです。それが、鳥にもわかるのでしょう。……儂は、違う。それゆえ、鳥たちが心を許すこともない」
「そうですか？　我が身の安全はまかせていますよ、あなたを信じて」
「殿、言葉遊びをしているわけではありませんぞ」
一本とられた。正論だし、隙がない。その上、ヤエトには逃げ場を残している——身辺警護以外の面でも信じているのか、と問われると困るのだが、ジェイサルドはそこを流そうというのだ。
実に親切な話だ。
なのに、なぜか追求したい。偏屈だからな、とヤエトは思う。だいたい、皇女が来てそれどころではなくなっていたが、自分は機嫌が悪いのだ。相手が部下なら、少しは絡んでもよいだろう。
「あなたにだって、信頼関係を結んだ相手もいたでしょう。たとえば先代とか」
「先代は、儂をお信じにはなりませんでした。だから、儂も存分にはたらけたのです」
ずいぶん緊張感のある主従関係だ。
もちろん、ヤエトもジェイサルドを全面的に信頼

しているわけではないが、たとえば、うっかり寝首をかかれてもしかたがないな、という程度には最初から負けを認めている。先代なら二重三重に保険をかけて、寝首をかかれないように手配するのではないか。そんな面倒なことをするくらいならバッサリやられた方がよい、とは思わなかったに違いない。

それにしても、心からの忠誠を誓ったという先代にさえ、ジェイサルドは信頼されていなかったのか。

――あるいは、信頼されないと諦めていたのか。

ヤエトに対しても、そうなのだろうか――はじめから、信頼を得ることを諦めているのか。そう思うと、なんともいえない気分になった。

――苛々(いらいら)する。

端的に表現すると、そんなところだ。そういう展開は鬱陶しい。だから、あっさり切り捨てた。

「では、生まれ変わればよい」

ジェイサルドは眼をしばたたいた。彼のこんな表情を見るのは、はじめてかもしれない。なんの話だかわからないという顔だ。

ヤエトは、彼が名づけた名を呼んだ。

「サーヤリム」

「……はい」

反射的に答え、老騎士は自分の声におどろいたように表情を強張らせた。ヤエトは言葉をかさねた。

「生まれ変わればよいのです。自分の望む自分に。規定された自分を捨てて、新しく。この名は、そういう風にだって使えるはずです」

名を交換した鬼神が、やがて世界の狭間から抜け出して来て、ジェイサルドを我が物にしてしまうのを防ぐ、そのためだけでなく。

「新しく……」

「わかりませんか？　では、こう考えなさい。あなたのあるじは、わたしになってしまった。だから、前のあるじに仕えるように仕えてはいけない。これなら理解できますね？」

はは、とジェイサルドは小さく笑った。

「まことに。……スラジャの奴に聞きましたぞ」
「なにをです」
「人殺しの泥棒を召し抱えたのではない、と仰せになったとか」
「……いったような気もしますね」
「正直に申しまして、それを聞かされたときは、甘いかただと思いました」
「否定できません」
ですが、とジェイサルドは言葉をつづけた。
「そうではないのですな。殿は、ほんとうの強さを求めておいでだ」
「……なんです、それは」
「背負った過去から未来を勝手に諦めるのは許さん、と仰せなのです。お望みはわかりましたが、難しいことですぞ、殿」
「努力してください」
真面目くさった顔で、ジェイサルドは一礼した。
「心得ました。しかし殿、今はほかにお聞かせ願いたいことがございます」
目顔で先をうながすと、ジェイサルドはわずかに顔を寄せ、声を低めて問うた。
「預言者は、殿になにをしたのです」
ヤエトには、答える言葉がなかった。
老騎士は、眼を覗けば心の中まであきらかになるとでもいうように、視線を合わせたまま動かない。
「預言者が……」
ようやく絞り出した声はかすれ、痰が絡んでまともに話をつづけることができなかった。
ジェイサルドに背をさすられ、暫く咳き込んでから、なんとか声が出るようになった。しかし、相変わらず言葉がみつからない。
「殿」
しかたない。肚を据え、明かした。
「記憶が、途切れているのです」
「なんと……お倒れになる以前から、でしょうか」
ヤエトはうなずいた。預言者という言葉を聞くま

で、あの女性が関係する可能性さえ、思い浮かばなかったほどだ。

まったく、記憶がない。

どこで倒れたのかと皇女に訊いたのは、倒れる前の記憶が不完全だからだ。たしかに、高熱を発して昏倒すれば、ある程度は記憶が混濁する。だが、どういう経緯で倒れたかくらいは思いだすものだ。

なのに、今回はそれがない。丁寧に辿っていけば、どこで途切れているかはわかるだろうが、今はまだ、記憶を精査する体力も気力も不足していた。

なにより、怖かった。

理由はわからない。情けない話だが、ただ怖かったのだ。

――少し、思いだしてきた。

そうだ。彼は、預言者と会談するために出かけたのだ。供も連れず、シロバに乗って。

会談は内密におこなわれる予定だった。スラジャは知っているはずだが、沙漠の問題には皇女を巻き込まないようにと、ヤエトは彼に申し渡していた。だから代官は、《黒狼公》が行方不明になったとだけ連絡したのだろう。ヤエトの消息がすぐに知れればなおのこと、皇女に余計な話を吹き込む必要はないと判断したに違いない。

「……わたしのいった通りになった」

「なんのことですかな」

「供など連れずとも、シロバさえいれば無事に帰れますから、と」

同行するというジェイサルドを、ヤエトは置いて行った。シロバが乗せたがらないから、と。実際、シロバはそのとき、ジェイサルドの同乗を嫌った。それで老騎士も引き下がらざるを得なかったのだ。

「まことに。ですが、次はどうしても儂をお連れください。それで……お答えいただけぬのですか」

「なにがあったかは、わかりません。ナオ殿の見立てでは、神気にあたったようだというので……きっと、そうなのでしょう」

「あの者が悪さをしたのでなければよいのですが」
口調が怖い。預言者の落ち度がみつかれば、即座に剣の錆にしてくれようぞ、という勢いだ。
「しかし、神気にあたるといっても……いったい、なにが起きたものやら」
「神を宿した者が力を向ければ、神気にあたりましょう。そういうものです」
「……経験が？」
ジェイサルドは笑顔を見せたが、無言だった。訊くな、ということだろう。
しかたなく、ヤエトは質問の方向を変えた。
「あなたは鬼神のその……神気というようなものに、あたったりはしないのですか」
「鬼神は鬼神に過ぎません」
ごく当たり前の常識を説くように、ジェイサルドは答えた。だが、ヤエトにはわけがわからない。
ヤエトの表情から、通じていないと察したらしい。少し考えてから、説明をこころみてくれた。
「神は地上にあるべからざるもの。地上に置くには大き過ぎる力と申せましょう。鬼神は違います。人よりは強く、不可解な存在ではありますが……地上にあってもおかしくはない。その程度のものです。でなければ、儂がこうしてお仕えすることもかなわなかったかと」
そうですか、とうなずくしかない。鬼神の力が凄まじいのは、ジェイサルドの強力無比ぶりを見れば実感できるのだが、それでも、いわゆる神とは格が違うということだろう。
鬼神でこれなのだから、神を宿す者に出会ったら、即座に後ろを向いて全速力で逃げ出すべき、ということになる。しかしどうやら、ヤエトはそういう存在とまともに対峙してしまったらしい。
「預言者は、神を宿しているわけでは……ないですよね？」
「神の言葉を預かるというのは、神を宿すのに非常に近い。ことに、ターンの神は別名を干渉する神と

いい、この世にある神の中で人にもっとも近い存在である、と聞き及びます」

いわれてみれば、預言者の言動自体がそんな感じだ。未来を見通してすべてを知ってなお、その決定済みの結末へと今を操作する。干渉する神とは、よくいったものだ。

ジェイサルドは深くうなずいて、告げた。

「殿に神気を向けたのが預言者でなければ、むしろ、おどろくところです。神気は、地上にあってはならぬものなのです。そんな存在が、そうそういては困る。神を宿す者は皆、短命に終わります」

「え？」

「人は人に過ぎません。神の受け皿として選ばれても、長くは耐えられぬでしょう。耐久力次第ですが、いつかは壊れます。そうですな……たとえば、医師神シーハを奉じた民をご存じでしょう」

「ナオ殿の一族ですね」

ジェイサルドの話は、やたら物騒な方向に傾斜しがちであるという欠点を除けば、おもしろく興味深いことが多い。彼は、ヤエトの知らない沙漠の習俗に詳しいからだ。

「左様。薬や治療法についての知識は一族が蓄積したものを学びますゆえ、シーハの民として生まれ育てば、医術の基礎は身につきます。その上に恩寵の力もあれば、治療者としては上等と申せましょうが、それでもすべての病を癒せるわけではない。ただ、特別な治療者というのがおりましてな。それが、シーハの民の名を高めておりました。地上の力ではどうにもならないとき――かれらはシーハの力を直接行使したと聞き及びます。死病すら癒し得たとか。しかし、身に過ぎた力を使うほど、治療者は死に近づくのです。シーハの再来よ、現身（うつしみ）よと讃えられた治療者は、例外なく早逝しています。数多の命を救い、感謝され、崇（あが）められつつ」

「……ずいぶん苛烈（かたじ）な話ですね」

――皮肉な話でもある。

自分の命を削って他者を治す？　なにかがおかしくないか。

ジェイサルドはうなずいて、言葉をつづけた。

「シーハの神殿には、病人や怪我人が通い詰めます。治療者を目指す者は、伝染する病に苦しむ者も厭わずに接し、治療をほどこします。そして病を得ると……死病からの復活を、自力でなし遂げるのだと聞き及びます。それがかなわねば、命を落とすと」

ヤエトは顔をしかめた。

きっと、成功しない者の方が多い。神を宿すほどの治療者が、一代にそんなに何人も出るはずがない。地上にあってはならないほどの力なのだから。

「そこまでして、治療者になりたいものなのか」

思わず本音がこぼれてしまう。ヤエトも恩寵の力の持ち主だが、彼の力は鍛練の末に発現させたのではなく、不運にも暴発してしまったものだ。

訓練すれば過去が視えるぞといわれ、それで命を削ることになるとわかっていたら、自分は果たして恩寵の力を欲しいと思っただろうか？

正直なところ、わからない。

ヤエトは過去が好きだ。歴史を検証できるなら、と喜んで訓練をはじめた可能性はある。

人を治すという信仰と使命感に支配された一族がいて、そういう環境で育てられれば、命懸けで治療者を目指しても、おかしくないのだろう。

「儂にはわかりませんが……。シーハの民は浮き世離れしていて、金銭や権力では動きません」

「ではナオ殿は、なぜ皇家に仕えているのだろう」

「なにかの縁があったのでしょう」

「知らないのですか」

「寡聞にして。調べますか？」

いや、とヤエトは首を左右にふった。ほとんど頭が痛まないのは、とんでもない味の薬膳のおかげだろうか。だとしても、もう食べたくないが。

「神気について、もっと教えてください」

「儂もこれ以上は存じません。神気にあたるとは、

我を失うこと。個我が消えるとか申します。恩寵の力もまた神気の一種でありましょうが、力の質、量、すべてにおいて隔絶したものであるとお考えを」

ジェイサルドは言葉を切った。殿、とヤエトを見ながらつづけた声は静かだが、力がこもっていた。

「――あの者に、関わってはなりません。殿のお命が、縮みます」

「そうもいかないでしょう」

現実的な回答が、勝手に口をついて出た。

ジェイサルドの眼は底冷えのする光を帯びていて、逆らうなんてとんでもないという感じだが、しかし、これは事実だ。

ヤエトの過去視の力は、過去をつかさどる神オルムストの与える恩寵だ。未来を語る神ターンとは、対になる存在である。同質で、逆に向かう力。

この繋がりは、ジェイサルドにはわからないだろう。理屈では説明できない。ヤエトは預言者を嫌いながら無視することはできず、彼女に呼ばれたらどうしても行かねばならない、と感じていた。

だから、行ったのだ。

引きあうとともに反発しあっているのは彼の中にある神の力で、ヤエトには制御できない。

そこまで考えて、ふと思った。

――外部の神気に晒されたのではなく、自分の内に宿したのかも？

神がヤエトの中に降臨する可能性も、皆無ではないだろう。だが、神託なき神と呼ばれ、つねに過去をみつめるだけのオルムストが、地上の人間に宿る可能性などあるのか？

ヤエトは考えるのをやめた。情報が少な過ぎる。憶測に憶測をかさねてもしかたがない。今は自分にできること、やるべきことをせねば。

「……ファルバーンを、ここに呼びたい」

かなり面倒な命令なのだが、ジェイサルドはことなげに答えた。

「内密に、はからう必要がありますな」

「内密かつ早急に。王にお願いして、鳥を使わせてもらいなさい」

ファルバーンというのは、滅亡した沙漠の都市国家、アルハンの元王族だ。今はなぜか平民面してヤエトに仕えているが、それも本来ならあやうい。

沙漠の王族は、帝国では叛逆者扱いである。北嶺に足を踏み入れさせたくはなかったのだが、彼も関係者、いや中心人物のひとりだろう。多少危険であっても同席を望みたい。同じ話をするのは面倒だし、種明かしは一回で済ませたい。

それから、とヤエトは顔を上げ、ジェイサルドの視線をとらえてから言葉をつづけた。

「あなたが実際に鬼神と名前を取り替えたという話をせねばなりません。許してもらえますか」

老騎士はわずかに眉根を寄せた。

「許す、など。殿はただ、お命じください」

「もちろん、命じます。嫌といわれても、そろそろ話しておかねばならない頃合でしょう」

限界だろう、とヤエトは思う。

いろいろと抱え過ぎだと、皇女なら呆れるだろう。いや、怒るだろうか。もっとたよれと命じたはずだと、彼を責めるかもしれない。

抱えてなんとかできるなら、叱られようがなにしようがかまわない。だが、たとえば自分がこのまま死んでしまったら――ヤエトは自分の手を見下ろした。もともと骨張った手だったが、さらに肉が落ちてしまった。

こんなものに、世界の命運を握らせたままでは困るのだ。

「……それでも、事前に許可がほしいと思ってしまう程度に、わたしは弱い。弱いから、あなたの考えを尊重することもできるのです」

ジェイサルドは暫し無言だったが、やがてふっと小さく息を吐くと、しみじみと告げた。

「殿は、ほんとうに変わったかたですな」

「そうかな。人間なんて弱いものだというのは、よ

く聞く評価だと思いますが」
「弱いと認めて、だから他者を尊重することができると結論づけるのは、きわめて珍しいかと。……ともあれ、殿を許すなどという不遜な行為が儂にできるのであれば、それはあらかじめ織り込み済みのものであるとお考えください。殿がいつ、誰に明かそうとお思いになってもかまわぬものである、と。お話しした時点で、その覚悟はできております」
いわれてみれば、当たり前だ。今さら許してほしいなどと口走った不明を羞じ、ヤエトはうなずいた。
「わかりました」
「相手が先代であっても、殿であっても、それは同じですが……敢えて申し上げれば、違うのです」
「違う？」
そのまま返した自分は、さぞ間抜け面を晒していただろうと思う。だが、ジェイサルドは重々しくうなずいた。ヤエトの言葉を認めるように。
「はい。先ほど、鳥にもわかるなどと申しましたが、殿は信の置けるかたです。どう申せばよいのか……先代とは違います。ただ信じてもよいと感じるのです、すべての面で」
「……体力は、信じられないでしょう」
ジェイサルドはにこりと笑って立ち上がると、一礼した。
「ご自覚がおありとは、ありがたい。手配は済ませておきます、安心してお休みください」

2

意識が戻っても、ヤエトは面会謝絶ということになっていた。
ジェイサルドの防御は鉄壁で、皇女すら二度と訪ねて来ることはできなかった。セルクが部屋の前まで突撃してきたのは大声でわかったが、これもあっさり撃退されたようだ。もちろん、ヤエトが外に出るのも許されない。許すなど僭越だとかいった割に、

この仕打ち。矛盾している。

おかげでヤエトの機嫌は悪くなる一方だったが、何日めかに、ジェイサルドがようやく告げた。

「そろそろ、よろしいでしょう」

「もうずっと前から大丈夫です」

「出歩いてすぐお倒れになるのは、大丈夫とは申しませんのでな」

やさしげな口調だが、なにかが怖い。

ことヤエトの体調に関しては、ジェイサルドに逆らっても無駄である。あの凄まじい味の薬膳も含めて、こうと決めたら絶対に譲ってもらえない。逆らえば命はないという迫力で睨まれると、長生きさせたがっているのだから殺しはしないだろうという、まっとうな理屈を認められなくなってしまう。

ともあれ、ヤエトはようやく床を払い、部屋を出ることができた。それは、喜ばしい。

しかし、ジェイサルドに背負われてというのは、あまりにあまりなのではないだろうか。快気祝いと称し、廊下で待っていた人々がいるわけなのだが。

「尚書官殿」

声の主は、厨房助手のアルサールだ。計算もなかなか得意なので、去年は暇をみて帳簿のつけかたを教えてやった。あの頃は今に比べればまだ時間があったな、と眼が遠くなってしまいそうだ。

厨房から駆け付けたのだろう、アルサールは手に玉杓子を持っている。包丁でなくてよかった。

「久しぶりだね」

ヤエトが答えると、アルサールはなぜか眼をうるませてうなずいた。

「はい。ほんとうに……」

お元気そうでなによりですと、ふつうならつづくのだろうが、ヤエトは元気には見えないだろう。気の毒に、完全に詰まってしまっている。

しかし、これがきっかけになって、皆が一斉に喋りだした。いかん、うるさいと思ったとき。

「そこを退けい」

ジェイサルドが唸った。おおかたの野次馬はそれで後ずさったが、反抗的に言葉を返した男がいた。グランダクである。

「少しくらい、いいだろう。ずっと、死んでるんじゃないかと案じていたんだぞ」

案じていたどころか、賭けていたに違いない。北嶺の民は賭けが好きだが、グランダクはとくにその傾向が強い。あらゆることを、賭けの対象にしてしまう。たとえば彼の親友のセルクだって、いつも賭けられ、遊ばれる側だ。そのせいか、セルクは賭けごとが好きではない。つねに真面目である。

「なんてことをいうんだ！」

セルクの声は、耳に突き刺さるようだ。この大声の威力を、なにかに転用できればよいのにと思う。たとえば冬場の暖房とか。

慣れているのだろう、グランダクは怒鳴られても平然としている。

「事実だろ、みんな心配してたんだ。おまえだってそうじゃないか」

「それは、……そうだが」

グランダクとセルクは廊下の中央に立っている。故意に進路妨害をしているのか、気がきかないだけなのかはともかく、グランダクの笑顔に偽りはなさそうだ。声も明るく、上機嫌そのものである。

「だから俺たちは、無事をたしかめたいんだよ。実際、元気ならお祝いしたいしな」

なるほど、とヤエトは思った。思っただけでは済まず、つい口にしてしまう。

「わたしが生き延びる方に賭けたんですね」

笑顔が、こわばった。

セルクの顔が真っ青になり、それから真っ赤になる。グランダクはいかにも嫌そうに顔をしかめると、これだから、とつぶやいた。

「簡単には死なないと思うんだよなぁ」

「グランダク、人の生き死にを、賭け……賭け……それも、それもこの、こんな……この！」

セルクは絶句してしまった。まだ指示語だけで話をしようとする年代でもないだろうに。ヤエトより若いのだ、もう少しは頑張ってくれないと困る。

それきり、誰も喋らない。グランダクは不満顔で黙りこんだままである。無言で見守るたくさんの青い眼。視線の圧力だけで疲れてしまいそうだ。

しかたなく、ヤエトは口を開いた。

「賭けの種にするのはかまいませんが、わたしの邪魔にならない範囲で願います。我が王のもとへご挨拶に伺わねばなりません、通してもらえませんか」

彼の言葉が終わるやいなや、ジェイサルドが歩きはじめた。その迫力に押されるように、廊下を埋めていた人々が場所をあける。

ついて来た者もあったが、主塔に通じる階段の下で、待ち受けていたルーギンがすべて追い返した。

「本日、ここから先は立ち入り禁止である。王にご用のある場合も、例外ない」

権威をふりかざすと決めたら、ルーギンは容赦がない。反論は許さないし、理由の説明もしない。ただ当然のこととして、命じる――そういうふるまいができる男だ。生まれついての大貴族らしく、やりかたが身についている。ととのった顔だちのせいもあって、冷淡な表情がひときわ効果的だ。

部下たちに通路を塞がせると、ルーギンは別人のような笑顔をヤエトに向けた。

「こちらへ。姫様がお待ちです」

塔の中の人払いは済んでいます、とルーギンは階段を上りながら説明した。人払いをしないわけにはいかない話だ、どうせなら完全を期してほしいと、ヤエトが事前に依頼しておいたのだ。

療養中のできごとについて聞き、今後の方針を決定する――要は北嶺国運営のための最高会議をおこなう、ということになっている。その手の話もせねばならないから、あながち嘘ともいいがたい。

皇女の女官も下に追いやった、とルーギンは告げた。徹底している。

「ナオ殿だけは、残っていただきました。男ばかりでは気配りの行き届かない面もあるでしょうし。かまいませんね？」
「はい。それで結構です」
皇女にとって、もっとも身近な存在はナオだろうと思う。起居をともにした年月も長い。皇女が意識している以上に、ナオの存在は大きいはずだ。そういう相手には、秘密を抱えない方がよい。
ルーギンは最後の扉を守る部下にうなずいて場所を空けさせた。進み出て、みずから呼ばわる。
「ルーギンです。公をお連れしました」
塔の中は、ひっそりとしていた。いつもの椅子に、皇女の姿はない。私的な謁見にも使われる広い部屋は、寒々しく見えた。
「待ちかねたぞ」
皇女の声は、奥の間から聞こえた。ナオが出て来ると、厳しい眼でヤエトの様子を検分した。
「この部屋では暖気がまわりかねます。あちらへ」
ヤエトはジェイサルドに命じた。
「下ろしなさい。自分の足で歩きます」
さすがに、最後まで背負われたままというのは礼儀に反するだろう。
奥の間には、大きな暖炉がある。ヤエトが最初に倒れたときに運び込まれ、そのまま滞在することになったあの部屋で、非常に見覚えがある——だが、あのときは暖炉に火は入っていなかった。今年の方が、寒さのゆるむのが遅いのかもしれない。
床には毛皮が敷かれている。北嶺人は、あまり椅子を使わない。木材が貴重でそもそも家具が少ないのもあるが、床下に暖気をまわして暖房をしているのも、椅子が発達しなかった理由だろう。
「早く座れ」
命じられて腰を下ろすと、ジェイサルドが背中にあてものをし、寄り掛かれるようにしてくれた。主君の前でこの姿勢はないのではないかと思ったが、皇女はうなずいた。

「それでよい」
ジェイサルドはそのままヤエトの左隣に座った。右隣はと見れば、頭に紗をかぶった女官が座っている。人払いをしたはずではと見直したとき、女官が紗を上げ、面を晒した。
「お久しぶりです、公」
あざやかな緑の眼に見覚えがなければ、うっかり騙されていただろう。
「ファルバーン？」
「はい」
ヤエトが呼んだのだから、彼がここにいてもおどろく理由はないのだが、……おどろいた。
ひょろ長いし肩幅もあるくせに、女装がしっくりと馴染んでいた。あやうく、よくお似合いですよと口走りかけたほどだ。
ファルバーンは笑った。
「ナオ殿の遠い係累というふれこみです。沙漠出身の寡婦で、ご領地にいたところを公に拾っていただき、ナオ殿にお引き合わせくださると、お約束をたまわったことになっております」
「……寡婦？」
答えたのはジェイサルドだった。
「寡婦です。未婚の女性ですと、斯様に襟元の詰まった、ぶかぶかとした服は着ませんのでな」
「動きづらそうだな」
端的に評したのは、皇女だった。そういう本人は、今日も男装といってよい恰好である。
「お見苦しいものをお目にかけます」
ファルバーンは頭を下げた。いやいや、とヤエトは小さく首をふった。身元をごまかすには悪くない。それに実際、見苦しくもない。
「早速、《黒狼公》は寡婦好みか、と噂がたちそうですけどね」
そんな軽口を叩きながら、ルーギンが扉を閉めた。ヤエトの恨みがましい視線に気づいたのだろう、こちらを見るとにこりと笑って保証した。

「ここは都じゃないから、暫くは大丈夫でしょう」
少しも安心できない。去年は年端も行かない少女が好みだと誤解され、えらいめにあったのだ。
「次から次へと縁談を断っておいでですからな。いろいろと無茶な詮索をする輩もおりましょう」
ジェイサルドがそう口にしたとたん。
「縁談？」
皇女とルーギン、それにファルバーンの三人が声を揃えた。
「……陛下のひとかたならぬ引き立てぶりを見れば、縁戚になって損はないと踏む貴族も少なくないか。で、どこから縁談が来たのです」
好奇心丸出しで尋ねるルーギンに、ヤエトは顔をしかめて答えた。
「お断りしているのです、関係ありません」
「関係ありますよ。誰がそんな野望を抱いているのか、知っておくべきですね。公を踏み台にして陛下に近づきたいのか、それとも姫様を狙っているのか……なんにせよ、教えていただかねば」
言葉はもっともらしいが、おもしろがっているだけに違いない。ルーギンを楽しませて、なんの得があるというのか。断固拒否である。
「そんなもの、詮索していたらきりがありません。都でわたしに声をかける人間は、皆そうです。とくに目立った動きがあればご報告します」
最後の部分は皇女を見て告げた。なんとなく不満そうな顔ではあったが、それでも皇女はうなずいて、わかった、と答えた。
「よきにはからえ。しかし、そなたと釣り合う年頃の貴族の娘で独身とは、不自然ではないのか？」
若いんですよ、とヤエトは心の中で答えた。《黒狼公》は子どもが好みというあやまった情報が未だに流れているらしく、へたをすると皇女より若いくらいの子どもが縁談の相手なのだ。
もっとも、理由はそればかりではないだろう。純血の貴族に限っていえば、男女比は寒々しいほど極



端だ。男が多く、女が少ない。

原因は沙漠越えである。

一族郎党引き連れて沙漠を越えたのは、よほどの大貴族だけだ。いずれ狂える皇帝に殺されてしまうと確信するほど皇家との血の繋がりが濃い一門は、女子どもも揃って沙漠を越えた。しかし、下級貴族はそうではない。もともと、皇弟の高潔な自殺であると考えられていた遠征なのだ。家門を代表して、身ひとつで参加した男だけが沙漠を越えた——つまり、同行者のほとんどが男性だったのだ。

だから、ヤエトと同年輩となると、未婚の女性など、貴族階級には存在しない。

なにごとも実利を重んじる帝国人とはいえ、貴族社会は面子の比重が大きい。土地の民を娶るより、純血の貴族から妻を迎えるべき、というのがその共通認識だ。だから、沙漠を越えてきたような年代の貴族の娘は引く手数多で、嫁ぎ先には困らない。皇女がいう通り、独身などあり得ないことなのだ。

ほんの少女であっても、未だに貴族階級においては貴重な手駒である。だから縁談の申し入れをしてくるのは《黒狼公》とは家格の釣り合わない下級貴族の、沙漠や南方出身の母から生まれた娘が多い。ヤエトも純血の貴族階級出身ではないから、それで釣り合うとでも思うのだろう。

——頭が悪過ぎる。

貴族階級出身でないからこそ、妻に迎えるには血筋も家柄も文句のない女性を求めるだろうという程度のことは考えろ、と思う。

もちろん、ヤエトには結婚する気などないのだが、それとこれとは別である。仕掛けかたのなっていない罠を眺める獲物の気分というか。こうすれば引っ掛かりやすくなりますよと助言したくなる。

「……どうか、今はご放念ください。それより、お伝えせねばならない話がございます」

危険をおかしてファルバーンまで呼び寄せたのに、とる気もない嫁の話など、時間の無駄だ。

「そうだな。話とは、なんだ」
「発端は去年、都で耳にした戯れ歌のような予言詩のようなものです。王にはお話ししたことがございますが——ジェイサルドにも」
老騎士はわずかに眉を上げた。
「あの、沙漠を軍が渡り、子ども騙しのまじないが力を持つ……という？」
「予言は、お好きではないと思っていました」
ぽつりと言葉をこぼしたのは、ファルバーンだった。自分の声にはっとしたように彼は首をすくめ、僭越なことを、とつぶやいた。
かまいませんよ、とヤエトは答えた。
「その通りです。好きではないし、信じてもいません。ですが、預言者の言葉を無視できないように、わたしはこの詩も看過できなかったのです」
「正確には、どんな詩なのです？」
ルーギンに問われるまま、ヤエトは暗謡した。
「神与の力がよみがえり、沙漠を軍旅が渡ります。言葉と名前が始源の力を取り戻し、子ども騙しのまじないが人を呪い殺すでしょう。剣を鍛え、竜を呼びなさい——」
皇女が、少し身を乗り出した。聞かせたことはあるはずだが、すっかり忘れていたのではないだろうか。少なくともヤエトのように何回も反復し、気にかけてなどいなかっただろう。
——皇女には身近なできごとばかりだな。
沙漠を渡ったのは、彼女の父親の軍だ。名前の魔法で皇女は呪われ、あやういところを生き延びた。そして青鉄の剣で眠れる竜、ツェートーを呼び起こした。すべて、符合する。
「わたしが気になったのは、この先につづく、女王ジャヤヴァーラの時代に履行されなかった契約の残りを果たすため、魔物があらわれるという部分です。血なまぐさい展開になるという示唆もありました」
「ずいぶん漠然とした話だ」
ルーギンの評に、ヤエトはうなずいた。

「しかし、どうしても忘れられなかったのです」
「過去のことだからだろう」
さらりと口にしたのは、皇女である。
「過去、ですか？　しかし……」
「あらわしているのは未来の話でも、古いものが『よみがえる』、『取り戻す』……。そなたは歴史馬鹿だからな、気になって当然だ」
全員が納得したような顔になった。歴史馬鹿という説明で腑に落ちられるのも癪に障るのだが、なるほど、と実はヤエトも納得した。
たしかにこれはヤエトにとって、過去を探って明かす行為だ。この詩ははるか昔、悪名高い女王ジャヤヴァーラが生きていた時代のものなのだから。
「ご存じの通り、沙漠の東には文字でしるされた歴史というものがありません。口承の神話や伝説も、残念ながらあまり……。沙漠にはもう少し、そういったものがあったでしょうが――」
帝国が、それを圧殺した。
そこは口にせず、ヤエトはゆっくりと息を継いでから話をつづけた。
「ともあれ、南方三代の伝説くらいは残っています。南方を統一して王国となした覇王アームラター、その息子で邪眼のヴァタール、そして最強最悪を謳われる女王ジャヤヴァーラ。アームラターは黒の御子と呼ばれる地下の神との契約により、尋常ならざる力を得たといわれています。ヴァタールはそれに比べれば逸話の少ない王で、父と祖父を圧倒するのは、なんといってもジャヤヴァーラです。彼女は魔物を率い、破壊と殺戮の限りを尽くしたと伝えられます。支配するより、滅ぼすことに歓びを感じるたぐいの人物だったようです」
「それでは、国は長くつづくまい」
皇女の指摘はもっともだ。
「お言葉の通りです。ジャヤヴァーラの死とともに王国は瓦解し、魔物は消えました。そして、魔法の力、神の力も薄れたのです」

全員を見渡して、ヤエトは言葉をつづけた。

「ジャヤヴァーラを倒したのは、若者だったといいます。彼は魔法の剣に選ばれた勇者でした。名は伝わっていません。その剣は、魔物たちの世界と我々の住むこの世界の境界を切り裂き、繋がりを断ち切ったといいます。そのため、ジャヤヴァーラが従えていた魔物もすべて姿を消したと。語り伝えられている物語では、地面が割れて魔物を呑んだとか、空の彼方へ消し飛んだとかいう表現になっています」

過去視の力は使いたくなかったので、ヤエトは地道に伝説を収集した。幸い、沙漠の旧国家群の生き残りが彼の領地に移り住んでいて、伝説を集めるにはもってこいだった。聞き取り調査には専任の尚書官を雇い、すべて文字に起こして報告させた。人を使う立場になってよかったと、はじめて思った。

自分で調べてまわる方が楽しいだろうとも思ったが、たとえ今のように多忙をきわめていなくとも、体力面で無理がある。

「魔物が、その女王の兵力だったということ？」

ルーギンが不思議そうに尋ねた。

「そうです」

「魔物ね……。そんなもの、見たこともないな」

「子ども騙しのまじないが実効を持つのだから、昔話にしか出てこないような魔物たちも、実体を持ってあらわれるとしても、おかしくはない」

皇女が口を挟むと、ルーギンは黙った。それでも、騎士の眸（ひとみ）はまだ懐疑の色に揺れていた。無理もない。ヤエト自身、恩寵の力で視て、聞かされていたのでなければ信じづらい。

だが、恩寵の力は神の力だ。それが伝えるのは真実のみである。

「かつて、南方地域は諸藩王が割拠しておりました。それを統一したのはアームラターです。覇王と呼ばれることからわかるように、彼は力で他を圧倒し、併呑しました。怪異な力に後押しされていたとも伝えられます。ですが、ここには魔物は登場しない。

呪師は重用されたそうですが、彼が率いたのは、せいぜい異能者の集団に過ぎませんでした。彼の孫娘であるジャヤヴァーラの軍は、そうではなかった……人外の異形を主体とした、怪異そのものです」

ジャヤヴァーラにまつわる伝説は奇想天外なものが多い。それらをまるごと信じるわけではないが、女王とその軍がどれほど異質だったか、人々の心に強い印象を刻んだかについては、疑いようもない。

「おかしくなったのは、女王の代からか？」

「それも難しいところなのですが……南方三代の第二代となる王、ヴァタールの異名は邪眼でした。遠方を覗き見る力を持っていたとも伝えられますが、事実かどうかは不明です。彼は覇王の数多いる息子たちの中の、あまりぱっとしないひとりでした。まずは常識の範囲内の兵団を預けられていたのですが、妻を得て以降、劇的に変わります」

「妻？」

「ジャヤヴァーラの母親です」

「なんという名だ」

「その女性の名は伝えられていません」

皇女は不機嫌そうな顔になった。だから歴史は嫌いなのだという風だ。女の名が残らぬから、と。

しかし、これは歴史ですらない。口伝えに残された、曖昧な物語だ。

「東方の平原地帯出身だったのだろう、といわれています。その一帯を制圧したのが、当時はまだ王子だったヴァタールでした。彼女は凱旋の途に就いたヴァタールの前にあらわれ、自分を妻にすれば王になれる、と宣言したとか。彼女を娶ったヴァタールは、みるみる頭角をあらわし、燃え尽きるように崩じた覇王の玉座を継承。彼の治世は父や娘の時代よりも安定したものだったようですが、このあたりから、南方の軍は魔物の軍、という話が出て来ます。ヴァタールの妃が邪術の使い手で、魔物を召喚したとか。そのヴァタールを弑して玉座を奪ったがために、ジャヤヴァーラは親殺しの女王と呼ばれます。

以後、女王の求めに応じて魔物は地上に姿をあらわし、そのまま留まった、と」

「母親はどうしたのだ」

「昔語りでは、ジャヤヴァーラが母親の腹を食い破って生まれたために命を落としたということになっていますが……産褥死かと」

荒唐無稽だな、とルーギンがつぶやいた。その通りだが、だからといって無視もできない。その理由を、ヤエトは告げた。

「その荒唐無稽な話にも、型があるのです。内容は語り手によって少しずつ違いますが、いくつか集めてみると、踏襲される基本の型がわかります。たとえば先ほどご説明した、魔物が地上から消える話でも、型は有効です。魔法の剣でジャヤヴァーラが殺されたとき、同時に魔物も消えた、という型です。ジャヤヴァーラの名も知られぬ母親の逸話にも、型は存在します。曰く、自分の命を捧げるゆえ、やがて生まれ来る娘がこの国を滅ぼす手伝いをせよ、と魔物たちと契約したのだと」

皇女が眼をみはった。

「胎内の娘に、左様な運命を与えたと申すか」

「御意」

作り話ならよかった、と思う。語り手次第で、物語は姿を変えていくものだ。より派手に、より聞き手を怖がらせるよう、工夫をこらされていった結果、そういう話になったのならよかった。

だが、これは実際にあったことなのだ。ほかの誰が信じなくても、ヤエトは信じるしかない。

恩寵の力で知った真実の断片と、この伝承は符合する。調査の結果を手にしたときに覚えたのは、意外さよりも腑に落ちたという感覚だった。これが、あの言葉の意味するところか、と思ったのだ。

――復讐に目が眩んだ女が、間違った契約の果てに産んだ娘だ。

今も、ふとした拍子にあの光景を思い出す。暗い空、さらに暗く冷たい海。そして、すべての音を吸

い込んでしまう雪と、あの白い青年。揺るぎない言葉は、人の領域を超えていた。あれは人ではなかったと思う。それならなんなのかは、わからないが。

「復讐であった、と伝わっています。王にするというのは、そのための餌であったのだと。ジャヤヴァーラの母親は、侵略者に媚びたと見せて、その口に毒を含ませたのです。運の悪いことに、彼女は魔界のものと交渉できるような力の持ち主だった。地上を蹂躙し、支配せよと魔物たちを誘惑した。贄としたのは娘の一生そのもの。娘が生きているあいだは彼女に従うようにと。ですから……残酷な君主であっても、ジャヤヴァーラが生きていたあいだは、魔物たちは彼女に従いました。ですが、女王が死んだ今、もしふたたび魔物が姿をあらわしたとしたら、それはなんら制御を受けない粗暴な力そのものでしかないでしょう。ジャヤヴァーラの母親は、娘が死に、南方王国が滅びた先のことまでは、契約に含めなかったのです。彼女は魔物たちに地上への道を開き、閉じないまま死んでしまった……昔語りに伝わる魔法の剣が、女王を倒したのみならず、異界への道も封じたのでなければ、地上は焦土と化していたでしょう」

暫しの沈黙の後、皇女が尋ねた。

「遠からず魔物があらわれると、そなたは考えているのだな」

「魔物を封じた力が、弱まっております。魔界との境が、開きかけているのではないかと思うのです。恩寵の力が強まっている原因も、それで説明がつきます——力の源泉に通じる道が開いたからであれば。その道は、魔界へ通じているはず。ジャヤヴァーラの魔物たちが這い出て来た穴が、開くのです」

「どこにあるかは、わかっているのか？」

「特定の場所に依存するわけではないかと存じます。この世と異界の繋がりは、そういった常識におさまるものではないでしょうから」

眉根を寄せて考えこんでいたルーギンが、顔を上

げ、断じた。
「いわせてもらえば、すべて憶測に過ぎないな」
「その通りです。ただ、ジャヤヴァーラは実在しました。父王という後ろ楯もなく女王が玉座を維持できたのも、魔物の存在を事実とすれば納得できます。誰も逆らえないだけの力が、女王にはあったのです。そして今、恩寵の力が強まっていることも、確言できます。王も、それはご存じのはず」
皇女はうなずいた。
「皇家の恩寵は、強まった」
「あなたはどうです、ファルバーン？」
ヤエトが隣を見ると、青年はうなずいた。
「アルハンの水源で、浄化すべき場所を探すのは容易でした。以前とは段違いに。わたしに与えられた恩寵の力は、強まっていると思います――清浄神に感謝を。ですが、水源の汚染もまた強まっておりました。それが、案じられます」
「折々、浄化をおこなう必要があるのか」
皇女の問いに、ファルバーンは少し躊躇してから明かした。
「母を博沙国に入らせました。沙漠からこちら側に流れてくる水脈に限っていえば、それで十分です」
ふうん、と皇女は脇息に肘をつき、額を支えてヤエトを見た。
「そなた、二の兄上を巻き込んだのか？」
「水は命のみなもとですゆえ。博沙王に、恩寵の力を持つ者がいると明かし、受け入れをお願いしました。出自（しゅつじ）については、お伝えしておりません」
「兄上のことだ、気づいておられるだろう」
「御意にございます」
知らなかったことにすれば、沙漠の元王族をかくまっていたと発覚しても、第二皇子は罪をまぬがれる可能性が高い。だからヤエトは告げなかったし、第二皇子も説明を求めなかった。
「水場の様子を直接ご覧になったのだ、穢（けが）れを放置できぬことは理解してくださったであろう。うまく

持ちかけたものだな」
「実利を重んじ、拙速を尊ばれるとお見受けしましたので、そのように配慮いたしました」
「その女性を証人に、公が訴えられることはないのかな」
ルーギンが水をさしたが、ヤエトがなにかいうより早く皇女が答えた。
「二の兄上には、たっぷり恩を売った。その支払いを真っ当にできぬかたではない」
「そうであれば、よろしいのですが」
「よろしくなければ、よろしいようにするまでだ。ヤエト、話のつづきを」
皇女にうながされ、ヤエトはふたたび口を開いた。
「とにかく、地上に湧出する力が増していること、その力の源泉との繋がりが、つまり経路が安定してきていることは確実であろうと思われます。そして、その道を通って魔物が出現することは……とても信じていただけないかもしれませんが、我が騎士団長の経歴が明かしてくれるでしょう」
「ジェイサルドの？」
「はい。ジェイサルド、お話しせよ」
正直なところ、ヤエトは久しぶりの長広舌で疲れていた。喋るだけでこんなに体力を消耗するとは思わなかった。休ませてもらえるところは休みたい。
そんなヤエトの心中を知ってか知らずか、ジェイサルドは低い声で語りはじめた。
「若かりし日、儂は名を秘しておりました。通称だけで過ごしていたのですな。ところがどうしたことか、秘していた名を知られてしまい、呪師に術をかけられました」
皇女の表情が少し動いた。自身が呪師の支配下にあったときのことを思いだしたのかもしれない。それでも、尋ねる声は落ち着いたものだった。
「どうやって助かったのだ」
「鬼神と、名を交換したのです」
ルーギンが笑った。

「……まさか、噂のその部分が真実とは思わなかったな。悪い冗談ではないんだね、ジェイサルド？」
「無論」
「では、その名前は鬼神の名なのかな」
「元来は。鬼神というのは沙漠での呼びかたで、南方であれば魔物と呼ばれる存在と同じであろうと、殿は仰せです。儂も、そのように心得ます」
皇女が、短く尋ねた。
「それで術はどうなった」
「呼び声は、ふつりと切れました。呪師に呼ばれるのがどういうものかは……ご存じのはず」
「呪師の術を引き受けた魔物の方は。逃れられたのか？」
「呪師めは死にましたが、鬼神は消えてはおりませぬ。儂には、わかるのです。彼奴は今、儂に与えた名を手がかりに、異界からこの世へ姿をあらわそうとしておるようです」
「名を手がかりに？　探されていると感じるのか」
皇女の問いに、老騎士は重々しくうなずいた。
「呪師にまじないをかけられていたときと、似ております。違うのは、呼んでいる者が人ではないと、はっきり感じられることです」
「人ではなく、魔物である、と？」
「御意」
ジェイサルドは答えて、頭をたれた。
ルーギンが顎を撫でながらつぶやいた。
「魔物、ねぇ……。そいつらに実体はあるのかな」
「沙漠では、彼奴らのことを『名づけられた力』と呼ぶこともあります。地上にあらわれるときは、力も容（かたち）を得るとか」
淡々と答えた老騎士の言葉が終わるか終わらないかのところへ、言葉がかさねられた。
「その呼称が示すものは、ジェイサルド殿のように鬼神と取り引きをした者も含まれるでしょう」
ファルバーンだった。意外なほど冷たい口調だ。
――あ、いかん。

清浄神の恩寵を得ている青年だ、地下魔界のものと深く繋がっているジェイサルドとは本質的に相容れないだろう。彼の故国を滅ぼし、父王を裏切った人物だというだけでも、かなり面倒な間柄なのに。

「ジェイサルドのような存在が、ほかにもおると申すのか？」

皇女が問い、ファルバーンが答えた。

「名を交換した者がほかにいるかとのお尋ねであれば、寡聞にして存じません。鬼神も思い切ったことをしたものです。ですが、鬼神との取り引き自体は、昔語りによくあります。異能と引き換えに、寝ているあいだは鬼神が自由にとり憑けるとか……願いをかなえる手助けをしておいて、本人が満足したところで食ってしまうとか……そんなものですね」

それを聞いて、皇女はふんと鼻を鳴らした。

「まさに、子ども騙しの世界だな」

見た目はまだ子ども子どもしたところのある皇女の口からそんな表現が飛び出すと、ちょっとおかしい。だが、ファルバーンは少しも笑わず、言葉をつづけた。

「すがれるものなら、なんでもよいという者がいるのです。力の善し悪しもわきまえず、手をのべ、摑み取ってしまう者たちが。ですが、わたしは魔界を信じません。魔界の力のみなもとは、あの穢れた心臓。毒の血です。舌に甘く、喉をうるおす水のふりをして、人を芯から腐らせてしまう――」

ルーギンが、のんびりとファルバーンを遮った。

「ま、それもやっぱり、実体はあるわけだ。異能があっても、血肉をそなえた人に過ぎないのだから」

「……たしかに、そうですが」

「相手が何者だろうと、剣で斬れば殺せるような存在なら、そうでないよりずっといい。公は――」

ここでルーギンはヤエトに視線を移し、いつものように胡散臭い笑みを浮かべた。

「――話が長くていらっしゃる。丁寧なのは結構ですが、以前もお願いしたはずです。騎士への命令は

簡潔かつ誤解の余地がないものであればよく、理由や事情の説明は不要なのです。説明が多過ぎるのは、よくない。混乱します」

「ルーギン」

名を呼んだ皇女の声は、たしなめるような調子だったが、ルーギンは気にせずつづけた。

「人外のものが魔界から這い出してくる前兆がある。備えよ、と命令してくださらなきゃね」

ヤエトは丁重に話の鉾先を逸らした。

「北嶺将軍に命令するのはわたしではありません。北嶺王でいらっしゃいます」

すかさず、皇女が話を引き取った。

「わたしの命令を聞く気はあるのか？」

「無論です」

「では、黙れ。そして、人外のものに備えよ」

ルーギンは恭しく一礼したが、顔を上げたところで表情が変わった。

「……ナオ殿？」

いわれて、気づいた。

皇女の後ろに控えていたナオが、ふるえていた。それもがたがたと、身体が揺れているのがはっきり見えるほど。

失礼、とつぶやいてファルバーンが立ち上がり、近寄ってナオの手をとった。女官の身体のふるえがますます激しくなったが、ファルバーンは手をはなさない。厳しい表情で、尋ねた。

「あなたなのか？」

「なんのことだ」

皇女が詰問すると、ファルバーンはなにもいうまいと決意したかのように口を引き結んだが、それも一瞬のことだった。低い声で、告げた。

「預言者の言葉です。北嶺王のお近くに、魔に魅入られた過去をもつ者がいる、と」

預言者、という言葉にヤエトはたじろいだ。どこにでもあらわれる。逃れられない。

皇女は険しい表情で告げた。

「ナオはわたしの乳母だ。いいかげんなことを申すと、ただでは捨て置かぬぞ」
「では、お調べしてもよろしいですか」
「なに？」
ファルバーンの眼の緑が暗く、濃くなった。
「魔とまじわれば、血が穢れます。ですので、確認は可能かと。ただし、清浄神の恩寵は浄化の力、穢れを感じるためのものではありません。ことに人の血は難しい。穢れがあれば、わたしの意に関係なく浄化がはじまり、契約を断ち切ってしまいかねないのです。契約次第では、命もあやういかと」
皇女は口を開いたが、そのまま閉じてしまった。
気詰まりな沈黙が部屋に満ちた。
ややあって、低い声がした。
「……嫌だ」
ナオだ。俯いたまま、小さくくり返した。
「嫌だ」
「どうした、ナオ？　なにが嫌なのか？」
さっと顔を上げ、皇女を見返したナオの眼には、涙が見えた。ファルバーンの手から自分の手を引き抜こうとしながら、ナオは叫んだ。
「魔物じゃない！　悪鬼なんかじゃない！　あれはシーハの神だったんだ、わたしはシーハに選ばれたんだ！　ちゃんとした治療者だ……」
ぽろぽろと、ナオの目尻から涙がこぼれた。

3

ヤエトは厩舎の屋根に腰掛けていた。
屋根には出入りのできる仕掛けがほどこされた場所がある。厩舎長の手が空いたら、そこから中に入れてもらえる約束だった。下を通ると無駄に時間を食うだろうと、ルーギンが手配してくれたのだ。ヤエトの体力では階段での移動に時間がかかるという意味かと思っていたが、部屋を出たときの騒ぎだの、ぞろぞろついて来た人の列だのを考えると、なるほ

どなぁ、と思う。

鳥が怯えるので、ジェイサルドは厩舎には同行できない。老騎士には悪いが、彼の監視下をはなれたという解放感を、ヤエトは満喫していた。

狭間のように切り取られた場所がいくつか、厩舎の屋根にはある。傾斜は緩く、ヤエトが座っても簡単には落ちない——ジェイサルドがいれば、それでも軒先にぷらんと足をたらすなど許してもらえなかっただろう。雪が解けるときには、この部分が樋の役を果たすのだと聞いた。

屋根にはもう、雪はない。

下界は春を過ぎて初夏になろうという季節のはずだが、北嶺はまだ峠が通行可能になって間もない。ようやく春がきざしはじめたか、という気候である。日がさしていても、空気は冷たい。

「どうしよう」

皇女がぽつりとつぶやいた。

北嶺王は、暇ではない。本来なら会談を終えたら政務に戻るはずだったのだが、現実はこれだ。

あれはシーハの神だ、魔物ではない、というナオの衝撃の発言から、さして時間はたっていない。

結局、ファルバーンは恩寵の力を使わなかった。

ルーギンが、ナオをどこかへ連れ去ってしまった。皇女に否を唱える暇も与えない神速の実行力は、驚異といってよいだろう。しかも、姫様も厩舎に行かれてはどうですか、と呆然としている皇女をヤエトに押しつけることまで、一気にやってのけた。

たのんだぞ、といわんばかりの勢いで送りだされたものの、これぞまさに、どうしよう……である。

——どうしよう?

知るかボケ、では済まされない展開だ。

ナオは口をつぐんでしまった。頑として喋らないのではなく、ただ無気力に黙っているように見えた。なんだか空っぽになってしまったような——今までのナオはどこかに消え、人の姿をした器だけが残っているような、そんな風情だった。

皇女も同じように感じていたのだろう、ナオが、と小さくつぶやいた。

「遠くへ行ってしまったようだ」

戻って来てくれますよと安請け合いしてもよかったが、そうならなかったときの責任はとれない。

――ウィーシャも、あんな感じだったな。

ヤエトがあの部屋に寝かされていた去年の春先、皇帝の伝達官もそこにいた。彼女に比べれば、まだナオの方が人間らしく見える。

――陛下の人事に間違いはないと、いわれているそうだが……。

未熟な伝達官をつけたせいで、皇女は危機に陥った。そして、今度はナオだ。

「ナオ殿は、シーハの神より恩寵の力を賜った……ということに、なっていたのですか」

「はっきり、そういう話をしたことはない。ただ、治療者としての実力は確たるものだったから、恩寵持ちなのだろうと……そうだな、勝手にそう思っていただけだ。ナオ自身が、わたしにそういうことを告げた記憶はない」

「陛下にも？」

皇女は首を左右にふった。

「そこまでは、わからぬ。ナオは本来、わたしの乳母ではなかった。沙漠越えで身体をこわした母のために、陛下が寄越したのだと聞いている」

「お母上のための……」

皇女の生母は、皇帝の寵愛を受けていたと聞いたことがある。その母に生き写しだからこそ、皇女は皇帝に溺愛されているのだと。

「母上のお命をこの世に留めることはできなかったのだがな。それでも陛下のご信頼は揺るがなかった。ナオがいなければ、母上はわたしをお産みになる前に亡くなっていただろう、と皆がいっていた」

――それを本人に聞かせるのも、どうなんだ。

こっそりと、ヤエトはため息をついた。

不粋で配慮のたりない人間が口にしたのだろうが、

皇女に払うべき敬意が不足し過ぎだ。宮廷でいかにかろんじられているか、察するに余りある。

とにかく、ナオに特別な力があるのは確実だ。問題は、その力の由来である。

「ファルバーンの勘違いという可能性もあります」

「勘違いどころか、調べてもいないのだからな」

調べれば異能が失われてしまうのであれば、治療者としてナオをあてにできなくなる。どうしようか、と皇女が悩むのも無理からぬことだろう。

ヤエトだって、どうするべきか見当もつかない。

「いっそ、調べてしまった方がすっきりするかもしれませんが……」

ヤエトの言葉に、皇女は苦笑した。

「そなたが倒れたとき、誰が薬を調合するのだ。ジェイサルドの薬膳だけで治る自信があるのか？」

そんな自信はまったくない。というより、あれは食べずに済ませたい。

「恩寵の力でなければ、ナオ殿は治療について嘘をつける、ということになります」

そうか、と皇女はつぶやいた。なにかを諦めるような口調だった。

——試してみるつもりになったかな。

ナオが嘘をつかざるを得ない状況に持ち込んでみればよいのだ。どれくらい追い詰められるか次第だが、それなりの精度で確認できる。

人を疑って試すのは、皇女の性格ではつらいだろう。疑念を向ける相手が母親代わりの乳母では、なおさらである。

それでも、おまかせくださいとは口にできない。ある程度は皇女自身に考えさせ、判断させねばならないと、ヤエトは考えるようになっていた。

——自分でやってしまった方が、楽だ。

つくづくそう思うが、隠居という目標を掲げているからには、自分がいなくなっても問題ないように皇女を育てておく必要がある。副官としての責務でもあろう。過大な地位と領地まで与えられてしまっ

た以上、見合ったはたらきをせねば気分が悪い。
あれもこれもと性急に押しつけてもいけないが、自分で判断することにも、きれいごとで済まない部分にも、慣れてもらわねばならない。
——ああ、面倒くさい。
早く隠居するぞとあらためて心に誓いつつ、黙ってしまった皇女を少しだけ励ますことに決めた。
「あのご様子です、ナオ殿には、お心当たりがおありなのでしょう。たとえば、本来ならご自分は恩寵にあたいする人間ではないと思い込まれるような、なにかが。ですが、ナオ殿がどうお考えになっているかと、実際にそれが神の恩寵の力かどうかは別の問題です。それに、魔物に与えられた力だったとしても、一概に否定すべきとも思えません。預言者がどういうつもりでファルバーンにそれを告げたのか、確認しておくべきでしょう」
「預言者に？　そなたはあれが嫌いなのだと思っておったが」
「それとこれとは別問題です。警告を発した以上、かかわる心づもりはできているでしょう。こちらとしても、かき回されるだけではどうしようもない。魔に魅入られた過去とやらが現在に、そして未来にどう影響してくるのかを、お尋ねになるべきです。過去になにがあったかでなく、この先どうなるかでご判断なさいませんと——ところで、王よ」
うろうろと歩き回っている皇女をふり仰ぎ、ヤエトは諭した。
「そのように落ち着かぬ風をお見せになっては、厩舎に入れてもらえませんよ」
「……わたしは、落ち着いておる」
「左様でございますか。ご立派なことです」
不満げにくちびるを尖らせ、皇女はヤエトの隣に腰を下ろした。狭い隙間に無理矢理だ。皇女が小柄だからなんとか並んで座れたようなもので、つまり、ぎゅう詰めである。
「そういう厭味ったらしいところは、好かん」

「申しわけありません」
「好かんといわれて落ち着き払っておるところも、たいそう苛立たしい」
「失礼をば」
答えながら、ヤエトは少し悩んだ。ここは慌てるべきなのだろうか？　しかし、厭味なところは好かないといわれたら、すみません、と返すしかないではないか。実際、ご立派ですというのは厭味のつもりで口にしたのだ。通じたようで、結構なことだ。
「ところで、本来ならもう少し長い話だったのではないのか？」
「は？」
「魔界の魔物どもが出て来る、という話だ」
「ああ……そうですね」
「阿呆将軍が割り込んだおかげで、聞きそびれた内容もあるのではないか」
「ルーギン殿は、聡いかたです。ひと息にすべてを説明しても、とても呑み込みきれないということに、思い至らせてくださったのです。近いうちにまた、お話しさせていただきます。今日はもう……」
言葉を探して、ヤエトは空を見た。北嶺の空はどこまでも青く、美しい。山々の冠雪の白も明るいが、空はそれ以上に明るいと感じてしまう。
風が吹いて、視界の隅にきらきらと光るものが揺れた。皇女の髪だ。美しいな、と思う。
「もう、疲れました」
思わずこぼした弱音は、本心からのものだった。
皇女は彼の顔を覗き、尋ねた。
「部屋に戻るか？」
「いいえ。シロバに会うまでは帰りません」
「倒れたらどうする」
ナオは使い物にならないぞ、という意味だろう。
ヤエトは肩をすくめた。
「厩舎に寝かせてもらいます」
「厩舎長に叩き出されるに決まっている」
「たしかに」

ここで寝ていいと誰がいった！　という声まで聞こえてきそうだ。おかしくなって、ヤエトは笑った。皇女も微笑んだが、すぐにその笑みが消えた。

「わたしがナオにしてやれることは、なにかあるだろうか。ずっと、考えていた」

眼を伏せた皇女の頬は少し削げ、するどくなったようだ。皇女の方こそ、疲れているのではないか。

――人が他者にしてやれることは、少ない。

それがヤエトの実感だが、口にして皇女の心が慰められるはずもない。助言としても、役立たずだ。少なくとも今は、これでは駄目だ。

「王は、おやさしくていらっしゃいます」

「……以前も、そなたはそんな風に申したな」

ヤエトは眉根を寄せた。さっぱり記憶にない。

「厭味で、でしょうか」

「おや、あれは厭味だったのか。……そうか、厭味か！」

皇女は笑いだした。その笑いはとまらず、しまいには涙が出て、息が切れはじめたほどだ。

ヤエト自身は、いつ、どういう場面で告げた言葉だったかを忘れているので、この反応はいささか釈然としない。だが、深い意味はないのだろう、とも思う。塞き止めていた感情が噴き出しただけだ。きっかけなど、なんでもよかったに違いない。

――少しは楽になってくれればよいが。

笑いが止まったところで、ヤエトは尋ねた。

「落ち着かれましたか」

「わたしは落ち着いておる」

「左様でございました」

「ほんとうに、厭味な男だな！」

「わたしとしては、厭味よりは偏屈を目指したいと考えているのですが」

皇女は顔をしかめた。

「わけがわからん。……とにかく、話が途中になってしまったのは、そなただけではない。わたしも伝えておきたいことがあったのだ」

「でしたら今、うけたまわります」
「叔母上が、隣の踏野郡においでになる」
「去年のもてなしが、お気に召したのでしょうか」
「わたしと、揉めたのだ」
「……は？」
皇妹と事をかまえるとは、勇敢にもほどがあると思ったが、すぐに勘違いだと知れた。
「踏野郡の太守がな、北嶺は山だけと決まっておる、と使者を寄越した」
「それはつまり、南麓鎮を寄越せ、と？」
皇女はうなずいた。
南麓鎮は都と北嶺を繋ぐ街道の、山裾の方に位置する砦である。もとは、いつの時代のものとも知れぬ建物で、狩人や行商人の宿泊所として使われていたのを、ヤエトの進言で整備したのだ。当然、北嶺の生活圏ではある。
もともと、帝国内諸領の境界は明確なものではない。人の住んでいない場所も多いし、検地も進んでいないのが実情だ。その上、北嶺では土地を所有するという意識がきわめて稀薄だ。面積の広さに比して人口は少なく、しかも経済の主体は狩猟である。
だが、踏野は違う。人口は多いし、農耕も盛んだ。経済は上昇の気運である。土地は広いほどよい、と太守も考えたのだろう。
ヤエトのように、面倒だから領地など狭い方がよい、いっそ失ってしまえばせいせいする……などと思う領主は、滅多にいない。
「どうお返事なさったのですか」
揉めたという割に、皇女の表情は爽快そのものだ。まさか使者の首を刎ねて送り返したのではあるまいな、と疑いながら尋ねると、答はこうだった。
「決めたとは誰が決めたことか申すがよい、南麓鎮を置くことについては、都の真上皇帝陛下より正式にご許可をいただいておるゆえ、陛下のお約束を覆すほどの者であろうな、誰ぞ、陛下のご権威を上回るというのは、さあ申せ……と」

「使者が気の毒になるような論法ですね」
ヤエトが正直な感想を述べると、皇女はにっこりと笑って答えた。
「誰かを見習ってみただけだ」
もしかしなくても、その誰かとはヤエトのことなのだろう。そういう含みを持たせた口調だ。
「そのようなところを見習われても、どうかと」
「ならば、どこを見習えばよい？　なにかといえば高熱を発して倒れるところか。それとも、すぐ吐くところか？」
「それはいけません」
「では、なんだ」
問いつめられても困る。見習われて困る欠点ならいくつもあるが、皇女に見習ってほしい美点など、自分では思い浮かばない。
「……話を戻していただきたいのですが。皇妹殿下はその調停のために？」
「叔母上のお考えは、わたしにはわからぬ。思い当たる節といえば、今話したことくらいだ」
「左様でございますか」
皇妹ラキニーは、おそろしい女性である。
女性が社会的に評価されることのない帝国において、彼女にあるのは皇帝の妹という身分だけ。公的な権力も地位もないと皇妹は嘆く。
それは、嘘ではない。嘘ではないが、だからなんだ、という力が皇妹にはある。
兄とともに竜種の受難を生き延びたという一事に限っても、彼女が非凡であることがわかる。愚かであれば、沙漠を越える前に死んでいる。勇気がなければ、沙漠に向かうこともできなかっただろう。
その上、飛び抜けて強い恩寵の力の持ち主でもある。本来なら不可能とされる、伝達官の繋ぎ変えもやってのけるし、伝達官を経由せずに遠くの誰かと会話することも可能だ。人の心をあやつるのも、彼女にとっては容易なことらしい。
これだけでもおそろしいが、ここからが本番だ。

ヤエトより少し年長で、そろそろ四十の声を聞くはずだが、女性としての魅力は衰えていない。近寄り難いほどの完璧な美貌と、男に強烈な引力を及ぼす色香が両立している。寡婦の証として喪の色である白を纏っているが、その孤独につけ込めると勘違いする馬鹿男が大量に発生し、崇拝者は掃いて捨てるほど。そいつらの鼻先で餌を揺らし、自在にあやつるのが皇妹の得意技である。恩寵の力を使う必要もない。人を操作する技術に長け、無言の目配せひとつで男をころばせる。

ヤエト風情では渡りあえる気がしないし、もちろん、なにを考えているかなど予測もできない。

「北嶺にもおいでになるのでしょうか」

「いや、叔母上はお忙しいのでな、山登りをする暇はないと仰せであった。だからなのだ。わたしとそなたも招かせるから、踏野郡で会食でも、と」

招かせるというのは、踏野太守に、ということだろう。地方長官に顎で指図するくらい、皇妹には児戯にひとしい。

しかし、隣郡の太守は利に聡い男だと噂されている。帝国の侵攻に敢えて逆らわず、土地の権力者という立場を守りつづけているのだから、それなりの才覚の持ち主ではあろう。

招きたくもない客でも招かざるを得ない以上、余禄をつけたいと計算するはずだ。なにか厄介なことを考えついていなければよいのだが。

――それは、こちらも同様か。

南麓鎮が北嶺のものであると主張するついでに、耕作可能な土地をもう少しもぎ取ってもいいだろう。それに、北嶺からの出稼ぎが、隣郡で搾取されているという問題もある。経済格差と知識の差から発生した、とんでもない利子を撤回させる好機だ。常識の範囲内におさめないと踏み倒す、と脅してみるのも悪くないかもしれない。

暴利をむさぼっている金貸しは、太守本人か、少なくともその側近には繋がっているだろう、とヤエ

トは見ていた。
そこまで考えて、ふと気がついた。
「ルーギン殿も招待を？」
「いや、わたしとそなただけだ。そなたの加減がよくないとお伝えしたら、日延べしてくださったが……四日後なのだ。まだ本調子ではなかろう。無理をかけるな」
「左様なお気遣いはどうかご無用に」
わざわざ延期までさせたとなると、逆に欠席は許されない。皇妹の機嫌と面子を損じてもよいと思うほど、ヤエトは暢気ではない。
――しかし、微妙だ。
ルーギンと皇妹が恋人同士だったのは、そう昔の話ではない。皇女の騎士であることに徹するため、ルーギンは皇妹と別れた……らしいが、未練たっぷりなのは傍目にもわかる。皇妹の方はどうかというと、特別な配慮をする程度には、今でもルーギンのことを気にかけているはずだ。先頃、第三皇子の陰謀でルーギンの父が陥れられそうになっていると発覚したとき、皇妹はいろいろと手を回し、胡乱な噂が駆け巡るのを止めてくれたという。
――こっそり会う約束でもしたかな。
そうであってほしいような、やめておいてほしいような……やはり微妙な問題だ。関わりたくない。
皇女とヤエトだけを招くと予告したのは、ルーギンへの意思表示という可能性もある。つまり、会いたくないと伝えるために、彼の身近にいるふたりを呼び寄せる、というわけだ。
考えたくないと思えば思うほど、嫌な方へ想像が進むのを止められない。
ヤエトの苦悩を知ってか知らずか、そういえば、と皇女が話題を少しずらした。
「少し前なら、領地を空けるのは陛下より禁じられておりますとお断りできたがな。つい先日、短期間であれば領地をはなれてもよいと決まったのだ。統治を放棄したと看做されないかたちであれば、とな。

叔母上のお招きは、それを受けてのことだろう」
「《天地輪》で、ですか？」
「そうだ。勅命である、と宣言なさってからのお達しだった。そうでもしないとお忍びで、ろくに供も連れずにうろつく者がいますから、しかたがないですね……と仰ったのは、二の兄上だと思う」
苦笑混じりに告げられて、ヤエトは少しおどろいた。《天地輪》では、竜種の皇子皇女が全員で心を繋げるため、心の声が均質化され、個性が失われるという。皇女の声も含め、兄皇子の誰が喋っているかわからないもののはずだ。
「聞き分けられるようになりですか？」
「憶測だ。ただ、事前に二の兄上から連絡があったのだ。陛下にお願いしておいたから、次に訪ねる機会があれば、正体を隠さず来るようにとな」
第二皇子にしてみれば、《黒狼公》の従者のふりをした妹の訪問は、迷惑だったはずだ。無事に帰れたからよかったものの、あそこで皇女が死んでいたら、皇帝の怒りを買うことになったかもしれない。いや、かもしれないどころではない。確実に、だ。
「隠さずに済むなら、移動が楽になりますね」
「わたしはお忍びも楽しかったがな」
「チビと呼ばれても、ですか？」
皇女は一瞬、くちびるを尖らせたが、すぐに破顔して答えた。
「ファルバーンにまでそう呼ばれたな。再会してみたら、奴はずいぶん態度が違うのでおどろいたぞ」
態度より見た目の差におどろくべきでは、と思いながら、口では別のことを尋ねた。
「チビと呼ばれた方がよかったのですか」
「しつこいぞ」
「チビという呼びかたがお気に召しているのであれば、わたしもそうお呼びしようかと」
「呼びかたの問題ではないだろう！　身分を偽って出歩くのが楽しいかどうか、という話だ」
「部下の肝が冷えない程度にでしたら、お楽しみい

ただいてもよろしいかと存じます」
皇女はおどろいたようだ。真顔で尋ねてきた。
「熱でもあるのか？」
「熱が下がりましたおかげで、部屋を出していただけたのですが？」
「また上がったのかもしれぬぞ」
「シロバに会うまでは部屋に戻りません」
皇女はなにか反論しかけたようだったが、結局、ぷいと顔をそむけてつぶやいた。
「シロバのことなら、熱心になるのだな」
何日お預けを食らわされているか、考えてもみろ、というべきか悩んでいると、どんどんと鈍い音が脇の方から響いた。
「開けるぞ」
厩舎長だ。皇女が先に立ち上がり、狭間を奥に行ったところで、厩舎長が内側から戸を開くのを手伝いはじめた。ヤエトも気だけは急いで、実際にはよたよたとそちらへ向かった。
中から顔を出した厩舎長はふたりを見比べ、なんだ、と顔をしかめた。
「姫様の方は聞いてないぞ」
「わたしはジェイサルドの代役で、ヤエトの護衛だ。奴はここに入れないからな」
「そうか」
なぜか厩舎長はそれで納得し、入れ、と短く告げただけで自分は中に引っ込んでしまった。ヤエトは眉をひそめて皇女を見た。
「滅多なことを仰いませんよう。そういうものだと厩舎長が覚えてしまったら、どうなさるのです」
「かまわぬではないか。そなたが先に入れ、気をつけてな。転がり落ちるなよ、ジェイサルドに変なものを食べさせられるぞ」
脅し文句に恐れ入ったわけではないが、足下に注意しつつ、ヤエトは厩舎の中に入った。
厩舎は城の二層に渡っている。といっても厩舎の内部は二層に分かれているわけではない。石積みの

突き出した部分が、ちょうど壁のなかばほどの高さで通路の役割を果たしているが、これは人間用だ。鳥のためには頑丈な止まり木が一定間隔で用意されているだけだ。吹雪で動けなくなる冬場でも、羽撃く程度の運動は可能なよう、設計されたのだろう。

雛鳥が増えたせいか、中はかなり賑やかだ。赴任当時と比べてどういいたいところだが、他所者のヤエトが中に入れてもらう機会は滅多になく、あったとしても、ちらりと覗く程度だ。気づかなかったが、去年も厩舎には雛がいたのだろう。

「鳥が減って、ずいぶん寂しくなったな」

皇女がそんな風にいうので、ヤエトはびっくりした。厩舎長の返事で、そういえば、と思いだす。

「交配のために、よその鳥を借りていたからな」

「もう皆、帰ったのか」

「帰したさ。ただでさえ、鳥がたりないんだ」

「そうだったな」

厩舎長の方が偉そうな口調だったが、皇女は気にしないようだ。双方、諫めても無駄だろう。

「シロバの状態は、変わらないのですか」

ヤエトが尋ねると、厩舎長はふり向かずに答えた。

「ああ。心を開かないんだ」

「戻って来たときから、ずっと同じ状態ですか？」

「そうだ。雛たちも怯えて、あまり居着かない。頑張って二羽も孵したってのにな、シロバの奴」

「三羽でも四羽でも孵してほしいくらいですよ」

厩舎長は笑った。

「無茶をいいなさるな。例年なら、卵は一個か二個だ。だが、よくしたものでな。鳥の数が減ると、卵が多めになるのさ。今年の産卵は、二個から三個だ。皆、頑張った。シロバだけじゃなく、皆がな」

シロバだけ特別扱いはできない、と言外にいわれた気がした。雛の世話は、親鳥よりも人がするものだと聞いたことがある。だから、人を乗せてくれるように育つのだ。いくら厩舎長が有能でも仕事は多い。厩舎の状況を見て、これでは駄目だ、とヤエト

は痛感した。人手がたりないときは、そのへんの北嶺人を引っ張って来て手伝わせるらしいが、そんな場当たり的な対応をするから助手が育たないのだ。

厩舎長がこれと見込んだ助手はタルキンひとりだが、あの少年は外回りの任務も多い。助手を増やす必要がある。なんとか説得しなくては——しかし、頑固で人の話を聞かない厩舎長に、望まない助手を取らせることが可能だろうか？

不意に厩舎長が立ち止まり、ふり向いて告げた。

「あそこだよ、尚書官殿」

シロバは羽毛を膨らませていた。止まり木ではなく、下にいる。木製の仕切りで囲われているのがいかにも北嶺人らしいな、とヤエトは思った。鳥のためには、最高のものを揃えるのだ。木材が貴重な北嶺で、こんなに贅沢に木を使った場所はない。

シロバが入っている囲いの中に、厩舎長が縄梯子を垂らした。

「下りていいのは、尚書官殿だけだ」

皇女は駄目だ、という意味だ。ここでも皇女は厩舎長に従い、自分も行くとは主張しなかった。

落ちた方が楽なのではないかと疑いながら、揺れる縄梯子と悪戦苦闘した末、ヤエトはなんとか地面に立つことができた。

シロバは首を曲げて自身の背中に嘴を差し入れた姿勢のまま、動こうとしない。

——羽毛に艶がないような……。

玉虫色のかがやきすら帯びる黒い鳥たちの中で、どこかうす汚れた風に白っぽい羽根色のシロバは、もとから艶とはあまり縁がなかった。だが、それにしても……と、思う。

大きな声を出すとおどろかせてしまうような気がして、ヤエトはささやいた。

「シロバ、わたしだ」

なんとなく近寄りがたく、ヤエトはそのままシロバを眺めた。

今日は天気もよいので、厩舎の窓は開かれている。

風がシロバの羽毛を撫でているのを暫く観察しているうちに、ヤエトは我慢がならなくなり、ついに距離を詰めた。動かないシロバのかたわらに立ち、低い声でくり返す。

「わたしだ」

シロバの頭が動いた。閉じていた目蓋がうすく開き、琥珀色の眼がその隙間から覗く。

ゆっくりと、シロバは頭を自分の羽毛から引き抜き、ヤエトの方を向いた。

鳥がまっすぐ自分を見たと感じた瞬間、ヤエトは反射的につぶやいていた。

「ありがとう……」

シロバは静かに頭を垂れ、ヤエトの顔の横で嘴を開いた。人間の首くらいなら、たやすく噛み切ってしまえそうな大きさのその嘴の先だけを使って、シロバはヤエトの耳をやさしくついばんだ。そっと、こわれものを扱うように慎重に。

その嘴に手を添え、ヤエトは眼を閉じた。見た目にはするどく、いかにも冷たそうだが、鳥の嘴はあたたかい。血がかよっている。

――生きている。

不意にそれを実感して、胸が詰まった。

「……おまえが生きていてくれて、嬉しいよ」

シロバが小さく啼き、ヤエトの頬を少し押した。よろけながら、彼は答えた。

「おまえも嬉しいか」

ヤエトは少し頭を動かすと、シロバの顔を覗き込んだ。表情に乏しい自分の顔が、大きな眼に映っているのが見える。

シロバが心を開かない、と皇女はいっていた。心が読めない。ヤエトにとって、それは以前となんら変わることのない状態だ。

シロバとヤエトとの交流は、シロバが一方的に彼の心を読むことで成立していた。ふつうの鳥なら不安に感じるらしいその関係が、シロバにはむしろ好ましく思えたのだろうと、厩舎長に教わった。

「わたしの伝えたいことが、わかるか？　肯定なら一回、否定なら二回、嘴を鳴らしておくれ」

人がシロバの心を読めなくなったのは、わかっている。ヤエトが確認すべきなのは、シロバが人の心を読めるかどうかだ。

カチ、とシロバは嘴を鳴らした。

――一回。

鼓動が速くなるのを覚えながら、それでもヤエトはできるだけ静かに問いをかさねた。

「わたしの考えはわかるようだね。以前と、なにか違うところはあるかな？」

カチ、カチ。

――二回。

もう、偶然ではないといっていいだろう。

シロバには、ヤエトの言葉がわかるわけではない。彼の考えがわかるのだ。意志を明確に絞れば、伝えたいことが伝わる。多少距離があって、声が聞こえなくても問題はない――去年、門前での呼び掛けに厩舎のシロバが気づいてくれたように。

口にだすのは、そうした方が集中しやすくなるからに過ぎない。おもにヤエト側の問題だ。

大きく息を吐き、ヤエトは次の質問を投げた。

「わたし以外はどうだろう。たとえば、厩舎長が考えていることは、おまえに伝わっている？」

カチ。

一回だけ嘴を鳴らすと、シロバはヤエトの肩にその先端を押しつけ、喉を鳴らした。太い首を撫でてやりながら、ヤエトは通路から見下ろしている皇女と厩舎長に告げた。

「大丈夫、シロバは人の心を読める。こちらがシロバの心を読めなくなっているだけです」

鳥の心が読めて当たり前のかれらには、こんな発想はなかっただろう。シロバが心を閉じてしまった、としか考えられなくても無理はない。心を繋ぐ能力のすべてがシロバから失われてしまったのだ、と。

伝えたいことが伝わらず、理解してもらうことも



できず。シロバはすっかり見捨てられた気分でいたに違いない。
来るのが遅くなったことを心の中で謝りながら、ヤエトはシロバの頭を撫でた。
——次の問題は、なぜこうなったか、だが……。
やはり、預言者に原因があるのだろうか。自分の記憶が失われたのと同じに——そう考えていると。
カチ、と耳元で嘴の鳴る音がした。

4

ヤエトを見て、皇女は小さく笑った。
「機嫌が悪いな？　なんという顔だ」
「生まれつきこの顔で……不調法なことで申しわけありません」
「わたしはおもしろかったぞ」
皇女はうなずいて、またヤエトを見上げた。なにがだ、と問いたい。ヤエトの顔がおもしろいのか。
「それはよろしゅうございました。きっと座長も喜ぶでしょう」
ふたりは、踏野郡にいる。派手にもてなされている最中だ。実のところ、ヤエトはまったく楽しめていない。しかし、そのまま口にするような不調法もできないではないか。とりつくろっているのに、皇女は容赦がない。
「心にもないことを申すな」
「左様なことは——」
「ないわけがなかろう。そんな顔をされては、騙されてやることもできぬ」
そんな顔もこんな顔も、ヤエトの顔はこれひとつである。反論するだけ無駄か、と諦めかけたところへ、背後から声がかかった。
「余興はお楽しみいただけましたでしょうか？」
声の主は、数名の部下を従えた男だった。
薄くなりはじめた頭髪のせいで老けて見えるが、踏野太守は実のところ、ヤエトとそう変わらない歳

らしい。茶色の眸は明るく、ほがらかな印象だ。腹は出ているが、太り過ぎというほどではない。艶のある黄色い布地であつらえた服に、これでもかというほど装身具をつけている。派手好みなのだろう。緑の濃い庭園に、似合っているような似合っていないような……なんとも微妙な姿である。

商人のようだ、というのが初対面で得た印象だった。損得勘定をきっちりこなし、儲けているぞという感じなのだ。

彼と並んでいると、皇女は新規開拓中の顧客に見える。実際、そんなところだろう。

「心きいたもてなし、感じ入ったぞ」

今日の皇女は、久々に女装である。高く結い上げた髪に飾った簪は、それ一本で悠々自適の隠居生活を楽しめそうな品だ。白い喉から鎖骨のあたりまでを網状に覆う金の首飾りも、簪に劣らないほど高価に違いない。耳飾りも、指輪も、腰に巻いた帯も、庶民にとっては一財産であろう。今までよく仕えてくれたと、どれかひとつ下賜して隠居を許してくれたらな、と思わず夢見がちな視線を送ってしまう。

太守の装身具も高価なものなのだろうが、ヤエトは価値を正確に判断できるほどの目利きではない。

――ルーギンがいればよかったのだが。

顕門の貴族に生まれ、華の騎士と呼ばれるあの男なら、趣味の善し悪しはもちろん、流行のものかどうかも踏まえて値踏みしてくれるのだが、いないものはしかたがない。

太守は指輪で重そうな手をふって、あちらへ、と皇女を導いた。

「お気に召したようで、なによりです」

「評判だけは耳に入っていたのでな。観たいと思っていたところであった」

「左様でしたか」

それなりに会話がつづいているようなので、ヤエトは少し距離を置くことにした。

「ジェイサルド、あの男の装身具は、どれくらいの

価値がある？」
　老騎士の前身は、名の知られた盗賊である。当然、目利きもできるはずだ。
「一見しての印象ですが、一軍を買い上げられるほどですな」
「新しいものかどうかは？」
「さて……あの指輪の意匠、西の帝国由来のもので、沙漠の東にはなかったはず。少なくとも、真上陛下がこちらに真帝国をお建てになってからでなければ、あの者の手には入らなかったかと」
　――儲けてるな、これは。
　父祖伝来の宝物もあるのだろうが、儲かっていそうだという第一印象は、間違っていないのだろう。
「内偵は、進んでいますか」
「この城に頻繁に出入りする商人の名と居場所は、すべて摑んでおります」
　罪のない商売に精を出している商人もいるだろうが、欲と得だけを追求して恥じない者もいるはずだ。ほぼ一方的な搾取の図式は、すでにできあがっている。とんでもない価格での薬品の販売、無理矢理背負わせた借金、出稼ぎに行くしかなくなる人々。そして、かれらの一部は戻らない。
　戻らないのにも理由がある、と考える方が自然だろう。
「人身売買の市場は？」
「把握しております。踏み込みますか」
　ヤエトは少し呆れて老騎士を見遣った。
「なんでもかんでも荒事にするな。自重せよ」
「痕跡を残さず、全員を解放することが可能です」
　関係者を皆殺しにするという意味だろう。ジェイサルドは真顔である。この男にまかせれば速くて確実には違いないが、無条件に許可はできない。
「人殺しの盗賊はやめろと命じたはずです」
「殿がご想像にもなれないような汚れ仕事もお引き受けすると、お約束いたしました」
「そんな約束は――」

「発想を、と殿は仰せになりました。ですが、発想だけで済むはずがありませんので。はじめから、儂はそのつもりでおります」

ヤエトはため息をついた。話にならない。

「交渉ごとは、これからです。向こうが難癖をつけてくる材料を与えて、どうします。やるなら、話が決裂してからです」

「御意」

「男同士で、なにを話しているのかしら?」

横合いから声をかけられ、ヤエトは向き直って一礼した。

「これは皇妹殿下。お久しぶりです」

「そうでもなくてよ、尚書卿。あなたとはよく会う方だわ。加減がよくなかったと聞いたけれど、もういいの? 顔を上げて、よく見せてちょうだい」

しかたなく、ヤエトは頭を上げた。今の身分なら、皇妹とも対等に話せるのだが、あまりまともに見たくない相手なのだ。

皇妹は女性にしては長身だが、なにしろヤエトの背が無駄に高いので、どうしても見下ろすことになってしまう。必然として、大きく開いた胸元が、どうしても眼に入る——透き通るように白い肌に、水晶を銀鎖で繋いだ首飾りが淡い蔭を落としている。気高く侵しがたいような眺めでもあり、同時に誘っているようにも感じられる。どっちなんだかはっきりしろ、といいたい。

——この人は絶対、わざとやってるからな。

うかうかと見蕩れていたら、次が怖い。といって、顔を見るのも怖いのだ。蕩けるような笑みを向けられて、うっかり笑顔を返さない男はいないだろう。あるいは、完全に惚け面を晒してしまうか、そのどちらかしかあり得ない。二択を迫られるなら、まだしも笑顔の方がましである。

「お気遣いいただくほどのことではございません」

皇妹の眸は、深くあざやかな紫である。恩寵の力の強さが窺い知れる色だ。白い肌、白い衣装、白銀

の髪に映えて、ひときわ印象的でもある。
　怖いほどの美しさだ、と思う。あるいは、逆か。怖いからこそ、美しいのかもしれない。
「相変わらずなのね、あなた」
「は？」
「少しは変わっているかと思ったのだけれど」
「……この歳になりますと、変化というものに乏しくなりまして」
　なんの話をされているかわからないまま応じると、皇妹は小さく声をあげて笑った。手を頬にあてる仕草は少女のようで、愛らしい。
「一介の尚書官から《黒狼公》にまで出世しておいて、そんなことをいうのね？　本気だから始末に負えないわ」
「一介の尚書官として生きてきた時間の方が、長うございます。それゆえ貴族としてのふるまいが身につかず、皆様の失笑を買っているくらいで……とても短期間に《黒狼公》らしくはなれません」
「あら、《黒狼公》夫人としては、そこは憤慨すべきところかもしれないわね？」
　先代《黒狼公》も底の知れない人物だ、と思う。あの真上皇帝の親友だというだけでも恐れ入るのに、この女性を妻としていたのだから。
「申し開きのしようもございません」
　皇妹は笑った。
「駄目よ、簡単に自分の落ち度を認めては。あなたはそうやって生きてきたのでしょうけど、貴族になったら、それは駄目。もっとふてぶてしく、自分に悪いところなどなにもない、という態度でいなければならないの」
「なるほど。ありがたいご助言、心に刻みました」
「刻んだだけでは駄目よ？　ところで尚書卿、あれは、どれくらい真実を含んでいるのかしら」
　嫌な汗が背中に滲むのを感じた。
「あれ……とは？」
「さっきの芝居よ。尚書卿の立身出世物語を劇に仕

立てて大評判をとっている、と話には聞いていたのだけれど。ここで見られるとは思わなかったわ」

皇妹は笑顔である。

彼女の性格と頭のまわり具合からして、ヤエトがこの事態を――つまり、自分の立身出世物語などというものが芝居を通じて広まっていくことを、まったく喜んでいないのは理解しているはずだ。だからこれは、嫌がらせに違いない。べつに真実の質とか量とかを知りたいわけではないだろう。

「わたしが平民から貴族へ成り上がった事情は、よくご存じのはず。芝居は芝居、つくりごとに過ぎません。平民でも成功できるという夢を見せる、そのための舞台なのです。主人公がわたしである必要もないでしょう」

「あのスーリヤという娘、やけにあなたに肩入れすると思ったら、貞操の危機を救われたのね」

――聞いてないし。

弁明するだけ無駄だという気がしたが、黙っているわけにもいかない。

「救ったというほどのことは、なにも」

「どんな虚構も、真実という種子なしには芽生えないのよ。逆にいえば、ひと粒の真実があれば、それは大樹に育てることもできるの。……でも、あなたに武器が扱えるとは、意外だったわ」

「ですから、芝居とは違います。発熱して歩くのもやっとだったので、その場に行って、……相手の男がわたしを見て、勝手に逃げてくれたくらいですから、幽霊と勘違いされるほど顔色が悪かったのかもしれません。あの芝居の主役のように、剣をふり回したりはとてもできません。わたしは騎士ではない、この手は剣を持つ手ではないのです。悪漢から女性を救うなどという芸当は、できかねます」

「……あなたはほんとうに、いろいろなことに対して無頓着なのね。姪も苦労していることでしょう」

皇妹が視線を向けた先を、ゆるゆると皇女が歩いている。太守とどんな話をしているのか、ここから

ではよく聞こえない。
「至らぬ臣で、王にはご迷惑をおかけするばかりです」
「似合いの主従よ、あなたがたは。あの子も、ああしていると年頃の姫君のように見えるだけで……内実はそうではないもの」
皇女が女装しているのは、皇妹に叱られないためだそうだが、少し取り繕った程度では意味がないようだ、とヤエトは思った。
外交の場に男装で出て行ったりしたら大変なことになるからと、衣装替えは南麓鎮で済ませた。もちろん、鳥にまたがって颯爽と……などという芸当はできなくなるから、そこからは馬車である。半日とかからないはずの道程が、ずいぶん伸びてしまった。途中の宿舎は踏野郡側で用意があったので、当初案じたほどの出費はせずに済んだが、それはそれで借りを作ったことになり、あまり嬉しくない。
シロバはまだ北嶺から動かさない方がよいだろうということになり、ヤエトは南麓鎮までの行程も馬を使った。ジェイサルドが絶対に同行すると主張したせいもある。彼を置き去りにして出かけて人事不省に陥った直後とあっては、無碍にもできない。
おかげで、なけなしの体力を使い果たした感がある。椅子はないか、とさっきから目で探しているのだが、この庭には四阿もなく、腰掛けもないようで、ヤエトの努力は報われていない。
皇女の方へ向けた視線はそのまま、皇妹が問う。
「台本に、スーリヤは協力しているのかしら？」
またその話に戻るのか。
正直いって、皇妹がスーリヤの名を覚えていることと自体、あまり歓迎できない。伝達官の才があるからだろうが、本人が望んでいればともかく、スーリヤは伝達官になりたいとは思っていないようだ。ミアーシャがスーリヤを預かっていたときから、皇妹はあの娘を神殿にやれ、伝達官の修行をさせろといっていたらしい。ミアーシャはうまく受け流してい

たようだが、スーリヤがヤエトの使用人となった今、あの娘が望まぬ未来に導かれるのを防ぐのも彼の役目だろう。

そんな大変な仕事は、できれば避けたい。つまり、皇妹にはスーリヤのことを忘れてほしい……というのに、あの芝居ときたら！

「さあ、わたしは存じませんが」

「あなたがとくとくと話すとは思えないし、逃げて行った女衒の男も話さないでしょう。となると、あの娘が話したとしか思えないわ」

「なるほど。ご明察かと存じます」

いささか辟易しているのを隠しきれない口調になってしまったが、そろそろヤエトも限界だった。

芝居のことは、もう考えたくない。

余興を用意してございますと聞かされたとき、まさか自分の立身出世物語の芝居を見せられるとは、思ってもいなかった。

誰のしわざかは、わかっている。代官の妻だ。芝居の前後と幕間に《黒狼公》ご用達の蠟燭を売っていたから、間違いない。スーリヤからいろいろ聞き出して、あることないこと書きまくったのだ。

締め上げてやりたい、と心の底から思っている。呪うべき人物名一覧表の一位にしてもよいのではないか。それくらい、不愉快だ。洪水のように蠟燭が売れると聞いたときに、なにかおかしいと感じはしたのだが、こんな仕掛けで売っていたとは……。

「奴隷の娘から見たご主人様なのね、あの芝居の中のあなたは」

「……ですから、虚構に過ぎません。現実のわたしは地味で、虚弱で、愚かです」

皇妹の顔から、すっと笑みが消えた。抑えられていた竜気が彼女の奥で蠢くのを感じ、ヤエトはたじろいだ。こんなところでいきなり竜気にあたり、昏倒するわけにはいかない。

「あなたは目立っているし、とても聡いわよ。ときによって愚かでもあるし、虚弱なのは間違いないと

思うけれど」
やさしげな口調だが、容赦のない論評だ。おとなしく、ヤエトは眼を伏せて答えた。
「御意にございます」
「あの太守、第五皇子と結んでいるわよ」
うっかり聞き流しそうになったが、あやういところで気がついた。皇妹は、とんでもないことを、さらりと口にしたのではないか。
「五の君が？」
「第四、第五の兄弟は、草原地帯にそれぞれ国をもらったでしょう。北嶺のように、もとから郡だったものを国へ、太守を王へと変えるだけなら簡単なのだけれど……草原地帯の行政区画はずいぶん変更されたわ。それは知っているわね？」
「心得ております。踏野は郡のままですが」
「併呑されずに済んだのは、都につてがあるからよ。そのつてというのが、五の君の部下というわけ」
第四、第五皇子は双児の兄弟で、末弟の第七皇子と同腹である。母親は白羊公家の女性で、三人もの皇子を産んだ割には野心がなく、ただ兄弟仲良くしてくれればよい、という姿勢を崩さない。当然、宮廷での勢力は大したものでもなく、息子たちが帝位を得る役には立ちそうもない、といわれている。
第五皇子はいじめられっ子、と皇女は評していた。皇妹の話が事実なら、第五皇子はただ兄にいじめられているだけの存在ではない、ということになる。
「五の君は、どういうお考えなのでしょう」
地方の太守に恩を売っておくのは、悪くない。
だが、皇帝の存念がどこにあるかも考えておかねばならないだろう。諸領を皇子たちに直轄させることで、この誕生間もない帝国の支配権を、土豪から引き剝がし、竜種が全面的に摑む契機とする——そのための措置でもあるはずだ。既存の勢力に変に肩入れをすると、全体が見えていないと判断される可能性もある。
「自分で人物を見るといいわ。来ているから」

「ここに？」
「ええ。四の君も招いたのだけれど、あの子は来ないというの。そんな辺鄙な場所には行けません、とね。太守を馬鹿にしているのもあるけれど、弟も妹も眼中にないわ。あの子が気にしているのは、ふたりの兄だけ。もちろん、わたしにも敬意を払ったりしないの。女だから」
「……は？」
「権力のある年上の男性以外、あの坊やは認めない。家柄や血筋も重要だから、あなたも彼の視界には入らないわ。あの子はね、たいへんな威張りん坊よ。甥たちの誰が帝位を継いでも、うまくやっていく自信があるけれど……あの子がいちばん、面倒ね」
笑顔でいいきって、皇妹はヤエトにちらりと流し目をくれた。
「姪も勘定にいれないと、あなたは怒る？」
とっさに、なんと応じればよいかわからなかった。
皇妹の言葉の意味はわかる。皇女には帝位を窺う気はあるのか、と問われている。皇女の副官であるヤエトに、その心づもりはあるのか、と。
「……王は、歴史はお嫌いだと仰せなのです」
皇妹はわずかに眉を上げた。無言で話の先をうながされたように感じながら、ヤエトは視線を皇女の方に向けた。
年頃の姫君らしい恰好をしていても、皇女にはどこか凛とした雰囲気がある。媚びを売ったり、誰かの助力を期待したりといった甘えがない。
ヤエトは静かに言葉をつづけた。
「女性の名前が出てこないから、と。王のお言葉で、わたしも気づくことができました。今までの史書は、仰るところの四の君のような視点しか持ち得なかったのだろう、と。わたしが官位をしりぞき、隠居の夢がかなったならば、女性の名前も残るような史書をまとめたいものだと思っております。ですが……帝国の皇帝位は男性が継ぐのが慣例。それが、にわかに破れるとは思いません」

「そうかしら」
「それに、女性も皇帝位を継ぐことができるのであれば、あなたはどうなのです、ラキニー姫」
尋ねて、答が得られるとは思っていなかった。だが、皇妹は即答した。
「皇帝になりたいとは思わないわ。皇帝の腹心である方が、ずっと楽しいもの。史書に名前を残すより、今この時代をうまく生きていきたいの」
「賢明なお言葉です」
皇妹は微笑んだが、すぐに表情を消し、ヤエトの肩に摑まるようにして耳もとにささやいた。
「あとで、お話があるの。時間をとってね」
「お望みのままに」
にこりと笑って、皇妹はひらひらと手をふった。
「五の君に挨拶して来るわ」
ほっそりした後ろ姿を見送って、ヤエトはジェイサルドにぼやいた。
「なんの話か見当もつかない……どれくらい時間をとればいいだろう?」
「お加減がお悪いとでもいうことにして、部屋にこもられては如何ですかな。会食は、姫様おひとりでも難なく乗り切ってくださるでしょう。皇妹殿下のお話の方は、事後に緊急の対応を迫られる内容でないとも限りませんし、殿が体力を温存してくださると、部下一同が胸を撫で下ろすところですが」
会食には、あの胸くそ悪い芝居を演じた役者だの、座長だのが顔を出すに違いない。本人たちに罪はないと思うが、ほんものの《黒狼公》としての感想を求められでもしたら、拷問である。当たり障りのないことを口にできる自信がない。
ため息をついて、ヤエトは首をふった。
「いや、会食には出ます。早めに退出させてもらうことにして」
皇妹が足を向けた先には、数名の男たちが立っていた。きらびやかな鎧に身をかためた騎士たちは、皇妹に気づくと道を開け、跪拝した。

木陰に立っていた青年だけが、わずかに頭を揺らしたのみで、正式の礼をとらなかった。あれが第五皇子なのだろう。背丈は皇妹より少し高いが、姿勢があまりよくない。なにか不安そうな、あるいは不満げな印象があるのは、そのせいだろうか。

叔母甥の間柄とはいえ、皇妹とも気の置けない関係というわけではないらしい――あの女性と気を許しあうのは大変そうだから、無理はないというべきか。恩寵の力をあらわす竜気が、たまに揺らめいて見えるのは、力が強い証拠なのか。それとも、制御ができていないということか。

あの皇子の狙いは、どこにあるのか――帝位か、それとも生き延びるだけでいいのか――見当をつけるにも、考えるための材料が少な過ぎる。

「せっかくの機会です、五の君の存念を探らずに帰るわけにはいかないでしょう」

「では、高利貸しや人身売買の方は」

「あの太守は、一筋縄ではいかなさそうだ。そう思いませんか？」

太守はまだ皇女と歓談をつづけていた。

第五皇子に護衛の騎士がついているように、皇女の後ろにも騎士が従っている。ルーギンが留守居となったので、今回の護衛の責任者はエイギルだ。太守の護衛と適当な距離を置きつつ、なにかあれば即応できる位置で、気を配っている。

「奸物とご覧になりますか」

「野心家に見えますね。都にあるってというのが、五の君の関係だけとは思えません」

へたをすれば領地を取り上げられ、丸裸にされる状況だ。そこで守りに入るか攻めに転じるか、選ぶなら攻めを選びそうな人物だと思う。彼が治める踏野郡を挟んで北側の北嶺国、南側の太緑国の王が、それぞれ皇女と第五皇子である。

――関係強化を目論むと見せかけて、陥れる、くらいのことは考えているだろう。

しかし、時宜を見ねば意味がない。

北嶺の価値は、以前とは比べものにならないほど高い。鳥が翼をとり戻したせいだ。今や誰の目にも、皇女を手に入れることは翼を手に入れること、と映っているだろう。あるいは皇女を除いて自分が北嶺王にと考える者の方が、多いかも知れない。

踏野太守の場合、彼がこの土地に執着しているなら、北嶺を手に入れただけでは独立には踏み切れないに違いない。鳥の機動力と戦闘力があっても、踏野郡を守りきるのは至難のわざだろう。

第五皇子の方が、標的としては有用だ。結んでうまく使うのもよいが、失脚させるのも一案だ。恩を最大限に売れる場面と相手を選ぶことで、次代の皇帝を、ひいては帝国との関係を能動的に構築することが可能になる。ヤエトが彼の立場であれば……。

――まぁ、やらないだろうな。面倒くさい。

自分が失脚して野垂れ死ぬ方が、ずっと楽だ。

皆がそういう思考で生きてくれれば、この世はずいぶん淡々としたものになるだろうと思いながら、彼はふと眉根を寄せた。

「あれは誰だろう」

皇女と太守のあいだに、男がひとり、立っていた。護衛の兵という感じではない。かなり赤味がかった茶色の髪に、一瞬、北方の民を連想した。

「太守の従兄弟だそうです」

男はヤエトの視線に気づいたように顔を上げ、厳しい眼差しを向けてきた。皇女の方を向くときは、一転、蜜のように甘い顔をしている。

「まさかと思いますが、あれは、うちの王様を籠絡しようとしているのでしょうか？」

ジェイサルドは咳払いをしたが、あきらかに、吹き出したのをごまかしたようだ。

「姫様も、ご婚約がととのっていてもおかしくないお年頃ですので」

いわれてみれば、その通りだ。貴族の姫君で十五歳なら、嫁いでいてもおかしくはない。

「うっかり忘れていました」

「なんと。殿でもうっかりなさることがおありとは、おどろきました」
「困りますね、わたしはうっかりの権化ですよ。心得ておいてください」
「しかと心に刻みました」
そこへ召使いがあらわれて、会食の支度がととのいましたので、と案内に立った。
会食の席次を決めるのは面倒な作業だ。招いた側とはいえ、主座を太守が占めるわけにはいかない。彼は帝国貴族ですらないのだ。皇子と皇女を並べると、皇妹はどうすべきか、《黒狼公》であるヤエトはどうなのか……と、問題は山積である。
彼はこの問題を、「草原の民の昔ながらのやりかた」で解決した。鄙びた土地の風習で恐縮ですがといいながら、庭園に張った天幕の入口で、客の男女を分けてしまったのだ。
天幕の中は、左が女性、右が男性の空間だ。最奥部の主の席には、草原の神が祀られていた。帝国に帰属している以上、その神は偉大なるひとつ神の限られた相に過ぎないと看做されるが、それでも神は神だ。そこは聖なる空間であり、人は入れない。
椅子がなく、直接床に座る習慣は北嶺と同じである。どうぞお好きな場所にお座りください、と客に選択を委ねてしまう。客が全員、天幕に入り終えたところであるじが入り、余った場所へ座る。
草原の民は移動する民であったという。家畜を追って草原を旅する、土地に縛られない文化がその根底に流れているのだと思うと、興味深い。
天幕の女性側には、皇女と皇妹、太守の奥方の三人。男性側には、第五皇子、太守の従兄弟、そして太守とヤエトが入った。護衛の騎士たちもそれぞれ控えているので、男性側の方があきらかに窮屈だ。
第五皇子は、躊躇なく奥の席をとった。神に近い場所だ。ヤエトは入口の付近に留まることにした。どうせ、途中で退出するつもりだ。
食事も昔ながらのものを、と太守が説明したよう

に、あまり口にしたことのない料理が並んだ。ジェイサルドの薬膳を食べ慣れてしまった昨今、どんな奇異な味つけでも平気な自信があるが、本来、ヤエトは偏食家である。食べたことのないものとの対決は、あまり嬉しくない。

「これは、彩果という実を百日のあいだ天日に干したものです」

酒のあてにと出された皺だらけの黒い粒については、そんな説明も受けた。酒は断ったが、説明されたら食べないわけにはいかない。しかたなく口に入れてみると、なんとも強烈な味がした。酸味と甘味が同じくらいで、しかも徐々に強まってくる。

ひと粒にしておいてよかった、と思った。

「珍味ですね」

「ひと粒で百日、寿命が延びると申します」

なぜか差し向かいで話すことになってしまったのは、太守の従兄弟である。無駄なものを削ぎ落としたような顔だちだ。太守とはあまり似ていない。眼は、わずかに青みがかった灰色をしていた。

「失礼ですが、北方の血が入っておられる……？」

「よくいわれますが、我らの血筋では、一世代にひとりはわたしのような容貌の者が生まれます。公のようなかたには野蛮だと思われてしまうでしょうが、このあたりは、かつては略奪婚が主流だったのですよ。異民族の血も、混ざろうというものです。一族によっては、南方人そっくりの子が生まれることもあるとか」

「なるほど。略奪婚の風習自体は、沙漠の西にもあったそうです。書物で読んだだけですが……略奪といっても、事前に親族間で調整し、婚資の交換もした上でそういう形式を踏んでいたとか」

太守の従兄弟は、うなずいた。

「このあたりでも、それが主流でした。異民族の血は、交戦にともなう文字通りの略奪で流れ込んだのでしょうが」

「あなたに流れている血は、歴史そのものですね」

そう考えると、なかなか感慨深い。太守の従兄弟は、ヤエトの言葉にやや酷薄な笑みで応じた。
「自分で刻んだのでもないのに、逃れられぬ過去というわけですね」
「捕らえられていると思えば逃れられず、捕まえようとすればすり抜けてしまう。たしかに実在したのに、端から失われていく。それが過去で、それを書き留めようとする努力が歴史なのだと思っています」
「過去を留めることに、意味はあるのですか」
「わたしは、あると思っています」
「そうですか。わたしは過去よりも未来が気になりますね。たとえば……あの若々しい姫君とか。まだご婚約がととのっていないと伺いましたが、どうされるのでしょう?」
直接話法で来られると思っていなかったので、ヤエトは素でおどろいた。なにを考えているんだと思いながら、無難な返事をしておく。
「竜種の縁組みは、帝国の大事ですので」
「帝国の法では、女性が家門を持つことはできない。そうですね?」
「今のところは、そのはずです」
「あの姫君がご結婚なさるとき、北嶺はどうなるのでしょう? あのかたの財産として、婚家のものになるのでしょうか」
籠絡した先の心配をしているのだろうか。ずいぶんな自信家だ。
「わたしは相続法には明るくないので確言はできませんが、北嶺国は陛下の直轄領にされるか、あるいは、皇女殿下個人の天領とされるのではないかと。ただ、先例のないことですゆえ、陛下のご判断次第という部分が大きくなるでしょう」
――不愉快だ。
質問自体もそうだし、その質問の意図を考えるのも、気分が悪い。ヤエトの気色から、この話題はつづけない方が賢明だと察してもよかろうものを、相手はさらに質問をかさねた。

「皇女殿下の天領となった場合、殿下が亡くなられたらどうなります。婚家のものとなりますか？」
ヤエトはまじまじと相手を見た。
「竜種のご不幸について、こういった場で語るのは不祥です。お控えください」
「それは失礼。田舎者ですので、お許しください」
うすら笑いを浮かべて心のこもらない挨拶をされたところで、ヤエトの我慢が不意に限界に達した。
「ジェイサルド、次に不祥を口にしたら、かまわん。この者を斬り捨てよ」
「御意」
太守の従兄弟は、さすがにぎょっとしたようだった。腰が引けている。ヤエトは畳み掛けた。
「覚悟がないなら、喧嘩は売らないことですね。わたしは真上陛下の勅命により、皇女殿下の副官という地位を賜っております。皇女殿下を害するものは、なんでも除く義務がある。おわかりですか？」
「……あなたの方こそ、あの姫君をたぶらかして、高位高官を得ようとしている奸物だろう」
ヤエトはため息をついた。
無理もない。そう見えるだろう。
だが、実情は違う。ヤエトは高位高官など得たくもない。だいたい、もう上り詰めてしまっているではないか。四大公家より高い地位など、あるものか。
「世評に惑わされると、足下を掬われますよ。太守にも、そのようにお伝えください」
踏野太守の方をふり向くと、視線があった。伝言の必要はなさそうだ。太守と並んで座っていた第五皇子が、口の端に笑みを浮かべてつぶやいた。
「《黒狼公》は硬骨漢だという評も、聞かないではない。それは信じてもよいのかな」
軽口を叩いている風だが、少しも楽しそうではなかった。身の入らない言葉だけが宙に浮いている、とヤエトは感じた。その場の雰囲気を和ませることもしなければ、自重を求める厳しさも、自分が責任をとって仕切るという気概もない。

――無駄な発言だ。

これまで、言葉をかわしたことのある皇子は三人である。

ひとりは第三皇子、裏表はあるが、華のある人物でもあった。敢えていえば、皇妹に似ている。その場に応じて相手に見せたい自分を演出する、そんな力があるのだ。もうひとりは第二皇子、こちらは即決即断の人であり、いかにも帝国人らしく実利を重んじる堅実さもあった。支配者の孤独を知る者であろうとも、感じさせられた。

第五皇子は、兄たちのどちらとも違う。その目は陰にこもって、明るさがない。挙措には自信が欠けている。ひとことでいえば、いかにも器の小さそうな人物なのだ。大局を見て果断に動くことができず、目先の損得勘定に流されそうだ。

――直感だけで、そこまで判断するものでもないだろうが……。

あなどりたくなる雰囲気がある。それが第五皇子の武器なのだとしたら、あなどるなど、とんでもない話だが。ともあれ、ヤエトは恭しく一礼した。

「ご挨拶が遅れましたことを、お詫び申し上げます。わたしはお妹君におつかえしております。先に、真上陛下より《黒狼公》の位をたまわりました――」

「存じておる」

話の途中に短く割って入られたが、ヤエトは気にせず先をつづけた。

「――もとはといえば卑官の出身、五の君よりじきじきにお言葉を賜る機会を得たことを、光栄に存じます。このような場をもうけてくださったこと、踏野太守にも感謝せねば」

第五皇子は眉を上げ、やや尊大な表情をヤエトに向けた。

「感謝するというなら、先ほどの言葉を取り消すがよい。太守の従兄弟を斬り捨てるとは、物騒であるし、無礼でもあろう」

「五の君の仰せとあらば、この場は剣を控えさせま

しょう。ですが、この者はそうされて当然の暴言を吐いたのです。皇女殿下に……いいえ、帝国に仇をなすような言葉を紡ぐ者を、看過することはいたしかねます。陛下よりご厚情をたまわり、身に過ぎた碌を食む以上、それがわたしのつとめと心得ます」

「大袈裟な。妹が死んだら領地がどうなるかくらい、そなたも考えたことはあろう」

なぜまた、そういう話になるのか。皇女は同じ天幕の中にいて、この会話を聞いているはずだ。

斬ってしまえと命じたい、とヤエトは思った。命じれば、ジェイサルドは実行する。それがわかっているから、ヤエトはただ口を引き結んでいた。

残念ながら、冷静さの在庫は尽きているようだ。自分でも、なぜこんなに腹立たしいのか、よくわからない。

感情というのは分析不能なものだなと考えながら、ヤエトは第五皇子をみつめていた。以前なら、直視するのは不遜であっただろう。だが幸い、今の彼は皇帝の友と呼ばれ、御前での帯剣まで許された高位の貴族だ。竜種とも対等である、といってよい。

沈黙を破ったのは、踏野太守だった。

「従兄弟の無礼は、わたしからお詫びします」

太守が頭を下げると、従兄弟の方もそれに従った。

「言葉が過ぎました。どうかお許しを」

素直に謝罪の姿勢を見せられては、怒りをおさめるしかない。ヤエトはうなずいて見せた。

「わかりました。五の君のお顔を立て、この場はお預けいたしましょう。申しわけありませんが、わたしは病み上がりであまり食も進みません。ご同席しては、却ってご迷惑をおかけするでしょう。失礼してもよろしいでしょうか」

「すぐ、お部屋に案内させます」

太守が目配せをすると、天幕の隅に控えていた召使いが、さっと案内に立った。皇女と視線があったが、なにを考えているのかはわからなかった。少なくともヤエトよりは冷静そうだと感じたくらいだ。

天幕を出るときに、芝居の関係者と思しき数名とすれ違った。これで気の重い対面は避けられたと思う反面、自分のいないところでどんな話がされるかを考えると、ますます嫌な気分になった。

吐きそうだ。

案内されたのは、天幕ではない。南方風といってもよさそうな、石造の建物だ。天幕を生活の場とし、風とともに草原を移動していた民は、もういないのだと、ヤエトは寝台に腰掛けながら考えた。

かれらは土地に縛られ、身動きがとれなくなってしまった。

――いずれ、北嶺もそうなるのだろうか。

鳥が翼を得たことで、北嶺は変わるだろう。ここのような変わりかたはしないだろうが、それでも変化は訪れる。逃れようもなく。

「殿、お顔の色が……」

ジェイサルドが案じたのを、ヤエトは手をふってしりぞけた。

「皇妹殿下がおいでになるまでに、内偵の結果についての詳細な報告を」

開かされたのは、気もちがさらに落ち込むような内容だった。

北嶺と踏野の関係は、古い。北嶺の民は、街道を通さない素朴な交易もおこなっていた。道に依存しない移動だから、運べる荷の量は限られている。近場で獲った獣の肉や毛皮が余ったときなどが、おもな交易の機会だったようだ。薬効があるといわれる高山の植物を乾燥させたものも、商品となった。交換するのは、少量の地酒や煙草などから、一夜の宿と食事、衣類、穀物の粉などである。

土地の民同士の物々交換が保持していた均衡は、しかし近年、崩壊の様相を見せていた。

ヤエトが着任した当初から、支払いきれない借財の話は出ていた。貸し主は、すべて踏野の人間である。借金の返済のため、借り主やその家族が北嶺を出て行かざるを得なくなる。金を稼ぎたいなら山を

下りろといわれるのだ。
そして、かれらは戻らない。
一部は奴隷として売り払われるらしいが、より多くは闇に消え、家族が問い合わせても、逃げた、という答が返るだけだ。へたをすると、家族もまた逃亡者の代理にと引き立てられてしまい、戻らぬ者が増えていく。
「鉱脈があるらしいのです」
消えた者たちは、そこに送り込まれているようだ、というのがジェイサルドの報告だった。鉱夫として、死ぬまではたらかされるのだろう。
鉱脈の場所と種類はまだわからないが、なんにせよ、隠し財源には違いない。
「早急に、証拠を。場所がわかれば、いっそ騎士団をやってもいいですね」
後ろ暗い場所なのだから、被害を届け出ることもできないはずだと考えながらつぶやくと、ジェイサルドが眉を上げた。
「本気で仰せですか」
「いろいろ、面倒になってきました。さっさと片づけて、隠居したいです」
ふむ、と老騎士は髭をしごいて答えた。
「内偵を急がせます」
「五の君は、鉱脈のことはご存じなのかな」
「調べますか」
「踏野太守との繋がりがどの程度なのかは、知っておきたいですね」
喧嘩を売るなら、踏野太守だけを相手にすればよいのか、それとも第五皇子の勢力も含めねばならないかを事前に知っておく必要がある。
もちろん、第五皇子の勢力自体がどれほどか、ということも把握せねばならない。
隠居への道は遠い……と、思わずため息をついたところへ、来客の報がもたらされた。
もちろん、客というのは皇妹である。それは予測済みだったが、皇女もいたのは意外だった。

「先ほどは場を騒がせてしまい、申しわけありませんでした」
「いいのよ、おもしろかったわ」
ねぇ、とふり向いて同意を求める皇妹に、皇女は肩をすくめた。
「叔母上は、なんでもおもしろがってしまわれるから。わたしは、あまりおもしろくはなかった」
「女はね、かわいくしていないと嫌われるわよ、あなた。素直になるところでは素直に、拗ねるところではきちんと拗ねて、その落差で男を落とすの」
人の部屋まで来ていったいなにを指南しているのか。だいたい、落差で男が落ちるのか？
皇女は聞き流す気満々だったようで、叔母の教えをさらりと無視して前に出た。
「加減はどうだ。無理はしていないか？　北嶺に戻った方がよければ、鳥を迎えに来させよう」
「お気遣いをいただき、恐縮です。身体は大丈夫です、無理をしないために、早々と退出させていただいたのですから」
「それならよいが……」
皇妹は皇妹で勝手に部屋の奥へ進み、窓辺に立った。鎧戸はもうしっかりと閉められ、外は見えない。硝子の窓に映った皇妹の横顔は、古びた絵画のように美しく、謎めいていた。花びらのようなくちびるが動き、思わぬ言葉がこぼれ出た。
「先代も、あまりお身体は丈夫ではなかったの」
初耳だった。思わずジェイサルドをふり向くと、老騎士は黙ってうなずいた。
——まさか、それでか。
あの珍妙な味の薬膳の知識は、ヤエトのためのものではなかったのだ。
「それは存じませんでした。さぞご苦労なさったことでしょう」
皇妹はかすかに首をかしげた。
「そんなところは真似なくてもよいのに」
「真似ではないでしょう。この者は、もとからこう

なのです」
皇女が口を挟んだが、今度は皇妹が聞き流す番だった。ふり返ると、あざやかな紫の眸でひたとヤエトを見据えて告げた。
「あなたは、あのかたではない。でも、あのかたと似ているところも多いわ。陛下に直言して怖じないところが、とくに」
「とんでもないことです。陛下に直言など……」
友よ、と呼びかけられて以降、まともに喋ったことなどないはずだ。だが、皇妹は首をふった。
「したでしょう。伝達官を殺すなと」
ヤエトは息を呑んだ。
――あのときか。
たしかに、皇帝に意見した。正確には、自身の伝達官の身体を完全に支配し、臨の状態になった皇帝に向かって、である。
見ていた者は、誰もいなかった。皇帝と、彼の伝達官ウィーシャと、そしてヤエトだけが知っていることだ。ウィーシャは自害し、ヤエトの行為は結局、無駄なものに終わった。
それをなぜ、皇妹が知っているのか。
――ルーギンか？
騎士には話さざるを得なかった。皇女も知っている。だが、話したのは皇帝だろうと考えるのが、納得しやすかった。なにかのついでに、こんなことがあったと教えたのだろう。
皇妹は、容赦なく言葉をつづけた。
「この手は騎士の手ではないなんて言葉に説得力がないのを、自覚するといいわ。あなたはつい、人を護ってしまう。うっかり、我が身を投げ出してしまうのね。そのあたりが……先代と同じよ」
「いや……わたしは」
「陛下も、そう仰せだったわ」
そういわれると、ヤエトは口をつぐむしかない。やはり、皇帝の言葉は絶対である。
わずかに眼をほそめると、皇妹は告げた。



「人払いをしてちょうだい」
ジェイサルドが視線で問うのに対し、ヤエトはうなずいた。老騎士は一礼して、さっと室外に出た。
皇女がふたりを見比べて尋ねた。
「わたしもはずしましょうか、叔母上？」
「どちらでも。でも、きっと興味がある話になると思うわよ。わたしはね、思い出話をしたくて来たわけじゃないの。さて尚書卿、これは陛下のご内諾もいただいているのだけれど……選ぶ権利はあなたに与えるということで」
猛烈に嫌な予感がした。
皇帝が絡むというだけで、嫌さ倍増である。選ぶ権利とやらが与えられるのが、さらに怖い。どうせ拒否したら破滅とか、そういう種類の選択だ。
聞きたくないというヤエトの願いを知ってか知らずか、皇妹はすらすらと言葉をつづけた。
「わたしが先代《黒狼公》の妻だったことは、知っているわね？　先代に離縁されたわけではなく、死別して、皇家に戻ったわけだけれど……本来なら家門を継ぐべき息子や弟といった親族がいなくて、《黒狼公》家の名は宙に浮いていたところへ、あなたが継ぐことになった。そこで尚書卿、息子や義弟というわけでもない新しい《黒狼公》であるあなたという存在とわたしの関係を、見直してみたらどうかしら、と思うのよ」
ヤエトは眼をしばたたいた。意味がわからない。
皇妹の笑みが深まった。言葉をあらため、彼女はきりと提案した。
「わたしたち、復縁してはどうかしら？」

第



章

1

ヤエトの機嫌は、よくなる暇がない。

――なんでこんなことに。

なりゆきに流される人生を送ってきたという自覚はある。その場その場で思いついたことを、心のままになしてきた結果がこれだ。

先行きがわかっていれば、もう少しは用心できたのではないか。もう何回めになるかわからない後悔を、ヤエトは嚙み締めている。

こうならずに済む道が、あったのでは？

平民が貴族になるだけでも予想外の大事件であるのに、事態はさらに進展し、皇帝の妹に復縁を提案される始末。それも、選択の権利はヤエトにあるというのだから、おどろきだ。

――そんなもの、誰が予測するか！

はじめの衝撃が過ぎ去ると、だんだん腹が立ってきた。なんで自分にばかり、こんな無茶な運命がふりかかるのか。

貴族の家門は、原則として当主の息子、弟、甥、従兄弟の順に継承権がある。

息子以外が家を継いだ場合、寡婦は実家に戻ることになる。帝国貴族の文化では、親族間での妻の共有は許されない。発覚すれば、深刻な汚名を背負うことになり、貴族としては死んだも同然である。寡婦が実家に戻されるようになったのには、そういう事情もあるだろう。

だから、夫と死別した妻が次の当主の妻となる、などという事例はあり得ない。通例ならば。

今回の場合、ヤエトは先代《黒狼公》の親族ではないので、そこは案ずる必要がない。

帝国貴族及び富裕層のあいだでは、再婚もまた問題視されていて実質的に不可能であるが、皇妹はあっさりとその問題をしりぞけた。

――いったでしょう。再婚じゃないわ、復縁よ。わたしは《黒狼公》の妻だった。またその座に戻るだけ。誰が文句をいえるというの？

皇帝の内諾を得ているのなら、表立って反対する者はいないだろう。真上皇帝の権威は絶対である。

皇妹が説明したところでは、過去にもそういった事例はあったそうだが、それが捏造であってもヤエトはおどろかない。沙漠を越えて持ち込まれた書物は、せつなくなるほど数が少ないのだから。

おどろかないが、嬉しくない。

ため息をついてヤエトは窓の外を見た。

相変わらず、空は澄んでいる。北嶺の民の眸と同じ、奇蹟のように美しい青だ。高空の寒さを知っているヤエトには、冷気を感じさせる色でもある。

踏野郡への滞在はごく短期間だったが、空の色はまったく違っていたな、と思いだす。あの状況で、よく空を見上げる余裕があったものだ。

――はじめにいったと思うけれど、わたしは提案するだけ。決めるのは、あなたよ。すぐに決めろとはいわないわ。じっくり考えていいの。

ただし、と皇妹は姪を見遣って微笑んだ。

――口外はしないでね。あなたが受けてくれるにしても、こちらから申し出たとは思われたくないし、断られるのだとしたら、余計に。わたしにも見栄というものがあるのよ。わかってちょうだいね？

わかってちょうだいもなにも、ないものだ。

理解を求めたいのは、こちらの方だ。栄達など微塵も望んではいない。目立たず、平和に、隠居したいだけなのだ。皇帝の襟首を摑んで訴えたい。いや、着衣の裾にくちづけてもよい。手段は問わない、とにかく認めてもらいたい。《黒狼公》に隠居を許す、という皇帝の言葉がほしい。

それが心からの願いだが、かなわないだろうなと思う。真意が理解されなくてももちろん、理解されたらなおさらだ。皇帝の不敵な笑顔が、まざまざと思い浮かぶ。あの宝石のような眼で、ヤエトが厭う

未来を正確に読みとり、笑顔で命じるに違いない。
死ぬまではたらけ、と。
自分がなにをしているかなど考えもせず、ヤエトは膝の上の雛を撫でていた。重みで足が痺れてきたが、もう少しなら我慢できる、もう少し、と耐えつづけている。あたたかくてふわふわで、変な音をだしたり、たまにこちらを見上げたりする生き物を手放すなんて、とてもできない。
……と思っていたら、ぽてっ、と一羽が落ちた。
「ああ、悪かったね」
椅子に座るのを諦めた方がいいのかもしれない、とヤエトは思った。雛たちはさらに成長し、二羽が並んで膝に乗るのは困難だ。それでも無理矢理乗ってくるのだが、長居はできない。今そうだったように、ぽてっ、と落ちてしまう。
――床に敷物を敷いて座ることにしようか。
そういえば、この椅子は皇妹の贈り物である。皇女が北嶺太守となった祝いにと、去年の訪問時に持ち込んだものだ。当時は平の尚書官でありながら太守の副官という微妙な地位だったヤエトが、その中の一脚を譲り受けたのだ。
椅子の方が立ったり座ったりが楽なので、由来など考えずに使っていたが……今はもう、皇妹を連想させるものは、できるだけ日常から遠ざけたい。
羽撃いて膝の上に乗り直した雛を支えてやろうと身を屈めたら、今度はもとから乗っていた方が落ちた。やはり二羽が乗るには無理がある。
「尚書……卿、その」
「はい？」
ふり返ると、セルクが扉のところに立っていた。なんだか微妙な表情で、こちらを見ている。
「つまり、なんだ。うん。雛は、甘やかし過ぎない方がいい」
「甘やかしてなどいませんよ」
「いいや、甘やかしている」
「そうでしょうか」

セルクはぐっと口を引き結ぶと、つかつかと歩いて来るなり雛たちを掴んだ。
あっ、と声をあげる暇もない。
「少しはシロバのところへ行け！」
肘で窓を押し開けるなり雛たちを外へ投げ出したから、ヤエトはびっくりして立ち上がった。
「なにをするんです」
「あんたの膝の上だと、飛ぶ訓練にならない」
「まだ雛ですよ」
「このまま甘やかしていると、太るぞ。まともな動きかたは、雛のうちに覚えるものだ。今、甘やかすと、苦労するのはあいつらだ。それに……やつらがあんまり来ないと、シロバもかわいそうだろう」
正論を吐かれ、ヤエトは返す言葉に詰まった。
「……そうですね」
「すまん、あんたを責めるつもりじゃ」
「いえ」
心に大きな負担を抱えているのは、ヤエトだけではない。シロバの方が、ずっとつらいはずだ。雛がいれば、少しは耐えやすいだろう。
大きく息をついて、ヤエトは椅子に腰を戻した。
「雛を投げるために来たわけでもないでしょう。ご用件は？」
「明日から祭りだというのに、尚書……卿がいなくなると聞いて、皆、残念がっている」
ヤエトは苦笑して答えた。
「わたしがいなくても問題ありませんよ。それに、呼びづらいなら、以前の通りに尚書官と呼んでもらってかまいません」
「問題はある。……どっちもだ！」
「そうでしょうか」
「人をどう呼ぶかは大事なことだ。たとえ、その……尚書卿がよくても、ほかの者がどう思うかを考えなきゃならない。……そうだろう？」
セルクに諭されるとは思いもよらなかった。天然のくせに、妙なところで常識的だ。

「たしかにそうですね」
「それに、祭りは皆で楽しむものだ。準備の手伝いはしたのに、当日はいなくなるなんて、おかしいだろう」
「手伝いというほどのことは、していません」
なにしろ、北嶺には到着したときは意識不明だったのだ。以後は療養を強要され、朝議にも何回か顔を出した程度である。去年の苦労に比べたら、なにもしていないも同然だ。
「議事録を修正してもらったぞ」
「誤記のように思えたところがあったので、確認しただけですよ」
「……すぐそうやって、だけ、っていうんだ」
「はい？」
セルクは苛立たしげに唸り、だから、とつぶやいて頭を掻いた。
「俺が凄いと思うことを、それくらいのこと、その程度、それだけ、っていうんだ。前からそうだ」
「いや……なにが凄いのか、さっぱりですが」
「俺だって、あの議事録は見た。だけど、誤記なんて気がつかなかった」
「中身がわかっていると、却って気づかないものですよ。わたしは朝議に出席せずにあれを見ましたから、そのせいでしょう」
「だから！　そういう問題じゃないって」
どういう問題ですかと切り返したいところだったが、きりがないのはわかりきっている。そこは堪えて話を違う方へ向けた。
「話はそれだけですか？」
「いや……ちょっと相談したいことがあるんだ」
そこでまた、セルクは少し言葉に詰まった。
勢いはあるのに踏ん切りの悪い男だと思うのは、こういうときだ。
「なんでしょう？」
「ナオ殿のことなんだが」
ヤエトはわずかに眉を上げた。

あの日以来、ナオはずっと部屋にこもっている。反抗する気配はなく、しかし、過去になにがあったかを明かそうともしない。皇女が訪ねても、ただ恐れ入り、ご迷惑をおかけして申しわけありませんと肩をふるわせるだけだという。

もちろん、事情を知っているのはあの場に居合わせた数名のみだ。表向き、ナオは体調を崩して寝込んでいることになっているが、いくらなんでも長いとは思われているだろう。

そういえば、預言者がほかにどんなことを話したのか、ファルバーンに問い質すべきだと思いだした。聞きたくないので、つい後回しにしてしまうのだ。

セルクはまだ口籠っている。面倒くさいなぁと思いながら、ヤエトは彼をうながした。

「なにか問題でも？」

「……姫様のことなんだ」

「王の？　ナオ殿の話ではなかったのですか」

「だから、つまり……そうだ。ナオ殿は、よほどお悪いのか？　姫様の顔色が冴えないし、なにかこう……様子がおかしいだろう。ナオ殿のこともあるのだろうが、踏野でも、なにかあったのか？」

「朝議で報告しましたが」

「それ以外に、なにかあるだろうと思ったから、尋ねてるんだ」

副官が叔母に復縁を迫られましたよ、と教えてやりたい。なんらよい結果に結びつかないのはわかっているが、どんな顔をするか、見てみたいではないか。セルクは皇妹にも純粋な崇敬の念を抱いているようだから、きっと衝撃を受けるだろう。

そんなことを考えている内に、セルクにも教えられる事件があったのを、思いだした。

「踏野太守の親戚が、王を口説いていましたよ」

「なに？　まさか、その野郎になにかされたとか」

「ご不快は覚えられたことでしょうね」

領地の支配権に注目しているだけだとあからさまにいわれて、皇女が喜ぶはずがない。

後刻、皇女に聞かされたのだが、芝居が終わってからあまりに馴れ馴れしいので、きっぱり拒絶したらしい。太守の従兄弟の一連の発言は、本音でもあり、嫌がらせでもあったわけだ。

底の浅いことです、とヤエトは評してやった。その程度で諦めてしまうのでは、話にならない。

「それで、返事は？」

「返事もなにも、正式になにか申し込まれたというわけではないですよ。色目を使われただけです」

「色目……」

セルクは絶句した。現実よりも刺激的な状況を想像しているのかもしれないが、教えて安心させてやる義理もない。少しは危機感を持てばよいのだ。

「よい機会なので、訊いてもかまいませんか」

「なんだ？」

「結婚は、しないのですか？」

ヤエトも頻繁に受ける質問だが、セルクはそれ以上なのではないか。去年の今ごろまで家名もない平の尚書官だったヤエトと違い、セルクには護るべき家があり、一族がいるのだ。二十九歳で独身とは、いかにも不自然だ。

案の定、その質問は聞き飽きたという表情で、セルクは肩をすくめた。

「尚書……卿には、いわれたくない」

「答になっていませんね」

「そっちはどうなんだ」

「寡婦を残す覚悟が必要になるので、難しいです」

具体的に申し込まれた今も、その問題は変わらない。正直なところ、皇妹の狙いがわからない。へたをすれば、またすぐ寡婦になるだけなのに……彼の虚弱ぶりを過小評価しているのだろうか？

評価といえば、健康というか寿命以外の面では、彼女はヤエトをどう評価しているのだろう。男性として魅力を感じるということは、まずあるまい。政治家としては未知数だろうし、官吏……は、とくに必要としていないだろう。

まさかとは思うが、叙爵から仕組まれていたのでは、という疑念がちらりと浮かぶ。

皇帝の思惑なのか？　希有な恩寵の力をそなえた妹を通じ、ヤエトを使うつもりなのか。

そこに皇妹の意志はあるのか？

皇妹は、公的な立場を得たいのだろう。皇家の女性というだけでなんの権力もないと語っていたことを想起すれば、それは容易に想像がつく。

だが、《黒狼公》の妻という地位で、彼女は満足するのだろうか？

開いたままになっていた窓を閉め、セルクはぽつりとつぶやいた。

「嫌なことをいうな」

「真実はいつも耳に痛いものです」

「そうかな」

「結婚しないのかと訊かれるのも、不愉快なものでしょう」

「耳に痛くはない。うんざりしているだけだ」

「皆が不思議に思っているでしょうからね。それとも、理由を知らないのは他所者だけなのですか？」

セルクの口の端に、笑みが浮かんだ。

「どうだろうな。俺が不能だからという者もいる」

「へぇ」

思わず素で応じてしまい、睨まれた。

「信じたんじゃないだろうな」

「いや、そんな考えかたもあるんだなと思っただけです。グランダクが喜んで賭けそうだ」

「十日ほど、口もきかなかった」

――賭けたのか！

確認にどんな方法をとったのかは、尋ねない方が安全だろう。ヤエトには、グランダクのような勇気はない。

「グランダクも独身なのでしたっけ」

「奴は逃げられた」

「……は？」

「一回、結婚はしてる。でも、逃げられた」

ヤエトは額をさすった。ぼんやりと頭が痛いのは、セルクと会話しているせいだろうか。

「逃げた女性は、社会的にこう……見下されたりはしないのですか？」

「逃げられた男が見下される場合の方が、多いな」

「再婚は？」

「したけりゃするだろう。グランダクのところを逃げだした女も、再婚してるはずだ」

帝国の常識とは、ずいぶん差があるようだ。貴族に端を発した慣習は富裕層にも伝播し、女性の再婚は禁忌とされている。

このことが知られれば、北嶺は宮廷でさらに馬鹿にされるだろう。野蛮だとか、未開だとか。

「わたしは当地の慣習に疎いので、教えてもらいたいのですが、……婚姻や離婚の手続きは、どうやっているのでしょう？」

「祭りのときに、やたら踊ったり歌ったりしている集団がいたら、婚礼だ。一族に認められた証だからな。離婚の方は、妻が夫の許可を得ずに実家に戻れば成立する。実家が受け入れれば、それでいい」

「実家で受け入れられないということは、ないのですか？」

「ある」

こともなげにいってから、セルクは少し、せつなげな表情になった。

「はぐれ者になるか、婚家に戻るしかないな。ただ、……ひとりになっても、鳥はいるから」

いかにも北嶺人らしい慰めの言葉だった。

人の社会で受け入れられなくなっても、鳥がいる。鳥さえいれば、山々をさすらって生きていくこともできる。

それも悪くないのでは、と思ってしまう。

――体力さえあればなぁ。

シロバとともにふらりと姿を消して、夢の隠居生活へ突入できるのだが、ヤエトには自力で食料を調達する知識も技術も不足している。もちろん、倒れ

たらそこで終わりだ。隠居ではなく、死亡である。
「はぐれ者というのは、村に居場所がないということですか」
「ああ、そういう感じだな。祭りには姿をあらわす者が多い。必ずではないが……三年つづけて見なくなると、もう生きてはいないのかなと思う」
「なるほど。もうひとつ、訊いてもよいですか」
「質問しに来たのは俺だぞ」
苦笑しながら、セルクは拒否はしない。むしろ、問いかけを待つような表情だ。
「夏入りの祭りで祀られているものは、なんなのですか？」
際どい質問であるのと、なかなか暇がないので、今まで確認せずに来てしまったが、ヤエトはここに興味があった。
北嶺には神が眠っている。ツェートー神は、当地の守護神といってよいだろう。かつて国を興した王と契約して恩寵の力をもたらし、鳥に翼を与えたのが、この神だ。
北嶺人は、はたしてツェートーという神の存在を、その名を、覚えているのか。どのように把握しているのだろうか。
セルクの答は明解だった。
「そりゃ、夏が来たのを祝ってるだけだ」
「……は？」
「去年もいったと思うが、俺は由来なんぞは知らん。皆、そうだろう。俺たちは、夏が好きだ。夏が来れば嬉しい、だから夏を祝うんだ。行き来が途絶していた地域にも行けるし、皆で顔を会わせることができるのも、夏だからだろう？」
――身の丈にあった考えかたというべきか。
神のことなど、念頭にないようだ。
それはそれで健康的なことだし、神だの魔だのといったことに悩み飽きているヤエトには、羨ましいとすら思えるほどだ。
だが、鳥に翼を取り戻したのは、やはり神である。

ツェートーが皇女の希いに応えた理由はわからない。神の考えることなど人間に想像がつくものか。

それでも、感謝はすべきだろう。

――王に進言しておくか。

祭りのあいだになんとか時間をつくって、ツェートーにも敬意を表してくださいと。事情を知るルーギンに供をたのめばよい。

「で、姫様の顔色が冴えない理由は、教えてくれないのか」

セルクはまだ諦めていなかったらしい。ヤエトは苦笑して答えた。

「貴殿が独身を通す理由も聞いていませんよ」

「……選べないんだよ」

いきなり、腑に落ちた。

セルクは血統がいい。帝国風にいえば、竜種の傍系くらいの感覚ではないか。その家の跡取りなのだから、縁談は降るほどあるだろう。

そして、この男は肝心のところで決断力を欠く。

当然、自分の結婚などという重要事において、さっと決めてぱっと行動することなどできないはずだ。

「選ぶのではなく、断ると考えればどうです？」

「よけい悪いだろう」

「そうでしょうか。断れば、相手に自由を与えることにはなりませんか」

「自由？」

「あなたが駄目と決まってようやく、ほかの誰かを探すことができる……そういう女性も、いるのではないですか？」

セルクは答に詰まったようだった。

暫くは顔をしかめていたが、やがて息を吐いてつぶやいた。

「そうだな。考えてみる」

――皇女と結婚しようとは考えないのだろうか。

セルクは皇女が好きなのだと思う。

それが男女間の恋愛感情と呼ぶべきものかどうか、そういった問題に疎いヤエトには判断できないが、

とにかく、セルクが皇女に抱いている感情が肯定的なものであるのは明白だ。

北嶺の慣習も、悪くない。結婚してみて、もしセルクが気に入らなければ、皇女は実家に逃げ戻れば――少なくとも北嶺においては、皇女の評価を落とさずに離婚が成立する。宮廷でも、さして問題にならないだろう。野蛮人を相手の結婚自体が、表向き、なかったことにされるはずだ。陰口は叩かれるだろうが、それだけだ。

皇帝の許可が得られる可能性も、そう低くはない。北嶺の価値は、昔とは違う。名家の跡取りであるセルクなら、皇女の結婚相手としては、悪くない。

「ナオ殿のこと、わたしに訊かず、王にお話ししてみてはどうですか」

「それは……無理だろう?」

――優柔不断め。

突っ走るときは制御不能なほどの勢いを見せるくせに、ここは決めねば、というところでは臆病に立ち止まる。だから、皇女との仲も進展しないのだ。

「無理ではないでしょう」

「しかし、俺は……去年、姫様に嫌われてしまったから」

ヤエトは眼をしばたたいた。なんの話だ。

「去年、ですか。なにかありましたか」

「忘れたのか、尚書官殿」

さっきまでの努力をあっさり無にして、しかしセルクは昔の呼びかたに戻してしまったことに気づきもしないらしい。

「ですから、なにを?」

「尚書官殿が連れ戻してくれただろう。ほら、姫様が……口論になって、俺もつい……なんだかもう、北嶺がまるごと姫様に否定されたような気分になって、だったらもういい、みたいなことを」

かなり考えて、ようやくわかった。連れ戻したというのは、皇女が失踪したときのことだ。つまり、都に呼び戻されるのではと不安になった皇女が、セ

ルクに八つ当たりした挙げ句に姿をくらましたときの会話を、この男は律儀に覚えていて、気にしていると。そういうことなのだ。

もう少しで、阿呆か、と口にするところだった。

セルクは真剣に悩んでいるらしいが、皇女には無用な気遣いだということを、なぜ理解できないのか。セルクの悩みを知ったとき、皇女が感じるのは同情ではなく、ずっと誤解させたままにしていたことへの反省でもないだろう。きっと、鬱陶しい男だな、と思われるだけだ。

やはりこの男では皇女の夫はつとまらないかもしれないなと考えつつ、ヤエトはセルクを励ました。

「大丈夫ですよ。王は、とてもわかりやすいかたですが、セルク殿を嫌っておいでのようには見受けられません」

「そうなら、いいが」

「去年のことも、セルク殿が王を案じられたからこそ、少し言葉が過ぎてしまっただけではないですか。気にすることなど、なにもないでしょう」

「だから、駄目なんだ。俺がナオ殿のことを訊けば、また同じことになるかもしれない」

セルクにしては、着眼点がしっかりしている。たしかに、迂闊なことをいってまた飛び出されたら、困ってしまう。鳥が翼を取り戻した今、皇女の行動半径は飛躍的に広がった。二度と無責任に姿を消したりはするまい……と、信じたくはあるが。

「そうですか。では、わたしから申し上げられることはありません。ナオ殿のこと、たしかに王は案じておいでなのでしょうが、我々にできるのは、いつも通りにしていることだけではないですか」

「いつも通りでは――」

「つねと変わらぬことが、心の支えになるという場合もあるのですよ。人に案じられていると察すれば、それをありがたく思う心が生じるだけでは済みません。我らの王は、きっとそれをご自分のなさけなさとお感じになるでしょう。臣下の者どもに余分な心

配をかけてしまった、なんと腑甲斐ないことだ、と。ですから、気づかぬふりをしてさしあげるのも重要なこと。セルク殿、王にお話をなさらないなら、なにか気づいた風をお見せしてはなりません」

暫し、セルクはぽかんとしていたが、やがて顔をしかめてうなずいた。

「わかった。やってみる」

皇女の話をきく方をやるのか、それとも黙ってそ知らぬふりをするのかは判然としないが、セルクの心は決まったらしい。

やれやれ、とヤエトが安堵の息を漏らしたとき、ジェイサルドが扉の内に入って来た。

「殿」

呼びかけながら老騎士は、ちらとセルクに視線をやった。席をはずせという意味だろうが、どうも通じなかったようだ。

苦笑して、ヤエトはセルクに告げた。

「申しわけない、内々の話があるので」

「え？　あ、ああ……どうも邪魔したな」

セルクが退出するなり、ジェイサルドは口を開いた。

「北方からの使節団が到着しました」

動悸がした。目眩もする。なんだって、と問い返したかった。同時に、確認したが最後、そこからもう逃げられないと怖じる心もあった。

どうして今日、《黒狼公》領に向けて出発していなかったのか。祭りの準備を見届けてから戻ろうなどと企図した自分を殴りたい。

「皆、知っているのか」

北方と当地の関係は、すこぶる悪い。積年の悪感情にくわえて、去年の鳥殺しの件がある。北方人がこの土地にいるというだけで、殺気立つ民も少なくないはずだ。

「はい。先ほど、姫様が引見なさいました」

自分が呼ばれなかったことに、ヤエトは意外さを感じた。

ジェイサルドは声を低めてつづけた。
「人質を要求しています。先方も、ここに人質を置いて行くと申しておりますが」
「……では、和平の使節ですね」
少し、ほっとした。北方蛮族が北嶺の鳥を大量に殺してから、まだ半年。そのときの侵入部隊は壊滅した。鳥を殺されて憤激した北嶺の民が、容赦なく復讐の刃をふるったのだ。
報復の報復、という展開になることを、ヤエトは恐れていた。だが、その連鎖を北方側がまず断とうとする姿勢を見せた。なかなかできないことだ。
「そのようです。ただ、交換する人質を、名指ししてきました」
ジェイサルドの報告に、ヤエトは眉根を寄せた。なにやら嫌な予感がするが、聞かないわけにもいくまい。
「誰です」
「セルク殿を、と」

2

北嶺の民にとって、夏は嬉しいものだ。だから祝う。それが祭りである——セルクの説明は、間違っていない。
だが、それは祭りの一面に過ぎない。
鳥に翼を取り戻したツェートー神にも表敬をと皇女に願うと、それなら今夜と応じられた。
決断力と行動力があるのは結構だが、そなたも同行せよ、と命じられるとは思わなかった。
「わたしはあの神には気に入られていませんが」
皇女は鼻で笑った。
「神のためなどではない。わたしが、そなたの同行を望むから連れて行く。クラルに同乗せよ。シロバはできるだけ休ませたい」
わたしも休ませてください……と訴えたい。ほんとうに明日、《黒狼公》領へ発てるのだろうか？

なんだか無理な気がしてきた。

――まぁ、それもしかたないか。

どうせ、行っても楽ができるわけではない。代官の妻を締め上げ、あの恥知らずな芝居の上演を止めさせたいのはやまやまだが、向こうに仕事が山積みになっているのは容易に予測がつく。

それに、遠くで案じるのはその場にいるより気疲れするだろう。結局、北嶺相であり、皇女の副官であるという責任からは逃れられないのだ。

皇女はくるりとふり返り、控えていた騎士にも、即座に命じた。

「ルーギン、同行せよ」

「御意。それでは《天地輪》が済んだら参りましょう。会食もせずに済むのですしね」

「会食……？」

皇女は、ふん、と鼻を鳴らした。ご不快である。

「自分たちで持って来たものを食べるそうだ」

毒殺でも疑っているのか。それとも信仰か、独自の慣習のためか。どちらにせよ、饗応されるのがへたなのでは、よい使節団とはいえない。

「人質を置いて行くといっているのですよね？」

「そうだ」

「今後の食事はどうするのでしょう」

「さあな。そなたはどう思う？」

――惜しい。

ここで、ヤエトが考えに考えた偏屈の決め台詞、知るかボケ、を使いたいところだ。いや、そんなことはどうでもいい。

北嶺の食べ物は受けつけないとかいって、勝手に飢え死にした挙げ句、人質を殺したと因縁をつけられでもしたら、知るかボケで終わるはずがない。

「捨て石のつもりでしょうか？」

ヤエトのこの問いには、ルーギンが答えた。

「今、調べさせているところだけどね、置いて行くのは有力な一門の継嗣らしい」

「継嗣ですか」

――断りづらいな。

セルクを名指しするほどだ。向こうもそれなりの家柄の人物を用意したのだろうとは思っていたが、次男、三男といったあたりで手を打ってくれればよかったのに、とヤエトは思う。

北方については知られない部分が多い。はっきりしているのは、北方諸領とか北方連合という呼びかたがあるように、いくつかの豪族が連携、あるいは割拠する土地であるということだ。

だから、特定の一族が和平を望み、人質の交換という比較的穏当な方策を選んだとしても、それが北方全体の意志を示すと楽観はできない。

それどころか、へたをすると、あの一族に人質を送ったのだからうちとも交換しろ、と次々に申し出られ、どこに送った人質の方が格が高いの低いのと争いの種になる危険性もある。

面倒くさい、とヤエトは思った。もうなにもかも、知るかボケ、で済ませてしまいたい。

「セルクはもう知っているのですか」

「まだだ。……今さらだがな、そなたはなぜ知っておる？」

「我が騎士団長より聞き及びました」

皇女は顔をしかめた。

「困ったことだが、あの男が知っていてもおどろく気にはなれんな」

「申しわけありません」

ヤエトの謝罪を、皇女は受け流した。

「日没後は冷えるぞ。厚着をするのを忘れるな」

おかげで、なぜ自分が同席を求められなかったのか、ジェイサルドの報告がなければ使節団の到着も知らずに過ごしてしまいかねなかったのか、を問いそびれた。

彼が倒れているあいだに、ヤエト抜きでものごとを進めるのに慣れてくれたのかもしれない。もしそうなら、歓迎すべき進歩である。でなければ――わけがわからない。

首を捻りつつ、ヤエトは皇女のもとを辞した。夕方までに、明日の出発の中止を随員に伝える必要がある。とくに、鳥を借りる貸さない、乗せる乗せないの押し問答をつづけているジェイサルドから、タルキンを解放してやる必要がある。

最近、タルキンはジェイサルドが是といえば非と返すありさまだ。春先、老騎士が鳥に剣を突き付けた一件からこちら、反感を隠さない。ジェイサルドがそれを相手にせず、遺恨など存在しないかのようにふるまうのが、事態を悪化させているようにも見える。それとも、これが正しい対処法なのだろうか。人間関係に正解などないとわかってはいるが、絶望的にすれ違っているとしか思えないのが困る。

厩舎長は介入しない。ヤエトもあまり介入したくないが、気がつくと、不満顔のタルキンを相手にしていることがある。今日もそうなった。

厩舎に顔を出したついでにシロバに挨拶をし、ちょっとクラルに乗せてもらうけど拗ねるなよ、と伝えておくことにした。案の定、シロバは羽毛を少しだけ逆立てたが、それ以上の意思表示は見せなかった。巨大な毛玉のような雛たちが、ヤエトの足にまとわりついて歓迎してくるのは、かわいらしいが、迷惑でもある。二回ほどころびそうになった。

厩舎長曰く、シロバの雛たちはヤエトを義理の兄くらいに位置付けているとか。心の中を見せてくれない母鳥より、見通し良好のくせに、雛に向かってうるさいことはいわない兄人間の方が、つきあいやすいと思っているのだそうだ。

ああそうですか、としか返せない。こいつらは、きっとあんたを乗せるよ、ともいわれた。裏を返せば、この雛たちは、少し特殊な育ちかたをしてしまった、ということになる。

若干の責任を感じながら、シロバの嘴を撫でて機嫌をとり、厨房で分けてもらった砂糖をこぼして雛にどつき倒され、ジェイサルドとタルキンの押し問答を仲裁し、軽食をとらなければと部屋に連行され、

すごい味の粥を食べさせられ……と、ものを考える暇もなく時間が過ぎた。

旧城趾は、鳥で飛べばすぐの距離にある。かつて、北嶺が栄えていた頃の主城であるが、崩壊した今は呪われた場所とされ、土地の民はまず近寄らない。

割れた石のあいだを縫って、ヤエトは慎重に歩を進めた。今宵は晴天である。満月の光があたりに満ち、夜といってもずいぶん明るい。

ヤエトは、この場所が好きだ。静かだし、過去に思いを馳せることもできる。へたをすると幻視に魂を持って行かれそうになるが、それも悪くない——体力と時間さえ余っていればの話だが。

この崩れた城の地下に、北嶺の守護神が眠っているのである。声をかければ応えるかどうかは、相手次第だ。そしてその相手がどう出るかは、ヤエトにもさっぱりわからない。

神の考えることがわかったら、おかしい。

神は人ではないから神なのだし、人は神にはなり得ない。だから、神の考えがわかると自称する者を、ヤエトは信じない。

——その点、預言者はぶれがない。

彼女は神を理解したとか、自分が神だとかは主張しないだろう。神の言葉の器という役目からの逸脱を、彼女は自身に許さない。潔癖であり、愚直ですらある。

——いつの間に、そんな印象を得たのか。

信じられるとは思うが、どうしても相容れない。自分はそんな風に感じているが、向こうはどうなのだろう。同じように考えているだろうか。

それとも、考えることすら自分自身には禁じているのだろうか——神の器として、なにも思わず、感じず、考えず生きようとしているのか。

「また血を使った方がいいかな」

皇女に問われ、ヤエトは我に返った。

予告された通り、日没とともに気温は下がり、むき出しの頬にあたる風は痛いほど冷たい。ほんとう

に夏を控えているのかと思うほどだ。
「愚見ですが……」
「前置きはよい」
「神は、人を見てはいないのだと思います」
ヤエトを見上げた皇女の頬も、寒風にさらされて紅くなっていた。
「人を見ぬ、とは？」
「血で、感じているのでしょう」
皇女は眼をしばたたいたが、すぐに、あっ、と小さく声をあげた。
「そうか。血か！」
「人の一生など神にとっては須臾の間に過ぎません。言葉をかわし、祈りを受け、あるいは恩寵の力を与えたといっても――過ぎ去る矢か、水面のうたかたのようにしか、とらえ得ないでしょう。ですから、恩寵の力は血を通じて一族に伝わるのです。神の時間にあわせるには、人は儚い」
恩寵の力を得るのは、個人ではない。その交渉をした者の、一族だ。代々、血を通じて力は伝わる。神が人に力を貸し与えるとき、かれらが認識するのはその血なのだ。
魂魄では一代限りで消えてしまう。神と人では、時間の流れがあまりに違い過ぎる。
「そなたの血は不愉快だとか、申しておったな」
「あの神と古王国の神は、あまり良好な関係を築いてはいないのかもしれません」
「なるほど」
「ですので、わたしをお連れにならない方が」
「くどい。神がどう感じようと、知ったことか！わたしには、そなたが必要なのだ」
横で聞いていたルーギンが、大きく息を吐いた。
「姫様、そういう発言はお控えください。自国の相を口説いておいでのようですよ」
皇女の顔が真っ赤になった。
「ルーギン！」
騎士はいつものように胡散臭いほど魅力的な笑顔

である。これは遊ばれている、とヤエトにはわかるが、皇女はどうだろう。

さっさと終わらせるか、と覚悟を決めて、ヤエトは肩をすくめながら口を挟んだ。

「うっかり口説かれてしまいました」

皇女は、ぱっとふり向いた。うっかりといえば、この勝ち気で間抜けで聡明なあるじに本気で仕えてしまっている現状が、かなりうっかりである。翼臣になってほしいといわれて、断れなかった。まさに、うっかり口説かれたかたちである。

周囲はなぜか気づいていないようだが、実のところ、ヤエトはかなり迂闊な人間だ。

「わたしがもっと賢明であれば、王にどうかき口説かれようとも、今ごろはあたたかい布団に潜り込み、明日の出立にそなえて寝ていたことでしょう」

皇女の表情が、硬くなった。

「予定通り、明日、発つのか」

「いいえ。延期します」

「……そうか」

ルーギンが笑みをたたえて口を開いた。

「ほら、申し上げた通りでしょう?」

「なんの話です」

「先生は、けっして姫様を見捨てたりはなさらない、ということですよ。さて、血がご入用なのでしたら、わたしが流しましょう。皇家のかたにはとても及びませんが、わたしも遠戚には違いないのですし。おそらく、それで用はたりるでしょう?」

ヤエトは首肯したが、皇女がルーギンの腕をとって、止めた。

「わたしのつとめだ」

「姫様が御身に傷をつけられる必要は――」

「駄目だ。わたしがやる」

皇女は語気を強め、ルーギンの言葉を遮った。ヤエトをふり向いたときの表情には、さっきまで見せていたような幼さは、どこにもない。

――竜気だ。

皇女の輪郭が、黄金の炎に包まれている。神を呼び出すという考えに、その内なる力が反応したのだろうか。それとも、すでに神と呼応しているのか。

竜気にあたらぬようにと祈りながらヤエトは半歩退き、御意、と口の中でつぶやいて頭を下げた。

鞘からわずかに引き出した剣の刃に指をすべらせると、皇女はその手をふった。月光のもとで鈍い銀色にかがやく石積みの上に、血がしたたる。それは虹の光輝をはなつ、小さな星のようだ。

「ツェートーよ」

皇女は声をはりあげなかった。低い声というわけでもない。ただ、その場にいる者に語りかけるような声量であり、口調である。

風がやみ、谷を渡る無気味な音が止まった。悪霊のうめき声だと、土地の者が恐れる音だ。

「そなたの力を貸し与え、鳥たちの翼に風を取り戻してくれたことに、心より感謝する」

無造作にたらした手から、また一滴、血がしたたり落ちる。光であり、生命である、とヤエトは思った。あの血こそが神の力だ。

その場にそぐわない感動が、胸の内側から突き上げるようにヤエトを襲った。

――生きるとは、奇蹟なのだ。

この地上に生きてある――それだけで、すべてが許される。

遺跡の輪郭が、白い炎をあげる。往時の姿をなつかしむかのように、幻の柱が立ち上がり、半透明の城が虚空に像を結びかけている。

皇女は跪き、石の上に手をついた。月光のもと、色を失って白銀となった巻き毛が、横顔を覆った。

「……そして、問う。魔界の蓋が開かんとしているとの噂を聞くが、それは事実か。かつまた、それを阻止する方法はあるのか」

『また、そなたか』

不意に足下から響いた声に、ヤエトはぎょっとした。皇女が唐突に質問に及んだことにもおどろかさ

れたが、その比ではない。
「ふたたびの呼び出しで、すまぬな」
少しもすまないなどと思っていない口調で応じ、皇女は言葉をかさねた。
「ツェートーよ、知っているなら教えてくれぬか」
『人とは強欲なものだ。感謝をあらわすと見せて、次はあれ、その次はそれ、と望んでばかり』
「欲するからこそ前へ進むことができる。それが人なのだ。立ち止まったときが、死ぬときであろう」
地面がふるえた。
崩れた石積みが雪崩をうってきそうで、ヤエトは首をすくめた。人間というのがどれほど脆く、壊れやすい生き物であるか、ツェートーはちゃんと認識しているのだろうか？
『欲深に望むそなたは、こよなく人間らしいということか』
「答をくれぬか？　人の命は長くない。時間が惜しいのだ、神よ」
『身に過ぎた欲だな、小さき者よ』
皇女がたやすく感情的になる弱点を突いてきたのは、偶然なのか。それとも、さすが神！　というところなのか、よくわからない。わざと持ち出したのなら、神もずいぶんである。
だが、皇女は冷静さをたもって答えた。
「否定はせぬ。わたしの欲を満たしてくれるのか、それとも満たさぬのか」
『魔界の蓋は、開く』
神の答は淡々としていた。
遠い山並が歪み、月が百倍も明るくなったように感じられた。同時に視界が霞み、世界のすべてが遠ざかっていく。
――神が目覚めている。
ツェートーの力が、ヤエトの五感を歪めているのだ。別の神の恩寵を享けているヤエトにとって、それは拷問に等しい……ということに、はじめて気がついた。去年は感じなかった。神を呼び覚ます前段



階で彼は体力を使い切っており、それどころではなかった……ということだろう。

『魔界の支配者は神のごとき力を持つが、人に似て欲深だ。彼奴はひたすら欲している』

「なにを欲するのか」

『復讐』

暴力と表現したくなるような圧力。それが、ヤエトを押しひしごうとしていた。胸が詰まり、呼吸が苦しくなる。

だが、皇女は気づかない。おそらくルーギンも。かれらは、この場の空気を神と共有している。呼吸や鼓動の速度も、すべて。のびやかに、いつも以上に生き生きとしている。

「復讐とは、なにに対してだ?」

『すべて。彼奴は喪った母神を求めておる。慕うておる。母神を堕天に至らせた天界を、在りし日の女神を知る天の神々を妬み、羨み、憎んでおる。彼奴は幼い——愛に餓えた孤児にして、誘惑者。しかも、世界を滅ぼし得るほどの力をそなえし者』

「ツェートーは、それに抗し得ぬのか」

『彼奴が滅ぼす前に滅ぼしてしまうことなら、できようぞ』

神の口調は飄々としていた。感情というものがなさ過ぎて、逆に、妙なおかしみを帯びて聞こえる。

「救うことは?」

『蒼竜王は、それで救った。彼に学ぶがよい』

「とうに死んだ者だぞ」

『オルムストの眷属に力を使わせよ』

「……ツェートーには、わたしに教える言葉はないのか? そなたの声は飾りか」

皇女の挑発に、神は地鳴りで答えた。

揺れている、とヤエトは思った。世界が回っている。個人的に目眩を覚えているだけなのか、ほんとうに周囲が揺れているのか、判断不能だ。

皇女の声は、強い。それ自体が光のように感じられる。今や、皇女は竜気そのものだ。

「ツェートーよ、そなたの望みはなんだ？ 魔王に与するのか？ ただ傍観するつもりか。わたしに手を貸せとはいわぬ、世界を救うためになにごとかをなそうとは、思わぬのか？ わたしは力なく欲深な人の子に過ぎぬが、世界を滅ぼすといわれて、それを座視する気はないぞ。神は如何に？」

震動が止まった。神の気配もまた消え去った。

皇女が立ち上がるのと入れ違いに、ヤエトは膝をついた。気もちが悪い。吐きそうだ。

「ヤエト」

天地が揺らぎ、上下左右はもちろん、前後の感覚さえあやふやになってしまう。

こんな風に感じるのは、はじめてではない。おそらく、これが最後でもない。いや、そうではなく——遠くへ彷徨っていきそうになる想念を、彼はなんとか摑み、引き留めようとした。

冷や汗が額に滲む。全身が、冷たい。氷のようだ。深くて古い、溶けない氷。

——あなたは神と語るでしょう。

独特の調子、うたうような節回しで語る、預言者の声が、遠く響いた。それとも、耳もとでか。

——避けたくても、避けることのできない運命というものがあるのです。人はそれに沿って生きるしかないと、あなたはご存じですね。

知らない。

預言者の顔が闇に浮かぶ。黒い髪、なめらかな額。淡い色をしたくちびるが、容赦なく告げる。

——神々は時を超越する。けれど、人は時の流れに沿って生きている。それだけのことです、おわかりでしょう？ わたしの仕える神は未来を語り、あなたの神は過去を語る。どこに違いがあるのです。どちらも同じ、すでに定まったこと。

違う、とヤエトは答えたかった。預言者に言葉を預けているターンの神に、問いたかった。

なぜ、未来を語る。決まっていることなら、敢えて語る必要もないだろう。

——成功するとわかっている方が、努力がしやすいでしょう？

それでは、とヤエトは尋ねた。あのとき、彼は暗い部屋で預言者に対峙し、その企図を問い質した。

——失敗するとわかっているときは？

——この世に失敗などないのですよ、公。あなたもおわかりでしょう？　神がご覧になる世界はすべて、あるべきようになっている。ですから、ターンはわたしに託してくださるのです。どの言葉を語れば、人がより動きやすいか。なにを教えれば、抵抗なく運命を受け入れることができるか。

反発を抑えがたく、ヤエトは問い返した。

——あなたは、この世を見通す神にでもなったつもりですか。終末に至るまでの、そのすべてを。

暗い部屋だった。夜のように暗い。

預言者は、小さな窓を背にしていた。さしこむ光は、室内に舞う微細な塵を金粉のようにきらめかせ、預言者の黒い髪をも光の炎でふちどっていた。顔は陰になってしまっていたはずだ。

それでも、彼は覚えている。あの微笑、装身具の淡いかがやき。ひと呼吸おいて答えた、くちびるの動きさえも。

——いいえ。

いつに変わらぬ笑顔の奥に、はじめて、かすかな苦悩の響きを聞き取った。それで気づいた。彼女もまた、神の器である以前にひとりの人であり、それを捨て去らずにいようと苦慮しているのだ、と。

力は人を変えてしまう。それが世俗の権力であってもだ。未来を語る神の預言者ともなれば、その心性をたもつのは容易なことではなかろう。だから、ヤエトも揶揄するようなことをいった。

結局、その幼稚な挑発が預言者の心を動かすことになったのだろう。声は凛として揺るぎなかったが、装身具の揺れる音が、彼女の心のふるえをあらわしていた。

——ターンが預けてくださる未来が無限だとでも

お思いですか。わたしは、わたしの命が尽きるところまでしか知り得ないのです。それは、遠い話ではありません。

絶句した。

あのときも、そして記憶をとり戻した今も。

眸の奥に、せつなる望みを見た。その内容も本質も知らず、ただ預言者がなにかを強く望み、諦め、受け入れていることだけを知った。

過去と未来。互いに背を向けながら、同質の力を持つふたり。ヤエトが預言者に共感を覚えたのは、そのときがはじめてだった。

「ヤエト！」

皇女の声が、預言者の顔を切り裂いた。これだから竜種は、と思う。迷妄の底まで、声が届く。うかうかと気を失わせてもくれない。

「……大丈夫です」

なんとか声にして、ヤエトは顔を上げた。

大丈夫だ。倒れたりはしない。気合いを入れ直し、ヤエトは立ち上がった。

皇女がこちらを見ている。大丈夫、と彼は心の中でくり返した。そうでなければならない。

預言者の貌は記憶の底の闇に溶け、声だけが残った。

——わたしには時間がないのです、救い主よ。

3

祭りがはじまった。

本来なら北嶺を去っているはずだったのにと思いながら、ヤエトは今年も皇女の隣に席を占め、競弓を観戦している。

去年より気詰まりなのは、皇女を挟んだ反対側に、北方からの使節団の代表が座っているからだ。

勇気のあることだ、と思う。

自分たちが憎まれているのは、理解しているはずだ。その上で、堂々と身を晒している。弓矢の狙い

が逸れましたといわれかねない状況で泰然としていられるのには感心するが、迷惑でもあった。

使節が害されでもしたら、問題がこじれるのは明白だ。そうなれば、後始末を押しつけられるのはヤエトに決まっている。

なにも起きませんようにと念じるのに忙しく、勝敗の行方には興味がもてない。そんなのは彼だけらしく、観衆はこれ以上ないほど盛り上がっていた。

「決勝戦がおこなわれるのは、とても珍しいことだそうだ」

皇女の解説を聞いてようやく、すんなりとは優勝者が決まらなかったのだな、と気がついた。

猛練習を積んだルーギンが、北嶺随一の射手であるセルクと同点を稼いだらしい。どちらかが的を外すまで、交互に射ることになるという。そんな練習をする暇があるなら、なにかほかにやることがあるだろう、といいたいところだ。

今ごろどこかでグランダクが、あらたな賭けの参加者をつのっているに違いない……いや、もう締切っているだろう。決勝戦は、はじまっている。

先手のセルクが、あっさり的の中央を射抜いた。口を開けば単純馬鹿のくせに、弓を扱っているときだけは、表情どころか顔だちまで違って見える。なにか深遠な真理にでも到達していそうだ。

「セルク殿は、名射手でいらっしゃいますな」

使節は三十歳くらいの年頃だろうか、磨いた銅のような色の髪が印象的な、するどい風貌の持ち主だ。冷静に考えればセルクと同年輩のはずだが、落ち着きぶりは天地ほど違う。

落ち着いているといえば、皇女もずいぶんだ。強心臓だとは思っていたが、どんな状況にも対応できる図太さに、羨望の念すら覚える。

今日の皇女は女装である。去年もそうだったし、男装より見栄えがするからと、皇女本人が決めた。

目立つし、受けがよいのもたしかだが、いつ変心を見せるとも限らない敵手を隣にするには、動きづ

らい服装だ。そう指摘すると、暗器を隠し持つ場所には困らぬぞと、袖から一瞬で短刀を出して見せられた。心強いと思うより先に、後始末をしやすい状況でよろしく、と口走りたくなった。

窮極の願いはこれだ――なにも起きませんように。

セルクの腕前を讃え、皇女がかるく手を挙げる。ひらひらした袖の中に隠した短刀を、使節に見とがめられたらどうするのか。ヤエトは気が気ではない。手を下ろすと皇女は鷹揚にうなずいて、使節の言葉に応じた。

「あれの取り柄のひとつだな。教えるのもうまい」

「是非、手ほどきを受けたいですね」

そう返したのは、使節のさらに向こうに座っている青年だ。こちらは二十前だろう。体格はもう大人だが、あきらかに雰囲気が若い。使節より赤味の薄い金髪で、表情はあかるく、これから人質として置き去りにされるようには見えない。

大物なのか、馬鹿なのか。あるいは、けなげに耐えようとしているのか。

「それは無理だな、レイランド。そなたと引き換えに、わたしは彼を連れ帰る。それが許されなければ、そなたを連れ帰る」

「ああ、そうでしたね、叔父上」

――そらぞらしい。

ジェイサルドがどうやってか調べ出して来たところでは、このレイランド青年、たしかに一族の継嗣ではあるのだが、立ち位置は微妙なところらしい。亡き先代の息子で、継嗣に指名されてはいる。だが現在、実権を握っているのは使節をつとめている彼の叔父、つまり先代の弟なのだ。邪魔な若造はうまく北嶺に押しつけ、そこで死んでくれればよし、という魂胆が透けて見えるではないか。

こちらに画策できるのは、レイランドを親北嶺派に洗脳して、無事に送り返すことくらいだろう。

ただし、レイランドひとりが北嶺に親しみを持ってくれても、故郷に帰ったときに協力者がいないの

では意味がない。

——セルクがなぁ……。

人徳は、ある。天然自然に善人であろうとするのがセルクという男だ。人に好かれているかどうかに敏感で、嫌われまいとする傾向もあるから、味方をつくることはできるだろう。

だが、彼は陰謀とは相容れない。意図して誰かに近づくとか、それを隠すといった任には耐えられない。となれば、ひそかに人脈を築き、レイランドが戻ったときの支持を約束させるためには、そういう才覚の持ち主をセルクにつけてやるしかない。

——といって、グランダクもなぁ……。

いろいろ考えてみたが、北嶺人は駄目だろう。昨冬の襲撃で、鳥が死に過ぎた。一年もたたない今、あれを水に流して冷静にふるまえるとは思えない。

そもそも、セルクを人質に出せるか、それでいいのか、という問題もあるのだ。本人の考えも不明のままだ。せめて競弓競技が終わってからと、まだ使節団の申し入れの内容は伝えていない。

「わたしでよければ、公子に弓を教えよう」

皇女の言葉に、レイランドは眼をまるくした。

「姫君が、弓を扱われるのですか？」

——しらじらしい。

北嶺王が男勝りの武芸好きであることくらい、知らないはずがないだろうに。

もっとも、今日の皇女の姿だけ見ていれば、宮廷の華としか思えないだろう。都にいたときより大人びた衣装で、うんと腰を絞り、胸のふくらみを強調している。襟元もかなり開いているから、男どもの視線がそこに集まるのもしかたがない。

——次は縁談かな。

レイランドと結婚をとでも申し込まれたら、どう返答すべきだろう。皇帝は、許すだろうか。皇女の嫁ぎ先についてはいろいろ考えているだろうが、今のところ、なんの音沙汰もない。

嫁に出したくないほどかわいい、ということなの

か。世の父親族というのは、そういう心境に陥りやすいそうだが、まさかあの皇帝が？

これればかりは、さっぱり予測がつかない。

当の皇女はレイランドの方に身をかたむけ、打ち明け話をするような調子である。

「セルクに教わったのだ。弓はおもしろい。セルクに勝てるとまではいわぬが、なかなかの腕だと自負しておる。ここに座っている役目がなければ、出場していたのだがな」

その姿勢は胸の谷間を強調することを、理解しているのだろうか。案の定、レイランドの視線は皇女の顔より下に向いている。

歓声がして、ルーギンが弓を射たのだとわかった。これも、あやまたずに中央を射抜いたようだ。いっそ曲芸団でも結成しろ、とヤエトは思った。きっと儲かるに違いない。ルーギンなら、ただ立っているだけでも客寄せになる。北嶺王御用達の蠟燭でもなんでも売ればよい。

「それはたのもしい。お国の女性は皆、そうなのですか？」

使節の問いに、皇女は微笑んで答えた。

「国というのが帝国のことであれば、さまざまであると答えるしかないな。我らが帝国は、雑多な民を抱えておる。それぞれに特異な才能を持ち、種々の文化を発達させておるゆえ、一概にはいえぬのだ。女子が武器をとるのが禁忌である一族もおれば、女子が戦士となるのが倣いとなっておる一族もおる。北嶺国のことであれば、そなたらの方が知っておろう。騎射をよくする女子は、少なくない」

「皇家のかたがたは？」

「旧帝国まで遡れば、二代皇帝のご息女は姫将軍として音に聞こえた戦上手、槍の扱いに長けておいでだったとか。今に伝わる槍舞いは、この姫将軍が馬上槍の扱いを部下たちに学ばせるため、ご自身の動きを舞い手に写し取らせたのが発祥であると記録されております。また、四代皇后は弓の名手で異名は

弓張姫。謀反を起こして皇帝を襲った軍の指揮官の額を、ただ一矢で射抜いたと伝わります」

ヤエトが口を挟むと、北方の二人組は沈黙した。皇女は笑ってうなずいた。

「北嶺相は、歴史好きでな。へたな質問はせぬがよいぞ。講釈する機会と見れば、それ、今のように」

「帝国の歴史にも、興味があります」

レイランドが勇敢に応じると、皇女は声をあげて笑った。

「公子は好奇心が強いのだな」

「はい。北嶺のことも、帝国のことも……姫のことも、知りたいと願っております」

とんでもないことをさらりとぬかした人質候補に、正直、ヤエトはびっくりした。口調も表情も、真摯なものだ。

――これではセルクは勝てないな。

好意の表出は、あからさま過ぎると下品になる。思わせぶりは、皇女の趣味にあわないだろう。レイランドの発言は、うまいところを突いている。

皇女は少しおどろいたような顔だ。

娘らしく頬を朱に染めたりしないのは、見上げたことというべきか。皇妹なら、ここで思わせぶりな仕草のひとつもして見せ、流し目をくれたりするのだろうが――と考えてから、ヤエトはその食えない相手が自分と結婚しようと提案中であることを思いだし、げんなりした。

命令ではない。提案だ。判断は、ヤエトにまかされている。だから、熟考せざるを得ない。

ずいぶん考えたのだが、この結婚――皇妹の表現を借りれば復縁で、皇妹になんの益があるのかが、わからない。

ヤエトの側は、利点が多い。皇妹を正式に妻に迎えれば、不安定な成り上がり者という立場を補強できる。やっかまれるだろうし、陰口も叩かれるだろう。だが、正面切って敵対するには危険だと看做される程度には、箔がつく。皇妹は、真上皇帝と親し

い。そして貴族社会における真上皇帝の権力は、未だ絶対といってよい。

同僚の秘めたる恋の相手を攫うことになるのはどうも……とか、そもそも皇妹という人間が怖いとかいう問題は、この際、考慮の範囲外である。貴族の縁組みとはそういうものだし、残念ながら現在のところ、ヤエトは貴族である。貴族の視線で見れば、悪い話ではない。むしろ、歓迎すべき良縁だ。

しかし、一方だけに益が生じるような縁組みがあり得ないのも、これまた貴族の結婚における常識のはずだ。だから、当事者である皇妹の損得について考えていたのだが。

——皇妹のための縁組みではないのだろうな。

ヤエトの社会的な地位の上昇を望んでいるのは、誰なのか。

考えるまでもないほど、あきらかだろう——真上皇帝そのひとだ。

皇帝は、皇女の身の安全をはかろうとしている。

そう考えれば、説明がつく。副官のヤエトに力を与えることで、皇女の後ろ楯を万全にしたいのだ。

皇帝は、ヤエトの野心が薄いことは把握している。全幅の信頼を置いてはいなくとも、栄達のために皇女を利用したりせず、与えられた職掌の範疇で真面目にはたらく男だと値踏みされたに違いない。

そもそも、皇家の縁組みを決定するのは皇帝だ。内諾を得ているから、と皇妹も明言した。

おそらくそれは内諾ではない。内命なのだ。

皇妹も皇家の女性だ、政略の道具になる覚悟はあるだろうが、二度も結婚することになるとは思っていなかったに違いない。しかも相手が貴族とは名ばかりの異人種とあっては、慰める言葉もない。

——気の毒に。

同情している場合ではない。それくらいはわかっているが、それでも、どうしても思ってしまう。再婚ができないのは、彼女にとって呪いであると同時に救いでもあり得たはずなのに——好きな男と結ば

れることがなくとも、好かぬ相手に添うことになるのは避けられたはずなのに。

貴族としてどうこういう以前に、彼女の悲劇に巻き込まれるのは嫌だと感じる。理屈ではない。損得の計算でもない。ただ、嫌なのだ。

ヤエトが断りさえすれば、皇妹は今の立場をたもてるのだ。そして、その選択をする権利を、彼は与えられている。

だから、困る。

人の人生を左右する権利を、彼は握りたくない。自分のことだけでも手一杯なのに、これ以上なにかを背負うことなど、できるだろうか。

——無理だ。

皇妹なら、わたしの人生をあなたが背負うというの、と眉を上げるだろう。笑うだろう。誰の妻になっても自分は自分だと、彼女は考えるだろう。

だが、選択するのはヤエトだ。皇妹にその権利はない。この差は大きく、重い。

皇帝にも、迷いがあるのだろう。あるいは、試しているのかもしれない。なんにせよ、抗し得ぬ命令ではないことが、ヤエトには重荷と感じられた。いっそ命令であれば、と一周まわって考えがはじめに戻ってしまう。

——命令なら、結婚したか？

するしかないではないか、と彼は内心の問いに答える。命令ならしかたがない。命令ではないから困っているのだ。

それもずいぶん卑怯な考えだとは思うが。

「ヤエト」

小声で名を呼ばれ、彼ははっとした。皇女が、案じるように彼の顔を見ている。

「申しわけありません、……なにか？」

「城へ戻った方がよくはないか？　顔色が悪いぞ」

「遺憾ながら、わたしの顔色はいつもこの程度ですので、どうぞご心配なきよう」

正直なところ、体調はよくない。いつも以上に悪

い。眠りが浅くなっているのだろう、朝目覚めるたびに、疲れがとれていないと感じている。座っているだけでもだるいし、眠い。なのになかなか寝つけない。それでますます疲れがとれなくなる。

「北嶺相殿は、ご不調でいらっしゃいますか」

眼をほそめてこちらを見る使節の心中は、さっぱり読めない。レイランドの叔父は、デュラルクと名告った。正式には、デュ＝アルク・ラ＝ルス・ア＝ルフという名だそうだ。ラ＝ルスが家名で、最後のア＝ルフが格を示すのだと、教えてくれたのはナグウィンだ。

商人は昨晩到着し、さっそく、ヤエトを訪ねて来た。表向きは、氷の専売について便宜をはかったことに対する表敬訪問だが、内実は情報の収集と交換のためであろう。直接明かされたわけではないが、ナグウィンは皇帝の非公式な伝達官だ。彼に与えた情報は、そのまま皇帝の知るところとなるはずだ。時日を置かず、すぐに。

北方からの使節団が来て、人質の交換を申し出ていることは、すでに皇女がみずから報告しているから、ナグウィンも当然そのあたりは知っていた。

挨拶もそこそこに、商人は北方についての知識をいくつか授けてくれた。

——北方ではね、格が重要なんです。

家名が同じでも格が違うということがあるそうで、それを決定するのは恩寵持ちの仕事らしい。

——どれだけ大地に愛されているか、だというんですけどね。北方人の考えることは、わかりませんよ……。大地に愛されるって、どういうことなんでしょうね？

さあ、と首を傾げておいたものの、なんとなく理解はできるような気がした。北方では、この世ならざる力が神という形をとらなかったのだという話を、彼は幻視の中で聞いたことがある。だから、力は選ばれた人間に直接与えられ、それが北の大地の支配者となった……と。

力が強まりつつある今、北の大地の与える力も強まっているだろう。だが、全員にまんべんなく与えられるわけではなく、格差はある。それを北方人は名前で示すというわけだ。

アⅡルフは、格としては第三位となる。レイランドの正式名はレイⅡアンド・ラⅡルス・アⅡレイ。アⅡレイは第二位で、この格を得る者はなかなかいないらしい。訓練すれば《雷霆の使者》になり得る素質を持つそうだ。

レイランドは、今も熱心に皇女をみつめている。帝国贔屓にできるかどうかはともかく、皇女贔屓には簡単にできそうだ。

正直なところ、《雷霆の使者》を人質に差し出されても困る。もし彼が術者としての訓練も受けているなら、天候を操り、風を呼び、雷を落とすことができるわけだ。そんな人物が北嶺に留まるなど、まったく歓迎できないではないか。

もっとも、《雷霆の使者》となれば家名を捨てるのが通例だそうで、世俗の権力とは無縁になるらしい。跡継ぎだというレイランドは、《雷霆の使者》ではないはずだ。少なくとも正式の訓練は受けていないと期待できますよ、と商人はいう。期待できますとは、ずいぶん心強い表現だ。

しかし、《雷霆の使者》で第二位なら、第一位はどうなるのか。第二位が使者の素質がある者、第一位が使者の訓練を終えた者という区別でもあるのかとヤエトが問うと、ナグウィンは首を左右にふり、それがねぇ、と顔をしかめた。

――訓練をしたかどうかは関係ありません。最上位はアⅡヴルスです。アⅡヴルスを名告る者には、注意なさった方がいい。北方の力をまるごと利用できるほどの器だ、という意味です。

そんな人物がいるのかと尋ねたヤエトに、商人は首をすくめて答えた。

――滅多に出ないそうなんですがね。今は、いるらしいですよ。噂ですが。

伝達官を見て皇家に与えられた恩寵の力を理解したつもりでいたら、皇妹が出てきました、というくらいの衝撃がありそうだ……と考えて、なんでまたここで皇妹のことを思いだすかな、とヤエトは頭を抱えたくなった。心の片隅につねに例の復縁問題があり、なにかというと連想してしまうようだ。

復縁問題に比べたら、北方のお家騒動を押しつけられているのかもしれない疑惑など、些末なことである……と、いってみたい。

――ちっとも些末じゃないぞ。

「病み上がりゆえ、いつも以上に王にご心配をおかけしております」

「たしかに、お顔の色があまりよくないようにお見受けしますね」

レイランドがそういうので、ヤエトは少しおどろいた。皇女以外を見ているとは思わなかった。正直にそう話したら、どう応じるだろう。試してみたいという欲求をねじ伏せ、ヤエトは話をかなり前へ戻した。

「わたしのことは、どうぞお気になさらず。歴史に残る女傑に比べても、皇女殿下はひけをとりますまい。弓も剣も達者でいらっしゃいます。不埒なふるまいに及んだ者を、手ずから成敗なさったこともおありだとか」

皇女はうなずいて、言葉を添えた。

「昔のことだ」

十五歳にとっての昔とは、何年くらい前をさすのだろう。三十七歳のヤエトには、想像が難しい。

レイランドは顔をしかめている。

「そのような者が御身に近づくなど……」

「皇家には、敵が多いのだ。そして、敵対して生き延びる者は少ない」

公子の同情心に満ちた言葉をあっさり切り捨て、皇女は使節に向き直った。

「だが、ここ北方においては違うな。わたしなど問題にならぬほど、そなたらには敵が多い。正直にい

おう、公子の身を守りきることができると、わたしは確約できぬぞ」
「我々としては、ただお信じするよりありません。そちらも我々を信じ、人質を預けてくださると、期待しております」
レイランドの身になにかあったら最後だな、とヤエトは暗い気もちで考えた。
レイランドが北嶺で不慮の死を遂げれば、セルクの命はない。大変な騒ぎになるだろう。
やはり、この話は蹴るべきではないか。
――だが、人質交換で平和になるなら……。
その可能性に、すがりたい気もちもある。北方のことを気にせずに済めば、ずいぶん楽になるはずだ。皇位継承争いに巻き込まれないように注意を払うだけでも大変なのに、世界が滅びるだの、魔界の蓋が開くだのといった問題もある。知るかボケ、という言葉を残して隠居できればどんなに楽か――と考えたところで、自分の思考が無駄な方へと突っ走っていることに気がついた。
隠居できれば、楽に決まってる。
「回答は、祭りが終わるまでに与えると答えたはずだ。急かすような真似をするのは、賢くないぞ」
「心得ておりますとも」
使節の答を聞くと、皇女は立ち上がった。視線は周囲の観衆に向け、低い声で言葉をつづける。
「言葉通りであることを願いたいものだ。わたしも、無駄に血を流したいわけではない」
使節の顔から表情が消えた。おおかた、生意気な小娘がとでも思っているのだろう。
生憎と、この生意気な小娘には権力があり、その使いかたを知っている。甘く見ると大変なことになるのだが、使節はほんとうに心得ているだろうか。
皇女は晴れやかな笑顔で声をはりあげた。
「今年も見事な競弓であった！　そなたらの弓弦の響きが春をさかんにさせ、夏を呼ぶであろう」
いつの間に決着がついたのだろう。初日の優勝は、

例年通りセルクだったようだ。こちらを見上げる誇らしげな表情は少年のように初々しい。的に狙いをつけているときとは、まるで別人だ。

そういえば、断るべき相手を決めて縁談を整理しろというヤエトの助言を、セルクは実行しているのだろうか？

観客の中に、セルクに熱い視線を送っている女性がいるのではとさりげなく見渡したが、よくわからない。若干もの憂い表情をしたルーギンが、セルクの隣に立っているのだ。どちらを見ているのか判別がつくはずがない。というより、女性はほぼ例外なくルーギンを見ているように思えた。

負けたら負けたなりに魅力的、ということか。セルクがまったく気にしても気づいてもいないのも、結構なことというべきか悩む。

「今回は、北方よりの客人にも我らの弓の上手を見せることができ、誇りに思う」

皇女が使節に言及したことで、少し、会場の空気が変わった。

セルクの表情が引き締まる。ルーギンの方は弓を置き、はずしていた剣を従者から受け取ると、大股にこちらに歩いて来た。途中でふり返り、セルクを呼ぶ。

「貴殿が先だ、セルク殿」

セルクはそれではっとしたように動きだした。こちらも弓を置いたが、あらためて剣を佩きはしない。祭りだというのに、セルクは尚書官の官服を身につけている。見慣れていたので気づかなかった。

競弓の勝者には、皇女が花飾りを授けることになっていた。見栄えがするから、と提案したのはルーギンだ。

——地上の祭りだな。

なんとなく、ヤエトはそう思った。

黒い官服で皇女の前に頭をたれるセルク。壇上から身を屈め、その首に花輪をかける皇女。金髪が日に照り映えて、実に美しい光景だ。

神事の勝者に花飾りを授けることで、人に過ぎない皇女がこの祭りの主役であり、権威であるかに見えるではないか。誰もそうとは気づかぬあいだに、神が得るべき尊崇を、人の支配者がかすめ取る。

——こうして、消えていくのだ。

すべては変化して、失われる。それが通例だからこそ、歴史というものが必要になる。歩いてきた道をふり返るのは、人にとって重要なことだ。

「今日の英雄をご紹介願えますかな」

使節がにこやかに皇女に乞う。皇女はうなずいた。

「これなる弓の上手は、赤い湖のセルクと申す者」

北嶺の民には、姓氏がない。あらたまって呼ぶときは出身地を添え、どこそこの誰某と呼称する。

「おお、貴殿がセルク殿でしたか」

大袈裟に相槌を打った使節を無視して、皇女は紹介をつづけた。

「セルク、こちらは北方の使節をつとめておいでの、デュ＝アルク・ラ＝ルス・ア＝ルフ殿。そしてそちらにおいでなのは、その甥御のレイ＝アンド・ラ＝ルス・ア＝レイ殿だ」

「レイランドと呼んでください」

如才なく言葉を添えたレイランドの微笑につられて、セルクの顔の強張りが少し弛んだ。

そこへ、使節が口を挟んだ。

「そなたが名を呼ばれる機会など、そうあるまい。セルク殿には、是非とも北方にお越し願わねばならぬのだ」

「使節殿」

皇女が声を尖らせたが、使節は意に介さない。視線はひたとセルクにあわせたまま、甥とは対象的に、悪人っぽい笑顔全開である。うわぁ、と声をあげたくなったほどだ。同時に、悟った。

——こいつ、やらかす気だ。

セルクを動揺させないためにと、ここまで黙っていたのが裏目に出ることになるわけだが、さて、当のセルクはこれをどう受け止めるのか。

「人質として、これなるレイランドを北嶺に留め置く。代わりに貴殿を北方へお連れする。そのために、我らはここに来た。さて、貴殿は人質となって敵国へ赴く勇気はおありかな?」

4

「もちろん、行く」

即応だった。

なにも考えてないだろうおまえ、といいたい。いいたいが、人目があり、立場もあるから我慢した。

会場がざわついた。今の会話が聞こえた者が、聞き取れなかった者に教え、さざ波のように話が広がる。大声でがなりはじめる者が出たが、皇女がぴしゃりと議論を止めさせた。

「黙れ」

ひとことで、あのうるさい北嶺人が口をつぐむのだから、皇女の威光は行き渡っているといってよい。

あたりを睥睨し、皇女は言葉をつづけた。

「人質を遣るか遣らぬかを決めるのは、北嶺王たるわたしである。そして、返事は祭りが終わったときにというておる。これ以上、この場で語ることは許さぬ。敢えて口にする者あらば、処断する」

処断という言葉にあわせ、ルーギンが剣の柄に手をかけ、皇女の背後に控えていたエイギルら騎士たちもそれに倣った。

「物騒なことを仰せだ」

まだ悪人笑顔のまま使節がつぶやくと、皇女はそちらを見もせず、いいはなった。

「従わぬ者はひっとらえ、獄に繋げ。無論、例外はない」

それから皇女はようやく使節の方をふり向き、眉を上げ、わずかに眼をほそめて告げた。

「無駄な血を流す気はないが、無駄でないと思えば躊躇はせぬ。我が言葉をかろんじる輩と、対等の取り引きができようはずもない。そなたがただ今なす

べきは、我が信頼を得ることだ。信がなくば、約定も無駄であろう？　もてなすのも無駄、話を聞くのも時間の無駄だ。すぐにもその首を刎ねて槍の穂先に晒し、北方との国境に飾ってやる」

さすがに、使節の顔が強張った。口を開きかけたのを見て、ヤエトは割って入った。

「出過ぎた真似をなさったこと、わたしからよくご説明申し上げておきましょう。きっと納得していただけると思います。委細、おまかせください」

「しかし――」

「貴重なお時間を割くべき相手か、わたしが見定めましょう。王は祭りをお楽しみください」

皇女は顔をしかめた。この状況で楽しめるか、といいたげだ。

それはわかる。わかるが、無心に楽しんでいるふりをしてください、と返したいところだ。皇女は見られている。誰に見られているかといえば、まず北嶺の民に、だ。

「王におかれましては、暫しこの場にお留まりになり、北嶺の勇者たちと親しくお言葉をかわされますよう――弓の上手は、優勝者のみでもありますまい。北嶺各地より民が集まる得がたい機会です。どうか、王の竜顔を拝し、竜声を耳にする歓びを、下々の者にあまねくお与えくださいますよう」

皇女はやや不満げに口を引き結んだものの、すぐにうなずいた。

「わかった、まかせる。……セルク」

「はい、姫様」

打てば響く勢いで返事があった。いかにも強情そうな表情で、今にも人質になります行きます勇気のあるところをご覧にいれますと口走りかねない、その意気込みを皇女は笑顔で受け止めた。先ほどのやりとりなど、まるで気にしていないというように。

「競弓に出場した者たちを紹介せよ。見たことのない顔もいくつかあった。皆の勇戦を言祝ぎたい」

切り換えの見事さに、セルクもつられたようだ。

声に張りが戻った。
「皆、喜びます」
「そうか。案内せい」
壇上から身を屈めて手をさしのべた皇女に、セルクは少し当惑したようだったが、すぐに気づいて手を貸した。男装なら身軽に飛び下りるだろうが、女装ではそうはいかない。
結局、細い腰を両手で支えて抱き下ろすかたちになり、大儀、と見上げた皇女は平然としているのに、セルクの方はすっかり顔を紅くしている。
「なかなか、男扱いがうまくなられたものです」
つぶやいた声にぎょっとしてふり向くと、いつのまにかルーギンが間近に立っていた。
「姫様の警護は？」
「エイギルがいます」
——つまり、こっちの方がまずいと見たわけか。
来てくれるのは心強いが、問題の深刻度に箔がついたようで、あまり嬉しくない。
もちろんジェイサルドはすでに準備万端、なにかあれば一刀のもとに使節もその甥も切り捨てるという顔つきで睨みをきかせている。これも、あまり嬉しくない。
ヤエトはもっと平和に生きたい。どうしてこう、殺伐とした方へばかり事態が進むのか。
彼の心中を見透かしたようにルーギンが苦笑した。
「城へ行かれますか」
その方が、守りやすい。ヤエトはうなずいて移動の手配を騎士団にまかせると、北方人ふたりを眺めた。随員の観覧席は、壇の下にある。ヤエトはなにも命じていないが、当然、北方人は全員が監視下にあるはずだ。
——威圧的な監視に変わったということだが。
監視されていたのは、はじめからだ。なにかあれば阻止するためでもある。北方人が胡乱な目論見を持っていないとも限らないし、北嶺人の誰かが鳥の仇を討とうと使節団に斬り掛かったら、それも止め

ねばならない。
どちらにも感謝されず、恨まれるだけの任務であるが、ルーギンにいわせると、騎士団にとってそれは問題にはならないのだという。騎士はあるじの剣なのだから、皇女の役に立てばよい、と。
官吏はどうなのだろう。ヤエトは皇女の副官だが、皇女個人に仕えるより、国のために動くことを考えるべきだ、と思っている。
公人としての皇女、つまり北嶺王のためになることは、ほぼ、北嶺国のためになることでもあり、帝国のためになることでもある。今のところ、両者は乖離していない。
――いつも、いつまでもそのままとは限らない。
そんなことを考えながら、ヤエトは使節の前に立ち、相手を見下ろした。使節も背が低いわけではないが、なにしろヤエトは無駄に長身なのだ。
「愚かな真似をなさいましたね、と申し上げておきましょう」
「愚かなのはどちらかな？　なぜあの男に人質の話を明かさなかったのだ」
「祭りは神事です。セルクは弓の上手で知られています。彼の心を俗世の悩みに浸らせず、神のための弓をとらせるべしと、わたしも献言申し上げましたし、今もそれを愚かとは思っておりません。まさか、回答は祭りの終わりにと申し渡されていながら、それをあからさまに無視するほどの無礼をはたらかれるとは、思いもよりませんでしたので」
「神などおらぬ」
吐き捨てるようにいった使節の表情から、ヤエトはそれが相手の本心だと知った。しかし、北方の常識がここでも通じると思われても困る。
「神はおわします」
静かに、ヤエトは告げた。いかんともしがたい、それは事実である。
「どこにいるというのだ」
「北嶺の大地に。ご存じありませんか、当地には竜

がいたという伝説を」

誰かから情報を引き出すときには、こちらは大雑把なことをいうに限る。あるいは、少し間違っているくらいの方がよい。うっかり、詳しくこまかく教えたくなるのが人情というものだ。とくに、優位性をたもちたいと必死になっているときは。

あっさり、使節がひっかかった。

「この土地の者どもがどう歪めて伝えているかは知らん。だが、北方には真実が残されている。かつて、ここには邪悪な竜が封じられていた。北嶺の民はその邪竜と取り引きをすることで、あの黒い化鳥を手に入れたのだ。やつらは略奪し、犯し、殺した。残虐な一族だったのだ。他所者にはわからんだろう、今に残るほどの爪痕の深さは。あの邪竜を神と崇める北嶺は、邪悪な国だ。死と破壊の兵団だ」

――邪竜？

少し、おどろいた。

堕ちた邪竜とは、沙漠の地下に心臓があり、今も水源を穢しているというあの古い神のことだと思っていた。北嶺にも竜はいて、それがツェートーなのだろうが、竜という共通項のせいで沙漠の方の神話と混交してしまったのだろう、と。

――これはこれで、別物なのか？

もっと詳しく！　と使節の首根っこを摑んで揺さぶりたい衝動にかられたが、残念ながら、邪魔が入った。

「叔父上、言葉が過ぎます」

レイランドだ。公子は叔父よりよほど落ち着いていた。眼差しは、針のようにするどい。眼を向けられると、声が出ないほど。

「北嶺相は、我が国にあればア＝レイと呼ぶべき力の持ち主でいらっしゃいます」

ア＝レイは公子と同じ第二位、つまり北方であれば《雷霆の使者》級の力があるということだ。

「おたわむれを」

「わたしは本気です」

勘弁してくれ、とヤエトは思った。これ以上、面倒な話は増やしたくない。

「アニレイという格は、北方にあってこそ意味のあるもの。北方生まれでもないわたしを、そのようにお呼びになるのは賢明なご判断ではありません」

「お気にさわりましたか？　申し上げたかったのは、ただ、貴殿の中に視える力が、なみなみならぬ質と量である、ということです」

だから喧嘩を売るな、と叔父を制した……という意味だろうか。ヤエトの力はあまり戦闘的ではなく、彼を怒らせようが敵に回そうが、どうせ呪うべき人物一覧表のどこかに名前を押し込まれるだけなのだが、さすがのレイランドもそこまではわからなかったらしい。

「そのように評価されるのは、はじめてです」

正直に答えると、レイランドは当惑したようにヤエトを見て、それから微笑んだ。

「ご自分ではそうお思いでも、周囲の目は節穴ではないでしょう。異例の大出世を遂げられた理由を、ようやく納得できました」

「なにか、勘違いをなさっておいでかと」

「よもやわたしが虚言を吐いたと仰せですか？」

「いえ、そのような……」

この話は打ち切りたい。心の底から、ヤエトはそう思った。彼が恩寵持ちであることを知っているのは、皇女とルーギンだけなのだ。

――いや、もう遅い。

背後にジェイサルドが控えているのだ。絶対に、聞いただろう。いきなり問い質してくることはないだろうが、忘れてもくれないに違いない。

――打つ手なしだ。

騎士が、馬車の準備ができたと呼びに来た。使節と公子を馬車に詰め込んで、ヤエトはルーギンの鳥に同乗させてもらうことになった。

「やつらの狙いはなんなのかな」

ルーギンの口調は、若干、不快げである。



「訊いてみますか」
「教えてくれると楽だね」
「それが真実なら、という条件つきで」
「真実など喋らない方に賭けるね。グランダクでも乗らないな、きっと」
ルーギンは笑い、ヤエトはため息をついた。
「暢気なことを」
「で、どう思います、先生」
「さっぱりです。北方について詳しいことを知りませんし……一族の長の継承権が、どれくらい重いものなのかも、わからないし」
「それはきっと、先生が考えるより、ずっと重いでしょうね」
「そうですか？」
「権力、名声、地位。そういったものに価値を置かない人に、正確な判断ができますか？　無理だな」
さらりと指摘されると、苦笑するしかない。
「いや、わたしだって一応、常識に沿って考えればどうかくらいは……」
「ま、使節は腹黒いでしょう。底は浅そうだけど、そう見せているだけかもしれないな。甥の方は……ちょっと底が知れない。あの若さであの落ち着きぶりだし」
「俗世の権力を得るより、神職に向いていそうな雰囲気ですね」
応じながら連想していたのは、預言者のことだった。自分の中にある価値観への絶対的な信頼。そのゆるぎなさが、似通っている。
「でも、姫様の胸はちゃんと見てましたよ」
「男なら誰だって見るでしょうよ、あれでは」
「あのお召し物は先頃、踏野でラキニー姫にいただいたそうですよ。たしかに、あのかたの趣味だ」
聞きたくない名前を耳にして、ヤエトは呻いた。
ヤエトが皇妹に復縁を迫られている事情を、ルーギンは知らない。明かすなと命じられているから、喋れないのだ。皇女が話したとも思えない。

――教えるべきではないか。

しかし、教えてどうする。決めるのはヤエトだ。ルーギンが、それに口出しするはずがない。皇帝の思惑、皇妹の事情、それにヤエトの意志。どれに対しても、自分の都合で文句をいったりはしない。そういう男だ。

「先生も、ちゃんと見てあげましたか？」

いかにも楽しそうな口調で問われると、やっぱり教えてやろうか、という気にもなる。

しかし、ヤエトはその誘惑をふりきった。結局、面倒なことの中心にいるのは自分なのだ。ルーギンに教えても、なんの解決にもならない。

馬鹿らしい。

「くだらないことをいっていないで、いい知恵を出してくださいよ。かれらの目論みを知るために」

「あ、それは先生におまかせです。わたしが学舎でどれだけ落ちこぼれていたか、ご存じでしょう。今だってほら、姫様からじきじきに阿呆将軍の呼び名を頂戴したくらいですしね」

説得力のないことをいわれて、ヤエトは脱力した。たしかに学舎での成績はよくなかったようだが、それはルーギンに勉強する気がなかったからで、阿呆という言葉はあたらない。

「ただの阿呆が、塞の兵士のすり替え作戦に気づくとは思えませんがね」

「わたしの得意分野は用兵だから」

「だったら、なんでついて来たんです」

「……楽しそうだから？」

「どつきますよ」

「慣れないことはやめてください。賭けてもいい、突き指します」

ちょっとした冗談に、妙に現実味のある返しが来ると、対応に困る。

「冗談です」

真正直にいってみると、ルーギンは笑った。

「冗談でも、先生に暴力は似合わないな」

いわれてみればその通りだが、どつく程度は許容範囲なのではないか。口論すべきことでもないので、ヤエトは適当に流すことにした。

「そうですね。疲れてしまいますし」

「……変わった人ですよね、やっぱり」

城に戻ると、使節らは四層の部屋へ移された。ヤエトは使節とその甥を別個に尋問することに決め、まず使節の方をルーギンにまかせた。こういう手合いの扱いは、大貴族の若様として育ってきたルーギンの方が慣れているだろうと思ったからだ。

必然的に、ヤエトはレイランドから話を聞くことになった。

「人質には、望んでなられたのですか」

「貴殿はどうなのです。北嶺国の相に、望んでなられたのですか？」

叔父から引き離すと、レイランドは少し幼く見えた。気張ってはいるのだが、それが却って若さを露呈してしまう。

「質問しているのはわたしですよ、公子」

「……我が望みです」

かわいた声だった。

姿勢よく椅子に座ってヤエトを見上げる表情は、挑みかかるようである。

ヤエトは自分も椅子に腰掛け、やれやれ、と息を吐いた。まだ緊張をとかない青年に向かって、笑みを向ける。

「人前に出るのは、疲れますね。あなたもお疲れでしょう。少しは肩の力を抜かれた方がよい。しかし、おもしろい質問をなさる」

「おもしろい？」

ヤエトは無言で眼を閉じた。そうしてみると、自分がほんとうに疲れていることがわかる。このまま眠りこけてしまいたい。

「望んで相になったのか、とは訊かれたことがないのでね。どうやって取り入ったのだという顔で、見られるだけですよ」

ゆっくりと、眼を上げる。視線があうと、レイランドは少したじろいだ風を見せた。それでもぐっと口を結んでヤエトを見返した。

男の子だなぁ、と思う。なにかこそばゆいような、なつかしいような、微妙な空気を払いたくて、ヤエトは言葉をつづけた。

「そんな訊きかたをされたのは、はじめてです」

「失礼を、申しました」

「お気になさらず」

受け流しながら、真面目な子だ、とヤエトは考えた。責任感も強そうだ。跡継ぎが人質になるという不自然な展開を、なすすべもなく受け入れるほど気弱でもない。

しかも、望んで相になったのかと揶揄するほど、ヤエトの性癖を知っている。

——奇妙だ。

レイランドの顔を眺めながら、ヤエトは考えこんだ。出世を望む者は多くとも、嫌がる者は珍しい。それは世間の常識だ。

ヤエトがこの出世を喜んでいないことは、べつに世間の常識ではない。スラジャの妻が捻り出した、あの恥知らずな台本でさえ、素晴らしい出世おめでとう、ありがとう、当然ですよという展開だ。

北嶺人ですら、気づいていない者は多い。たとえばセルクは、自分のことのように感激して大騒ぎしただけで、ヤエトがげんなりしているという事実を察する気配はない。あれはあれで異常だが、まぁ常識には沿っているといえる。

なのに、はじめて北嶺を訪れたレイランドが把握しているのは、まったくもっておかしい。

——内通者か。

考えたくないが妥当な結論に達し、ヤエトはまた息を吐いた。大きく、深く。

春先、侵入経路を確認したときから、なんとなく感じていたことだ。北方と北嶺、途絶した二地域の争いには、案内役が存在している。

つきとめねばなるまい。誰が、なんのために、具体的にどうはたらいているのかを。

——それはそれとして、だ。

今は、目の前のレイランドのことだ。

「人質の候補は、ほかにもいたでしょう。おひとりだったはずはない」

頬が、ぴくりと動いた。表情が変わったというほどではないが、肩にも、また力が入った。

——当たりだな。

ヤエトはジェイサルドが調べてきた一族の家族構成表を思い浮かべ、候補を絞った。

「お妹君が、いらっしゃいますね」

「妹ではない」

即答だ。笑いたくなる。

「では、お妹君ではないのに、そう指摘されると『違う』と表明せざるを得ない関係の公女様が、いらっしゃるということですか」

「黙れ」

「ル＝シル公女？」

「あれは公女ではない」

唸るように答えたのをいなすように、ヤエトはうなずいた。

「たしかに、家名は違うと聞いております。ル＝シル・ル＝ウル……違いますね、あなたと。ラ＝ルスではない。養女に出されたそうですね」

「だからもう、ル＝シルは妹ではない！」

「しかし、あなたは兄君として、ル＝シル公女を守ろうとなさったのでしょう」

「家長としてだ……ル＝ウル家はラ＝ルス家の庇護下にある」

「仕組まれたのですか？」

ヤエトの問いに、レイランドは表情を強張らせた。もう明白だろう。答は必要ない。

だが、レイランドはすっかり喋る気になっていた。ヤエトが話を向けるまでもなく、説明をはじめた。

「誰かが来なければならなかったのだ。あの戦いで、

一族の男が大勢死んだ。これ以上の犠牲は支払えない。我らの領地は、もっとも北嶺に近い」

――やはり、公子ははめられたのではないか？

ただ人質になれといっても無駄だから、妹を、と持ちかけた。公子は高潔な人柄で、年少者を庇うために自分を犠牲にすることを選んだ――残念なことに、とヤエトは思った。優先順位を間違っている。彼の死が引き起こす破局は、行き着くところ、守ったはずの妹をも滅ぼしてしまう。

人質交換がレイランド公子を追い出すための策略なら、抑止効果は薄い。むしろ、攻め込む口実に利用されかねない。

「ここでは鳥がたくさん死んだのです、公子」

「聞いている」

「あなたがたに殺された、と皆が思っております」

レイランドは口をつぐんだ。

だが、その表情には不満が渦を巻いていた。それはそうだろう。北方も、多大な犠牲を払ったのだ。勝手に攻めて来て返り討ちにあっただけと切り捨てるのはたやすいが、それで感情がおさまるはずがない。死者は戻らないのだから。

「北嶺人にとって、鳥は家族同然。鳥を失った哀しみが、あなたがたの感じる痛みや嘆きより軽いだろうとは、ゆめにも思われますな。できる限りはお守りしますが、どうか北嶺の民を刺激するような言動はお慎みくださいますよう、お願いいたします。我我としても、北嶺人に公子が殺された、という展開にはしたくありませんので」

立ち上がると、ヤエトは言葉もなく自分を見ている公子に、問いかけた。

「まだ死にたくはないでしょう、公子も？」

「脅しているのか」

「とんでもない。あなたに死なれると、たいそう困るのです。どうか生き延びていただきたい。その点では、わたしはあなたのお味方です。戦端を開くにたるどんなきっかけも、排除したいのですから」

「領土を広げたくは、ないのか」
ヤエトは微笑んでみせた。
「北嶺相になりたくてなったのか、とお尋ねでしたね？　お教えしましょうか。領地も財産も、過分なものは必要ない。わたしの答は否、です」
では失礼、と部屋を出ようとしたとき、レイランドが引き留めた。
「お伝えしておこう。貴殿の背を守る者は、悪神の加護を受けている」
ジェイサルドのことだろう。今さらだ、とヤエトは苦笑して答えた。
「存じております」
「この部屋の隣にも、悪神の眷属から力を受けている者がいる」
表情が変わらないと評されるヤエトだが、このときばかりは、レイランドにどう見えたかわからない。すっかり念頭から抜け落ちていたことなので、動揺させられた。
――ナオだ。
みずから謹慎しているあの女性、皇女を慈しみ育ててきた母代わりともいうべき彼女に、なんの罪科があるというのか。その力の源泉がなんであろうと関係ないではないか。
だが、レイランドの口調は無視できないほどするどい。譴責（けんせき）というよりは、断罪に近い。存在すべきでないものを城へ入れ、許容していることへの批難が含まれているのは、明白だ。
「悪神とは、使節殿の仰る邪竜のことですか？」
ヤエトの問いに、レイランドは短く答えた。
「違う」
その眸は今は暗く、彼自身が闇に囚われてしまったかのようだった。
「では――」
「本性が邪悪なものは、いかに水で漱ごうとも、その邪悪を洗い流すことはできない、とわたしは教わった。わたしが貴殿の立場であれば、隣の部屋にい

る者は処刑するし、廊下で貴殿を待っているあの老人も追放する」

それから、と彼は顔を上げてヤエトを見た。

「できれば部屋を移してもらえないか。あれを身近に感じるのは、つらいので」

5

城の最上層にある皇女の部屋からは、篝火を囲んで踊る若者たちや、頭を寄せて語り合う人々の姿までは、見ることができない。

昼間は華やかにその色彩を競っていた天幕も、今はおぼろに光を宿した曖昧な形を並べるばかりだ。

――遠い。

天幕も、その中にいる人々も、ここから見ると別の世界の存在のようだ。

距離の開きは、関心を薄める。

当たり前のことだ。人は目の前に見えるもの、間近にふれ得るものを無視しては生きられない。遠くのことばかり考えていては、足下の穴に落ちてしまう。だから、人は距離で関心のありようを変える。それが正しくて、有効な対処なのだ。

――だが、遠いからこそ全体が見える。

全体とはなにか。個々の意識が、行為が、集合してひとつになることの怖さをヤエトは知っている。社会、常識、文化。それらを統括する権力は、すべてを使っているようでいて、実は使われているに過ぎないのかもしれないと感じることもある。

権力を握るとは、全体を動かす力を得ることだ。誰もがそう信じている。

だが、それはほんとうに個人の意志で動かし得るものなのか？　もし可能だったとして、その個人は全体の一部なのか、それとも永遠に他者とふれあうことのできない、孤独な存在なのだろうか。

「なにを考えている」

ふり返ると、皇女が部屋に入って来たところだっ

た。ルーギンも同行している。
ヤエトは窓辺をはなれて一礼した。
皇女が祭りの会場から城へ戻って来たのは日没前だが、あたりはもうすっかり暗くなり、ほんものの星も姿をあらわしはじめている。
軽装に着替えた皇女は、一転、年齢より幼く見えた。飾りをとってすっかり軽くなった髪を手で梳き、ふう、と息を吐く仕草は童女のようだ。
だが、見た目はどうあれ、責務は変わらない。彼女は、帝国北辺に位置する北嶺国の王だ。竜種として帝国に、そして北嶺の支配者としてこの土地と民に、義務を負う。
「支配者の孤独を想っておりました」
「孤独？」
「権力があるほど、民からは遠くなり、対等に言葉をかわせる相手もいなくなり……行き着く先は、絶対的な孤独なのだろうか、と」
皇女は窓の外にちらと視線を投げ、そうだな、とつぶやいた。
「陛下は孤独でいらっしゃるかもしれぬ。だが、伝達官がいるからな」
伝達官は、竜種の耳目であり、声である。両者の力関係は一方的であり、それが精神的な慰めになるかは疑問だが、ヤエトは敢えて反論はしなかった。
セルクの声が、耳によみがえる。
――ひとりになっても、鳥はいるから。
寂しさとあたたかさが同居した口調だった。
北嶺では、鳥はなによりの慰めであり、よろこびでもある。対等につきあえる同伴者といっても過言ではないだろう。
「今宵の《天地輪》は大過なく終わりましたか？」
「いや、仕掛けてきた者がいた。二の兄上がまた兵を集めていると、指摘があった」
ヤエトは眉根を寄せた。《黒狼公》領は第二皇子が治める博沙国と境を接している。領地に帰れば、第二皇子の動静は摑みやすい。しかしながら、ここ

暫くは帰っていないし、情報も受け取っていない。危急の用があれば伝達官を使えるが、皇女を介さねばならないのが問題だ。ちょっと通信をお願いします……と気楽には使えない。

「誰でしょう?」

「わたしには、なんとも。二の兄上は、胡乱な気配に気づいておいでだったようで、《天地輪》がはじまる前に、都の伝達官を通じて個人的な連絡があった。敵を絞りたいので、今宵はなにがあっても黙っていてくれと」

へえ、とヤエトは少し感心した。

第二皇子は女嫌いで、妹である皇女のことも基本的には信じていなかったはずだ。春先の一件で、その印象が払拭されたのだろう。ここまで劇的な効果があるとは、思ってもいなかった。

信頼だけは、山ほど売れたようだ。

「それでは、仕掛けたのは二の君ご自身かもしれませんね」

「いや……どうだろう。《天地輪》のことだ、詐術は使えぬからな」

数名の竜種が心を繋いで情報を交換する《天地輪》は、三の月の新年祭からはじまったものだ。多数で同調するため、話者の個性が失われるという。兄弟を貶めるようなことをいっても、発言者の特定は困難だ。

ただし、恩寵の力は神の力、そこで許されるのは真実のみである。嘘やごまかしは、不可能だ。抜け道を駆使したとしても、作り話で陥れるのは容易ではない。

「どのような内容だったのです?」

「塞の襲撃の一件はかたづいたというのに、博沙王がまた兵を集めているのは胡乱である、とか。あとは、一の兄上のお母君を侮辱するような発言を、重臣の誰ぞがしたとか、《銀鷲公》が《灰熊公》と会合を持って馬を融通したのされたの……と、いう話がだな。かなり、口汚く陰険に展開された」

皇女は毛皮の敷物に腰を下ろした。立ったまま見下ろしているわけにもいかず、ヤエトも皇女の下座に座った。心の中で、どっこいしょと声をかけながらだ。座るのはまだしも、立ち上がるときに声を漏らさない自信がない。

同じようにルーギンが座るのを見守りながら、この男は死んでもどっこいしょとは口にしないだろうなぁ、と思う。なんとなく、確信がある。

ヤエトがくだらないことを考えているあいだも、皇女は真剣に悩んでいたらしい。ひときわ大きなため息をつくと、つぶやいた。

「対等に言葉をかわしあっているのだから、我ら兄妹はまだ権力の座から遠いのだろうな。さっさと誰かが権力を握り、一段上に行けばよいのに」

よほど気疲れしたらしい。これではルーギンより皇女の方が、どっこいしょが似合いそうだ。

皇女は休ませておくことにして、ヤエトはルーギンに尋ねた。

「そういえば、少し前に《金獅子公》が《灰熊公》の領地を訪ねたという話があったように記憶していますが、なにかお聞き及びでは？」

憎んでも憎みたりないという父親の話題のはずだが、騎士はごくふつうのことを喋るように答えた。

「弟が、馬を貰ったそうです」

「ああ、あの……」

名前までは思いだせないが、《金獅子公》の邸で会っている。ルーギンの異母弟だ。

あの少年には、微笑ましいという印象しかない。憧れの兄を独占したくてしかたがないのが、よくわかった。あまり邸に寄りつかないルーギンとは、会う機会も多くないのだろう。それでも慕ってくる弟妹を、ルーギンは扱いかねているようだった。

父を憎みつづけることも、義母と距離を置くことも、ルーギンには容易だろう。相手は大人である。責任の所在は本人たちに求めてよい。

だが、子どもは違う。かれらはまだ事情を知らな

い。この先、どういう人間に育つかもわからない。

——あの子も、呪師の術に脅かされた。

実際に呪師の術下で廃人同然になっていた皇女を見たことがあるヤエトには、それがどんなに非道なおこないか、身に染みてわかっている。解決したとはいえ、安易に許してはいけないことだと思う。

呪師を使ったのは、皇女にとって同母の兄である第三皇子だ。

一見すると儚げな印象だが、実は、ヤエトが知る誰よりも酷薄な人物だ。愛することを知らないという皇妹の評も、あながち間違いではないだろう。

しかし、第三皇子もそろそろ手駒がないのではないか。相変わらず宮廷での人気集めに励んではいるそうだが、さすがに複数の女性を手玉にとるのは難しいらしく、嫉妬から政敵に転じる貴婦人もいるとか……だから女は、と第二皇子ならいいかねない。

情報源はミアーシャである。都にあるヤエトの邸を経由して届くのだが、表向きはエイギル宛の書簡なので、鳥の馴致訓練のため都へ行った騎士が持ち帰るのを、まず手にするのはエイギルだ。中を見ては泣いているという噂を耳にした。部下たちは妻恋しさに感極まって泣いていると誤解しているようだが、どう考えても、自分宛の手紙がヤエトに向けた情報ばかりなので泣いているのである。

たまにはエイギル宛の恋文も書いてやってくださいとミアーシャに依頼すべきか、悩みどころだ。

「もっとも、息子のための馬というのが口実に過ぎなくても、おどろきはしませんが」

さらりとそんなことをいって、ルーギンはヤエトに微笑みかけた。あまり考えたくないあたりを教唆されてしまい、ヤエトは顔をしかめた。

「《金獅子公》が《灰熊公》を訪ねたのは、二の君の一件が解決する前でしたよね」

「そう。三の君に加担すると見せかけるには、馬を押さえるのが早道だったから。質のいい馬さえ確保してしまえば、誰に譲るかはそのときの趨勢次第で

決められますからね。三の君に……という可能性もあったと思うな。《金獅子公》は、今さら二の君の派閥に入りはしないでしょう。《銀鷲公》の影響力を凌ぐのは大変そうだし。といって、一の君にというのもないんじゃないかな」

「大貴族の支持はないですよね、一の君には。だったら、共闘する相手としては悪くないのでは」

「いったはずですよ、《金獅子公》は、減点法で人を評価する、と。あの母君だけで、一の君の持ち点は使い切られてしまいますよ」

第一皇子が抱える最大の弱点である。

生母であるラハーマ妃には、貴族たちを不必要に見下す悪癖がある。相手が大貴族であるほど、自分を馬鹿にしていると思い込んでしまうし——実際、その思い込みも間違ってはいないから困るのだが、とにかく対処法が最低最悪なのだ。

おかげで、人品骨柄とくに問題がない第一皇子が、なぜか支持者集めに苦労する、という状況だ。

「ですが、ご本人の資質の問題ではないのですし」

「甘いなぁ、先生。《金獅子公》は、そうは考えません。あれをのさばらせておくこと自体が、ご本人の資質を示すと考えるでしょうね」

実の母を始末するわけにもいかないでしょうと口にしかけて、あやういところで踏み止まった。これは、権力のためならなんでも犠牲にするという種類の争いなのだ。

あからさまな弱点を放置している第一皇子は、支配者としての資質に欠けていると判断されてもしかたがない。だが同時に、それは付け入る隙でもあるのではないか。傀儡に仕立て、あやつることを考えるなら、少し抜けているくらいの方がよい。

——ただ、ラハーマ妃を嫌う貴族をすべて敵にまわすことにもなるからなぁ……。

最高権力を欲するなら、どうせすべての貴族は敵であり、足下に従えるべき存在になるといっても、それは最終的な到達点での話だ。そこに至るまでは、

敵は少ない方がよいに決まっている。うまい具合に貴族社会の軋轢を利用せねばならないだろう。

考えるのが面倒になってきたので、ヤエトは話を元に戻した。

「では、《金獅子公》は、ある程度の量の馬は押さえたと？」

ルーギンは肩をすくめた。そこまで知るかといいたげな所作だが、言葉では肯定した。

「押さえたから《銀鷲公》もそれを確認しに行ったか、自分も欲しいと申し出たか……とにかく、注目を集めて話題にのぼったんじゃないかな」

「鳥の存在がひろく知られた今も、やはり馬は重要なのか？」

皇女の問いに、ヤエトとルーギンは顔を見合わせた。答えたのはルーギンだ。

「鳥に乗れる者は限られ、鳥自体の数も少ない。多数の兵に行き渡らせることは、不可能です。なにより、鳥は北嶺のもの。手に入れるには、まず北嶺を陥とさねばならない――となると、馬の重要性はそう変わらないものとお考えになった方が」

「なるほど」

「二の君からその後、ご連絡は？」

つづけてルーギンが尋ねると、皇女は意外そうに応じた。

「いや、……なにかあるべきなのか」

「ただで協力する手はありません。相応の情報を流してもらわねば」

「明日の《天地輪》前に、連絡をとろう。てっきりご報告いただけるものと思っておりましたが、と嫌味たっぷりに」

「嫌味は控えめになさった方が」

あわててヤエトが献言すると、皇女は鼻に皺を寄せて答えた。

「冗談だ」

「それは失礼を申しました」

「面倒だが、決めてしまおうか。人質の一件、そな

たらはどう思う。ルーギン、まずそなたの意見を聞こう。信じられるか。効果はあるか」

ルーギンは居住まいを正して答えた。

「使節は貪欲な人物で、一族の宗主となることを望んでいます。本来の跡継ぎである甥には、後腐れなく退場してもらいたいと望んでいるようです。あの一族はどうやら恩寵の力が強い人材を輩出しているようで……他の一族への影響力は非常に強い。ただし、政治的なものではない、と見ました」

「政治的ではない影響力、とは？」

「《雷霆の使者》です。かれらは俗世をはなれる決まりなので、政治的な力はありません。ですが、精神的な指導者でもあり、軍事的な力でもある。それを輩出する血筋です、どう転んでも族滅されることはない。しかし、政治の中枢にも入れないというのが建前です。使節は、建前は建前として実を求める性質の持ち主です。いわば現実的で、欲が深い」

皇女はルーギンの言葉を咀嚼しようとするように考え込んでいたが、やがて先をうながした。

「それで、結論は」

「彼にとって、今回の人質の件、どちらに転んでも損にはならないでしょう。受け入れられれば、人質が北嶺で死んでくれるように画策するでしょうし、人質の交換ができなければ、領地に帰ってこういうだけです。かわいそうにレイランド公子は北嶺人に殺された、と」

皇女は笑った。

「甥を始末するために、我らを利用する気か」

「ですので、こちらが積極的にレイランドの命を獲ってやるから、代わりに利権を寄越せという方向に話を持って行けば、乗ることは乗るでしょうが……信の置けない人物です。こちらとしては、レイランドを匿っておいて、デュラルクが逆らったらレイランドを出して使うのが賢明でしょう。かるく化かしあいになるでしょうが、せっかく譲ってくれるという駒です、獲得しておくべきかと」

「断っても、我らを悪者にするのだろうしな」
「疑う者もいるでしょうが、北嶺が悪いといっておけば、それを信じたい者も多いでしょう。憎みあい、疑いを抱くだけの素地が育っているのですから」
嫌な予測ばかりずらずらと並べあげ、ルーギンはヤエトの方を見た。
「ところで、どうでした?」
「どう、とは?」
「レイランド公子ですよ。おとなしく殺されてやりそうな子でしたか」
難しい質問だ。
「本人は、その覚悟がありそうです。火種になるよりは、……と考えている部分もあるでしょうが」
ヤエトは言葉を切った。
どこまで、真実なのだろう。公子の言葉すべてを額面通りに信じるわけにはいかない。それは、使節の方もだ。かれらが結託し、騙しにかかっていないとも限らない。
「あるでしょうが、なんだ?」
皇女にうながされ、ヤエトは迷いながら告げた。
「生きたいと思わぬ人間は、おりません」
「……うん。そうだな」
「使節は、権力が欲しいでしょう。ですが、彼も死にたくはないはずです。北嶺との戦いを見据えているなら、勝てると踏む要因があるに違いありません。かれらは鳥を知っている。戦った経験があるのです。《雷霆の使者》でさえ、絶対の優位性はたもてないことも把握しているはず。それでも賭けに出るなら、わたしたちの知らないなにかを知っているのかもしれない。そういうことになります」
ううん、と皇女は唸った。
「そこまで賢い男かな。目先の欲で頭がうまくはたらいていないのではないか?」
「それを期待したいところですが、期待とは、実によく裏切られるものですから」
ヤエトの答にルーギンが苦笑した。

「先生と話していると、未来は真っ暗という気分になるな」
「わたしは悲観的な人間なのです」
「まあよい、それでそなたは人質の件、どうすべきだと思う」
「受け入れるより、ほかにないかと」
皇女はため息をついた。
「受け入れずに送り返しても、よい展開が望めぬとあれば、そうなるか。だが、セルクを遣るのはどうかな……」
「本人が、どうしても行くと主張しておりますし。その決意を覆すことはできないでしょう」
セルクの性格では、衆人環視のもとで持ち出された人質話に否はいえない。彼の眼には、それは憶病者のすること、恥ずべき行為と映るだろう。
死んでも行くとかなんとか、わけのわからない決意をかためていても、おどろかない。
「不安だけどね……天然がどう作用するか、見当がつかないからなぁ」
ルーギンの心配は、もっともだ。だが、セルクはもう動かしようがない。
となると、打てる手は限られてくる。
——しかたがない。
ヤエトは渋々と、しかし断固として宣言した。
「わたしが同行します」
「はぁ!?」
ルーギンが珍しく奇声を発した。皇女は眼をしばたたき、少し考えてから尋ねた。
「なぜだ?」
「同行して北方の国情を観察し、セルクが人質として暮らす環境を確認、納得いかない状況でしたら条件を出し、改善を求めます——こういったことを、セルク本人ができるとは思えません」
皇女がため息をついた。
「そうだろうな」
ルーギンの表情が消えていくのが怖いのだが、そ

れでもヤエトは臆せず言葉をつづけた。
「レイランド公子に同情的な人物を探し、公子の帰還を待って支持層を団結させるための素地を作ることができれば、と」
「あの公子に肩入れするのか？」
「肩入れするにたる人物に、育てましょう。協力的な支配者になってもらうのです。北嶺や鳥への反感を軽減させ、おそらく今は実感がないであろう帝国の巨大さ、力の強さを理解させれば、善き隣人となってくれるでしょう」
「それが可能だと思うのか」
「御意にございます」
「うまくいかねば、どうする？」
「人となりを知り、理解を深めれば、敵となったとしても、相手の打つ手はたなごころをさすようにわかるでしょう」
「わたしの役目なのだな、それは？」
ヤエトは無言で頭を下げた。わかっているなら、くどくど説明する必要もないだろう。
皇女はまた、大きなため息をついた。
「公子の一件はともかく、そなたの同行はどうだろう。よろこんで応じてくれるとも思えぬが」
「正式に使節を立て、セルクを送り届けるのに同行するのが筋……とでもいっておけば、断ることもできないでしょう。先方の使節は一族の摂政にあたる人物、こちらの代表はわたしが相応でしょう」
「ご領地はどうなさるのです、公」
尋ねたのはルーギンだ。さっきまで先生呼ばわりだったくせに、公、ときた。
「代官にまかせます。諸事おこたりなくやってくれるでしょう。わたしが譲り受ける前も、ずっとこなしていたのですから」
「では、王は？」
「わたし？」
皇女がおどろいてルーギンを見たが、騎士の視線はヤエトに向けられたままだった。

「王のご負担は、考えないのですか」
いつものように姫様ではなく、王、である。ルーギンが怖い。
「ご負担を軽くするために、参るのですが？　セルクだけを送り込むより、わたしが同行した方がご安心いただけるでしょう」
「そういう問題ではありません。相を欠いていたあいだ、王がどれほどおつらい時間を過ごされたか、おわかりでない」
ルーギンの言葉の意味がわからず、ヤエトは少し面喰らった。
「なんのことです」
「ルーギン、もうよい」
「よくはありません」
――欠いて、というと……。
あちらへこちらへと移動してばかりだったし、皇女の相談相手として役に立たなかった時期もあるだろうが、と考えてすぐに思い当たった。
そういえば少し前に、死に瀕したばかりだった。
――しかし、どうしようもないだろう。
そこは、我慢してもらう以外に手立てがない。ヤエトが虚弱であることは承知の上で、皇女は彼を翼臣にと欲したのである。ヤエトにできるのは、せいぜい意識があるときに自分のできることをするだけで、それ以上は責任のとりようがない。
なんとかしようと、思ってはいるのだ。
この中で真っ先に死ぬ可能性が高いのはヤエトである。自分がいなくてもとどこおりなく動くよう、組織をととのえる。それが、ひそかに思い定めた目標だ。しかし、こんな台詞が出てくるようでは、達成にはまだ遠いのだろう。精進せねばならないが、同時に身体もいたわる必要があり、……正直にいって、なにもかも無理だなぁという心地である。
「至らぬことで、申しわけありません」
ヤエトが頭を下げると、皇女は怒ったように手を叩いた。

「もうよい、というておる！　頭を上げよ」
「よくないでしょう、姫」
「黙れ」
今度は、皇女の声が怖くなった。ルーギンが口をつぐんだほどの迫力だ。
ヤエトとしては、頭を上げるどころか、このまま退出したいくらいだ。しかし、命令である。
心を決めて顔を上げてみれば、皇女は泣きそうな顔をしていた。なるほど、これではルーギンは逆らえない。
ヤエトだって、泣かれるのは困る。できるだけやわらかい口調で確認した。
「お許しいただけますでしょうか」
大きく息を吐いてから、皇女は答えた。
「そなたが望んでわたしが許さぬのは、隠居することと死ぬことくらいだ。ほかにもあるかもしれぬが、おおむね、そなたは許されていると心得よ」
軽々しく言質を与えてはいけません、と説諭すべき場面ではないような気がしたので、そこは堪えてふたたび頭を下げた。
「身に余るお言葉です」
「行きたければ北方へ行くがよい。そなたの言葉ももっともだ。だが、わかっておろうな？　わたしは隠居を許したわけでもなければ、死んでもよいともいってはおらぬぞ」
「心得ましてございます」
死なない方は、あまり自信がない。だが、それをそのまま口にしない程度の思慮深さを、今は発揮すべきだろう。
――なんにせよ、ジェイサルドを連れて行けば、暴力で殺されることはないだろうし。
「同行を願いたい人物がいるのですが、王からもお言葉を添えていただけますでしょうか？」
「命じればよかろう、誰だ」
「陛下の直属でしょうから、王にご命令いただいても、支障があるかと」

皇女は首をかしげた。
「陛下の直属？」
「ナグウィンです」
彼に命令できるのは真上皇帝だけだろう。面倒見のよい行商人のような顔をして、その実、非公式に皇帝の眼となり、耳となっている伝達官だ。話を持ちかければ、まず断られはしないだろうという自信はあった。
ナグウィン本人の希望はともかく、皇帝は断らない。排他的な地域である北方に、堂々と入れる好機を逃しはしないだろう。

6

出発前夜、ヤエトは皇女に呼び出された。
「夜は、外聞が悪うございます」
さっそく文句をつけたが、皇女は一笑に付した。
「暇な時間がないのだ、しかたなかろう」
皇女は夜着の上に肩掛けを羽織っただけの軽装である。どうしてこう無防備なのか。やはりヤエトを男性として意識していないのではないかと考えざるを得ない。
迎えに出たのはファルバーンで、これもなんだか問題な気がした。
女装はしているが、男である。いやそれ以前に、帝国に恨みを抱いている立場のはずだが、そのあたりはどうなのか。皇女にとっても、ナオを悪神に繋がる存在ではないかと指摘した、あまり嬉しからぬ人物なのだが。
こんなことになっているのは、ファルバーンをナオの親族という触れ込みで連れて来たせいだ。表面上は、体調を崩して寝込んでいるナオの看病をし、かつその代わりをつとめるべく皇女に仕えていることになっている。たしかに自然な流れなのだが、実態は違う。彼はナオを監視し、悪神由来の穢れが流出しないよう、気を配っているのだ。

皇女の側仕えという立場は都合がよかったので、今まで放置するしかなかったが……やはり、おかしいだろうと思う。

――まぁ、これは解決する。

ファルバーンはヤエトの身の回りの世話をするという名目で、北方へ同行することになっている。本人が、それを望んだのだ。おおかた預言者あたりになにか吹き込まれているのだろうが、こちらとしても都合がよいので、受け入れることにした。

そのファルバーンも、ヤエトを案内すると姿を消してしまった。

「なにか火急のご用でしょうか」

不在中のことについて、おおかたの申し送りは終わっている。

今回、ヤエトは皇女の伝達官を帯同しない。つまり、今までになく連絡のつかない時間が長くなる、ということだ。レイランド公子という読めない存在を残していくことになるし、踏野太守や第五皇子の存念、人身売買など問題は山積しているため、時間をとって念入りに説明した。

皇女も諸問題を理解し、臨機応変に対処すると約束してくれたはずだ。

そこへ、この呼び出しである。あらたに問題が起きたのでなければよいがと案じていると、皇女はあっさりその懸念を否定した。

「そんなものがあれば、昼間でもなんでも呼びつけているに決まっておろう」

ヤエトは当惑した。

「は……？」

「あのな。わたしには、他愛のないことを喋ったりする時間が必要なのではないかと思うのだ」

「なるほど」

そういうのは身近な女官とでもお願いしたいところだが、皇女の側仕えともなれば皆が貴族の出身で、当然、家門の有利不利には敏感であるよう含められているはずだ。気を抜けない相手に違いない。

だったらファルバーンと……と、いうわけにもいかないだろう。それはそれで問題だ。

——話し相手、か。

以前は、ナオになら気をゆるすことができたのだろう。だが、今はそれもできない。むしろ、ナオのことについて話して気もちを落ち着けたいだろうに、真相を知る人間はごくわずかだ。

しかたない、とヤエトは腹を括った。皇女の心身の平穏をたもつのも、彼の責務の一部であるには違いない。気軽な話とやらに、少しだけでもつきあうべきだろう。たとえ、待ち受けている旅程に体力的な不安を抱いているとしても、である。

「北方へ行くそなたとは、暫く話せなくなってしまうだろう。今のうちだと思ってな」

「あまりおもしろい話もできかねますが」

「わたしが、そなたと話したいのだ」

「光栄なことです」

皇女は鼻を鳴らした。あまり上品とはいいかねるが、ヤエトが口先だけで答えた言葉には、相応の返しだろう。

「そなたには酒を飲ませるわけにはいかぬゆえ、茶でもどうかと思ってな。ファルバーンが用意した。スーリヤに教わったそうだ」

階段を延々と上って来たので、喉はかわいている。勧められるまま腰を下ろし、杯をとった。席が用意されていたのは、あの小さな部屋だ。運び込まれて寝付いたときのことを思いだし、ふと、なんともいえない気分になった。

——出会って、まだいくらもたっていなかったが……あのとき、明かしてしまったんだったな。

自分が恩寵の力の持ち主であることを、皇女には告げてしまった。あんなに恐れ、隠していたのに。なりゆきでどうしようもなかったとはいえ、直感で、皇女を信じてしまっていたのかもしれない。

「名を、ご記憶なのですね」

「ん？」

「スーリヤ、と。女官の名は覚えぬと仰せでした」
ああ、と皇女は少しくちびるを尖らせた。
「だってあの者は、そなたが特別に目をかけているそうだから」
なにか含みがありそうないいかたなので、ヤエトは用心深く答えた。
「わたしのせいで、三の君のお邸に戻れぬ身になってしまいましたし……」
「悪漢に襲われたところを、身を挺して救ってやったほどだしな？」
頭痛がするので、と辞去したら事態は悪化するだろうか――そんなことを、つい真面目に考えた。
「芝居の筋を、まるごとお信じになるはずはないと心得ておりましたが、わたしの勘違いでしたでしょうか？」
「無論、そのまま信じるほどおめでたくはないぞ。そなたが剣をふり回しても、転んで自分が怪我をするだけだろう」
どういう認識だ、とヤエトは思った。そういう認識なのだろうが、あんまりではないのか。
「……わたしが剣を持ったとしても、転ぶほどの勢いでふり回したりはしないものと存じます」
「そうか？」
「転んでも意味がありません。剣が使えないことを相手に教えてどうするのですか」
皇女は眼をしばたたき、それから笑った。
「そうだな。意味はないな、たしかに」
「皇妹殿下にも申し上げましたが、あのとき、つまり芝居の元になった一件が発生したときですが――わたしは高熱を発して寝込んでおりました。王が案じてくださったときです。三日ほど寝込んで」
「始終あるから、わからんな。いつの話か」
「たしか、伝達官殿が亡くなられる直前です」
反射的に答えてから、しまった、と思った。
これでは、他愛のない話にならない。
だが、皇女はとくに気分を害した風も見せず、そ

うか、とうなずいた。
「あの伝達官が、殺される前か」
「……申しわけありません」
「謝るな」
「ご命令ですか」
「無論」
答えて、皇女は苦笑した。
「許せ」
「……は？」
「他愛のないことを喋りたいといっておいて、命じてばかりだ。わたしはもっと、ふつうに喋りたい」
そういわれても、皇女はいつも通りだ。少し考えて、ヤエトは尋ねた。
「対等に、ということでしょうか？」
「うん」
難しいことをいわれた。対等にしてよいなら、ではもう部屋に戻って寝ますので、おやすみなさい、で済むのである。この先にそなえて、今は体力を温存したいのだから。
しかし、ヤエトは皇女の命令をきかねばならない。だから、ここにいる。端から対等など望めないことは、皇女もわかっているはずだ。
それなのに。
皇女は俯いて、うん、とくり返した。
「命じたくないときもあるのだ」
「はい」
それはヤエトにもわかる。というより、そもそも命令などという面倒くさいことは、あまりしたくない。命じるとは、責任を負うということだからだ。ヤエトは責任など大嫌いである。隠居したいという願望の根は、そこにある。
「剣をふり回しはせずとも、そなたはあの娘を救いに行ったのだろう？」
「……またその話ですか」
「救えと命じられずに、そなたに助けてもらえることを、あの娘は幸運と思うべきだ」

皇女の言葉は謎掛けのようだ。意味がわからないが、きっとヤエトが察することのできない理屈が通っているのだろう。

「そうでしょうか？」

「わたしのまわりには、命じたり命じられたりする者しかおらぬのでな」

――なるほど。

思い至らぬ方が幸せだろうが、そこまで馬鹿ではない皇女は、気づいてしまったのだろう。

皇家の娘であるから、人は彼女に従う。

しかし、それは権力が崩れれば消えてしまう支配と従属の関係だ。けっして対等にはなり得ない。

「命じられずとも、お助けします」

「わたしは、そなたの主君だからな」

「それもありますが――ですが、皇女殿下なら、助け手にはお困りでないでしょうし、あの程度の下劣な輩であれば、ご自身で討ち取ってしまわれるかもしれませんね」

「そうか」

「伝達官殿は、報告する前に命を落とされたのだと思いますが……スーリヤは、売春宿から買われた奴隷なのです。わたしを籠絡するために」

皇女は眉を上げた。

「それで、籠絡されたのか？」

「少年だと思い込んでいたくらいで、まったく」

「……気の毒に」

急に、皇女は同情的になった。当初、スーリヤはわざと少年を装っていたのだろうとヤエトは考えているが、そこまで教える必要はないだろう。

「そんなわけですから、あの芝居が示唆しているような事実はありませんでした」

「示唆？　なにを示唆していたというのだ」

「さあ？」

ヤエトはにっこり笑って茶を啜った。対等でいいなら、とぼけるくらいは許してもらおう。

「食えない男だな」

「骨と皮くらいしかありませんので」
「北方でも食われずに帰って来い」
「ご命令でよろしいのですか？」
「なに？　……あ」
皇女は少し狼狽したようだった。
いくら対等に話したいといっても、倣い性となっている命令口調や思考法が容易に変えられるとも思えず、この反応は無理もないところだ。
口籠っている皇女に、ヤエトは教えてやった。
「帰って来てくださいね、とか」
「……いいづらい」
「では、帰りを待っている、とでも」
「それなら大丈夫だ」
「待ってくださるのですか？」
「うん」
大丈夫だといいながら、あらためて口にはしないあたり、皇女にも照れがあるらしい。ふうん、とヤエトはなにか新たなものを発見した想いである。
「ナオ殿のことですが」
皇女が表情をあらためた。
「ナオがどうかしたか」
「他愛のない会話のひとつとして、お聞きくださいますか」
そう前置きをすると、皇女は居住まいを正した。逆だろう、と突っ込みたいところを堪え、ヤエトは話をつづけた。
「これは、ジェイサルドから聞いた話です。シーハの神に仕える民は、それは過酷な修行をするのだとか。みずからの命を死病に晒してまで、治癒の力を求めると――ご存じでしたか？」
皇女は首を左右にふった。
「いや。初耳だ」
「ナオ殿は、きっと、お若かった頃のことはお話しにならなかったのですね」
本来の医師神の力でなく、悪神の眷属から力を得たとなれば、話したいとは思わないだろう。ナオの



修行はどこかで歪み、挫折してしまったのだ。
ナオはそれを恥じている。今、彼女は表面化したその恥に押しひしがれ、受け止めかねているのではないか。
「そうだな……わたしが話して、ナオが聞いてくれるばかりだった。ナオの生まれも育ちも、わたしは知らぬ。こうしてみると、知らぬことばかりだ」
皇女の口調は淡々としていたが、逆にあやうい、とヤエトは感じた。感情がこもらないのがおかしい話題だ。むしろ、爆発してくれる方がよいのだが、はたしてヤエトにそれを受け止められるのか。
はなはだ疑問だと考えながら、彼は静かに諭した。
「下々の暮らしなど意に介さぬのが、竜種というものでしょう。そのようにお生まれになり、そのようにお育ちになったのですから、無理もありません」
皇女はヤエトを見た。
「そなたのこととて、ろくに知らぬ」
「わたしは隠居願望丸出しの、覇気のない尚書官です。よくご存じでしょう」
「たよりにしたいのに、すぐ倒れる。親切かと思えば冷淡だし、人の心がわかると思えば呆れるほど無頓着だし……それに、剣はふり回さない」
「まったく、仰せの通りです」
「だが、つい人を救ってしまう」
ヤエトは苦笑して答えた。
「それは買い被っておいでだと、申し上げておきましょう。わたしの場合、人を救うだとか助けるだとかいうような、大それたことは考えておりません」
「そうか？」
「ただ、見過ごせぬだけなのです」
苦笑するのは、今度は皇女の番だった。
「ほかの誰もが見過ごすことだ。あるいは我が身の安全を考え、あるいは外聞を気にして……さまざまな理由で見過ごすことに、そなたは正面から立ち向かうだろう。それを、わたしは勇気だと思う」
「無駄に勇敢で、無駄に背が高く、無駄に腰が低い

……と、ルーギンにいわれました」
「茶化すな」
「他愛のない話なら、茶化すくらいは許していただかねば。……ナオ殿は、今、長年見過ごして来たものと向きあっておいでなのでしょう」
皇女は無言だった。
両手で包むように持っている杯に視線を落としたまま、動かない。
「ともに、向きあってご覧になればと」
「……わたしが？」
「ナオ殿に、語ってもらうのです。母君がどのようなかたでいらしたか。陛下のお目にとまったきっかけや、帝国が沙漠に侵攻するまでの暮らしぶりも。なにもかも、お聞きになるとよいでしょう。知らなかったことを悔いておられるなら、その無知を埋める努力をなされればよいのです。遅いということはありません。ナオ殿はまだ生きて、おそばにいらっしゃるではないですか。ちっとも遅くはないのです」
そのように生まれ、そのように育った――皇女は支配者の一族に生まれ、被支配者を個人として認識しない習慣を手に入れている。それが崩れそうになっている今、破れた堤を修復し、元の視点に戻してやる方が賢明なのだろう。
その方が、皇女にとっては楽なはずだ。
だが、ヤエトはそうしたくなかった。皇女なら彼を超えていくと確信した、あの感じを失いたくなかった。自己満足に過ぎないのかもしれない。だが、皇女ならきっと、できるだろう。
民を消費すべき物と看做すのではなく、ともに生きる人と考えることが。その上で、君主としてふるまうことが。
「だが、ナオはなにも語らぬのだ」
「語ってくれと、仰せになればよいのです。お命じになるのではなく……なつかしい昔話をしたいと。幼少時のご記憶には、いつもナオ殿のお姿があるのではないですか？　それをひとつずつ、語ってみて

は如何ですか。いつも見ていたのだと。ともに、生きてきたのだと。ずっと信じて待っていると、あのかたの心に伝わるまで」

ヤエトが言葉をかさねると、皇女は黙ってしまった。考えているのか、それとも呆れているのか。

「わたしは……」

ややあって、ようやく皇女が漏らした声は、かすかにひび割れていた。

皇女の茶はほとんど減っていない。手にした杯の中を覗くようにして、つぶやいた。

「間違うことが許されぬ」

「間違っても許される、のでは？」

「それは違う。間違うてはならぬのだ」

声にはどこか自嘲の響きがある。

ヤエトがどう応じるべきか考えているあいだに、皇女が先をつづけた。

「わたしが青といえば青でなければならぬ。皆がその通りと認めることになる。だから、青くもないものを青いとはいえぬ。空を青いというのはよい。夜は黒いし、朝や夕には紅く、日によっては鈍色の雲に覆われることもあろうがな、それでも空は青いというのは間違うてはおらぬ。北嶺の民の眼は空の色だというのもかまわぬ。だが、わたしが北嶺の民の眼は黒いといえば、どうなる？」

「……皆が困るでしょう」

「しかも、口にだしてしまえば、気安く間違うたと訂正することも許されぬ。わたしは間違うてはならぬのだからな」

「ですが、わたしは――」

いいかけて、ヤエトは迷った。だが、皇女が彼の言葉を引き取った。

「そなたなら、指摘するであろう。間違うておる、とな。それゆえ、わたしは安心して話せるのだ、そなたとであれば」

「なるほど」

自分自身のなんというか、融通のきかなさとでも

いえばいいのか、ある意味では無礼きわまりない部分が、皇女にとって一種の救いになっているとは思いもよらなかった。

「そなたがいなくなると、わたしはますます間違うことが許されなくなるのだ」

「大変そうですね」

「またそうやって、他人事のように」

「他人事です」

皇女は吹き出した。

「正直過ぎるぞ」

「そこを買ってくださっていると、たった今、仰せになりました」

「……うん。ナオのことだがな、わたしは信じたい。信じたいのだが、信じてそれが間違いだったとわかったときには、とり返しのつかないことになっているように感じるのだ。疑ってナオをしりぞければ、傷は浅くて済むだろうと」

「賢明なご判断です」

「やはり、そう思うか」

「痛手を少なくしたければ、すべてを疑ってしりぞけるだけです。ナオ殿も然り、わたしのことも」

視線があうと、なにかせつない心地がした。ここに至ってようやく、ヤエトは自分が不安を感じていることを明確に自覚した。この若いあるじを長期に亘って置き去りにするのが、心配でならないと。

――去年も、そうしたではないか。

だが、もうあのときとは違う。

――皇位を巡る政争に巻き込まれるとは思ってもみなかったし、過去視の力もろくに使えなかった。それに、当時は平民で責任も重くなかったし。

いろいろと理由を並べたてながら、心のもう半分で、ヤエトは渋々と認めていた。

――それだけではない。

彼が不安なら、皇女はその倍も不安だろう。

皇女の眼差しは、すがりつくようだった。ヤエトを失うこころもとなさを、はっきり訴えていた。

「やっと、眼をあわせてくださいましたね」
「そなたのことは、疑わぬ……と思う」
「つねならば、疑ってくださいと申し上げたいところですが、今回ばかりは申しません。どうか、お信じください」
「なぜだ？」
「すぐに戻るというわけには参りませんので」
北方側は、ヤエトの逗留期間を二十日間といってきた。ルス公家ばかりでなく、他領の領主とも面談を望むなら、日程や場所の調整も含めてそれが最短だといわれたのだ。
予想より長いとは思ったが、実現するなら滅多にない機会である。逃すわけにはいかない。
「しかも、皇女殿下の伝達官が同道してくださるということもありません。長く連絡がない者同士が信じあうほど、困難なことはない。虚言に踊らされぬ方が珍しいのです。ですから、ただお信じくださいとお願いします」
皇女の顔が歪んだ。また、視線を落としてしまう。睫毛の影に眼が隠され、その小さな顔の輪郭までもが、黄金の巻き毛に覆われた。
「忘れてほしいのだが」
「はい？」
「……不安なのだ」
「なにがでしょう？」
「そなたが戻って来るかどうかが」
皇女は杯を置いていた。空いた手でなにをするでもなく、ただ膝の上で握りしめていた。
「お信じくださいと、申し上げたばかりです」
「信じたい」
「そう思ってくださることに、感謝します」
「忘れてくれるか、ヤエト」
難しいことをいうなぁ、と思う。こんな状況で、こんな風に語られて、忘れられるとは思えない。
「ご命令ではないのですよね？」
「……そうなるな」

「では、忘れません。覚えていさせてください」
「意外と、そなたは意地が悪い」
「今ごろお気づきですか？」
「知ってはいたが、あらためて思った。そなたはひどい。親切そうな口調で、実は容赦がない」
皇女と自分の差は、おそらく担っているものの大きさの差なのだろうと思う。ヤエトも領主となり、一国の相となって背負うものが増えたが、その実感がどれだけあるかというと、あやしいものだ。どうしても、身ひとつで生きているという感覚が強い。
皇女は違う。だから、間違うことができないと思ってしまう。過ちは、正せばよいと考えられない。そういう不自由さのなかに生きていることは気の毒だと思うが、それはヤエトにどうにかできることではない。
そんなに、根の浅い問題ではないからだ。
ナオの処遇を、軽々には決められないのも無理はない。心と理性が相反したことをいうのだろう。ナオを救いたい、信じたいと叫びながら、遠ざけよ、信じるなとおのれに命じるしかない。
もう少し、いい加減に生きればよいのに。
皇女が真面目だから、自分もつきあって真面目にならざるを得ないではないか。とんだ貧乏くじだ。
「王は、お忘れでしょうか？」
「なにをだ」
「去年、わたしが都へ、三の君のもとへ発ったときです。シロバの羽根を結んだお守りをくださり、こう仰せになりました——帰るべきはどこぞの土地ではない、ご自分のもとだ、と」
そのときのお守りは、今もヤエトの腰帯に下がっている。最近では、身に着けていることすら意識しなくなってしまった。
「……ずいぶん、勇ましいことをいったものだ」
「たまには、勇ましくないのもよろしいでしょう。ですが、すぐに飽きてしまわれますよ」
皇女は顔を上げた。ぽかんとしている。

「飽きる？」
「自分の不幸に陶酔するのは、飽きるでしょう。不毛ですから」
皇女の口が開いたまま閉じなくなった。よほど、呆れたらしい。
それもそうだろう、かなり無礼なことをいっている自覚はある。今の皇女には、少し極端なことをいった方がよいだろうと判断したからだ。
頑張れという言葉は無駄だし、力にならない。皇女はもう頑張って、頑張って……頑張り過ぎて疲れているのだろうから。だから逆にぴしゃりと切り捨ててみたが、吉凶の判断は帰るまでお預けといったところか。
「わたしは勇ましくないことの方が多いですが」
「それはない」
言下に、否定された。
「そうでしょうか？」
「無駄に勇敢だと評されているのだろう？　さっき申したばかりではないか。ルーギンの奴、うまいことをいったものだ」
「まぁ、勇敢かどうかなど、どうでもよいのです。ただ、わたしはそのときのお言葉を、肝に銘じておりますので」
皇女がなにもいわないあいだに、ヤエトは杯を置き、後ずさって一礼した。
「お茶を、ご馳走になりました。かならず、という言葉は好かないのですが、そう申し上げた方がよろしいですか？」
皇女は彼の言葉を予期したらしい。あわてて、止めようとした。
「かまうな。わかっている、そなたが口にしたくないことを、無理にいわせるつもりはない」
よく知られているからこそ、効果があるのだ。しかたない、とヤエトは腹を括った。
「かならず、御許へ帰ります」

第



章

1

北方諸領は、北嶺よりさらに北に位置する。当然、寒い。だが北嶺よりは春らしく、もうじき夏という気配もただよっているのは、標高のせいだろう。

文字通り山中の国である北嶺に比べれば、北方は低地といってもよい。地形的な難所といえば、北嶺との国境近辺くらいだ。深く切れ込んだ渓谷に雪解け水が轟々と流れる急流には、橋がない。

今回の使節団は、はるかに南下して草原地帯で川を渡り、そこから街道に出て、南麓鎮を通って山を登ったそうだから、危険度は低いが日数はやたらかかる、迂遠な道程には違いない。

帰路は綱を使うという。北嶺側の方が崖が高くなっている場所で渓谷上に綱を渡し、その綱に滑車を噛ませて籠を滑らせる。荷物も人も、それで運ぶというからおそろしい。

友好の証として、ここだけは鳥を使うことを申し出た。案の定、使節団の全員がそれを受け入れたわけではなかったが、ヤエトとセルク、それに使節団の若者ひとりが、鳥に乗って谷を渡った。

「このまま、一気に飛んでしまえばよいのに」

そんな風にいうセルクを、ヤエトはたしなめた。

「鳥の姿を見せれば、余計な不安を与えてしまいかねませんからね」

「なんで不安なんだか。鳥のよさがわからんとは、どこか――」

「セルク殿」

ヤエトは低い、しかし厳しい口調ですかさずセルクの言葉をさえぎった。セルクはうんざりしたという顔で答えた。

「――土地には土地の道理あり、尊重すべし、と」

「わかっているなら、結構です」

獣も通わぬ険しい斜面を降りるのは、ヤエトには

かなり酷な行程だったが、なんとか倒れずに道らしい道まで辿り着くことができた。

――かなり整備されているな。

南麓鎮から北嶺へ向かう道などより、舗装もずっとしっかりしている。その上、用意されていた馬車は震動を殺す機構がしっかりしていて、長時間乗っていてもあまり疲れない。

去年の晩夏、宮廷に招かれたときに乗った第三皇子の馬車も、こんな感じだった。第三皇子は新奇なものがお好みでと説明を受けたが、あれは北方由来の機構だったのだと、今さら納得させられた。

馬車の設計においては、北方の技術は帝国を凌いでいるかもしれない。それは車輪を使うもの全般にいえるだろう。谷を渡るのに使っていた滑車も、実に見事な細工だった。

馬車を引く馬は、帝国の騎士たちが好んで使う馬よりもやや小柄なようだ。毛足が長く、とくに蹄（ひづめ）の周辺にはふさふさと、飾り毛のようなものが生えている。蹄も大きい。雪上を駆けやすいように、そうなっているのだろうか。

土地のものだ、とヤエトは思う。土地が生物種を特徴づける。人もまた、土地に属するものだ。生まれ育った土地の気候は身体に染みついて、容易には忘れることができない。

――文化もだ。

北方の問題はおそらく寒さだろうから、それに抗するための建築術、服飾、料理や行事などが発達しているはずだ。きっと、他所者にはわからない慣習や、傍目には不条理な決まりごともあるだろう。何百年と歳月を過ごすうちに生まれては失われ、変質をつづけるもの。それが、文化だ。

下り坂の多い道は、次第に樹木の豊富な森林地帯へと入って行く。緑でいっぱいの景色は、北嶺とはまったく似ていない。

「木が、とても豊富ですね」

同乗している使節に話を向けると、思いもよらな

い返事が来た。
「適当に間伐してやらないと、幹がねじれたり、太くならなかったりで、よい木材にはならないのです。このあたりは手つかずで、お恥ずかしい」
川をくだれば、草原地帯に至る。同族としか商売をしないというから、そのあたりに北方出身の商人がいて、取り引きを斡旋しているのだろう。
草原地帯には、大樹が少ない。果樹の栽培をしている地域もあったはずだが、それを切り倒して売るわけにもいかないし、そもそも木質がよくないと聞いている。
なるほど、北方の商材として木は重要なのだろう。ヤエトは相手をねぎらう口調で答えた。
「いろいろとご苦労がおありなのですね。北嶺には木があまり生えませんので、なかなか思い至らないところです」
「公は、沙漠の向こうのご出身だとか。ご生地もあまり木は多くなかったのですか？」
北嶺と北方が木材の取り引きをするとしたら、輸送手段は鳥になるだろう。友好関係がかなり深まらないと厳しいな、と考えながら答える。
「わたしの育った土地は沙漠のほとりでした。木はありましたが、もっと幹がぬうっと伸びて、上の方にだけばさばさと枝がつき、葉が茂っているような姿をしておりましたね」
「ぬうっと、ですか」
使節は苦笑した。なごやかといえなくもない雰囲気になったところで、使節の隣に座っていた《雷霆の使者》が口を開いた。
「沙漠には悪の根がある。そのほとりに育つ木も、悪神の気を受けて形が歪むのだろう」
馬車にはぎゅう詰めで五人が乗っている。進行方向に背を向けるかたちで使節と《雷霆の使者》、そして向い合せにヤエトとセルク、ファルバーン。ナグウィンは同乗を遠慮した。横幅がある人間が乗ったらいけません、と商人は自分の腹回りを示した。

本来なら、ここにジェイサルドが無理矢理入っていたのだろうと想像して、そうならなかったことに感謝したくなった。

ジェイサルドは、同行を断られた。正確には、北方に足を踏み入れることを許されなかった。

はじめて、あの最強老人が思うにまかせないところを見た、と思ったほどだ。鳥がいうことをきかないのは、彼に怯えているからで、それはまた別の種類の不自由さだ。

今回は、そうではなかった。

同行者ひとりずつ、北方に入れてよいかどうかを決めたのは、この《雷霆の使者》だ。独断である。政治的な意図は、彼の判断の基準にはならないのだろう。超然とした態度から、人によっては傲慢さを感じたかもしれない。ヤエト自身は、深い断絶のようなものを感じた。似たような感覚を覚えるのは、伝達官か、……預言者だ。

彼はひとりずつを見、そして名を問うた。彼に名を預けないと、北方には入れない。事前に聞かされていたから覚悟はあったが、男に名を問われると、心を根底から揺り動かされるような心地がした。

——《黒狼公》ヤエト。

名告りを聞き、視線をあわせたとき、男の眉が上がった。つづけてファルバーンを見たときも、かすかに表情が動いた。

恩寵持ちであると、気づいたのだろう。レイランド公子にすら、わかってしまったのだ。《雷霆の使者》に、見破れないはずがない。

もちろん、ジェイサルドの特殊な背景も同様に。

不可、と《雷霆の使者》はひとこと告げた。それだけのことだが、ジェイサルドは動けなくなった。名告りさえ、させてもらえなかった。

——いったいなにを？

ヤエトの問いに相手は平然と答えた。

——悪しき神の眷属が北方に足を踏み入れることは、許されぬ。

——このままここに立たせておくおつもりか。

——北方への禁足を命じたまでだ。この者が北方へ行くことを諦めさえすれば、いくらでも動くことが可能であろう。

あのジェイサルドが、《雷霆の使者》とヤエトの問答をよそに、まったく動けない。つまり、同行を諦めていない証拠だ。

——少し、時間を。説得します。

あわててヤエトはジェイサルドの腕に手をかけ、内命だとささやいて、なんとか老騎士の身体を後ろへ向かせることに成功した。

——諦めろ。ちょうどよい、踏野郡の一件はまかせる。王と相談した上で、処置を。

珍しく、ジェイサルドはごねなかった。殿の仰せのままにと頭を下げてから、ただひとこと。

——ご無事で。

無事に帰らないと殺されるなと、かなり矛盾した感想を抱いたものだ。

もちろん、セルクは問題なく許可された。護衛として同行する六名の騎士も、ひとりずつ《雷霆の使者》の検分を受け、通行を許された。積年の恨みがあるであろう北嶺人よりはと、騎士団から帝国出身の者が選ばれ、この任にあたることになった。

幸い、護衛の騎士に南方人は含まれていなかった。もしいたら、どうなったことやら。南方は、北方からは悪神信仰の土壌と看做されているだろう。今でも呪師が徘徊し、人々を惑わす土地なのだから。

街道に出てからは、騎士たちは馬である。もちろん、用意したのは北方側だ。使節団一行が乗っている馬よりも足が短いから、本来は力仕事に従事する品種だろう。沿道の領民から供出させたに違いない。

ナグウィンは、騎士のひとりと同乗しているはずだ。《雷霆の使者》は、商人が恩寵持ちであることも把握しているはずだが。

拒否されたのは、ジェイサルドだけだ。

悪神とその支配下にあるという地下魔界は、北方

では徹底して厭われているようだ。もしかして、とヤエトは思う。

——救いの手は、北方でみつかるのでは？

敵の敵は味方なのだ。少なくとも、つい最近その神の存在を知ったヤエトなどに比べれば、かれらはずっと長く、深く、敵を知っているはずだ。その知識を持ち帰ることができれば、今後のためになる。

できるだけ、無邪気な風をよそおって訊いた。

「沙漠の悪の根というのは、堕天した母神の伝説のことでしょうか？」

「悪神だ。名をいうことは、はばかりがある」

ヤエトに向けられた眼差しは、非常に冷たい。やはり、似合わないことはよした方がいい。

「母神の名、ですか？　わたしは存じませんが」

「悪神を敢えて呼ぶときは、黒の御子と」

——地下魔界の魔王か。

ヤエトの乏しい知識を総合すると、堕天した母神から生まれた地下の王で、天界を憎んでいるとか。

——しかし、具体的にはなんの神なのだ？

たとえば、古王国が恩寵の力を賜ったオルムストは、過去の神だ。預言者が言葉を預かるターンは未来の神で、予知に通ずる。治癒の力を恩寵として授けるシーハは医師神と呼ばれ、かつてアルハンを水の王国たらしめていた清浄神は、浄化の神である。

だが、黒の御子とか闇の御子とかいう名で呼ばれる神の力は、判然としない。

「それは、南方で崇められていた神ですか」

答はない。使節が、忌わしい言葉を聞いたとでもいいたげに肩をすくめ、ヤエトを諭した。

「あれの話は、おやめになった方がよい。退けられたとはいえ、倒されたわけでも消えたわけでもないのですぞ。今はおとなしく眠っているだけのこと。その眠りも浅くなっている当今、洒落にならぬほど危険な存在のはず」

——眠りが浅くなっている……。

地下魔界の王の力が増しているなら、魔物の力も

増すのではないか。胃が痛くなりそうだ。そういう情報を小出しにするのは、やめてほしいと思う。

しかし、神などいないと豪語する北方の民が悪神の存在を信じ、恐れる、というのもおかしい。どうしても気になって、ヤエトはふたたび口を開いた。

「悪神の存在はお認めになるのですか？　神などいないと仰っていたはずですが」

「外の人間とは、神という言葉の意味が違う」

答えたのは、また《雷霆の使者》だった。視線があうと、《雷霆の使者》は言葉をつづけた。

「神とはかつて天界にあり、真理の力で人を導いた存在だ。だが、神は去ってしまわれた。今、この世に残っているのは、神代の昔、世界に満ちていた力の残滓に過ぎぬ。それでも強い力をそなえるものは、間違って神と呼ばれ、崇められもしよう。だが、それは本来、神などではない。魔である。魔は悪であり、排すべきものだ」

神学理論はヤエトの専門ではない。神とはなにか、について真面目に考えたことがない自信はある。

ヤエトにとって神といえばまず思い浮かぶのはオルムストなのだが、彼はあの神を崇めも恐れもしていない。歓迎されざる力の源泉としてしか、意識にのぼらないのだ。

――干渉しない神だからか。

かならず祈りが届く神、オルムスト。しかし、その祈りに応えることもない。神の力は過去にしか向いていないからだ。それを魔といわれても、実感は湧かない。もちろん、ヤエトには迷惑な力だが、だからといって悪であるとも思えない。力はただの力だし、過去は過去。それくらいの認識だ。

そこに神の意図を感じないのだから、善にも悪にも意識のしようがないのだろう。

だが、同じように恩寵の力を享けている預言者ウィナエが神について語るとき、その口調はまったくヤエトのものとは違う。思い入れも、かかわりかたも、隔絶しているといってよいほどの差がある。

ファルバーンも、彼の神を崇めている。それは、神と直接対話するウィナエとはまた別のかかわりかただが、ヤエトのように神自体をほぼ無視しているのとも違う。ファルバーンは清浄神の加護を得るために、清潔であることには気をつかっている。かつてアルハンの王族が呆れるほどの贅沢に身を持ち崩したのも、本来は清浄神にその信仰を捧げるためのものだったはずだ。

そして、北方人にとってはそのどれもが、神と呼ぶにあたいしない存在への奉仕、ということになるのだろう――自分たちだけずいぶん特別ぶって偉そうだなと思わなくもないが、まぁそういうものだろう。

万事、世の中はそのようにできている。とりたてて咎めだてすべきことでもない。流せ、とヤエトは自分に命じた。そこは流せ。ほかを追求しろ。

「なるほど。本来の神、すなわち天界の神というものは、今も地上のどこかに残っておいでなのでしょうか？ もし、おわしますなら、是非に――」

世界の罅（ひび）に対処するなら、罅から流れ込む力とは無関係な神、すなわち天界にその存在の根をもつ神の力を借りるべき、とヤエトは幻視の中で聞かされている。だから、その痕跡を追いたいと思ったのだが、《雷霆の使者》は無情に告げた。

「いない。地上と天界との繋がりは断絶し、神がこの世に慈悲をたれたもうことはないだろう」

ヤエトはファルバーンの様子を窺った。祭りをするのは夏が嬉しいからと答えるほどだ、神がいないといわれてもセルクが暴れる心配はない。

だが、ファルバーンは、そうはいかないだろうと思ったのだ。

ファルバーンはまだ女装している。それでこんなにぎゅう詰めの馬車に乗るのもどうかと思ったのだが、本人がヤエトの袖を握ってはなさなかったので、しかたなく同乗した。ここが都なら、《黒狼公》は寡婦好きという噂が野火のように駆け巡るだろう。

――で、皇妹との復縁も、なるほどと納得される

ことになるのだな。

嫌なことを思いだしてしまった。あの件も、まだ決められずにいる。先送りにすべきではないと、わかってはいるが、目先の問題で精一杯だ。

泣きわめいて癇癪を起こし、地面に転がって手足をじたばたさせたいくらいである。黙って馬車に揺られている自分は、かなり頑張っていると思う。

周囲にもっと大変な状況の人物が多いから我慢できる、というのはあるかもしれない。たとえばファルバーン。亡国の王子である彼は、落ち度もないのに民から疎まれ、時の権力からは叛逆者の汚名を着せられている。潔癖な母親に代わって世間とつきあい、出自を隠し、時には危ないところを逃れながら生きてきた。今は平民から成り上がった似非貴族の供をして、異国へ向かっているところである。しかも、なぜか女装。

ヤエトには、ファルバーンの気もちはわからない。ただ、非常に辛抱強いということはわかる。

紗をかぶって俯いた青年の横顔は、間近だからなんとか表情が見えるという程度だ。向かいあわせに座っている使節らには、きれいに通った鼻筋くらいしか見えないだろう。

――落ち着いているようだ。

ひとまず安心することにして、ヤエトは《雷霆の使者》に注意を戻した。

「なぜ、そうまで確信をもって断言なさるのです」

「天界と地上の繋がりは、元来、当地にあった。天界に地上の様子を見せる鏡、天界よりの使者が眠る不凍湖だ。伝説にいう、かの湖に願えば祈りは天に届き、神々の知るところになったと。だが、その湖も天には通じなくなった。湖のあるじが、断ち切ったのだ」

神話のことになると、《雷霆の使者》の言葉はなめらかに、表現もゆたかになるようだ。

「なぜ、そんなことが起きたのです？　いつ頃？」

「公、お控えを」

使節が口を挟んだが、それを無視して《雷霆の使者》が答えた。

「氷姫の御代のことだ。氷姫は、黒の御子が人の子を使って当地へ侵入をたくらんだことを察し、北の大地を凍結させることで、これを阻んだ。だがその後、黒の御子はまた別の人の子を利用して当地を侵した。すべては、天の鏡を通じて天界への経路をひらくため。そこで、湖のあるじはこれを防いだ」

「氷姫とは？」

「当地を凍らせ、滅ぼした。忌むべき者でもあり、救国の英雄でもあり、かつまた前例なきほど大地に選ばれし者。我らの呪いであり、誇りである。我らは氷姫の故事に倣う。たとえこの身が滅びるとも、悪神の眷属には立ち入らせぬ。彼奴がどれほど魅力的な姿を見せ、言葉を語ろうとも。誘惑が、我らの心を揺るがすことはない。北嶺は堕ちたようだ。昔日と変わらぬ、おどろくことでもない」

セルクが口を開きかけた気配を感じたが、ヤエトがそちらを向くまでもなく、彼は沈黙を守った。

つまり、セルクですら迂闊に言葉を発することもできない雰囲気が馬車の中を支配しているのだ。天然男の無駄口まで封じられたのは幸運だが、その場から身動きできないのは不運というしかない。

――胃が痛い。

馬車が目的地に着くまで、もう会話はなかった。

2

ヤエトには話しかけるたびに叱られるので、セルクのお喋りはナグウィンに向けられることになったらしい。翌日には、商人は馬車の中での一件をつぶさに知っていた。

「セルク殿は駄目ですな」

「なにがです」

「なにもかもですよ。全方位、存在そのものが隙というか……いやぁ、以前からそうじゃないかとは思

ってましたが、確信しました。ここに置いておいたら、彼が知っていることはなにもかも聞き出されてしまうに違いないですよ。本人の自覚もなしに」
「……楽しそうですね、貴殿は」
心外な、といいたげに商人は眼をくるりとまわした。それから顔を近づけ、小声で尋ねた。
「ところで、どうしても気になるんですがね、何ってもよろしいですか？」
「なにをです」
「あなたのお供の、あの女性ですよ！　あなたが女性を連れ歩くなんてまぁ、その、びっくりじゃないですか。ついに春ですか？」
わざわざ声をひそめて語る内容が、それか。ヤエトは冷淡に返した。
「春というにはもう遅いでしょう。北嶺ですら、夏に入ったほどですから」
商人は鼻に皺を寄せた。
「あのね。その返し、気がきいてるとでも思ってらっしゃるんですか？」
「いいえ。鬱陶しい話題を終わらせたいだけです。もっと効果的な返事があれば、教えてください。そのまま口にしますから」
「つれないなぁ」
ナグウィンは大袈裟に息を吐くと、後ろを着いて来るファルバーンをふり返り、ううん、と唸った。
かれらはルス公家の城の庭を散策していた。ラとは、公を意味する北方の言葉だという。つまり、ラ＝ルスはルス公という意味になる。
ただし、ラが公を意味するのは家名に使われているときだけで、個人名ではまた別の意味になるそうだ。他所者にとっては、まぎらわしい決まりだ。
使節をつとめていたデュラルクは、このルス公家の仮の当主である。城に着くなり、使節の役はもう終えたので、と彼は告げた。摂政閣下とでも呼んでくだされればよろしい、とつづけた声の調子に、ヤエトは支配者の奢りとでもいうべきものを感じた。否

を唱えることを許さない強さが、そこにはあった。

――そろそろ、レイランド公子が後を継いでもよさそうな年齢ではあるのだが。

公子を担いでデュラルクをしりぞけようと考える者を探し、共闘するにたる存在かを見きわめねばならない。到着後、さっそく一族の有力者には紹介されたものの、初対面の他所者にいきなりうちとけた話をする者があろうはずもなく、初日は顔あわせだけで終わった。

セルクはずいぶん緊張した顔つきだったが、たった一晩で慣れた。図々しい男だ。朝餉を終えて、庭には一緒に出たのだが、ルス公家の若い者たちに囲まれ、手を引かれて中庭の方へ消えてしまった。

護衛の騎士たちは顔を見合わせ、三名がセルクを追った。ヤエトはそれを見送り、残った三名にうなずいて見せた。

「あなたがたもゆっくり散歩なさい。気を張りつづけていては、疲れがたまる」

どうせ、ここで襲われたら終わりだ。

それに、セルクやヤエトに危難が及ぶ可能性は低い――到着翌日に殺すくらいなら、ここまで連れて来るような面倒なことはしないはずだ。案じられるのは、セルクが度を越した失礼をやってのけることくらいだが、それこそ心配してもしかたがない。

――長期的には、セルクが傀儡にされることを警戒しなければならないかもしれないな。

こちらがレイランドに対して考えていることを、そのままやり返される可能性がある。今、北嶺の君主は皇女だが、それを追い落としてセルクを権力の座につけようと目論まれたら、どうすべきか。

――セルクがセルクである限り、皇女に逆らうとも思えないが……。

人の心は変わるものだ。

ヤエトは足を止め、息を吐いた。

信じてやればよいものを、自分という人間は、まず疑ってしまう。心にそなえ、心の準備をしておこ

うと考える。面倒くさい。こんな風だから、次々に仕事がみつかって忙しくなるのだ。

なんでこういう性格なんだと鬱々としているところへ、気楽な質問をされた。

「それで、名はなんというんです。どこで拾って来たんですか」

「……わたしが暢気に女遊びをする人間に見えますか。わざわざこんなところまで来て。助けてほしいと同行をお願いしておいて、そのあなたの前でうつつを抜かすわけにはいきませんよ。だいたい、そんな体力がどこにあるっていうんです」

「そりゃそうですが。でもね、あなた、あらわれるたびに、ほかにたよれる人がいない、助けてほしい……ってのはどうにかなりませんかね」

「こういうことでは、あなた以外に、たよれる人がいないので」

真顔で答えると、商人は困ったように笑った。

「やめてくださいよ、ほんとうに」

「わたしが面倒ごとに巻き込まれなければ、よいのですが。実にしばしば、面倒なことになります」

「全力で回避なさってはどうです？　ああ、でもなぁ……」

意味ありげに笑って、商人はヤエトの肩をかるく叩いた。

「なんです？」

「変わってなさそうですね、良心のお値段は。あなたは面倒ごとに巻き込まれる運命だ」

「では、またお願いにあがるでしょうね。ほかにたよれる人がいないので、と」

「よしてくださいよ」

「ですが、今回もあなたの損にはならない話でしょう。直接取り引きに応じるよう、説得しますよ。めぼしい商材があれば、ですが」

「木材がねぇ……」

打てば響くように商人は答え、しかしあまり浮いた顔は見せなかった。

「流通経路の問題ですか？」
「川を流して、下流で取り引きしますよね。それを都に持って行くあいだに値が上がる……おや、その先は行けませんね。空濠かな」
「水は入っていませんね」
深く掘り下げられた空濠を見下ろし、戦時を想像してみた。腰高の石壁からは、身を隠して矢を射ることも可能だろう。中庭まで侵入されたい城主はいないが、それを想定したそなえは必要だ。
商人が、大きくため息をついて踵を返した。
「いい商材があっても、それだけじゃね。物を運ぶには、金がかかるんですよ」
「氷の運搬には、鳥をお貸ししますよ」
「それはありがたいですよ。とても、ありがたい。ですが、木材はねぇ……今より状況がよくなっても、鳥は使いづらいでしょうし。となると、やはり下流での取り引きですからね。物を運ぶのがもっと楽ならいいんですが、なかなかねぇ」
「わかります。瞬時に移動できれば、ほんとうに便利ですよね」
商人は口をつぐんだ。
去年、都から雪に鎖された北嶺へ戻ったとき、ヤエトはこの商人をたよった。商人の切り札は、長距離を一瞬で移動させるという、途方もない力をもった人物だった。
おそらく、その力を押さえているのは皇帝なのだろうが、ヤエトは詳細を探ろうとはしなかった。あれが誰だったのか。そして、正確にはどれほどの力があるのか。知りたくないわけではないが、彼がふれてよい問題ではなさそうだ。
「あそこにはもう、誰もいませんよ」
「心得ています。口外もいたしません。王にもお話ししていないほどです」
「……律儀なかただ」
「ほかに、取り柄がありませんので。ですから、せめて商売の手助けをと、思っているのですが」

「下流で取り引きできるようになったとしても、結局は、輸送に金がかかりますからね。既存の商売敵をしのぐのは、難しいでしょう。どうしたって、身内に好条件で卸すでしょうしねぇ」

皇帝にとっては、北方との経路ができることの意義が大きいはず。取り引きだけでも認めさせれば、大いに役立つだろう。そこから儲けを捻出したいのなら、それはナグウィンが頭を絞るべきだ。

「一応、話はしてみましょう。うまく根回しをすれば、街道の通行料が格安で済むかもしれません。そのへんは、北方人の商人よりあなたの方が有利なはずだ」

「……そうは仰いますがねぇ」

ヤエトは周囲を見渡して、大きく息を吸った。

「それにしても、木が多いですね」

城壁の内側にも、木立がある。壁の外は広大な森だ。三階にある部屋の窓から眺めると、視界の果てまですべて森というありさまだった。

これでは、手入れが追いつかなくても当たり前だろう。圧倒的な量だ。

「この一本一本に、北方の力が流れている……んでしょうかねぇ」

商人は、珍しく神妙な声だった。

「信じがたいですか？」

「にわかには。ですが、そういうことなんでしょうな。帝国の神官様たちは、神を崇めているのか人を崇めているのか、わからないところがあるじゃないですか」

ああ、これはご内密に、と商人は片眼をつぶった。

ヤエトは肩をすくめて答えた。

「平民には無縁な存在ですよ、皇家の皆様がたが崇めておいでの神などというのは」

「……きわどいことを仰る」

「そういう性格のせいで、北嶺に左遷されたので」

「よく都の尚書局で何年もつとまりましたね」

「部署から部署へと異動は多かったですよ」

おかげで、何年たっても平の尚書官だったのだ。
「いやいや……まぁとにかく得体の知れない相手ですね、北方の人々は。わたしらとは、価値の基準が違い過ぎるという気がします」
「それでも、かれらもすでに帝国の一部ですよ」
「……は？　でも、ここは」
ヤエトはうなずいた。
「領土の外ではあります。ですが、経済の上ではどうでしょう？　帝国が街道を整備し、物流を促進したからこそ、木材の販路もひらけたのです。当然、真帝国の建国前後で、商売は様変わりしたでしょうね。かれらも大いに影響は受けているのです」
「金が動けば物も動く。人も動く。動けば、おのずと変わっていく……ということでしょうなぁ」
ナグウィンは、どこか遠くを見るような眼差しになった。
わからないといえば、この男のことだって、わからない。どこからどう見ても帝国の血が流れているのに、伝達官の才があるのが、まず破格だ。何代か前に帝国貴族の血が入り、たまたま彼には恩寵の力が強く発現したということだろうが、見た目にはとても伝達官とは気づけない。
力が発現したのは、いつなのか。どういう訓練を受けたのか。そして、皇帝の非公式の伝達官になったきっかけは、なんだったのか。
興味はあるが、尋ねるのは不躾な気がする。
「世の中、わからないことだらけです。自分のことだって、よくわからない」
ヤエトがぼやくと、ナグウィンは微笑んだ。
「わからないことをよく調べも考えもしない人なら、そんなことを口走っても心配はしないのですがね。公の場合、放っておくとどこまでも考えてしまわれるから、少し怖いですなぁ」
「ご出身は、どこなのですか？」
「わたしですか？　沙漠のどこかですよ」
「なんという都市です？」

ナグウィンは、彼には珍しく皮肉っぽい表情で答えた。
「関係ないでしょう。すべては灰燼と化しました。滅びた街の名を唱えてどうなります。くちびるが寒いだけですよ」
「滅びたら、忘れられてもよいのですか。わたしはそうは思いません。覚えている者がいるあいだに、記録に残すべきです」
「忘れることが癒しになるんですよ」
つぶやいて、ナグウィンはまた視線を遠くへ向けた。見えるはずのない、砂上の楼閣を見ているようだった。
「しかし――」
「覚えている限り、憎まなきゃいけない。恨まなきゃいけない。それが、なんの得になります？　わたしは損得の勘定で動きたいんだ。だから、すみません、忘れたいんですよ」
商人は、ヤエトに視線を戻してまた謝った。
「すみませんね」
なにを謝っているのか。いや――。
――誰に、かな。
あの殲滅戦を生き延び、その上で皇帝に仕えているのだから、彼はなにかを捨てている。捨てて、今の位置を選んだのだ。
「僭越なことを口にしたようですね。わたしは、……忘れる方が、怖いので」
失われてしまうということに、自分は神経質だ。
――怖いのだ。
静かに、ヤエトは言葉をつづけた。
「時は流れて戻らない。形あるものは滅び、命あるものは死する。それはわかっています。ですが、それをそのまま忘れてしまうのは怖い。……ナグウィン殿、失うことを惜しむのは、恥ではないのです。わたしはそれを、王から教えられました」
ナグウィンは眼をしばたたいた。この世ならざるどこかを透かし見ていた視線が、戸惑うようにヤエ

トに向けられる。
「……え？　お姫様に、ですか？」
「自分は早死にすると思っていましたから。生に執着しないようにしていたのです。気づかぬまま、それが習い性になっていました。いわば、自分の身を惜しまぬよう心掛けていたのでしょうね。ですが、これも気づかぬままに、わたしは歴史を志すことで心の平安を得ようとしていたのではないかと」
「歴史で、ですか？」
「自分が死んでもなにか残ると、思いたかったのではないでしょうか」
「ああ、歴史に名を刻むとか？」
　ヤエトは微笑んだ。
「わたしに、そんな野心があるように見えますか」
「……すみません、見えませんね」
「自分の命を諦めているから、個人の栄光には興味がありませんでした。ですが……そこにないものは忘れてしまうのがよいといわれれば、わたしの存在はあまりに儚い。そうでしょう？」
「ですが、まだ生きておいでだ」
「ええ、生きていますが、余人に比較すれば、やはり死に近い。わたしが死んだら、あなたは忘れますか。覚えていても得にはならないから、と」
　商人は困ったようにヤエトを見た。
「あんまりいじめないでくださいよ」
　ヤエトはにっこり笑って答えた。
「いじめてなどいませんよ。いいんです、忘れてください。時の流れとは、そういうものでしょう。流れに逆らおうとするわたしの方が、どこかおかしいのかもしれません」
　商人は実になさけない表情になった。
「……それがいじめですよ」
「ひとりひとりの生きた軌跡を記録することなど、神にしかなし得ないでしょう。人にできるのは、せいぜい歴史を伝えていくことだけ。いずれ、お気が変わったら聞かせてください。あなたのことも」

「わかりました。わたしが商売を隠居したら、お話ししに参りますよ」
「皆、隠居しないと話してくれないな。ジェイサルドもそんなことをいうんです」
「悪鬼が隠居仲間ですか。うへぇ」
肩を落とした商人の向こう、木立のあいだに人影をみつけて、ヤエトは眉をひそめた。
――子どもか？
十歳になるやならずという年頃の少女である。腰まで伸ばした金茶色の髪が、上着のようにその上半身を覆っていた。襟の詰まった、くすんだ灰色の服の上には、小さな青白い顔。
商人もヤエトの視線に気づいて頭を巡らし、おや、とつぶやいた。
「いつの間に、ここに」
「公」
間近で呼ばれてぎょっとした。いつの間にといえば、あれだけ距離を置いていたファルバーンが、なぜかぴたりと寄り添っている。
ファルバーンは声を殺してささやいた。
「お下がりください」
――なにか、おかしいのか。
ファルバーンには、不浄を感じる力がある。しかし、北方にはそもそも、そうしたものが立ち入れないはずだ。だから、……と考えている間に、少女はふわりと動いた。
ヤエトは我が眼を疑った。
――今、地に足が着いていなかったような。
見間違いだろうか。
よく見れば、少女が手を置いているのは大樹の幹ではなく、古い石の柱だった。春に芽吹いたばかりと見える明るい緑は、木の葉ではなく柱に巻きついた蔦のものである。古い館の趾だろうか。折れた柱は、よく見ればそれ以外にも何本かあった。少女が身を寄せている柱が、もっとも背が高い。
風が、蔦の葉を波打たせた。押されるように、少

女の姿が前に出て来た。
「あなたが、もし」
かぼそい声だ。切り下げた前髪の下、髪と同じ金茶色の大きな眼が、まっすぐにヤエトを見ていた。
ぐい、と腕を引かれた。気がつくと、少女とのあいだにファルバーンが身体を割り込ませている。見たところ武器を帯びているようでもないが、寡婦の服は身体に沿ったかたちをしていない。皇女が短剣を忍ばせたひらひらの袖など、かわいいものだ。この服なら、どこでも仕込み放題である。
だが、いきなり剣呑なのは歓迎できない。
「自重せよ」
押し殺した声で命じた。ファルバーンはうなずいたが、しかし下がろうともしなかった。
少女はそのすべての動きを無視し、ひたとヤエトに視線を据えたまま、つづけた。
「……もし、風霊の教える人なら、あとで、わたしの言葉を聞いて。ここで」
――あとで？
なぜ、今ではいけないのだろう。
お嬢さん、と商人が横から声をかけた。
「お名前は？　どちらのお子ですか」
少女は答えた。
「ルシル」
そしてヤエトの方を見て、言葉をたした。
「語ったから。ここで」

3

少女との会話は、そこで途切れた。
なににおどろいたのか、少女ははっと視線を上げると、無言で身をひるがえした。木陰に飛び込み、完全に姿を消してしまった。
混乱したまま、ヤエトは城に戻ることになった。
デュラルクの家臣が彼を呼びに来ていた。
わたしはもう少し散歩しますよ、と商人が告げた

のは、少女を追うつもりなのかもしれない。ごゆっくりと挨拶して、その場で別れるしかなかった。

ヤエトはあのできごとについて考えるのをやめ、目下の交渉相手に注意を集中することにした。

向かいに座っているのは、デュラルクである。その隣には、もう少し年輩の男が座っていた。従兄にあたる、と紹介された。北方人はいちいち名告るのが礼儀らしく、それはつまり、大量の名前を覚えねば失礼にあたるということだと理解したのは昨晩で、会うたびに名告り直してくれるから多少は救われるようだと知ったのは、つい先刻のことだ。

デュラルクより赤味の強い頭髪を戴いた従兄は、ラズラフというらしい。正式にはラズ＝ウフ・ル＝ウル・ア＝ルフだ。家名より格が重要とナグウィンにはいわれているので、はじめにそこを自分の中で確認し直す。ア＝ルフは第三位、デュラルクと同格となる。

「通信の手段、ですと？」

そろそろ腹を割った話を一回、と向こうから切り出してくれたのを幸い、ヤエトはセルクを人質に置いていく条件として考えて来たことを口にした。それが、通信の確立である。

「はい。定期的に、使者の往来を持つことができれば、と思います」

一応、セルクも同席している。できるだけ喋るなと事前に含めたら、不満そうな顔をされた。とにかく、こちらの意見が割れるのを見せてはいけない、反論があれば後刻別室で聞くから当面は同意しかしてはいけない、最低限それだけは守ってくださいと、よくよく念を押しておいたが、さて理解してくれただろうか。

「ふむ。しかし、鳥はいけませんな」

「たしかに」

ラズラフがうなずいた。家名はラ＝ルスではないし、そもそもついているのがラではなくルである。傍系の有力な一族といったところか。年長者だから

顔を立てる必要があるのかも、と考えながらヤエトはわずかに頭を下げ、遺憾の意を示した。
「それは残念です。少しずつ慣れていただければ、と思っていたのですが」
「慣れる？　我が北の大地の上を、あの鳥どもが飛ぶのに慣れる？　や、失礼。しかし、それに慣れるつもりはありませんな」
デュラルクの返答は、きっぱりしたものだった。この程度は想定の内である。ヤエトは一歩、譲ってみせることにした。まず断らせて、相手の心に貸しを作る。ここまでは、本命を提案する前の下地づくりに過ぎない。
「交易にも、たいへん有用かと存じますが……そこまでお厭いになるのでしたら、鳥は諦めましょう。では、騎馬で」
「馬はこちらで用意せよと？」
「それでは貴国に負担がかかり過ぎる。北嶺から直接、馬を出せるよう、橋を架けます」
かたわらのセルクがぴくりと動いた。だが、相手がたはセルクの倍は驚愕していた。
「橋」
そういったきり、言葉が出ないようだ。
それはそうだろう。北嶺側は、渡りたければ鳥がいるのだ。渡りたくない、あるいは渡らせたくないときは、橋などない方が都合がよい。
それなりに友好関係が築けたとして、橋を架けようと切り出すのは北方のはずだ。なのに、先んじて北嶺相がそれを提案した。一方的な有利を捨てましょうか、と提案したようなものである。おどろかない方がおかしい。
「ただし、あの山道は整備していただく必要がありますね。馬車を通すのは難しいでしょうが、とにかく馬で通れる程度に。共同で作業してもよいですし、北嶺の者が入らぬ方がよろしければ、そちらでお願いすることになります。そのあたりは、あなたがたのご意向を重んじましょう」

デュラルクが黙ると、ラズラフが口を開いた。
「馬を通すとなれば、丸木の橋というわけにはいくまい。吊り橋も駄目だ。よほどしっかりした橋になる。足下が透けて下が見えてしまえば、どんな馬も怖じて進まぬぞ」
「存じております」
「それもわかった上で、馬も通れる橋を、あの谷に架けると？」
「馬を通すために架けるのです。橋はあっても馬は通れませぬでは、意味がないと思うのですが？」
当たり前のことをいったつもりだったが、ラズラフは完全に沈黙してしまった。デュラルクも、無言のままだ。感心なことに、セルクも黙っている。
となれば、ヤエトが話をつづけるしかない。
「架橋技術の問題もありましょうが、それは克服できるでしょう。人の知恵とは、はかり知れない。話が私事になってしまって恐縮ですが、わたしの領地では治水を進めている最中です。洪水を起こさぬために、用水路や堤をつくり、護岸もおこなおうと、さまざまな考えや技を持った者を集めました。無論、橋も架けます。あの者たちの話を聞いていると、わたしには橋が見えてくるのです。その気になれば、どこにでも架けられると信じられる。時間は必要でしょう。試したことのない方法も使うでしょうし、資材の運搬、費用の捻出、人手の確保はもとより悪天候との戦いも考えねばならない。ですが、助けあうことで問題の大部分は解決できるのではないか、とわたしは考えています。重要なのは、尽きぬ熱意です。そこに橋が必要だと考える、人の心です」
ようやく、デュラルクが口を開いた。
「架橋の方法から考えるのでは、さぞ時間がかかることでしょう。当面の定期連絡には役立たぬはず」
「では伺いますが、貴公がお申し出になった両国の友好とは、今日や明日に破れるものですか？　橋が架かるより前に、反故にされる程度のお約束のおつもりですか」



「いや、……左様なことを申したいわけではない。ただ、今すぐには使えぬものを、人質を置いていく条件として出されるのはどうかと」

ヤエトはわずかに眼をほそめた。摂政閣下は、強硬に反対する気はなさそうだ。このまま押してしまえと心に決めて、答えた。

「当面の不便はいたしかたありません。暫しは、馬や道のことで一方的にご負担をおかけすることになるとは存じます。ですが、橋が架かり、道がととのえば、往来も容易になりましょう。人と人の心の距離も近くなるはず。人の心に道をつける――それが北嶺王のお望みです。時間がかかるのは、当然のこと。積年の誤解をとき、互いが互いをありのまま認める。そのために必要な橋であり、道なのです」

ラズラフが唸った。見事な赤髭をしごきつつ、視線は机に落としている。

「橋などいらぬ」

「いや、橋は作っていただこう」

「デュラルク」

咎めるような口調にも、デュラルクは動じなかった。一門の長は自分だ、といいたげに宣言する。

「せっかくのお申し出だ。お断りする理由がない」

少し待ってから、ヤエトは尋ねた。

「ラズラフ殿も、ご納得いただけたでしょうか」

「いや――」

従兄の逡巡を断ち切るように、デュラルクが声をかさねた。

「決めるのは、わたしだ」

「お返事は急ぎません。わたしが帰国するまでに、お考えをお聞かせいただければ結構です。貴殿にも、祭りのあいだは返答をお待ちいただくという約束を課したのですから」

デュラルクは一瞬、口を歪めた。が、すぐにその表情を消して、答えた。

「いや、もう決めた。実に結構なお申し出だ、お願いしよう」

「ならん。橋など――」

ヤエトは無言で立ち上がった。椅子が床に擦れる音が、従兄弟同士の口論を押し止めた。嫌な音だが、効果的なことは否めない。

「どうか、お気が済むまでお話しあいを。上意下達も結構ですが、北嶺王が求めておいでなのは、それだけの関係ではありません。真の友好と、恒久的な平和です。より多くに、ご納得いただきたい」

にこやかに語りながら、嘘くさいなぁとヤエトは思っていた。北方人たちもそう思っただろうが、外交上の建前くらいは唱えておきたい。実際、その通りになれば、願ってもない展開なのだし。

一礼して辞する。セルクもヤエトに倣ったが、廊下に出たとたん、双の拳を握りしめて奇声をあげた。本人は小声のつもりだろうが、不意のことでヤエトはひどくおどろかされた。

「……なにか？」

「すごい。すごいな、尚書卿殿」

「もう少し、声を低くしてくれませんか」

無駄に大きなセルクの声は、廊下の端から端までどころか、しっかり閉じた分厚い扉の向こうまで朗朗と響きそうだ。

ルス公の城は石造りである。こんなに木が豊富なのに、城は木造ではない。石材にも困らないからだろうが、巨人族にあわせたのかと思われるような天井の高さに、圧倒される。廊下も幅が広い。騎馬の戦士がそのまま入って来て武器をふり回しても問題なさそうだ。守りやすいとはいえないが、逆に、勢いよく出撃するには便利だろう。あるいは、敵が城館の内部に入るまでに馬を降りざるを得ない仕掛けをつくっておけば、突入して来た敵を騎馬で一方的に屠ることができるはずだ。

――それこそ、下が透けて見える橋とかだな。

城の中庭には空濠があったはずだ。あれを使うのかもしれない。自分たちが出撃するときは、しっかりした橋を渡せばいい。なんなら水を入れて舟橋で

もいいだろう。敵襲を受けたら、囮に劣悪な橋を残してやればどうだろう。うかうか渡って来たところで、痛撃をくわえることができるか……と考えているヤエトの横で、セルクはしみじみとつぶやいた。

「恒久的な平和か……。姫様は、そこまで考えておいでだったんだなぁ」

今の建前を聞いた感想がこれか。呆れるのを通り越してしまいそうだ。

――素直にもほどがあるぞ。

上意下達と表現したのは、デュラルクとラズラフの力関係が不安定と踏んでのことだ。どちらも、ちらりと嫌そうな顔を見せた。

デュラルクは自分が上だと誇示したがっているが、そう思わない者もいるだろう。ラズラフは、デュラルクとの関係は対等であると認識しているに違いない。割れた意見を、自分が望む方向にまとめることができるのか。威張るだけの力がデュラルクにあるのか、お手並み拝見というところだ。

背景にある事情は、まだ想像がつかない。可能性が多過ぎるのだ。推論の手がかりを得るには、相手のとり澄ました顔だけでなく、素の表情を見る必要がある。

――揉めろ、揉めろ。

心中ではそんな風に思っていた……と教えてやったら、セルクはどう反応するだろうか？

ルス公家の内情を見定めるためにも、互いを疑い、足を引っ張りあってもらいたい。だから、敵の内紛を煽るようなことを口にしたのだ。それに感動してしまう味方も……少し、困る。

曖昧に微笑んで、ヤエトは答えた。

「北方の人々も、同じように望んでくれればよいのですが」

「そうだな」

――おや。

並んで歩くセルクの横顔は、考え深げな表情を浮かべている。さすがの単細胞も、素晴らしい、だか

ら皆が納得する、とまでは思えないのだろうか。

だとしたら深刻だな、とヤエトは思った。セルクでさえ容易に信じられない、明るい未来。それを、なんとか認めさせるのがかれらの使命なのだ。

「道を拓く役目は貴殿に託されているのですよ」

「……え？」

「人質として当地に留まるのは、わたしではない。貴殿です。北嶺の者にとって、当地の人の心は荒れ野のようなものでしょう。そこを耕す役目を、王は貴殿にお与えになったのです」

厳密には、北方側が一方的にセルクを指名してきたから、人質候補は選びようがなかったのだが。そこは、敢えて忘れてもらおう。

「人の心に、道を」

セルクは熱心にヤエトの言葉をくり返した。話の流れで必要になって口走ったに過ぎないその言葉が、よほど心に響いたようだ。

「腹が立つこともあるでしょう。それどころか、貴殿を害そうとする不心得者も、いるかもしれません。ですが、お忘れなきよう。吹雪の夜には星は見えないものですが、雲の向こうには変わらずにかがやいているはず。目の前の悪天候に負けず、星を探すつとめです。きっと、つらいものになるでしょう」

我ながら、よくもここまでそらぞらしいことをいえるものだと感心する。しかし、相手がセルクであると考え、彼が納得する説明をしようとすると、勝手に言葉が口から出てきてしまうのだ。

天然には、人を引きずる効果があるらしい。セルクを人質として受け入れたせいで、ルス公家の人々が皆こんな風になったら……怖そうだ。

「しるべの星が見えなくても、道をあやまたぬようにということだな！」

耳にしたくない言葉を口にされて、ヤエトは少したじろいだ。セルクにはそのつもりはないだろうが、しるべの星という言葉からヤエトが連想するのは、なによりもまず、預言者ウィナエだ。

忘れろ忘れろと心の中で唱える。
「当家の若者たちが、やたらと親しげですが……あれも、無理をしているものと考えた方がよい」
ああ、とセルクは声を漏らした。
「そういうことか……そうだろうな。俺たちが鳥を殺された恨みを忘れられないのと、同じだな」
いわずもがなのことではあったが、一応、ヤエトは注意しておくことにした。
「人と鳥を同列に扱うのは賢くないですよ」
「は？」
「北嶺ではよいのです。ですが、当地でそれは、いけません。化鳥なんぞと自分たちの家族を同じに語られることに、我慢がならぬと思う者もいるでしょう。鳥を殺すのと人を殺すのは、わけが違うというのが当地の常識です」
「その常識を塗り替えるのも、俺のお役目だろう」
「……は？」
ぽかんとするのはヤエトの番だった。セルクはうなずいて、胸を叩いた。
「やってやる。鳥たちがどんなに賢くて、素晴らしい仲間なのかを、きっとわからせる」
「現物がいないのに？」
「俺を信じさせれば、ことたりる」
あっさり、セルクはいいきった。
「たしかにそうですね」
ヤエトは微笑むしかなかった。
――どれだけ困難か、わかっているのか。
セルクの言葉なら信じられると、皆に思わせることさえできれば。だが、まず壁がある。溝がある。夫や父親、兄や弟を殺した仇であるという深い断絶がある。北嶺は敵だという認識を拭うことが、はたして可能なのだろうか。
努力が必要なのは、セルクだけではない。
「……北方の人々も和平を望んでいるかどうかが、試されるのかもしれません」
誰かの心を変える。それは、たやすいことではな

い。説得する側の努力だけでは、無理なのだ。
「なんの話だ？」
「わたしが、あなたに金貨を渡すとします。どんなに渡したくても、あなたが受け取りたくないと思えば、それまでです。やせ我慢をしているだけなら、うまく受け取れる口実を探せばいい。相手がほんとうは欲しいものなら、渡すための手段を考えればことは済みます。ただ……金貨の価値を知らない者に、貨幣が物と交換できることを教えるのは難しい。市場のない場所で、商売とはなにかを実感させることは困難です。鳥がいないのに説得できるか、というのはそういう意味です。そして、金貨を送るという行為を疑う者に、それを受け入れさせるのは難しい。裏があるのだろうと誤解され、誹謗されることもあるでしょう。相手が金貨を憎んでいれば、憎むべき金貨に価値を置く者として、蔑まれるかもしれません。わかりますか？」
セルクは唸った。
「そうだな、たぶん」
「相手の心を変えてやる、と思わないことです。うまくいっても、なかばまでは相手の功。自分だけの力ではないと心得ておくことです。最善を尽くしても変わらないことがあるかもしれない……ですがそのときも、やはりあなただけの責任ではない。相手にも、理由はある。そう考えるべき問題なのです」
うなずいて、それからセルクは少し笑った。
「おもしろいな」
「なにがです」
「俺に、無理なことをやれと」
「……無理とまでは」
肩を叩かれ、ヤエトはつんのめりそうになった。なににつけても加減を知らない男だ。
「でも、尚書卿はそれを実現したんだな」
セルクが感慨深げにいうので、なんのことかとヤエトは首をかしげた。
「どういう意味でしょう」

「朝議だよ。去年のことだ。小娘になど従えるか、と息巻いていた皆を、貴殿が説得しただろう」
「あれは、わたしの手柄ではありませんよ。王が聡明なかたでいらしたからこそ、皆が認める気にもなったのです」
セルクは大きなため息をついた。
「うん……そうだな」
「当時はまだ、太守でいらっしゃいましたが」
「尚書卿も、ただの尚書官だったな」
「前任者の引き継ぎをして、ばったり倒れたりしましたね」
左遷されたのを幸い、今度こそ波風立てずに生きていこうと考えていたのに、現実はこれだ。
「俺は……貴殿が頑張っているのを見て、心打たれたんだ」
「頑張る？」
セルクは怒ったような口調で答えた。
「ほら、そうやって。頑張ったことなどございませんん、みたいな顔をする！　でもな、貴殿はすごいんだよ。到着するなり青い顔して具合悪そうで、でも前の尚書官の何倍も熱心に、まず議事録の読み直し。並べ直して、綴じ直して。目録も作ってた」
「……ろくな記録がなかったですねぇ」
とくに頭を使わねばならない内容でもなく、量も少なかったから、簡単な仕事だった。昨今、ヤエトが処理を求められる書類の質と量を考えると、遠いところへ来てしまったなぁ、と思う。
「朝議にも真面目に出て、ずっと記録をとってただろう。皆……ただの口喧嘩なのに」
「自覚があったのですか」
ぽろっと本音がこぼれてしまったが、セルクは気にしなかった。
「去年はともかく、今はわかるさ。あれはひどかった。でも、そのひどいところに来ても、ちゃんと自分の仕事をしようとしてただろう？　それで、俺は自分たちの駄目さに気がついた。見習って、きちん

としようって。なんとかしなきゃって、思った」

――おどろいた。

セルクがヤエトをそういう風に見て、評価していたことを、はじめて知った。原因不明に高く買われているのは、セルクの帝国贔屓のせいかと思っていたのだが、それだけではなかったようだ。

「地味な仕事をしていただけのわたしに高評価を与えた貴殿こそ、なかなか得がたい資質の持ち主だと思いますよ」

真面目に返したのに、セルクは吹き出した。

「そうやって、手柄は皆、自分以外のものだというんだな」

「実際、そうですから」

「謙遜するだけ無駄だから、やめてくれ」

それをいうなら褒めるのも無駄だと思うのだが、ヤエトは黙っておくことにした。それこそ、時間の無駄である。どうせセルクは自分の信じたいようにしか信じない。

――わたしのことならなんでも、よい方へと誤解して信じそうだ。

ひょっとすると、セルクはその虚像を目指そうとしているのかもしれない。かつて彼がヤエトに見た理想、異国から来た孤高の官吏への憧れを、再現しようとしているのかも。

自分とは思えない架空の自分を目標にされるのは、実に微妙な心地がする。

「……気もち悪いな」

「ん？」

「いや、……ああ、またお若いかたがたがお待ちのようですよ」

廊下の奥に人影をみつけて、ヤエトはセルクをうながした。

「隊商双六をやろうと、誘われているんだ」

「賭け双六ですか？」

「まさか。賭けなどするものか」

妙な借財でも背負われたら困るが、グランダクに

さんざん遊ばれているせいで、セルクは賭けが好きではない。そこは安心できると踏んで、ヤエトは別の助言をすることにした。

「ごまかしをしない相手かどうか、負けたときや勝ったときの態度の違いに注意なさい。遊技は現実の縮図です。真摯に遊ぶ姿勢を見せる相手の方が、信用できるものです。遊びは遊びと割り切れる人間は、損得の割り切りもたくみですからね。得にならないと見れば、親しい相手も切ってしまう」

「なるほど」

「双六に限りません。貴殿に求められているのは、よく見聞きすることです」

セルクは熱心に聞いている。助言を聞き流されることがないのを幸運と思うべきだろう。ヤエトは慎重に言葉を選び、セルクに伝えた。

「相手が見せたくないところにこそ、真実が隠されているものです。使用人や下級の兵士を見なさい。城に出入りする民の服や、持っている道具、連れている馬を。かれらの体型や表情を見れば、暮らしぶりも推測できる。敵になるにせよ、味方になるにせよ、相手を知らないことには話になりません。土地を見、地勢を知りなさい。貴殿は誰よりも北方を理解する北嶺人になるのです。そのためにこそ、王は貴殿が人質になることをお許しになったのだと、心得なさい」

セルクはうなずいた。

「心得た」

依頼しているのは間諜の仕事だが、おそらく、セルクにそんな意識はないだろう。手を挙げてほがらかに挨拶をし、大股に若者たちの方に歩いて行くセルクの後ろ姿を見送って、少しだけ羨ましい、とヤエトは思った。

4

城中は自由に見てまわってよい、ただし、立ち入

りを禁じられた場合は指示に従うように……と、申し渡されている。だが実際には、建物の中はあちこちに見張りがいて、すぐに通行を差し止められてしまう。城門に近づくことも、許されなかった。

――まぁ、当然だろうな。

北方の使節団が北嶺に滞在していたときも、似たような扱いをせざるを得なかったのだ。そこそこに行動を制限しておくのが、お互いのためだ。

馬車で通って来たときに見た限りでは、街がない。その点では北嶺の主城と同じだが、もともと北嶺の民は一か所に留まって過ごすことが少ない。狩りに行けない者だけが、冬に家族の戻って来る家を守っている。そういう土地柄だから、城の周辺に城下町がなくても不思議はない。

だが、北方はどうなのか。

たしかに城の敷地は広大ではある。それでも、街というほどの規模はない。まさに一族のための居館だ。使用人や兵士はいるが、庶民の姿が見えない。馬車で来た道はよく整備されていたが、沿道に街はおろか、人影すら見えなかった。

見たままの印象で推測すると、ルス公家が支配する人口は少なく、北嶺と比べて強いのは一族の結束だけ。集住しているこの城を陥としたければ、短期間で可能だろう――ただし《雷霆の使者》の力を考えなければ、の話だが。

朝も散歩をしていた中庭をうろつきながら、ヤエトは《雷霆の使者》について考えていた。

ルス公家は、《雷霆の使者》を輩出している名門だ、と聞かされている。北の大地から与えられる力が強いということだそうだ。恩寵という言葉で呼びたくなるが、神などいないと断言するかれらにとっては、侮蔑にひとしい表現だろう。

ともあれ、この城は異能者によって守られていると考えるべきだ。見た目ほど容易には陥ちないだろう。城下町がなく、小規模にまとまっているのも、いわば少数精鋭の証かもしれない。

とくに力の強い者が《雷霆の使者》と呼ばれるくらいだから、雷を扱えるのは上級者だけにしても、風を乱されれば鳥もまともに飛べなくなる。雨が降れば飛速が落ちるし、視界も悪くなる。天候は、戦闘の重要な条件だ。一族のほとんどが能力者であれば、交替で戦えるだろうから、長期戦にも耐え得る。全員で力をあわせ、爆発的な戦闘力を発揮することも可能だろう。

——武力にたよるのは避けるべきだな。

北嶺側からことを起こさざるを得なくなるのは、セルクが殺されたときだろう。人質を殺されて、そうですか、で済ませるわけにはいかない。

セルクには、なんとしても生き延びてもらわねばならない。絶対に。

「これだけ木が多いと、雷は怖いでしょうね」

ヤエトは手近な木の幹に手をあてた。見上げた梢は遠く、その向こうにある空はもっと遠い。たなびく雲は灰色に、空は深い藍色に沈みつつある。

「木と雷に関係が？」

低い声で、ファルバーンが尋ねた。

「雷は、木に落ちやすいのです」

答えて、ヤエトはファルバーンを見た。暗くなりつつある景色の中で、その白銀の髪は明るく見える。紗をかぶっていてもごまかしようがない。だが、髪の色までは布越しにわかっても、眼の色を窺い知るのは困難だ。

女装も役に立たないわけではないな、と思う。元アルハンの王族であるという身体的特徴を、容易に隠すことができるのだから。

それに、ふたりで歩いて来ますといえば、ごゆっくりと意味ありげに皆が見送ってくれるのも便利ではある。セルクに至っては、これでグランダクが賭けに負けるところを見られるなどとわけのわからないことをいっていたが、いったいどんな賭けがおこなわれているのか。

ファルバーンは木を見上げてつぶやいた。

「こんなに背の高い木がたくさんあると、圧倒されます」

北嶺には大樹がないし、ファルバーンが暫く過ごした《黒狼公》領も、どちらかといえば横に広がる樹形の木が多い。ここの木は、皆まっすぐ天を目指している。木立には荘厳さがたちこめているが、どこか窮屈さも感じさせる眺めだ。

北嶺の民なら、空が狭いというだろう。

「沙漠では、木に雷が落ちるとはいわないですか」

「高いものに落ちるとは聞きました。雷呼びの塔を見たことがあります」

「ああ、避雷針ですね」

ファルバーンは首をかしげた。

「避けるのではなく、呼ぶのですが？」

「呼んで、避けるのですよ。わざと落雷させ、それを地面に流して逃がす仕掛けです。そうすることで、ほかの場所には雷が落ちづらくなります。でも、ここでは作るだけ無駄かもしれないな……」

「木が多いからですか」

「だから、《雷霆の使者》なのでしょうね」

つぶやいて、ヤエトはまた空を見上げた。雷を扱えると聞くと、自在に呼べるのだろうと考えてしまう。だが、本来はそれを避けられる力として、尊重されたのではないか。落雷から集落や森を守るために、かれらは技を磨いたのかもしれない。

「雷が、怖いから？」

ファルバーンが問い、ヤエトはうなずいた。

「天候をあやつる不思議の力は、さまざまに呼ばれ得るとは思いませんか。たとえば沙漠であれば、降雨の恵みこそが望まれるでしょう。南方であれば、涼風かもしれない。北嶺はどうかな」

「夏入りの風では？　祭りで、皆の気分が浮き立っているのを感じました」

ヤエトはうなずいた。

「土地には土地の決まりがあるし、それを知るためには行ってみるのがなによりですね。今のわたしの

推測が正しいかどうかは、ともかくとして。土地の人々も、どういう理由で名づけたかは覚えていないかもしれません」

共通語以外にも、《雷霆の使者》には土地の言葉での呼びかたがあるだろう。呼び名の祖形がもっと純粋な形で保存されているかも……と考えたところでヤエトはぐっと袖を引かれ、立ち止まらざるを得なくなった。ファルバーンのしわざである。

外交交渉担当として、ヤエトは豪勢な服を着用せざるを得ない。偉そうに見せるのは、彼の仕事の一部である。よって、引っ張り放題の袖に甘んじるしかない。

そもそも官服だろうが平均的な貴族の服だろうが関係なく、なんでこう袖口が長いものばかりなのか、理解に苦しむ。長くないのは武官の服だが、ヤエトがあれを着るわけにもいかない。

服とは、それを着用している人物がどういう存在であるかを社会に示すための手段である。官吏なら官服、貴族なら貴族らしい服を着ておけば、彼を見た誰かが混乱せずに済む。まともな服を着るとは周囲に親切をほどこすことだ、と彼は考えている。

考えるというより、あきらめているというべきだろうか。服装に特段の思い入れはないが、常識を無視した恰好をすると、説明を求められて逆に面倒なことになる。こだわりなどないのだから、立場をはずさない服を着用した方が楽だと結論した。

なにも考えずに官服を着ていればよかった平尚書官のころはともかく、今でもそれが楽といえるのかは微妙だ。貴族になってからは、制約が多い。とはいえ、気をつかわない恰好をすれば、それがそのまま皇女の評判に直結するだろう。面倒くさいなぁ、とヤエトは思う。

思いながら、長い袖をファルバーンの手から引き抜いた。

「引っ張らないでください」

「失礼。ですが、方向を間違えておいでです。もう

少し、あちらでした」

ヤエトはため息をついた。

彼が向かっているのは、朝の散歩で少女と出会った場所である。たぶん、そのはずだ。自分ではわからない。ファルバーンがいなければ諦めていた。

しかし、と今頃になってファルバーンは尋ねた。

「なぜ、あの場所へ？　寒くなって参りました、あまり長く戸外を歩かれると、お身体にさわります」

「長くしないように努力するよ」

身体はたしかに休ませるべきなのだろうが、あの城にいると閉塞感を覚え、心が休まらないのだ。だから朝も散歩に出たのだが、ファルバーンは感じないのだろうか。

「あちらです」

ファルバーンが示す方を見れば、木と見紛う古い石柱があり、蔦の葉が風に揺れていた。

そこに、少女の姿はなかった。

デュラルクの配下が見張っているのかもしれないが、少なくともヤエトの視界にはファルバーン以外、誰の姿もない。

無人の木立と、古い石の柱。そして、風。

あとで、と少女は告げた。

――あとで、わたしの言葉を聞いて。

もし風霊たちが告げるような人ならば、と。

「風霊という言葉を知っていますか」

「いいえ」

「わたしも知りません」

少女の言葉はたどたどしかった。北方人も沙漠から広まった共通語は使うが、土地の言葉自体も別に存続していると聞く。共通語は一般教養として学ぶもので、卑賤の民は北方語しか話さないと。

あの少女は共通語を学んでいる。この館の中にいるくらいだから、地味な服を着ていても公家の一員なのだろう。風霊という言葉は、共通語の「風」と「霊」を繋げただけのもので、一般的な表現ではない。少女が作ったのか、あるいは北方で独自に流通

している言葉かのどちらかだ。
「大地に選ばれたといいながら、かれらの能力は風や雷といった大気にかかわりの深いものだ。なんとなく、不思議ですね。もっと、そうだな……たとえば、植物が見る間に伸びるといった力の方が、大地の力と呼びやすい」
「はい」
ファルバーンは当惑しているようだ。ヤエトは思いついたことを端から言葉にしているだけで、自分でもこの話がどこに着地するのかわかっていない。それを聞かされるファルバーンも気の毒だが、言葉にすることで思考が整理されるのだ。少し我慢してもらうしかない。
「氷姫の昔話は知っていますか？」
「常春の庭に住まう美姫の話なら、酒場で詩人が語ったのを聞いたことがあります」
「ああいった、植物を育てる力の方が、実益に結びつきやすそうなのに、《雷霆の使者》だ……よほど雷が怖いのか、あるいは大地に近い力よりも大気をあやつる力の方が、より高等で強いものと考えられているのか。なんにせよ、風は北方では重要な要素であることに間違いはない……」
あの少女がここに待っていてくれたなら、ずいぶん楽ができたのだが。現実には、無人である。
となると、確認しないわけにはいかない。
ヤエトは少女が立っていた場所に立ち、柱に手を添えた。そして、ささやいた。
「誰も近寄らせないでください」
「おまかせを」
――さて、久々だ。
倒れるわけにはいかない。慎重に、しかし確実に、時を戻してみよう。
ヤエトは深く息を吸い、吐いた。自分が空になったと感じるまで、長く、ゆっくりと。呼吸法だけは体調が許す限り練習をつづけていたので、ほとんど考えることなく身体がやってくれる。

——聞かせてもらおうか。

もし、少女が特別な異能者なのだとしたら。

考え過ぎかもしれない。だが、少女の言動はあまりに印象的過ぎた。風霊という耳慣れない言葉もそうだが、あとで、という曖昧な指定も。

少女がヤエトに伝えたいことを、この場に語り残しているのだとしたら？

その仮定が事実なら、少女はヤエトの力を知っていることになる。過去視の恩寵持ちだと知って、その上で示唆されたのだとしたら、無視するのが当然ではないか。応じてどうする？

だが、無視できなかった。

余人に知られることが、怖い。それは変わらないはずなのに、今は恐怖を感じない。

ただ、知りたい。

柱の周辺が、ぼんやりと昼の光を取り戻す。少女の姿がふっと浮かび上がった。記憶にあるよりずっと克明だ。

一歩、ヤエトは下がった。近過ぎて、少女の頭のてっぺんしか見えないのでは困る。

少女は柱と向きあっている。まるでその柱が話し相手だとでもいうように見上げ、少しはにかんで。それから口を開いた。

——わたしは知っている、あなたの名前。

早口に、少女はつぶやいた。

——おかしな響き……ヤエト。

たしかに、レイランドとかデュラルクとかラズラフとかに混ざると、ヤエトというのは奇妙な名前と聞こえるだろう。

——わたしは呼ぶ。ヤエト。あなたが教える。わたしに、教える。風がそういった。わたしは風霊と話す。時間の向こうを知る。

少女の声はかすかで、今にも途切れて消えてしまいそうだ。なのに、ヤエトにははっきり聞こえた。心の中で声がしているようだ。

——でも、風霊は自由。時に、とらわれない。

それがなにかの合図でもあったかのように、不意にすべてが明瞭さを増した。なにもかもが克明に見え過ぎて、どこを見ればよいか判断に困るほどだ。少女の頬に浮かんだ小さなそばかす、睫毛の先に宿る光のかけら、その蔭に覗く金茶の眼。

まるで太陽だ、と思った。鳥の眼に似ている。黄昏の琥珀色、豊穣な秋の陽光を孕んだ眸。くちびるは、少しひび割れていた。

——時の向こうの、順番がわからない。古いと新しい、混乱する。あなたはしない。順番がわかる。混乱しているさ、とヤエトは思った。ひどく当惑させられている最中だ、と言葉を返したかった。

少女の言葉をそのまま受け取るなら、相手は今以外の時間の流れを覗き見ることができるらしい。そんなことがあり得るのか。

過去の真実を教える神オルムスト、そして未来を教える神ターン。この双方の網にかからない、時の旅人がいるなどということが、あるのだろうか？

少し、少女は迷った。言葉を探しているようだ。

——あなたも必要なこと。昔の約束。古い物語。とらわれた風を、自由にする。そうすれば、風もわたしたちを助ける……。

少女は柱を見て口を結んだ。不満げな表情だ。切り下げた前髪の下、額にも皺を寄せている。

——わたしは教える。これから、わたしは会う。あなたに会う。風霊が教えた。わたしに教えた、きっとこの先、すぐ先の話。あなたには、過ぎた話。わたしは話す。あなたは無言。でも、隣の人には話しかける。

少女は首をかしげた。

——じちょ、せよ？　わたし、言葉知らない。

手に汗が滲むのを覚えた。我知らず摑んでいた蔦（つる）の蔓が、手の中で滑る。

少女はヤエトを見ている。まるで、そこに彼が立っていると知っているかのように。

——あなたは来る。来て、ここで話す。さっきと



同じ人に、話す。誰も、近寄らせない。

息を吐くと、少女は身体の向きを変えた。風が髪を揺らす。光が散乱し、まばゆさにヤエトは眼を閉じる。もういい、と思う。もういい、もう終わりだ、と。だが、今に戻ろうとする彼を、なにかが引き留めた。少女の力なのか。双眸に宿る光は、直視し得ぬほどの強さとなっていた。

太陽だ、とヤエトは思った。唯一にして無二の存在。そういいたくなるほど圧倒的な力が、そこに少女の姿で立っていた。

――わかったら、わたしの名を呼ぶ。あなたが呼ぶ。風霊が、あなたの言葉を運ぶ。わたしに運ぶ。わたしはル＝シル・ル＝ウル・ア＝ヴルス。この館では、誰も呼ばない。呼べば届く。かならず。

少女の幻影が消える前に、ヤエトはその名を復唱していた。

「ル＝シル・ル＝ウル・ア＝ヴルス……？」

――どこかで聞いた名のような。

そのとき、風がヤエトの頬を撫でた。彼はぎょっとした。どこがどうとはいえないのだが、ふつうの風ではない、と感じた。

ファルバーンもなにか不審なものを覚えたらしい。声を殺して告げた。

「おかしな気配がします」

「今、風が――」

変だった、と言葉をつづけかけて、ヤエトは世界がくらりと揺れるのを感じた。

――まずい。

目眩がひどい。そんなに無駄な力を使ったつもりはないし、以前よりずっと慣れているのに。やはり、疲れているのだろうか。

「お部屋へ戻りましょう」

丁重な口ぶりだが、命令だと思うべきだろう。ファルバーンの表情が本気である。紗をかぶっていてくれてよかった、と思う。きっと、間近に見たら怖い顔をしているに違いない。

くらくらする頭を抱えながら、ヤエトは歩きはじめた。そして、思いだした。

――今、あの子が名告ったのは、ナグウィンが注意しろといっていた格じゃないのか？

アニルフでもアニレイでもない。少女ははっきり、アニヴルスを名告っていた。

それだけではない。

ルニウルは、交渉の席にデュラルクと同席していた従兄、ラズラフの家名だったはずだ。そして、ルニシル・ルニウルとつづけられて、ようやくこの家名に聞き覚えがあった理由に気づいた。

――レイランドの妹だ。

妹ではない、と公子は即応した。養女に出した、妹ではない妹。彼が身をもって庇わねばと判断したのは、ただ血縁からだけではなく、少女がアニヴルスの格を与えられていたからなのではないか。

それを人質候補にできるのだから、デュラルクはすでに一族の主権を握っている。デュラルクに逆らうことは誰にもできなかったのだと考えるべきだ。

デュラルクの足場を崩すか、それとも彼と結ぶか。どちらにせよ、情報がたりない。

――さて、どうする？

ヤエトは自分に問うてみた。セルクはもう焚き付けた。当面、彼から聞きだせる情報は相手が見せたがっているものだけだろう。それはもちろん、ありがたく教えてもらうとしても、隠したがっている部分も探らねばならない。

手札が少ないおかげで、悩まずに済んだ。

「ナグウィンと話したい」

ファルバーンの返事は常識的なものだった。

「まず、お部屋に戻られることです」

5

「ですから、やめてくださいと申し上げたのに！」

ナグウィンは悲鳴をあげた。

そう来るだろうと思った、と考えながらヤエトは商人の手を握り、息も絶え絶えという顔つきで言葉を継いだ。

「あなたしか、たよれる人がいないのです」

「……わざとですね？　わざとわたしを困らせようとなさっている！」

「まさか。考えてください、あなた以外の誰にたのめるというのです」

長椅子から半身を起こしているヤエトを見下ろし、商人は大きなため息をついた。

「真面目に、お話し申し上げているのですがね」

「わたしはいつも真面目です」

「そうでしょうとも」

商人はヤエトの手をやんわりと払い、卓を挟んだ椅子に座った。その勢いに、ぎしりと座面が軋む。

少し咳き込んで、ヤエトも座り直した。ふと、皇女がいたら、横になっておれと命じられるところだな、と思った。だが、寝たまま喋るのも、それなりにやりづらいのだ。

「ナグウィン殿、そもそもア＝ヴルスという格について教えてくれたのは、あなたではありませんか。今の世に、北方すべてを引き受けるほどの力の持ち主が生まれている、注意せよ、と。注意するには、問題のア＝ヴルスの人物を知る必要があります。本人の性質も、それをとりまく周囲の状況も。できるだけを、知るべきです。違いますか？　それを今さら、調べてくださいとお願いしただけで、そんな逃げ腰になられるのはおかしいでしょう」

いやいや、と商人は頭を左右にふった。

「信憑性（しんぴょうせい）があるわけじゃないんですよ。ア＝ヴルスがいるらしいというのは、商人仲間に聞いた噂に過ぎませんし」

「つまらない嘘をつかないでください。身内としか取り引きをしない北方人の話を聞き込んで来るなんて、ずいぶん都合のいいお仲間だ」

「公……」

ナグウィンは眉尻を下げ、泣きだしそうな表情で手を揉みしぼった。こんな所作を実際にする人間がいるのだなぁ、とヤエトは少し感心した。しかし、だからといって手加減しようとか、譲ってやろうとかは思えない。

相手は、知らぬふりをしているだけだ。それなら、とぼけても無駄だと教えてやればよい。

「わたしに明かせない事情があるのもわかりますが、もう少し、胸襟を開いて話しませんか。でないと、帝国が瓦解するかもしれません」

「そんな、まさか」

「ア＝ヴルスが北方という国ひとつを背負うだけの力がある存在なら、それなりの扱いを受けているはずだと思いませんか？　伝達官が皇族に準ずる扱いを受けるのとはまた違いますが、《雷霆の使者》でさえ、使節をつとめたデュラルクに対し、へりくだる態度は見せなかった。むしろ、デュラルクの方が譲っているようでしたね」

「まぁ、そんな感じではありましたが、それが？」

「ア＝ヴルスは、レイランド公子の妹かもしれないのです」

「……は？」

眼をしばたたく商人に、ヤエトは畳みかけた。

「ル＝シル・ル＝ウルという、ル＝ウル家の養女がいます。これが、レイ＝アンド・ラ＝ルスの血を分けた妹で、格がア＝ヴルス」

「ちょっと待ってください、そんな話をどこで」

「もう妹ではない、とレイランド公子はいいました。妹ではない、ルス家の娘ではないから人質には出させない……ということだったのでしょう」

「人質ぃ？」

商人の声が、裏返った。自分で自分の声におどろいたらしく、両手で口を押さえる。

ヤエトは部屋の隅に立っていたファルバーンに視線をやると、命じた。

「外に出ていなさい」

ファルバーンは動かない。しかたなく、ヤエトは言葉をたした。

「命令です。あなたがわたしに仕えているというなら、外に出ていなさい」

承服しがたいという雰囲気をただよわせつつ、それでもファルバーンが廊下に出ると、ヤエトはナグウィンに視線を戻した。商人はまだ混乱しているようだ。

「あの……待ってください。その、なんですか。つまり、ア＝ヴルスの格を持つ娘が先代ルス公の娘で、人質に出されそうになった、と？　それを逃れる目的で、別の家の養女に、ですか」

「レイランド公子はア＝ヴルスを守るため、自分が人質になったのではないでしょうか」

「しかし、そんなことがありますかね。ア＝ヴルスを国外に出すなんて、正気じゃない。だってあなた、ア＝ヴルスっていうのは――」

言葉を探すように、ナグウィンが手を宙に舞わせた。動揺すると、身ぶりが大仰になるようだ。ヤエトはそっと、言葉をさしだしてやった。

「現人神（あらひとがみ）、ですか？」

「そう、そうですよ。北方には神がいない。大地の力が直接、人に宿るんです。ア＝ヴルスともなれば、土地神の力そのものが、人の手に委ねられた状態みたいなもんでしょう。それを追い出そうなんて、望んで力を捨てるようなものだ」

「そういうことができるほど、デュラルクに権力があるのでしょう。彼は神だけでなく、ア＝ヴルスの力をも信じていない……いや、尊重していないのかも。彼は、古い大地の力にたよらない、新しい基準を手に入れたのではないでしょうか。それがなんなのか、北方諸領内で、彼に賛同する者がどれくらいいるのかを探らないことには、動きようがありません。ですから、調べてくださいと」

商人はこわごわという口調で尋ねた。

「動くって、誰がです」

「帝国ですよ」

皇帝が、とはいわなかった。それでも、ナグウィンは正確に意味を読み取っただろう。

ほんの一瞬、表情が消えた。そこには、数えきれぬほどの修羅場をくぐり、心胆を鍛えられた男の顔があった。皇帝が伝達官の身体を乗っ取る、いわゆる《臨》かとも思ったが、それにしては竜気が見えない。

これがナグウィンの素の顔なのだろう、とヤエトは思った。どこかジェイサルドに通じるものがある。本人にいえば嫌がるだろうと思いながら、ヤエトは言葉をつづけた。

「北方の古い政体は崩れかけているのではないかと思いませんか。その原因の一部が帝国にあるのは、まず間違いないでしょう。どこでどう繋がっているのか、確認する必要があります。いったい誰が得をするのか、もね」

「そりゃまぁ、知っておくべきことでしょうが」

「わたしは身動きがとれません。賓客という名の虜囚ですからね」

ああ、と商人は頭を抱えて息を吐いた。

「……もうね、絶対、たよられてもすがられても力を貸そうなんて思ったりしませんからね」

「あなたは勇敢な人ですよ、ナグウィン殿。だからまた、力を貸してくださいます」

「わたしはね、ただの商人ですよ。護衛がつくわけでもない、身分もない、なんにもない！　金だって、大して儲かるわけじゃないんだ」

「氷の専売は、きっと儲かりますよ。今年の夏が楽しみですね」

「……夏まで生きていられればね」

ヤエトは苦笑した。

「わたしが口走りそうなことを、先にいわれては困ります」

「だってねぇ。わたしだって、ただふらふらしていたわけじゃないですよ。それなりに耳を澄まし、眼

もきちんと開けていました。だけど、ここでアヴルスの話は聞いたことがない。ちょっと話題をふってみようという気にもなれないほど、そういう話が出ないんですよ。《雷霆の使者》がここには常駐していないの、ご存じですか」

「馬車に同乗していた《雷霆の使者》が、すぐに立ち去ったのは知っていますが」

「この土地は、《雷霆の使者》をたくさん生み出してる。いくら世俗とは無縁に生きる決まりといっても、故郷の家族から乞われれば、力を貸そうと思う者もいるでしょうよ。昨冬の北嶺戦、あれに参加した《雷霆の使者》たちは、同業のお仲間たちには内密に、本来してはならないことをした。人情と、金と、権力欲で動いてしまったんです」

「《雷霆の使者》は、俗世を捨てる決まりがあるそうですが……かれらは、どうやって行動を決めるのでしょう？　たとえば昨冬の戦に力を貸すべきか否か、といった判断は誰がするのです」

「大地の求めに応じるというのが建前らしいですね。わたしら俗人にはわかりませんが……ただ、昨冬のはどう見ても裏切りだったんですよ。大地のためではなく、人のためだった。親族の、あるいは自分の、俗世での成功のためになされたことだと、誰の目にもあきらかだったんです」

商人の告発を、ヤエトは黙って聞いていた。

――力の扱いは、難しい。

自分のためか、他者のためか。その見きわめをあやまると、こうして批判されることになる。

「それで勝てばともかく、ぼろ負けでしょう？　だから、ルス公家は《雷霆の使者》たちと折り合いが悪くなった。呼べば来てくれるような甘い相手は、戦で使いきってしまったんですな。だからもう、ほんとうに必要なときにしか、《雷霆の使者》の協力は仰げないんです。たとえば、北嶺に使節を送る……とかね。和平を持ち出さなきゃならなくなったのは、そのせいもあるんでしょう。後始末ですよ。自分た

ちでしたことの責任はとれという圧力が、強かったに違いないです。《雷霆の使者》からもですが、他の公家からも感じたでしょうね」

一気にそこまで話して、ナグウィンはまた頭を抱えてしまった。ふうん、とヤエトは思った。

――なるほどね。

いくらナグウィンが優秀でも、この短期間にここまで調べ上げることはできないだろう。すると、可能性はふたつ。摑んでいた情報を出し渋っていたか、ここで間諜に接触し、そこから情報を得たか。

どちらかな、と思いながらヤエトは尋ねた。

「しかし、その和平の道具にア＝ヴルスを差し出したりしたら、もっと風当たりがひどくなりそうなものですが」

「ア＝ヴルスを葬り去るつもりかもしれませんね」

商人の声は、おどろくほど暗い。

「どういう意味です？」

「権力欲の強い人間なら、《雷霆の使者》は自分の競争相手だと考えるでしょう。自分の権勢を削ぐ相手だ、と。とりわけ至高の存在になり得るア＝ヴルスなんて、便利に使えないならいなくなれ、くらいのことは思うんじゃないですか」

いわれてみれば、なるほどと思うしかない。

「しかし、《雷霆の使者》たちだって、黙ってア＝ヴルスを殺させはしないのでは？」

「もう死んだことになっているのかもしれませんよ。それこそ、北嶺で殺されたとか」

「ひどい冤罪ですね」

商人は肩をすくめた。

「まぁ、さすがにア＝ヴルスが死ねば《雷霆の使者》にはわかるでしょう。生まれるとすぐに、わかるらしいですからね。逆も同じはずだ。つまり、罪をなすられるなら、これから先の話ですね」

「どのみち、押しつけられると？」

「悪いことはなんでも宿敵のせいにしておけば、仲間の結束も高まりますしね。同族が裏切るより、憎

むべき敵国に殺されたという話の方が、信じやすいでしょう？　人って、そういうものですよ」

淡々とした口調だったが、言葉には重みがあった。ナグウィンが積み重ねてきた人生のどこかに、そういう事件があったのだろうと思わされるような。

額をさすりながら、ヤエトは眼を閉じた。ぼんやりとした頭痛が早く消え去ってくれないかと思う。熱が出るほどではなさそうだが、気もちが悪い。

「権力、権力。皆好きですね、権力」

「まぁねぇ。きわめれば、人に顎で使われずに済みますからねぇ」

「そんな理由で権力を欲するのでしょうか？」

素朴な疑問をぶつけてみると、やれやれ、といわんばかりの口調で答えられた。

「わたしに訊かれても困りますよ。……わたしは儲けを出すのが好きだから商人をやってますがね、ここにあれを運べばどれくらい売れる、と読むのがいちばん楽しいんですよね。自分の予測がぴたりと当たったときは嬉しくてもう。公だって、商売のことかどうかはともかく、読みが当たると嬉しいでしょう？　そういうお人だと思いますよ」

「……それは、まぁ、そうかもしれませんが」

「人の動きを読む。これは、相手を支配するようなものです。ただし受身というか、人を直接的に動かす志向がない。そこが大きな違いです。権力欲にとり憑かれている人たちは、命じて、実行させるのが好きなんでしょう。ですがね、わたしにいわせれば、そんなのはつまらない。命令したんじゃ、予測の楽しみがなくなるでしょう？」

商人がそんなことを考えているとは思いもよらなかったので、ヤエトは少しおどろかされた。

「儲けを出して、それでどうしようとかは考えないのですか？」

「次の仕入れはなにを、どれくらい、とは考えますがね。それで権力を買おうと思ったことはないですね。だって、転売できないでしょう」

「転売？」
「権力は、失ったら買い戻せない。手に入れたら死ぬまでしがみついていないと、危険な品物です。売れないものに興味はありませんよ」
「そうなのですか？」
「そんなもの、仕入れても不良在庫になるだけじゃないですか。商売上がったりだ」
「……わたしも変わった人間だと思いますが、ナグウィン殿もかなり変わっていませんか？」
商人はヤエトの言葉をうち消すように、顔の前で何回か手をふった。
「とんでもない！　自分が変人度で公と並べるとは思ったこともありません。とにかく、政治権力を握るのは嫌ですね。商売の邪魔です」
「……わたしも一応、特権階級の人間なのですが」
「一応だなんて」
感心しないという顔で見られてしまい、ヤエトはくり返した。
「一応、です。この身分を返上して、いずれは隠居する予定ですが、無理でしょうか？」
ううん、と商人は腕を組んで唸った。
「敵がいない状況であれば、なんとかなるのではないですかね。しかしねぇ……真面目に、かつ衷心より申し上げますが」
「はい」
「無理だと思いますよ、隠居なさるなんて」
ヤエトは商人の言葉を聞かなかったことにした。
「アヨヴルスといえば、氷姫が有名だそうですが……姫というからには、彼女も名家の生まれだったのでしょうね」
「いつの間にか、昔話にもずいぶん詳しくなられましたね。氷姫は王の一人娘です。ただ、氷姫の父王も権力欲にとり憑かれた人物だったそうで。自分の地位が脅かされるのを恐れ、長く娘を幽閉していたとか。おかげで氷姫が生まれ持った力を使うまでに時間がかかり、南方の侵攻を防ぐことができるかど

うかの瀬戸際になったといいます。その教訓を生かすためでしょう、《雷霆の使者》が世俗の権力にかかわらないという決まりができたのは。家を出て、同族のあいだで技術を研鑽すると決まっていれば、血族の絆に惑わされずに済みますからね」

「ですが、今のア＝ヴルスは……」

商人は顔をしかめた。

「ルス公家の姫君に生まれたのが災いしたんでしょうねぇ。ア＝レイであっても、レイランド公子が《雷霆の使者》にならなかったようなもので……」

「先代の遺児は、レイランド公子と姫君のふたりきりだそうです」

ジェイサルドが渡してくれた系図を信じる限り、そういうことだった。直系を守るために、ア＝ヴルスといえども容易には家を出せなかったのだろう。

しかし、デュラルクが実権を握って事態は変わった。レイランドは妹を守るため、ルス公家の直系が途絶える危険をおかしている。一公家の直系よりも、ア＝ヴルスの安全の方が上と判断したに違いない。

「忌むべき存在、しかし英雄でもある」

馬車の中で聞いた言葉を思いだしてヤエトがつぶやくと、ナグウィンは眉を上げた。

「なんの話です？」

「氷姫のことです。呪いでありながら、誇りにも思う、と……《雷霆の使者》がいっていました」

「まぁ、魔王をうち負かしたんです。見事というしかないですが、同時に国も滅亡しましたからね。それができるだけの力とともに生まれてしまったというのが、氷姫の呪いですな。……お話を聞いてずいぶんわかりました。とにかく、情報を集めるのはこの城では難しいですね。わたしだって、そう自由に動けるわけじゃないですし、ア＝ヴルスの話を持ち出すのは危険過ぎる」

「……わたしも、あなたの話でいろいろと腑に落ちることがありました。やはり、胸襟を開くべきときだったようだ」

「もっと話せといわれても、もうなにもありませんからね」
　用心深く応じた商人に、ヤエトは新たな情報を投げてみた。
「わたしの方は、あります。ア＝ヴルスは、おそらく、今朝がた出会った少女です」
「えっ？　今朝って、あの……庭にいた？」
「あのときはルシルと名告っていましたね。ル＝シル・ル＝ウル――」
　名前を正確に口にするのが賢明かどうかはかりかねて、ヤエトはそこで言葉を切った。あのとき吹いた風の、なんともいえない気色の悪さを思いだしてしまう。
「ちょっと待ってください。あの子がア＝ヴルスだというのは確実なんですか？　なにか確証が？」
「風霊が、あの子に情報を伝えるそうです。些末ではありますが、その場に居合わせなければ知らないはずのことをいくつか――わたしが連れの者に語りかけた言葉がなんだったか、といったことを当てました。不思議な力の持ち主では、あるようです……風霊というのがなんなのかは、わかりかねますが」
　商人は真面目な表情で問い返した。
「風霊？　それは風妖のことではないですかね」
「わかりません。共通語があまり得意ではなさそうでした……それに風妖という言葉もわたしは存じませんが？」
「シダーカというんです。古い言葉でね。今の共通語では、精、と」
「なるほど」
「それにしても、油断のならない……。いつの間に、あの不思議な娘とまたお会いになったのです」
　ヤエトは黙って微笑んだ。訊くな、訊いても答えない、という意味だ。
　ナグウィンは大きく息を吐き、話を戻した。
「精というのはね、魔物よりもっと人から遠い存在です。ただ、昔は人に近しい場所にいた。あらゆる

ものに精が宿っていた時代があったのです」
そういう考えかた自体は、歴史を学んでいくつか知っている。だが、ナグウィンの話は、ヤエトの曖昧な知識よりずっと具体的だった。
「火、水、風、土。この四種類がことに図抜けて力があると考えられていました。南方では、呪師たちがこれを使役していたのですよ」
「精を？」
「そうです。やつらは精にも名を被せて使ったそうです。公もご存じの通り、呪師の術は名被せの決まりにのっとっていますからね」
「……では、名明かしの術を使う者もいた？」
「ええ、いたそうですよ。妖魔使い、あるいは妖魔の王、という存在がね。妖魔というのは、本来は沙漠の言葉でも南方の言葉でもない。もっとずっと古い、滅びて久しい言葉だとか」
「名明かしとは人外のわざ、神の力だとジェイサルドには聞きました」
ヤエトがつぶやくと、商人はうなずいた。
「悪鬼の言葉はいつも信じてよいわけではありませんが、それは真実ですね。名明かしは人外のわざです。人が扱えるものじゃない」
「では、ア＝ヴルスが風霊……いや、風妖を使っているなら――」
「名被せなんかじゃないでしょう。この土地で、それはできない。つまり、本物だということです」
呪師のように、穢れた力なのではないか。そう疑ったところ、正反対の答えをされた。ナグウィンの表情は真剣だ。
なにもかも信じるわけにはいかないといえば、この商人だってそうだ。それでも、今の言葉は嘘とは聞こえなかった。
「では、あの子は名明かしができるのですか」
「明かす必要がないんでしょう。ア＝ヴルスは北の大地のすべてをつかさどる。人であるかないかはもちろん、生物と無生物の境界すら無意味です。意味

があるのは、それが北方に属するか否か、それだけです。ア＝ヴルスはすべての名を知っている。そして、その名に命じることができる」

「それは……ずいぶん絶対的な権力だ」

「だから、ずっと申し上げているじゃないですか。ア＝ヴルスは、人がふれるべきでない力です」

「一件を、陛下にお伝え願えますか」

ナグウィンは口をつぐんでしまった。

お互い様だ。ヤエトは答を待たなかった。

「あの少女は遠からず、ふたたび接触してくるでしょう。ですからア＝ヴルスについては、あなたにはお願いしません。わたしが自分でなんとかします。あなたは、ルス公家の内情について、調べればよい。デュラルクにはおそらく、帝国内部に同盟者が存在するはずです。その価値観に乗ったからこそ、ア＝ヴルスをかろんじることができているのでしょう」

第三皇子は去年の一件で皇帝の不興を買い、帝国内では大きな動きはできない。だが、ここなら監視もないし、もともと同盟関係にあったのだ。まだ繋がりが残っているなら、北嶺戦での不始末をとり返すべく動いている部下がいても、おかしくはない。この人質の交換自体、第三皇子の入れ知恵だという可能性はあった。

北嶺側の記録を参照できないので確実なことはいえないが、古老の記憶で辿れる範囲では、北嶺と北方の二国間での人質の交換というのは、例がなかった。政略結婚さえ、ないのだ。となれば、外部の発想と考えた方が納得がいく。

――第三皇子に限らないのかも。

第五皇子が王に封じられた太緑国も、国境を北方に接している。ヤエトは、踏野郡で間近に見た皇子の暗い眼差しを思いだしていた。少しまるめた背中のせいもあって、どこか風采が上がらない青年だった。その隣で食えない笑顔を浮かべていた踏野太守のことも、忘れるわけにはいかない。

上流から北嶺、踏野、太緑と並んだこの二国一郡

が、北方諸領と河を挟んでいる。
「そりゃ、わたしはその方が助かりますが……つまり、アヨヴルスについて調べろといわれても、わたしには無理ですよ。ですが、公はどうなんです」
「どう、とは？」
「アヨヴルスは人じゃない。氷姫の例を引くまでもなく、それは強力な呪いです。そんな力の持ち主に近づくおつもりですか。へたをすると、命を落としますよ」
「それは困りますね」
商人はいやいやと頭を左右にふった。
「そんな、少しもお困りでないようなお顔で仰られても、信憑性がありませんから！」
「今回ばかりは、ほんとうに困るのです。死なずに戻ると、王にお約束したので」
「……よいお約束をなさいましたね」
「守れなければ、よい約束とはいえませんが」
「守ってください、たのみますよ！」
「約束ですから、守りますよ。わたしも無駄に死にたいわけではないですしね」
商人はヤエトの顔を見て、長いため息をついた。
「無駄でないならいつでも死ねるみたいな仰りようは、おやめください。背筋が寒くなります」
「いつでも死ねるなど、誰がいいました。今は死ねないと、お話ししているのですよ？」
商人は頭を左右にふって、考え深げに眼を伏せた。
「まぁいいですがね。ひとつ、申し上げておきましょう。陛下はあなたを助けたりはなさいませんよ」
ヤエトはおどろいて答えた。
「そんなこと、期待していません。それより、すべての名を知っていて、それを通じて命じることもできるのだとしたら……なぜ、あの子はなにも命じないのでしょう？　兄が人質にやられるのも、阻止できたでしょうに」
「運命の日まで、氷姫は諾々と幽閉されていたそうです。父王の命に従ってね。強い力を持ってはいて

も、あの子もまだ子どもなんでしょう」
「なるほど。安心しました」
「安心？　なにをです」
「人ではないと脅されましたが、やはり人なのだと思います。神ならば、幼いからといって力の使いかたがわからないということはないでしょう。どんなに力が強くても、不思議な存在でも、人は人です」
ヤエトは真面目にいったのだが、商人はからかわれたと思ったのか、思いきり顔をしかめられた。
「まったくもう、あなたという人は！　いいですか、ただ子どもなんじゃなく、人の情が薄いだけならどうします？　兄が自分をかばって異邦へ遣られることに、なんの感動も覚えないだけだとしたら」
「そうですね。そういう可能性もありますか……。まぁ、困ったら、またお願いしますから」
「なにをです！」
商人が悲鳴のような声をあげるので、ついおもしろくなって、ヤエトはにっこり笑って見せた。
「どうしても、我があるじのもとへ帰らねばならぬのです、助けてください、とね」

6

ルス公家の城に着いて五日目の夜を迎えたところで、呼ばれた。
深い淵からぼこりと泡が浮かぶように。
――ヤエト。
呼び声は、彼の内部にある。
全身が凍った。身の内から呼ばれるなど、今までに経験がない。
真っ先に思ったのは、呪師のことだった。呼ばれる心地がする、とジェイサルドは説明していた。雑踏の中で漠然と呼び声を耳にとめてふり返る、そんな感じなのだと。皇女も、たしかそんなことをいっていた。寝る前に呼び声がする、だから暗くなるのが怖いと、少し恥じながら明かしてくれた。

今、彼が直面しているのは、そんな曖昧なものではなかった。

呼び声は明瞭で、間違いようがない。ほかのすべてを圧し、五感による現実との接触を遮断しそうなほどだ。

――ヤエト。

気味が悪いのはともかく、声には明るさがあった。あるいは正しさ、というべきだろうか。呼ばれるたびに、混乱した想念が流されていく。

ヤエトがヤエトであるというその事実、存在の根幹に近い部分が洗いだされ、音楽のように鳴り響く。世界をふるわす完全な和音の一部でありながら、独自の音色をそなえる、この世でただひとつの音。

――ヤエト。

それが自分の名だと知ることは、この上ない快感だった。

白く飛んだ視界の彼方に、至高の楽園を感じた。見えざる都市を囲む光の壁を、尖塔を巡る風の息吹を、そしてりんりんと鳴り響く彼の名を。

――ヤエト、答えて。

「はい」

ファルバーンが顔を上げた。

「公、なにか？」

ヤエトは眼をしばたたき、苦笑して答えた。

「いいえ、なにも」

ファルバーンは話のつづきを待つように暫し作業の手を止めていたが、やがて諦め、つづきにとりかかった。彼はヤエト付きの女官ということになっているので、衣服の整理など、身の回りの世話をすべて引き受けて、控えの間に寝泊まりしている。

当然、お手つきだろうと噂されているに違いない。これがほんものの女性であれば、評判を気にしてやらねばならないが、ファルバーンは騙り、いわば架空の女性であるから、そこは気楽だ。架空の人物の未来の幸せまで気遣う必要はないだろう。

むしろ、気にしなければならないのは自分のこと

だ。今の声が空耳でなければ、彼は呪的な力をそなえた呼び声に返事をしてしまったことになる。

もう、声は消えていた。

――アヨヴルスか？

少女は彼の名を知っていた。今さら呼ぶまでもない気もするが、なにか呪的な意味でもあるのだろうか。あらためて支配力を及ぼす効果があるとか。

憶測してもしかたがないし、してしまった返事はとり戻せない。

早晩、連絡してくるだろうとは思っていたが、こんな形でとは。

――選択権がなかった。

呼び声を閉め出すことも、無視することもできない。応答を求められれば、突き動かされるままに返事をしてしまっていた。

身の内に呼び声があるなど、あまり体験したくはないものだ。あの凄まじさは、どうにも説明のしようがない。

興味深いのは、それにもかかわらず、呼び声がはっきりとした不快感をともなわなかったことだ。

たしかに、違和感は覚えた。おどろきもした。終わってみれば、返事を強制されたも同然だと苛立ちもした。

だが、呼ばれるのは心地よかった。

世界は音である、と感じた。世界は名前でできている。人の口の端にのぼらぬまま消えてしまう名も、存在自体が知られぬような名もあって、自分の名もそのひとつに過ぎないと理解した。しかし同時に、かけがえのない、たったひとつの名でもあるのだ。

唯一の響き。すべての名前がそうなのだと、信じられた。

澄み渡る世界を、彼は感じた。どこまでも奥深い空と、庭先の葉にはしる葉脈の一本ずつ、その尖った葉先に夜露が少しずつ姿をあらわしていくのを同時に把握するようなものだった。

――これが、アヨヴルスの力なのか？

名を呼ばれただけのヤエトが、ここまで感覚することができたのだ。本人は、どれほどの精度と規模をとらえ得るのだろう——もちろん、ア＝ヴルスの呼び声かどうか、彼には判断できないのだが。

だいたい、あの少女がア＝ヴルスなのかどうか、そもそも自称しているようにル＝シル・ル＝ウルであると信用してよいのかも、わからないのだ。

しかし、これもヤエトにはどうしようもない。デュラルクかラズラフにル＝シルという少女に会ったのですがと報告すれば、彼の預かり知らないところでなにかがどうにかなるかもしれないが。

——選択権のなさでいえば、より絶望的だな。

結局、謎はそのままにして、待つことしかできないようだ。

ヤエトは眉根を寄せ、デュラルクにたのみこんで貸してもらった辞書を眺めた。

北方には独自の文字があって、歴史書も残されていると聞いたときには、なにが蛮族だ、文明社会じゃないか、むしろ南方や北嶺が野蛮なのだ、これが本来あるべき国の姿だ、と小躍りしたい気分だった。だが、問題があった。

読めないのだ。

北方語は、沙漠を発祥地とする現在の共通語とは、まったく違う言語らしい。表音文字だから、少し訓練すれば発音を推測することはできるだろうが、その先は高山を登るがごとき難行だ。共通語に翻訳したものはないのかと尋ねたが、おどろいたように、ありませんと答えられた。

排他的な民族だから、翻訳など用意するはずがない。もし本が流出していても、河向こうの蛮族たちは——と、ヤエトは容赦なく評価をくだした——歴史を記録する習慣がない。これでは、訳本がつくられるはずもない。

河のこちらと向こうは断絶している。永きに亘り、互いにそうしてきたのだ。

橋とは、それを変えるための明確な手段だ。

デュラルクは、その考えに乗って来た。

――彼は、境界を外へ押し広げようとしている。ありていにいえば、野望とか野心とかいった言葉に近く、剣呑な発想を含んでいるのも、まず間違いないだろう。帝国のお株を奪うような膨張主義が、その根底にあるのかもしれない。

だが、だからこそ彼は改革者たり得るのだ。

デュラルクは意志が強い。古いものをただ守るだけでなく、自分の願望のために変えていくだけの心胆の強さがある、とヤエトは見た。

でなければ、神にも等しいア＝ヴルスの存在を圧殺し、人質に出そうなどとは考えられまい。

デュラルクは革新を望んでいる。北嶺と北方の関係に変化をもたらしたいヤエトにとっては、都合がよい。

レイランド公子を人質に出した手口や、そもそも昨冬北嶺に攻め込んだことを考えると、無邪気に応援できる相手ではないのも明白だ。彼の望む変化の性質を、その方向性と程度を推測し、うまくつきあっていかねばならない。少なくとも今、これから、橋を架けるという一点では協力できるにしても、その先はわからない。

橋を架けると決まったとしても、それだけでは済まないだろう。そして、ここまで急進的な改革を推し進める者がいれば、かならずそれに反発する動きもあるはずだ。その争いがどこで、誰と、どう起きてどう展開するのか。それも観察する必要がある。

――革新派と守旧派の比率を知りたいものだ。

この城の中だけの話ではない。北方諸領の領主たちのあいだでは、どれくらいの割合なのか。

――明日になれば、多少はわかるか。

まずはルス公家と関係の深いロキ公家の長と会談を、といわれている。明日にはこの城を発ち、ロキ公家の支城へ向かうことになっている。

ヤエトとしては、領主たちとの面談は一気に済ませてしまいたい。どこを優遇したとか、事前に密約

ができているとかいった憶測をされることは、避けたいのだ。

しかし、地歩をかためねば無理だといわれれば、それもそうかと思う。北嶺を間近に暮らさざるを得ない地域の領主たちと、そうでない領主たちとのあいだには、当然、北嶺への態度に温度差がある。関心などないという者もいるはずで、それに対して日限を切ってさっさと集まれと強制力を発揮するほどには、ルス公家の力は大きくないだろう。

ロキ公家は支城があるというくらいだから、まずまず大きな一族で、影響力もあるのだろう。そう信じるしかない。

地図は、まだ手に入れていない。地形図と勢力分布図の双方が欲しいが、相手もおいそれとは渡してくれないだろう。立場が逆なら、ヤエトだって渡さない。偽地図をでっちあげるくらいのことも、するかもしれない。

とにかく、とヤエトは考えを大きく戻した。

――人質交換が安全保障として機能するようにせねばならない。

これが最低限、彼のなすべきことだ。

今のところ、セルクは粗略な扱いを受けてはいないようだ。本人も、妙なところで短気を起こさぬよう、気をつけてふるまっている。

自分と交換されたのがどんな人物か知りたいからと理屈をつけて、レイランドについて皆に尋ねるという力技までやってのけた。ただし、さしたる情報は得られなかったらしい。

なにを考えているかわからない奴だそうだ、とセルクは複雑な顔でヤエトに告げた。なんでそんな表情かと思えば、セルク殿は実にわかりやすいが、という枕があったからだという。レイランド公子はその反対で、まったく読めないのだと。

誰にでも親切で、如才なくつきあいはするが、実のところなにを考えているのかわからない人物だというのが、皆の一致した意見らしい。

一族の支配権を叔父に狙われているとあれば、隙を見せられないのも無理はないか、とヤエトは思う。彼が知っているのは、祭りの会場で皇女の胸の谷間に視線を落としていた年相応の若者としてのレイランドである。なりたくて相になったのか、と問われたのを思いだし、ヤエトはため息をついた。

彼が心を許す人物を、みつけねばならない。デュラルクの牽制に、レイランドは使える。

今はデュラルクと橋を架け、将来的にはレイランドとデュラルク、どちらかよりよい協力者になってくれそうな方に助力して、間接的にルス公家の力を使えるようになっておきたい。

人質交換がルス公家の暴走でないとはいいきれないことも、ヤエトを悩ましていた。北嶺が交渉すべきは、諸侯のひとつではない。北方全体なのだが、実際のところ、どうなのだろう――レイランド公子の命の重さは、北方全土に認知され、重要視されるほどのものなのだろうか？

デュラルクは、遠くの領主とは会ってもしかたがないだろうなどと放言した。かれらは北嶺にも、帝国にも関心がないのだ、とまでいった。

全体と交渉できないなら、完全な切り崩しを考えるべきかもしれない。遠方の領主ほど危機意識が低いだろうから、油断もしているはずだ。付け入る隙も、たっぷりある。やはり、面談はしたい。

いや、本心をいえば、そんな疲れることはしたくないのだが。

「面倒だな」

ぽつりとつぶやきを漏らすと、ファルバーンが微笑んで答えた。

「そう仰せになるときにはもう、心に決めておいでですね。なにかをなさる、と」

たまに、ファルバーンにはおどろかされる。目立たぬように心掛け、周囲の様子を窺いながら生きてきたせいだろう、この青年は人間観察が得意だ。その眼差しが他者に向けられているときはともかく、

自分が分析されると微妙な心地がする。
「そうかもしれませんが、……自発的になにかしようと決意したわけではないですよ」
「状況から、これをやるしかないと判断なさり、実行に移されるのでしたら、それはもう自発的と申し上げるしかないように思います」
知るかボケ、と吐き捨てて隠居したい。
痛切にそう思った。
――それができないから、困る。
なぜ、できないのか。放っておけない性分だからだ。誰よりもボケなのは自分ではないか。
敵は、身近過ぎてふり払うことができない相手である。生涯かけて飼い馴らすしかない。命数が尽きる前に、なんとかしたいものだ。
「自発的にやりたいことといえば、隠居とか」
投げやりにつぶやくと、ファルバーンは苦笑した。
「皆さん、困っておいでしたよ。公が隠居したいと仰ったらどう応じようかと。頭を突き合わせて相談なさっていました」
「……いつ？」
「北嶺で、皆を集めてお話をなさったときです。姫様の塔に公をお迎えするお支度をしているあいだ、聞こえて参りましたよ、相談する声が。病み上がりで、もう隠居するといわれたら引き留めづらいとか。そこをなんとか遺留するのが姫様の腕の見せ所です、いや将軍こそ古いつきあいを盾に頑張れ、いやいや古いつきあいといってもこちらに借りがあるので盾にはとれませんとか、なんとか。始終、そういう話をしておいでのような雰囲気でしたね」
そんなことがあったのかと呆然としているヤエトに、ファルバーンは肩をすくめて見せた。
「わたしにまで水を向けられました。そなたも助力せよ、と。そういうわけで、隠居のお手助けだけは、お断りすることになっております」
――今こそ、知るかボケと吐き捨てるべき場面なのではないか？

ヤエトが真剣に悩んでいると、扉が叩かれた。来客は、セルクだった。
「ナグウィン、来てないか？」
「いいえ。部屋にいないのですか？」
セルクはファルバーンにちらと視線をはしらせ、知らないか、と尋ねた。ファルバーンは無言で小さく首を左右にふり、畳んだ衣服を運びはじめた。
その背に向かって顔をしかめると、セルクはヤエトに向き直った。
「隊商双六の必勝法を教えてくれる約束だったんだが、部屋を訪ねてもいないし、姿が見えない」
「警護の者は、なんと？」
「そんなの、ナグウィンの部屋の前にはいなかったぞ。引き連れて出かけたのかな」
「ああ、いや、どうでしょう。北嶺の騎士は、あなたとわたしの護衛についているだけで、ナグウィン殿には――」
ただの商人なんですから、とぶつぶついっていたことを思いだし、ヤエトは口をつぐんだ。
都にも顔がきく御用商人だというふれこみで、ヤエトはナグウィンの同行を認めさせた。外交交渉が通商の利権に及んだ場合、商人がいた方がより早く、具体的な話ができるからと。
それも嘘ではない。だが、同道してもらったのは、彼が皇帝の非公式な伝達官だからだ。
ナグウィンは皇帝の耳目であり、間諜のようなものだ。正体を知っているのは、一行の中ではヤエトひとりである。重要人物ではあるが、あからさまに護衛することはできない。護衛の騎士たちには、ナグウィンのこともヤエトやセルクと同様に守れと命じてあるが、実際のところ、おまけ程度にしか思っていないだろう。
そのぶんナグウィンは身軽に動けるが、北方側がこの商人を野放しにするとも思えない。
「北方の見張りがついているでしょうね、きっと」
「ああ、それはそうだろうな。俺にもたくさんひっ

ついてるぞ。影からこそこそと、面倒くさい」
「わかるのですか？」
「そりゃ、あれだけ注視されれば気になるからな」
セルクはどこか得意げだ。ヤエトは素直に感心しておくことにした。
「そういうものですか。凄いですね」
「尚書卿殿は、狩りをしないから。俺は……いや、北嶺の人間は皆、狩人だからな。腕の差はあれ、物陰から獲物を狙うことも、根気よく追跡することも、実地に体験してる。だから、自分が狙われたときも気がつくんだろうな」
ヤエトは首を傾げた。
「狙われているのですか？」
「殺気はないと思う。ただ、そういえば今日は人数が少ないな。ほかに用ができたのか――」
途中までいいさして、セルクは眉根を寄せた。そして、廊下につづく扉の方をふり返った。
ファルバーンがヤエトのかたわらに膝をつき、衣服をととのえるふりをしながらささやいた。
「この部屋の周辺も、今日は監視が少なくなっています」
自分にできないことを、まわりの人間はさらりとやってのける。皆が化け物なのか、自分が腑甲斐ないのか。両方かな、と考えながらヤエトはファルバーンにうなずいて見せた。
セルクがヤエトの方を見た。
「まさか、ナグウィンを追っているとか？」
「飛躍し過ぎですよ」
答えながら、ナグウィンがセルクとの約束を反故にするからには、なにかそれなりの理由があるのだろう、と考えていた。
彼は自分の置かれた立場をわきまえている。セルクの人となりも知っている。約束したのにいないとなれば、セルクが騒ぐこともわかっているだろう。
「とにかく、北方人に訊けばわかるだろう。見張っているのだしな！　ちょっと訊いて来る」

「……いや、お待ちなさい。影から見張っているのを知っていますよと教えるのは、不粋なのでは」
「粋とか粋じゃないとかいう話じゃないだろう」
ヤエトは苦笑した。セルクが巻き込むのはヤエトだけではない。北方人の、姿を見せている護衛だけでもない。物陰に隠れて見守る監視者まで、騒がせようというのだから、直球勝負にもほどがある。
セルクには、ナグウィンが内密になにかを探りに行くために姿を消したのかも、という発想はない。ヤエトはその可能性を考えてしまう。
探りに行った先で、面倒なことになったのかもしれない。その場合、ヤエトはナグウィンを助けるべきだろうか？　手駒は少ない。それに、北方と揉めるわけにはいかない。
――面倒くさいなぁ。
先々のことを考え、生き延びるための保険をかけて立ち回るのは、実に面倒だ。
「必勝法を教わるということは、また双六の約束があるのですか？」
「ああ、そろそろ行くことになっている」
セルクが遊んでいる若者たちは、ルス公家の外戚を引っ張って来たとかで、もともとここに住んでいるわけではないそうだ。だから、デュラルクについては批判的な意見が飛び出すこともあり、レイランド公子に同情的な言葉も聞いたとは、セルクから報告を受けている。
――ここに住んでいた若い男は、あらかた死んだということだ。
ヤエトはそう理解したが、セルクはそこまで察しているだろうか。ついでにいえば、デュラルクへの反感やレイランド公子への同情が本音であっても、かれらはデュラルクの指示には逆らえない関係にあるはずだ。でなければ、北嶺から来た客人の相手をするために、ここに呼び寄せられたりはしない。
「では、行かれるといいでしょう。わたしはナグウィン殿の部屋で、彼が戻るのを待ちます。早く戻っ

て来たら、セルク殿のところに行って差し上げるよう、お伝えしますよ」
セルクはじっとヤエトの眼を見た。
「ナグウィンに、なにかあったと思うか？」
「なにかとは、なんです？」
「いや……だからなにか」
「なにごともなければ、じきに戻って来るでしょう。騒ぎたてて、却って事態を悪化させてもまずい。それと、隊商双六でうまくやるコツは、最初に勝たないことです」
「は？」
「最初にいい札を引いても、温存した方がよいでしょう。儲けている印象を与えると、参加者全員を敵に回しますからね。はじめは、損をしていると勘違いさせるくらいの方がよい。厩舎長に聞いたのですが、たまに、雪鳩に野生の鳥を交配させるそうではないですか」
「なんで急に鳥の話だ」
「その鳥の、卵を盗んだことがあるそうですよ。交配できるくらいだから、雛から育てれば人慣れして、うまく使えるのではないかと考えて」
えっ、と声をあげたきり、セルクは絶句した。鳥馬鹿めと思いながら、ヤエトは話をつづけた。
「結論からいって、使い物にはならなかったのですがね。とにかく、抱卵の時期に巣に近寄ると、親鳥の一方が、怪我をした風を装って、注意を引き付けようとするのだとか。ご存じでしたか」
「ああ、それは知っている」
「大事な卵を守るためには、いつわることも必要なのです。鳥だって、それくらいわかっている。真っ正直なのは貴殿の美点ですが、それにこだわり過ぎると勝負には勝てませんよ」
「……あなたにいわれたくない気がするが」
ヤエトはにっこり笑って立ち上がった。
「もうひとつ申し上げておくとすれば、その勝利は必要なのか、ということでしょうか」

暫し、セルクはわけがわからないという顔でヤエトを見返していたが、やがて、うなずいた。
「勝たせてやるのも必要、ということか？　相手の気分もよくなるだろうからな」
この天然男が、相手に悟られないように勝ちを譲れるとは思えない。どうせ見え見えの手を打つに決まっている。
「そうではありません。双六で人物を見ることができるとお教えしましたね？　相手も、貴殿の性格を知ろうとしているはず。目先の勝ち負けに惑わされ、姑息なことをしてはいけません。貴殿のよさは、腹蔵なく語ることができそうな、こう――」
ヤエトは少し、言葉に詰まった。馬鹿っぽいところ、というわけにはいかない。
「――おおらかさです。勝ち負けではなく、正々堂堂と爽やかなところを見せるのが、眼目でしょう」
「さっきの話と矛盾するぞ」
「そうですか？　勝たねばならぬなら詐術も必要ですが、必要とされているのは盤上での勝利なのか、それとも違うものなのか再考を、と」
「あっそうか、なるほど。わかった」
素直なのは助かるが、ヤエトの発言を絶対視されても困る。助言がつねに正しいとは限らず、結果に責任は持てない。といって、放置するわけにもいかないだろう。
セルクとの距離のとりかたは難しい。目立たないようにため息をついて、ヤエトはセルクに告げた。
「さあ、お互いに行くべき場所へ参りましょう」
まだ時間があるから自分も行くというセルクを追い払い、ヤエトはナグウィンの部屋へ向かった。やはり、商人は留守だった。
見かけた者がいないか聞いて回るよう騎士に命じ、ヤエトはファルバーンとともに商人の部屋に残った。なんとなく、嫌な予感がする。
「誰も近寄らせないように」
ファルバーンは一礼して、距離を置いた。察しが

いい、と思う。余分なこともいわない。

博沙国で、彼はヤエトが皇女と手を繋ぎ、なにかをしていたことを知っている。具体的にそれがなにかはわからないまでも、特殊な力があるだろうことは推測しているだろうが、それについて尋ねたりはせず、黙っている。

彼なりの処世術なのだろう。それだけ苦労してきたのだと思えば、胸が詰まった。

――幸せになってほしいが。

不意にそんなことを感じ、眼を伏せた。言葉にはできない。無責任に願望だけを押しつけるには、ヤエトはもう歳がいき過ぎている。彼のできる範囲のことは、すでにやっている。出自が知られれば、即座に括られてもしかたのないファルバーンに身の安全を、今日の居場所を与えているのだ。

それ以上のことは、今はできない。将来も、できるかどうかはわからない。

そんなことができるとしたら、真上皇帝その人を措いてほかにいないだろう。勅赦さえ得られれば、沙漠の王子は叛逆者からただの流民となる。

だが、勅赦を手に入れるのは困難だ。願い出ることが、そのまま破滅に繋がる可能性がある。そこに叛逆者がいるからこそ、赦しを求めるのだから。赦さない、しかし目溢(めこぼ)しはしてやろう、というほど皇帝は甘くない。

皇帝の耳目であるナグウィンは、はたしてファルバーンをどう見ているのか。まだ女性だと信じているのかどうかすら、ヤエトにはわからない。

商人が与えられた部屋は、ヤエトのものより少し狭い。控えの間もなく、一見して家具調度も一段劣るものであることがわかる。それでも、木製品の細工は一流といってよく、貴石を配した重厚な意匠には、独特の美しさがあった。

粋人ではないヤエトには判断が難しいが、都へ持って行けば一財産になるのではないか。木材の産地だからこそ、木を素材とした工芸の技も磨かれる。

素材も貴重だろうが、細工をほどこした木工品はさらに高値を呼ぶのではないか。

もちろん商人がそれに気づかないはずはないが、輸送には木材以上に手間がかかり、金もかかるということも、考えざるを得ないだろう。

安定した通商のために、商人は平和を望むだろうか。それとも、帝国がさらに領土を拡充し、この北方までもがひとつの国、ひとつの大地となることを望むだろうか？

皇帝の思惑は、どこにあるのか。

ヤエトは窓辺に近寄り、壁に対して少し斜めに置かれた椅子の背に手をあてた。いかにも、誰かが座って立ち上がった、そのままの位置に留まっているように感じられたからだ。

――ナグウィン、なにがあった？

皇帝の耳は、誰の、どんな言葉を聞いたのか。

息を吐き、ヤエトは呼吸をととのえる。時間の狭間に身を置き、かなたへと手をのべる。

必要なものを探す感覚を、ヤエトは言語化できない。言葉にできないとは、誰にも説明できないということだ。それは個人の直感である。共有は、不可能だ。

視覚でもなく、聴覚でもない。なんともいえない感覚が、ここぞという場面をとらえる。時の流れに鉤をかけ、彼は縄をたぐっていく。

――アヨヴルスを封じる？

質す声は冷静だった。答えた側の方が、揺れている。声も、その心も乱れている。

――デュラルクは、そのつもりだ。

――なぜ？

視界が広がる。落ち着かない足取りで右へ左へと移動しつづけているのは、ラズラフだ。強烈な不安が、ヤエトを直撃する。赤毛の男が抱えているのは、自分は破滅の淵に立っているという感覚だ。今にも彼とともに奈落に落ちてしまいそうな錯覚にとらわれそうになったほどだ。

――ア＝ヴルスがいなくても、なにも困ることはないという。むしろ、いると困ったことが起きるだろう、と。氷姫の故事を考えろと彼はいうのだ、あのア＝ヴルスのために、北方は滅びを経験している、それが再現したらどうするのだ、と。

――自分がいればよい、理性的に支配するという話か……。

なかば笑うように、声は応じた。聞いたことのある口調だ。笑みを含んでいても、その芯はするどく、強い。けっして流されない。

そこに座っているのはナグウィンであって、ナグウィンではなかった。

沙漠の民と南方人の血が混ざっているのだと本人がいっていた、真剣でいても愛嬌を含んだ顔だちは消え失せ、どこまでも怜悧な貌を見せている。

ラズラフは気づいているのだろうか。商人の身体を借りて喋っているのは、都にいるはずの真上皇帝である、ということに。

竜種が伝達官の身体を完全に乗っ取り、意識のすべてを支配するとき、ヤエトにはその竜種の姿が視える。祖先がかわした誓約のせいだと思うが、詳しい理由はわからない。ただ、視えるのだ。皇女の伝達官の姿が皇女そのものに視えるのと同様、皇帝の伝達官も、皇帝自身に視えてしまう。

皇帝の姿で、ナグウィンは立ち上がった。黄金の髪が、冷たい炎のようだ。明るく、まばゆく、ふれ得ざるもの。

――北方を氷雪に鎖すのは、もったいないことですね。デュラルク殿のお考えも、そういう意味では理解できます。

丁寧な言葉遣いだが、口調は尊大だ。

――だが、ア＝ヴルスは……必要なものだ。

――お考えを、尊重しましょう。帝国は、あなたを支持します。

――どこまで信じられる。

――それを決めるのは、ご自身でしょう。お渡し

した金子を存分にお使いなさい。金は裏切りません。追加は、近々下流で。

ラズラフは迷っている。自分が帝国になにかを売っているのではないか、と薄々は勘付いているが、なにを売っているのかは理解できない。

事実に直面できない。したくないのだ。

——金だけでは、ア＝ヴルスを守りきれない。

——それを解決するのは、わたしではない。あなたの仕事ですよ、ラズラフ殿。守って、その先をどうするかも。

薄く笑ったその表情は、酷薄だった。切羽詰まっているラズラフに、どう見えただろうか。

——力を貸してほしい。

——しかたありませんね。では、死ぬことにましょうか。

笑みを消さないまま、皇帝は答えた。

世界が遠ざかっていくように感じ、ヤエトは椅子の背を握りしめた。やはり、ここは奈落の淵だった。少しでも足を踏み外せば、一気に地の底だ。

——死ぬ……？

——この商人が死ねばなにが起きるか、考えてみてはどうです。こう見えて、外交使節の一員です。それに、ナグウィンという商人が実は皇帝陛下の内命を受け、全権を委任された存在であることは、《黒狼公》も承知です。それが死ねば……？

声が、途切れた。

考える時間を与えているのだ。ラズラフは、それが計算された間であるとは気づかない。彼にそんな余裕はない。不安と希望が交互に押し寄せ、彼を揺さぶる。

——大問題だ。介入の口実になるでしょう。

——しかし……わたしは、ア＝ヴルスを守りたいだけなのだ。

その言葉の背後には、痛烈な保身の欲求だけがあった。心臓をじかに摑まれたように感じ、ヤエトは息苦しさに喘いだ。

完璧に抑制された皇帝の感情は、ヤエトには届かない。だが、ラズラフのそれは、むき出しにされた傷口のようだった。とくに考えることなく従ってきた古い基準、北の大地に選ばれた者への尊崇の念は、どこにもない。変化への恐れがあるだけだ。

そして、自分が権力を握りたいという欲望が。

――お渡しした金では守れない……と、そう仰いませんでしたか？

――皇帝の代理人が死んだら、帝国は本気で侵攻して来るのではないか？

――あなたにはア＝ヴルスがついているのではないですか。守り通した不思議の力さえあれば、氷姫の故事よろしく、帝国の軍など追い返すことはたやすいでしょう？

――ア＝ヴルスはほんの子どもだ。それに、帝国とは揉めたくない。共存共栄のために、わたしは尽力しているのだ。デュラルクにまかせていては、それができないからこそ……。

――気の小さいかただ。このわたしが、すべて話をつけてさしあげるというのに。皇帝の存念をなにもかも理解している、このわたしが。

皇帝は笑った。相手の反応を予測していたのだろう、余裕のある口ぶりで言葉をつづける。

――では、行方不明にしておきましょうか？　それでは、商人が勝手にあちこち首を突っ込んで動き回り、自分の責任でのたれ死にしそうだという話になるだけかもしれませんよ。ラズラフ殿のお力で、うまく誘導できますか？

――どう、誘導しろと。

――ただでさえ、昨冬の襲撃で《雷霆の使者》との関係を悪くしているのです。ア＝ヴルスの力を恐れて始末しようとしているとの噂は広まっているのでしょう？　デュラルク失脚の素地はできています。そこへ、商人の死で帝国の介入を招いた、という事態が発生する。交渉の立て役者になるのは、誰です？　デュラルクが消えたルス公家をとりまとめ、

その名を上げるのは誰ですか？

ラズラフが唾を呑んだ音がした。

――あのセルクという人質ではいけないのか。

――都の皇帝陛下を動かすには、あの男では不足でしょう。陛下が即座に兵を動かし、貴殿とア＝ヴルスを守るには……そう、わたしか《黒狼公》が死ぬべきです。

――だが、おまえが死んだら、誰が約束を知っているというのだ。

――《黒狼公》が、意を汲んでくださいます。ご安心を。

――その《黒狼公》も、デュラルクは生かして帰さぬかもしれぬというのに？

――放っておけば、デュラルクは《黒狼公》を殺しはしない……しかし、そう……《黒狼公》が死ねば、北嶺王が動きます。セルク殿と違い、彼は帝国貴族。都にも報告がなされ、帝国は兵を動かすでしょうね。間違いない。

皇帝が一歩、ラズラフとの距離を詰めた。いかにも親しげに手をのべ、男の肩を摑む。顔を寄せ、皇帝は相手の耳もとでささやいた。

――そうなさい。まず、商人が死ぬ。そうすれば、《黒狼公》は抗議せざるを得ない。その《黒狼公》を、勢い余ってデュラルクが殺してしまう……これで事態は抜き差しならなくなる。騎士をひとりかふたり、逃がしてやるとよい。悪いのは誰か、味方になるのは誰か、しっかり含めて。

――だが……。

――あなたは商人や《黒狼公》を殺したデュラルクを始末し、まず来るであろう北嶺王に彼の首級を差し出せばよいのです。それだけで、あなたは北嶺王の味方になれる。

顔を寄せ、彼はラズラフの耳元で囁いた。

――罪をデュラルクに着せることなど、簡単です……今までに、あの男はあなたのものを横取りして来たのでしょう？ 想像にかたくありません。盗ま

れたものを返させるのは困難でしょう。それより、望まぬものまで押しつけてやればよいのです。

——しかし……。

——気が咎めますか？　では、デュラルクが我慢できないことをして来ましょうか……たとえば、ア＝ヴルスに接触するとか。彼がア＝ヴルスの存在自体を抹殺したがっていることは、誰でも知っている。そうですね？

——可能な限りは、広めたが……。

ラズラフはまだ躊躇を捨て切れない。皇帝は静かに、しかし逆らえない強さで問い質した。

——ア＝ヴルスの居場所はどこです？

——……風の塔だ。

——案内を、つけてもらえますね？

——途中まで、わたしが案内しよう。

皇帝は微笑んで身をはなした。

——結構。実に結構です。

——支度をする。北の門で落ち合おう。

ラズラフが早足に部屋を出て行くのを見送って、皇帝は笑顔の質を変えた。無人の室内を見渡し、彼は告げた。

——聞こえるか、《黒狼公》。

ヤエトは息を呑んだ。

皇帝の全身から発散されているのは、自信だった。過剰ではない、細心の注意を払った行動と情報収集に裏打ちされた、確信だ。

——古王国の神の恩寵が生きているなら、そなたはこの声を聞くだろう。ナグウィンが姿を消せば、調べずにはおくまいからな。委細は今の通りだ。デュラルクは危険な男だ。小心で従順なラズラフに権力をとらせた方がよかろう。ナグウィンが死ねば、大きな貸しとなる。ラズラフにはな。デュラルクでは、それは望めない。

皇帝が視線を室内に巡らせる。ヤエトがどこから視ているのか、探すように。

——そなたが恩寵の力を隠し、わたしの言葉を聞



かなかったふりをするのも自由だが、ナグウィンを無駄死にさせるのは、いかにも惜しい。そうは思わぬか？　それとも自身の命が大事と、すぐさま逃げ出すかな？

ひと呼吸置いて皇帝は笑みを深め、告げた。

――わたしと意を共にしてくれることを望もう、我が友よ。

そのまま、皇帝は部屋を出て行った。

その背を見送って、ヤエトは呆然と立ち尽くすしかなかった。

ヤエトは背を摑んでいた椅子に崩れるように座った。ほとんど意識しないまま、今に戻っている。呼吸は乱れ、心臓が痛いほど速く打っていた。

「殿……？」

ファルバーンが声をかけたことから、よほどひどい状態に見えるのだ、と理解した。

たしかに、ひどい。

恐怖と混乱、頭痛と呼吸困難の、どれに対処すべきかわからない。いや、違う。すべてに対処せねばならないのだ。彼が必要としているのは、そうする上での優先順位に過ぎない。

ヤエトは手を動かそうとした。痺れた指先が、やわらかいものにふれる。鳥の羽毛だ。シロバの羽根を結びつけたお守りを握りしめ、鳥と意をかわし得る距離の限界は、どれくらいだろう、と考えた。皇女やセルクですら、視界に映るより少し遠く、くらいの群れの位置しか感知し得ないのだ。ヤエトには、北嶺の城門から厩舎のあたりが精一杯だろう。

シロバに呼びかけ、彼が知ったことを皇女に伝えてもらいたい――いや、それは無理だ。もし、シロバが今すぐヤエトの考えを知ったとしても、シロバにはそれを周囲に伝えるすべがない。誰もあの鳥の心を覗けなくなってしまったのだから。

それに、皇女に教えてどうするというのか。

北方との和平を望むなら、事態を静観する以外、皇女になにができる？　鳥を飛ばしてヤエトやナグ

ウィンを救いに来るというなら、むしろ諫止せねばならないだろう。

それでも、今の窮状が伝われば皇女は来るだろう――そう考えることで、ヤエトはどこかほっとしている自分を感じた。

信じられる、あるじを得た。

それでよいではないか、と思った。無条件に信じあえる相手が存在するのだ。今ここで命を落としたとしても、悪くない人生だったと総括できる。

だが、皇女のためを考えれば、死ぬわけにはいかない。ヤエトは生き延び、北方との和平も進展させねばならない。

「ナグウィンを、……探さねば」

どれくらい前のことなのか。夕餉（ゆうげ）の席には、ラズラフはいただろうか。いや、いなかった。

あの調子なら、皇帝は……いや、ナグウィンと呼ぶべきか？　どちらにせよ、ラズラフを唆して殺されてやるくらいのことはするだろう。そうなる前に、追いつかねばならない。

――だが、どうやって？

過去視の力を全開にすれば、ナグウィンらの足取りを追うことはできるか、そもそも城を出ることが可能なのか。彼は監視されている身だ。賓客でありながら、生かして帰されないかもしれない囚人でもある。

その上、恩寵の力があることを証明してしまえば、生きて帰ったとしても皇帝が……。

――いったい、どうすれば。

立ち上がる気力も体力もなく、ヤエトは時間を無為に使っている自分を呪うしかなかった。

（下巻に続く）

あとがき

本格隠居願望ファンタジー、シリーズ第三作の上巻をお届けいたします。通巻で申しますと、第五巻となります。

開幕からぶっ倒れている主人公の相変わらずの虚弱っぷりと、呪うべき人物一覧表のトップ交替を、お楽しみください。もっとも、上巻が終わった時点でも、また入れ替わっていそうな気はします。書き直しが容易な脳内リストでよかったですねぇ。

さて。

今まで上下巻二ヶ月連続刊行というスタイルをなんとか守って参りましたが、ついに破綻してしまいました。申しわけありません。今回、下巻はすぐには出ません。刊行時期をいつとは明言できない程度に、お待たせすることになる予定です。

こんなに時間がかかるとは、と本人はびっくりなのですが、周囲には「一年待つくらい余裕」「二巻がむしろあなたにしては早かった」「三巻が今年出るのもおどろき」といわれるほどです。

いやちょっと待て、そこまで遅筆じゃないですぞ！　……たぶん。

なんでこんなに時間がかかるのか。いろいろ理由はあるにせよ、突き詰めると、作者の脳味噌の性能が残念なレベルに留まっているのが原因かと思われます。納得のいく「次の展開（別名・無茶振り）」を捻り出すのに、ものすごく時間がかかるのです。

おもしろい話がさらっと、つるっと、書ける日が……いつか来るといいなぁ、なんて、夢見がちなことを考えてみたり。来ないだろうなぁ。でも、来たらいいなぁ。

そういうわけで、お待たせしてしまうことになりますが、どうかお許しください。

セルクにはずっとこのままでいてほしいと仰せの内田さん、すてきな谷間を描いてくださったことときさん、まだまだお世話になります。思いもよらぬ長丁場になってしまい、ほんとうにすみません。

とりあえずこの上巻が、皆様に楽しんでいただけますように！

二〇一〇年七月　妹尾ゆふ子

幻狼ファンタジアノベルス

Information

この本を読んでのご意見・ご感想を
下記の住所までお寄せ下さい。

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
株式会社 幻冬舎コミックス
幻狼ファンタジアノベルス編集部

幻GENROU狼 FANTASIA NOVELS

Colophon

翼の帰る処［ところ］3——歌われぬ約束——上

THE HOME OF THE WINGS——Volume three——First volume

二〇一〇年七月三十一日——第一刷発行

著者——妹尾ゆふ子 せのおゆふこ

発行人——伊藤嘉彦

発行元——株式会社 幻冬舎コミックス
〒一五一-〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四-九-七
電話 〇三-五四一一-六四三四（編集）

発売元——株式会社 幻冬舎
〒一五一-〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四-九-七
電話 〇三-五四一一-六二二二（営業）
振替 〇〇二〇-八-七六七六四三

コンセプトデザイン——コードデザインスタジオ

印刷・製本所——共同印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は
送料当社負担でお取替致します。
幻冬舎宛にお送り下さい。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©SENOWO YUFUKO, GENTOSHA COMICS 2010

ISBN978-4-344-82000-5 C0293
Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

幻冬舎コミックスホームページ——http://www.gentosha-comics.net

9784344820005

1920293009001

ISBN978-4-344-82000-5

C0293 ¥900E

Published by
GENTOSHA COMICS

定価—本体900円+税
発行—幻冬舎コミックス
発売—幻冬舎



翼の帰る処 3 ——上
——歌われぬ約束——
THE HOME OF THE WINGS——Volume three——First volume

望んでもいないのに四大貴族の一角《黒狼公》に出世してしまったヤエトだったが、その隠居願望と病弱さは変わらぬまま。どこで倒れたのか気がついたら、皇女のいる北嶺国で看病されている始末だった。そんな折、ヤエトは、前の《黒狼公》妃であった皇妹から「復縁」を提案される。激しく動揺するヤエトに追い打ちをかけるように、宿敵・北方蛮族の使節が北嶺国を突然訪れ、相互和平のため人質交換を要求し……。